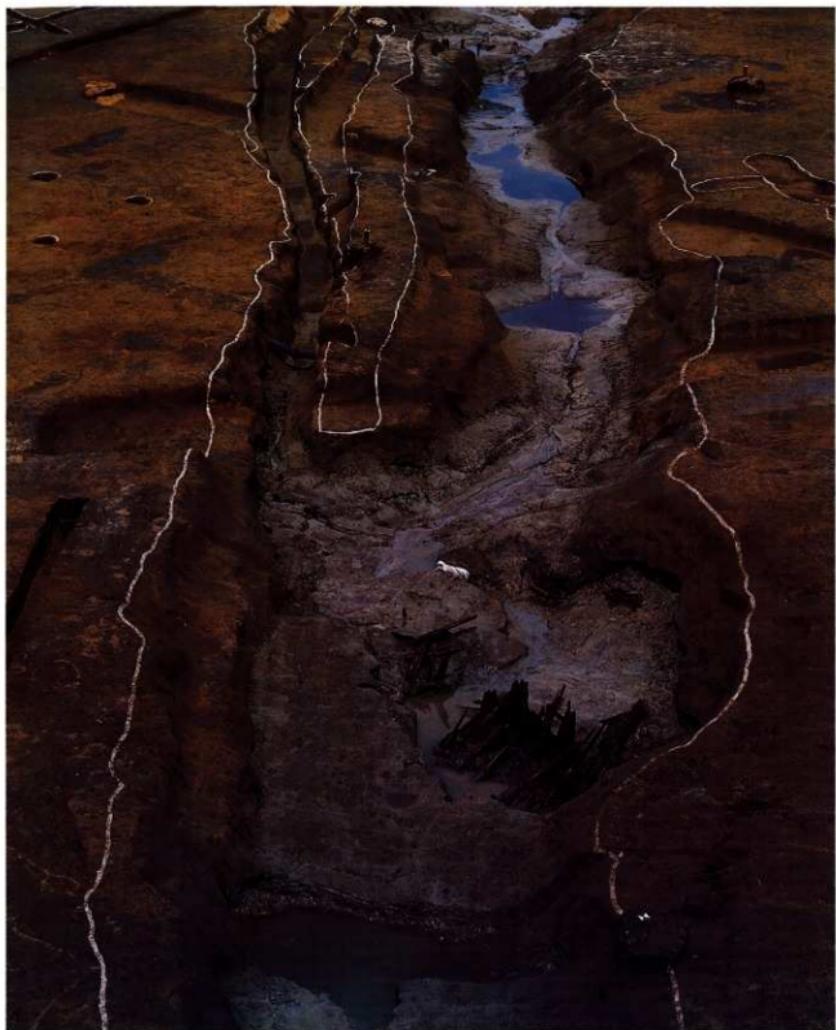


富山県舟橋村

浦田遺跡発掘調査報告(3)

2000. 3

舟橋村教育委員会



巻頭カラー SD01(弥生段階)及びSG01(南から)

序

舟橋村は、県東部・富山平野のほぼ中央にあって、緑豊かで住み良い文化的な都市近郊農村を目指しています。近年は、人口増対策により、村外からの移住者が増加しております。

それに伴い、村では舟橋村東部団地の造成を計画し、平成9年度から平成11年度までの3ヶ年で発掘調査を実施してまいりました。

調査では、弥生時代中期から江戸時代の遺跡が発掘され、これによって弥生時代中期以降の土地利用の変遷をたどることが出来ました。

中でも有孔円盤状石製品、磨製石錐は、ともに県内2例目の出土で玉作り技術の発達過程を知る貴重な例です。

村の古代史を知る上で、貴重な資料となりました。

おわりに、調査実施及び報告書の刊行にあたり、富山県埋蔵文化財センターをはじめ関係者各位にご援助・ご協力をいただきました。

衷心より感謝申し上げます。

平成12年3月

舟橋村教育委員会

教育長 藤塚 孝雄

例　　言

- 本書は、富山県中新川郡舟橋村舟橋に所在する浦田遺跡で、平成10年度・平成11年度に実施した発掘調査の発掘調査報告書である。
- 調査は、舟橋東部住宅団地造成事業に伴い、舟橋村教育委員会が実施した。
- 調査主体は舟橋村教育委員会であるが、調査実施にあたり富山県埋蔵文化財センターより調査員の派遣を受けた。
- 調査事務局は舟橋教育委員会に置き主事吉田昭博が事務を担当し、総務課長金森勝雄が統括した。
- 出土遺物と調査に係る資料はすべて富山県埋蔵文化財センターが保管している。遺物の注記は、舟橋村浦田遺跡を示す「HUT-」に調査年度・出土地点等を併記した。また、本書に掲載した遺物には、図版毎にコンテナに入れ収蔵してある。
- 発掘調査担当者は次のとおりである。

発掘調査	平成10年度	調査担当者	富山県埋蔵文化財センター	文化財保護土事	高 梨 清 志
(A～C地区)	同	同	文化財保護土事	越 前 康 祐	
調査員	同	主	事	杉 泽 淳 子	
平成11年度	調査担当者	富山県埋蔵文化財センター	文化財保護土事	越 前 康 祐	
(D地区)	同	文化財保護土事	高 梨 真 実		

- 各年度の発掘調査面積は、平成10年度約8,800m²、平成11年度は約2,100m²である。
- 本書の作成は、富山県埋蔵文化財センター職員の協力を得て、調査担当者がこれにあたった。ただし、本書の「第4章 附載 自然科学分析」については、井原の樹種同定分析は富山県林業技術センター坂本英子氏、樹種同定、軟X線写真撮影、珪藻分析、花粉分析、植物類似度分析、放射線炭素年代測定はパリノ・サーヴェイ株式会社、ガラス下質光X線分析非破壊法、「ガラス質物質」分析は奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター遺物処理研究室長肥塚隆保氏にそれぞれお願いした。坂本英子氏、パリノ・サーヴェイ株式会社からは下書きを頂いた。なお、調査担当者執筆箇所の文責については文末に記した。
- 本書は本文・計測表と巻末図版(挿図・写真図版)からなる。本書の挿図・写真図版の表示は次のとおりである。
 - 遺構番号は基本的に年度毎にかつ遺構の種別ごとに付した。しかし、調査時点で明らかに同一遺構であることが確認された場合はこの限りではない。遺構番号・表記は、原則として調査中に付した番号・表記を使用している。掘立柱建物-SB、横列-SA、格円柱穴建物-一樁円柱穴建物、土坑-SK、柱穴・小穴-P、清-SD、井堀・溝岸-SG、水田跡-SX、サク状遺構-SFと表記している。なお、遺構番号は遺構検出時点で付したため、井戸もSKと表記している。
 - 本書で示す方位はすべて真北、水平基準は海抜高である。
 - 事業記載におけるH9調査・H10調査・H11調査は、それぞれ平成9年度・10年度・11年度の各調査を指す。なお、H9調査は、東部住宅団地造成事業および主要地方道立山水橋線道路改良事業に伴う調査を、H10調査はA～C地区的調査すべてを指す。
 - 本文中の遺物番号は、(年度-遺物番号)と表記し、(H9-) (H10-) (H11-)は、それぞれ平成9・10・11年度の出土遺物であることを示している。同様に、遺構についても紹介するものについては、遺構番号後の()内に記した。
 - 引用・参考文献は著者と発行年(四刷)を〔 〕で文中に示し、巻末に括弧で掲載した。
 - 土器の色名や土器・陶器器の胎土・釉薬色調は、農林水産技術会議監修「新版標準土色誌」(1994年版)に基づいている。
 - 遺構図版は、弥生・古墳時代および古代の全体図はA地区から順に載せ、中世・近世は平成10・11年度の各地区を合せて載せた。なお、掘立柱建物および施設を伴う井戸以外は個別の遺構平面図は載せていない。それぞれの遺構の平面形および上層図のセクションポイントについては、それぞれの全体図を参照願いたい。
 - 遺物実測図版・遺物写真図版は、年度毎におさめ、基本的に古い時期の遺構出土上の遺物の順に配置した。同じ遺構出土上の遺物はなるだけまとめて配置したが、スペースの関係上必ずしも徹底していない。番号は、写真図版におさめた遺物を基本に、時代・遺構・種類を問わず年度毎に順に番号にした。なお、平成9年度調査出土遺物は、平成9年度発掘調査報告書に未掲載の遺物について、代表的なものを実測・掲載した。なお、本文・図版・写真図版および各計測表、観察表における番号は共通である。また、本文中ににおいて、(番号)は遺物計測表の番号を表す。
 - 遺構図版・遺物図版凡例は、計測表と巻末図版の間にまとめて載せた。
 - 遺構図版の縮尺は、原則として1/40とし、古墳時代住居跡・古代掘立柱建物は1/60、中世掘立柱建物は1/80とした。
 - 遺物実測図版は、土器は原則として1/3とし、一部陶器類はスペースの関係上1/4とした。井戸の部材については1/4・1/6とした。石器・玉類は原則として等倍とし、一部1/2とした。
 - 遺物写真図版については、陶器類の大型被片・復元品は1/3とし、その他の土器類は1/2とした。なお、井戸の部材は1/10とした。石器・玉類は、その大きさによって1/2・等倍・3倍とした。また、縮微鏡写真は10倍である。
 - 整理期間中、下記の方々の協力を得た。
船崎貴子・村井(志鷹)章子・田中恵子・横川美雪・森山陽子(整理作業員)
 - 発掘調査中および報告書作成中に下記の方々・機関から多大な御教示・御協力を得た。記して深甚なる謝意を表したい。
(敬称略、五十音順)
赤澤徳明・宇野隆夫・岡本淳一郎・門脇謙二・川越俊一・河野一隆・川村浩司・肥塚隆保・久々忠義・植 正勝・澤井 齊・島田修一・神保孝造・鎌木景二・高橋浩二・宮山正明・富山県林業技術センター・国立奈良国立文化財研究所・福海貴子・松村恵司・宮田進一・安 英樹

目 次

本文目次

第1章 はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 遺跡の立地と環境	3
(1) 周辺地域の概観と遺跡の立地	3
(2) 浦田遺跡周辺の地形	6
第2章 調査の概要	
1. 調査の方法	7
2. 調査の経過	9
3. 基本層序	10
4. 繩文・弥生・古墳時代	12
(1) 概要	12
(2) A 地区の遺構	12
a. 弥生時代	12
(3) D 地区の遺構	13
a. 弥生時代	13
b. 古墳時代	15
5. 古代	16
(1) 概要	16
(2) 挖立柱建物	16
(3) 清	16
(4) サク状遺構	17
6. 中世	19
(1) 概要	19
(2) 区画溝	19
(3) 挖立柱建物	19
a. 小世前期掘立柱建物	19
b. 中世後期建物および付属する遺構	21
c. 清・水田遺構・サク状遺構	22
7. 近世	24
(1) 概要	24
(2) 清	24
(3) 水田遺構	24
8. 出土遺物概要	25
(1) 繩文時代の遺物	25
(2) 弥生時代中期の遺物	25
(3) 弥生時代後期の遺物	26
(4) 古墳時代の遺物	26
(5) 古代の遺物	26
(6) 中世の遺物	27
(7) 近世の遺物	28
第3章 まとめ	
1. まとめ	41
附載 自然科学分析	46

表 目 次

表1	周辺の遺跡
表2	古墳時代住居跡一覧
表3	古代掘立柱建物一覧
表4	古代サク状遺構計測表
表5	中世掘立柱建物一覧
表6	出土遺物觀察表

挿図目次

- 図1 周辺の遺跡
図2 人正7年当時の地形と復元流路
図3 周辺の地形分類図
図4 調査地周辺の字制と旧流路の復元

- 図5 潛在区画及びグリッド図
図6 基本層序
図7 中世土器器分類図
図8 遺構変遷図

図版目次

- 図版1 X軸グリッド断面図
図版2 Y軸グリッド断面図
図版3 遺構図（1）（A地区弥生・古墳時代）
図版4 遺構図（2）（A地区弥生時代）
図版5 遺構図（3）（D地区弥生・古墳時代）
図版6 遺構図（4）（D地区弥生・古墳時代）
図版7 遺構図（5）（D地区古墳時代）
図版8 遺構図（6）（D地区古墳時代）
図版9 遺構図（7）（A地区SD01）
図版10 遺構図（8）
（A地区古代、一部弥生・古墳時代を含む）
図版11 遺構図（9）（A地区古代）
図版12 遺構図（10）（A地区古代）
図版13 遺構図（11）（A地区古代）
図版14 遺構図（12）（A地区古代）
図版15 遺構図（13）（A地区古代）
図版16 遺構図（14）（A地区古代）
図版17 遺構図（15）（B地区古代）
図版18 遺構図（16）（B地区古代）
図版19 遺構図（17）（B地区古代）
図版20 遺構図（18）（C地区古代）
図版21 遺構図（19）（C地区古代）
図版22 遺構図（20）（C地区古代）
図版23 遺構図（21）（C地区古代）
図版24 遺構図（22）（D地区古代）
図版25 遺構図（23）（D地区古代）
図版26 遺構図（24）（中世）
図版27 遺構図（25）（中世）
図版28 遺構図（26）（中世）
図版29 遺構図（27）（中世）
図版30 遺構図（28）（中世）
図版31 遺構図（29）（中世）
図版32 遺構図（30）（中世）
図版33 遺構図（31）（中世）
図版34 遺構図（32）（中世）
図版35 遺構図（33）（中世）
図版36 遺構図（34）（中世）
図版37 遺構図（35）（中世）
図版38 遺構図（36）（中世）
図版39 遺構図（37）（近世）
図版40 遺構図（38）（近世）
図版41 遺構図（39）（近世）
図版42 出土遺物（1）（平成10年度包含層出土遺物）
図版43 出土遺物（2）（平成10年度包含層出土遺物）
図版44 出土遺物（3）（平成10年度包含層出土遺物）
図版45 出土遺物（4）（平成10年度遺構・包含層出土遺物）
図版46 出土遺物（5）（平成10年度遺構・包含層出土遺物）
図版47 出土遺物（6）
（平成10年度包含層出土遺物・石製品）
図版48 出土遺物（7）（平成10年度木製品）SG01
図版49 出土遺物（8）（平成10年度木製品）SG01
図版50 出土遺物（9）（平成10年度木製品）SG01・02
図版51 出土遺物（10）（平成10年度木製品）SG02・03
図版52 層上遺物（11）（平成11年度遺構出土遺物）
図版53 出土遺物（12）（平成11年度遺構出土遺物）
図版54 出土遺物（13）（平成11年度遺構出土遺物）
図版55 出土遺物（14）（平成11年度遺構出土遺物）
図版56 出土遺物（15）（平成11年度遺構出土遺物）
図版57 出土遺物（16）（平成11年度遺構出土遺物）
図版58 出土遺物（17）（平成11年度遺構出土遺物）
図版59 出土遺物（18）（平成11年度遺構出土遺物）
図版60 出土遺物（19）（平成11年度遺構出土遺物）
図版61 層上遺物（20）（平成11年度遺構出土遺物）
図版62 出土遺物（21）（平成11年度遺構出土遺物）
図版63 出土遺物（22）（平成11年度包含層出土遺物）
図版64 出土遺物（23）（平成11年度包含層出土遺物）
図版65 出土遺物（24）（平成11年度石製品）
図版66 出土遺物（25）（平成9年度遺構・包含層出土遺物）
図版67 出土遺物（26）（平成9年度包含層出土遺物）
図版68 出土遺物（27）（平成9年度包含層出土遺物）
図版69 出土遺物（28）（平成9年度包含層出土遺物）
図版70 出土遺物（29）（平成9年度包含層出土遺物）

写真図版目次

巻頭カラー SD01 (弥生段階) 及び SG01
 写真図版 1 全景
 写真図版 2 昭和47年当時の航空写真
 写真図版 3 平成 9 年当時の航空写真
 写真図版 4 作業風景
 写真図版 5 平成 9・10・11年度調査区全景
 写真図版 6 平成10年度調査区全景
 写真図版 7 A 地区 (1)
 写真図版 8 A 地区 (2)
 写真図版 9 A 地区 (3)
 写真図版10 A 地区 (4)
 写真図版11 A 地区 (5)
 写真図版12 A 地区 (6)
 写真図版13 A 地区 (7)
 写真図版14 A 地区 (8)
 写真図版15 A 地区 (9)
 写真図版16 A 地区 (10)
 写真図版17 A 地区 (11)
 写真図版18 B 地区 (1)
 写真図版19 B 地区 (2)
 写真図版20 B 地区 (3)
 写真図版21 B 地区 (4)
 写真図版22 B 地区 (5)
 写真図版23 B 地区 (6)
 写真図版24 C 地区 (1)
 写真図版25 C 地区 (2)
 写真図版26 C 地区 (3)
 写真図版27 C 地区 (4)
 写真図版28 C 地区 (5)
 写真図版29 C 地区 (6)
 写真図版30 D 地区 (1)
 写真図版31 D 地区 (2)
 写真図版32 D 地区 (3)
 写真図版33 D 地区 (4)
 写真図版34 D 地区 (5)
 写真図版35 D 地区 (6)
 写真図版36 D 地区 (7)
 写真図版37 D 地区 (8)
 写真図版38 D 地区 (9)

写真図版39 D 地区 (10)
 写真図版40 D 地区 (11)
 写真図版41 D 地区 (12)
 写真図版42 H10年度調査出土遺物 (1)
 写真図版43 H10年度調査出土遺物 (2)
 写真図版44 H10年度調査出土遺物 (3)
 写真図版45 H10年度調査出土遺物 (4)
 写真図版46 H10年度調査出土遺物 (5)
 写真図版47 H10年度調査出土遺物 (6)
 写真図版48 H10年度調査出土遺物 (7)
 写真図版49 H10年度調査出土遺物 (8)
 写真図版50 H10年度調査出土遺物 (9)
 写真図版51 H10年度調査出土遺物 (10)
 写真図版52 H10年度調査出土遺物 (11)
 写真図版53 H10年度調査出土遺物 (12)
 写真図版54 H10年度調査出土遺物 (13)
 写真図版55 H10年度調査出土遺物 (14)
 写真図版56 H10年度調査出土遺物 (15)
 写真図版57 H10年度調査出土遺物 (16)
 写真図版58 H11年度調査出土遺物 (1)
 写真図版59 H11年度調査出土遺物 (2)
 写真図版60 H11年度調査出土遺物 (3)
 写真図版61 H11年度調査出土遺物 (4)
 写真図版62 H11年度調査出土遺物 (5)
 写真図版63 H11年度調査出土遺物 (6)
 写真図版64 H11年度調査出土遺物 (7)
 写真図版65 H11年度調査出土遺物 (8)
 写真図版66 H11年度調査出土遺物 (9)
 写真図版67 H11年度調査出土遺物 (10)
 写真図版68 H11年度調査出土遺物 (11)
 写真図版69 H11年度調査出土遺物 (12)
 写真図版70 H11年度調査出土遺物 (13)
 写真図版71 H11年度調査出土遺物 (14)
 写真図版72 H11年度調査出土遺物 (15)
 写真図版73 H 9 年度調査出土遺物

付図

舟橋村浦田遺跡古代・中世遺構全体図

(平成 9・10・11年調査分)

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

当地に事業計画が最初に持ち上がったのは、平成2年のことである。当初、地元の土地区画整理事業として前面が持ち上がったが、平成4年に村直営事業とすることが決定した。その後、平成6年に農地転用許可申請および開発申請が提出された際に、事業地内に埋蔵文化財包蔵地（浦田遺跡）があることが判明した。

遺跡の取り扱いをめぐって、村教育委員会（以下、村教委）と富山県埋蔵文化財センター（以下、県埋文センター）・文化課（現在の文化財課）と協議がおこなわれた。その結果、事業地内において耕作が行われなくなつて久しいため、表面踏査による遺跡範囲の確認は困難と判断された、平成7年に調査依頼を受けた県埋文センターによって試掘調査が実施されることとなった。

試掘調査 調査は、平成7年5月23日～5月31日にかけて、総事業面積約23,700m²のうち約19,000m²を対象に実施した。計39本の試掘溝（基本的に幅1m）を設定し、遺構・遺物の遺存状況を確認した。調査面積は1,230m²であった。その結果、弥生時代・古代～中世にかけての遺構・遺物を検出し、西側で確認した埋没河道を遺跡の西端とした。事業対象地内に約17,800m²の遺跡の広がりを確認した。その結果を基に事業計画の見直し・設計変更などをした結果、最終的に約16,100m²を対象に本調査を実施することとなった。

本調査 村教育委員会が主体となり、平成9年度から3年計画で実施された。なお、実際の調査は、村教委の依頼を受けた県埋文センターが調査員を派遣して実施している。調査は、工事請負方式で実施され、村の要望により周回道路をまず調査し、順次宅地造成部分を調査することとなった。なお、調査は、事業地に隣接する主要地方道立山水橋線道路改良事業に係る調査も同時に実施することとなった。

平成9年度調査 平成9年4月22日～11月25日にかけて、事業地東側の団地周回道路部分および主要地方道立山水橋線道路改良事業に係る調査を実施した（本文中では平成9年度調査区として一括した）。調査対象面積は、約6,000m²である。主な遺構は、古代掘立柱建物群・中世区画溝・掘立柱建物群・溝・埋没河道などがある。遺物は、旧石器時代～近世に至る各時代のものがみられた。報告書は、事業別に2冊が年度内に刊行されている。

平成10年度調査 平成10年4月22日～11月30日にかけて、宅地造成部分の北側から調査を実施した。当初、A・B地区合わせて約6,350m²の予定であった。しかし、調査が予定以上に早く進んだため村教委・事業課と協議を行い、さらに約2,450m²の調査を実施することとなった。その結果、延べ調査面積は約8,800m²となった。なお、計画段階においては、遺構検出面は1面を想定していたが、対象地西側では2面で遺構検出を行った。上面では中世後半～近世の遺構が、下面は弥生時代～中世前期の遺構を検出した。主な遺構は、弥生時代溝・井堰・古代掘立柱建物群・溝・サク状遺構・中世区画溝・掘立柱建物群・近世の溝などがある。遺物は、縄文時代～近世に至る各時代のものが出土した。また、8月1日には現地説明会を実施した。報告書は、前年度に引き続き単年度刊行の予定であったが、次年度の調査面積が少ないとから二年度分を合わせて刊行することとした。

平成11年度調査 当初、前年度までの調査金終了分を除いた約3,000m²の調査を実施する予定であった。しかし、遺跡の取り扱いの変更に伴い、村教委と県文化財課との協議の結果、一部を盛土保存することで調査対象から除外することとなった。調整がなされた結果、約2,100m²を対象に調査を実施することとなった。調査は、平成11年4月26日～8月31日にかけて実施した。8月21日には現地説明会を実施した。主な遺構は、弥生時代埋没河道・土坑・古墳時代住居跡・古代溝・サク状遺構・中世掘立柱建物・水田跡・溝などがある。遺物は、縄文時代～近世の遺物が出土し、中でも弥生時代中期の遺物がまとまって出土した。また、周囲の水路掘削に伴う立ち会い調査を8月末に実施している。これによって、事業地内におけるすべての調査を終了した。

(越前)

1. 調査に至る経緯



図1 周辺の遺跡 (S=1/50,000)

2. 遺跡の立地と環境

富山県は東・西・南には山地をひかえ、北には広義の富山平野が広がり富山湾に面している。南の飛越県境の山地は北へ伸びるに従い高度を下げ射水丘陵に変わり、その一部はさらに北東へ延びて呉羽山丘陵となり富山県を呉西と呉東に二分している。呉西の平野は射水平野・水見平野の海成堆積低地と小矢部川・庄川扇状地などの河成堆積低地である砺波平野に細分される。呉東は河成堆積低地により構成されており、神通川・常願寺川扇状地などの狭義の富山平野・片貝川・早月川・上市川などの複合扇状地である新川平野、黒部川扇状地による黒部平野に細分できる。

(1) 周辺地域の概観と遺跡の立地

浦田遺跡（1）は狭義の富山平野の東部、常願寺川右岸扇状地の扇端部に位置し、舟橋村と立山町にまたがって広がる。ここでは遺跡が位置する常願寺川右岸扇状地扇端部を中心として上市川・白岩川周辺の地形を概観し、その後地形と遺跡の立地について述べる。地形の記述に際しては、地形種により地形変化速度に違いがあり、現在の地形と単純には比較出来ないため出来るだけ過去の地形の記載に努めた。なお、地形区分の範囲とその名称は「土地分類基本調査」[富山県1980年]を参考とし、地形学的な用語は鈴木隆介氏[鈴木1997]の区分を用いている。

常願寺川は立山連峰にその源を発する日本でも有数の急流河川として知られている。山間部を抜け標高190mの大山町上流を扇頂とする半径11kmの広大な扇状地を形成し標高15m付近で蛇行原に入り富山市水橋で富山湾に注いでいる。常願寺川右岸には東から上段・下段・岩崎野の各旧扇状地が隆起し三段の河岸段丘が形成されている。上段段丘は立山町吉峰から石坂を経て藤坂までの範囲を指すが、吉峰地区を一段高い独立した段丘とする区分もある。下段段丘は立山町下田から金剛寺を経て横越までで、上段段丘を浸食し明瞭な段丘崖が発達している。岩崎野段丘は立山町岩崎野から五百石を経て遺跡が所在する浦田まで広がり下段段丘を浸食している。各段丘と新扇状地を分ける段丘崖は上流部分では明瞭だが下流域ではその境界は不明瞭となる。新扇状地は岩崎野段丘から以西に広がり、現富山市街地は新扇状地上に位置している。地学的調査では新扇状地の形成時期は繩文海進以降と考えられ、縄文時代中期頃の流路

表1 周辺の遺跡

No.	遺跡名	遺跡番号	神奈	時代	No.	遺跡名	遺跡番号	種別	時代
1	浦田遺跡	321003	北陸	純文～近世	25	石井古墳群	320444	古墳	純文～近世
2	小平遺跡	321001	鳥島	縄文・弥生・古墳・古代・中世・近世	26	佐久間遺跡	320299	墓葬・式庭	純文～近世
3	津山遺跡・追跡	322026	敷布池	弥生～近世	27	下川瀬遺跡	320340	散居地	純文
4	津田古墳・追跡	322023	敷布池	古文～近世	28	中山・東東郷遺跡	322094	散居地	古代・中世
5	津田古墳・追跡	321008	敷布池	成文～近世	29	芦谷古墳・追跡	322095	散居地	中世
6	人代塚	322024	詳解	中世	30	三輪山遺跡	322014	散居地	純文
7	弘少山遺跡	321002	城塚	中世	31	芦谷山遺跡	322020	聚落	古墳
8	竹内水谷古墳	321003	六頓	古文	32	阿賀山遺跡	322072	散居地・集落	古代
9	竹内水谷古墳	321004	城塚	中世	33	猪谷山遺跡	320376	聚落	古代
10	坂重遺跡	321014	敷布池	古文・古代・近世	34	猪谷山南古墳	322061	古墳	古代
11	坂越・者跡	321009	鳥島	純文～近世	35	猪谷山北上遺跡	322065	散居地	縄文
12	坂越・山跡	322001	古岸	古文	36	猪谷山北古墳	322067	古墳	古墳
13	神代1・1遺跡	322005	散居地	純文～近世	37	尾根子人遺跡	322068	宮古地・聚落	縄文
14	阿賀山遺跡・追跡	322008	鳥島	純文～近世	38	鬼岳遺跡	322084	聚落	古代
15	浦穴1遺跡	321012	散居地	純文・古代～活潑	39	猪谷山城跡	322093	山城	古代
16	浦穴2遺跡	321013	散居地	純文～近世	40	合抱樹遺跡	322260	山城	古代
17	五郎木大遺跡	322012	笛吹池	古文・古代・近世	41	山中十ヶ所御殿跡	322079	聚落	古代
18	二ノツノ野原	322021	詳解	古文・古代・近世	42	弓の谷城跡	322078	聚落	古代
19	一ノツノ野原	322022	光原	中世	43	弓の谷跡	322095	散居地	中世
20	大明寺遺跡	322029	散居地	中世	44	勝手内塙	322090	古墳	古墳
21	忍足山古墳	322032	古塚	古墳	45	弓の谷人形山遺跡	322091	古墳	古文・古墳
22	勝手山古墳	322038	古塚	古代	46	中十ヶ所人形山遺跡	322097	古墳	中世
23	勝手古占塙	321043	古塚	古代	47	中十ヶ所御殿跡	322100	聚落	古文
24	勝手山古墳	321042	散居地	古代	48	合抱樹遺跡	322069	散居地	古文
25	勝手山古墳	321045	散居地	古代	49	合抱樹遺跡	322105	聚落	古文
26	勝手山古墳	321046	散居地	古代・中世	50	合抱樹遺跡	322106	聚落	古文
27	猿山古墳	322108	散居地	中世	51	山中十ヶ所御殿跡	322079	聚落	古代
28	上人山遺跡	322111	散居地	中世	52	弓の谷城跡	322078	聚落	古代
29	上人山遺跡	322003	散居地	御生	53	日上山人土遺跡	322110	聚落	中上段・田代・器・純土・純太
30	江上山遺跡	322004	集落	古文・中世	54	日上山人土遺跡	322112	聚落	近世
31	麻伏遺跡	322004	集落	古文	55	日上山人土遺跡	322113	聚落	古文
32	麻伏遺跡	322006	集落	古文	56	日上山人土遺跡	322113	聚落	古文
33	中小山遺跡	322006	集落	御生・中世	57	人導寺遺跡	322118	聚落	古代
34	三印山遺跡	322007	聚落	御生・中世・近世	58	合抱樹遺跡	322069	散居地	古文
35	大印山遺跡	322008	集落	古文	59	合抱樹遺跡	322105	聚落	古文
36	若可古遺跡	322045	集落	純文～古代	60	白山人土遺跡	322110	聚落	中上段
37	若可古遺跡	322045	集落	純文～古代	61	白山人土遺跡	322111	聚落	古文
38	若可古遺跡	322045	集落	純文～古代	62	竹内山内御殿跡	322112	聚落	近世
39	江上山遺跡	322045	集落	純文・古文	63	井戸遺跡	322113	聚落	古文
40	麻伏遺跡	322046	集落	佛生	64	人導寺遺跡	322118	聚落	中世
41	人導寺遺跡	322046	集落	御生	65	上人山古墳群	322118	古墳	古代
42	上人山古墳	322046	古墳	御生	66	白山心地	322078	古墳	古時
43	白山心地	322047	古墳	御生	67	竹内山遺跡	322123	聚落	先土器・山石群・御文・古代～近世
44	若可古遺跡	322045	集落	純文～古代	68	伊勢野沢遺跡	322071	聚落	古文・古世

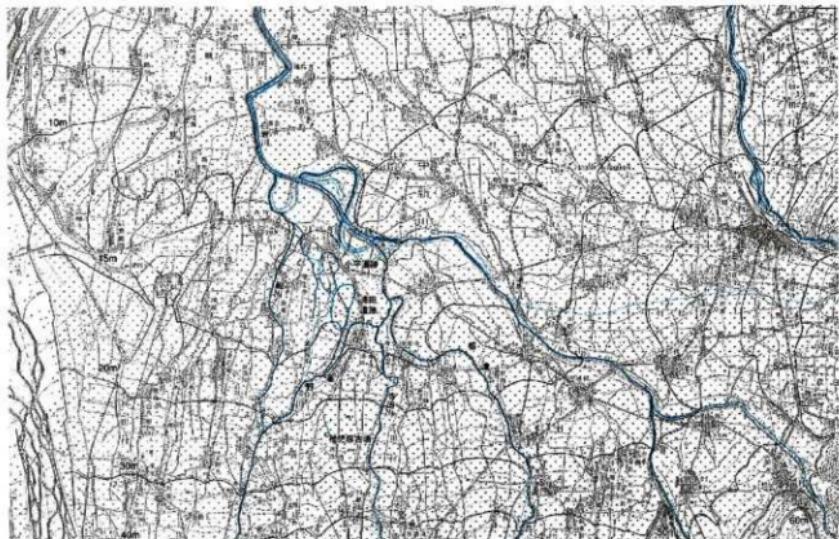


図2 大正7年当時の地形と復元流路 (S=1/50,000)

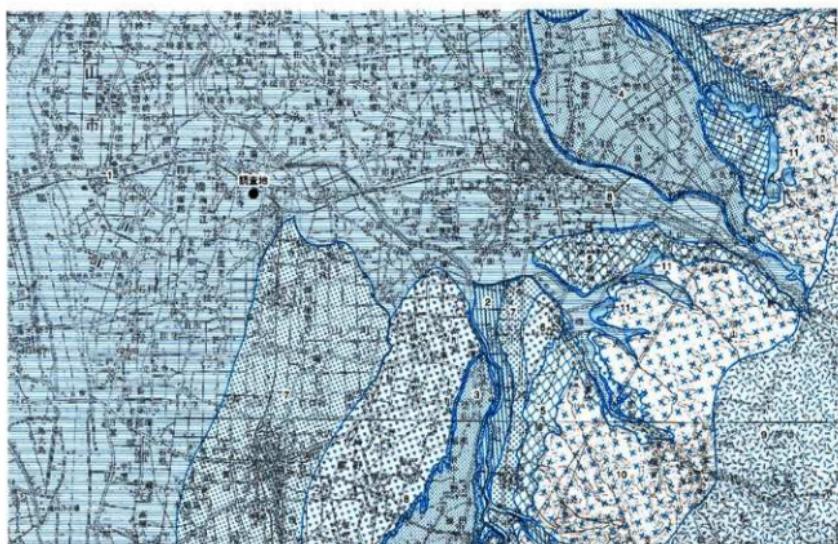


図3 周辺の地形分類図

低地：1. 新層状地 2. 谷底平野・台地・段丘 3. 砂礫台地(開析層状地) 4. 砂礫段丘 I 5. 砂礫段丘 II(上位段)
6. 砂礫段丘 III(低位段丘) 7. 砂礫段丘 IV(低位段丘) 8. 段丘崖
山地・丘陵地：9. 中起伏山地(起伏量400~200m) 10. 小起伏山地(起伏量200m以下) 11. 山頂・山腹緩斜面

は現在とは違い谷口を出た後、北西に流れ現富山市街地の北を経て神通川と合流して富山湾に注いでいたが、平安時代以降に流路が東偏し現河道に固定されたと考えられている〔富山県1980年〕。この様に、右岸の各段丘は洪水など常願寺川による直接的な影響は早い時期に受けにくくなってしまっており、多くの遺跡が段丘上で確認されている。このことは安政五年（1858年）の飛越地震の影響で起こった高山の崩壊による大洪水の被害が、この新扇状地の範囲に限られており右岸の旧扇状地上ではほとんど被害を受けていない事からもうかがえる。

上市川は立山連峰を形成する大日山塊の一角である早乙女岳にその源を発する流長28.1kmの2級河川である。標高約65mの上市町北島を谷口とし半径約6kmの扇状地を形成する。現在、上市川は谷口を出て北流し、左右に河岸段丘を形成して、上市町市街地の北を経て郷川と合流し富山湾に注いでいるが、江戸時代初めまでは谷口を出て西流し、上市町正印新通りで白岩川と合流していた。

白岩川は立山連峰の前山である大辻山に源を発する流長29.1kmの2級河川である。山間部を抜けると常願寺川上段段丘の東で谷底平野を形成して北流し、立山町横越付近で北西に流れを変え、浦田遺跡の北で支流の柳津川と合流する。ここから再び北流し、蛇行しながら富山湾に注いでいる。白岩川は水源地からの上砂供給が少なく扇状地を形成せず、常願寺川・上市川扇状地がほぼ現在の形となった縄文時代中期以降、両扇状地が接する凹地に沿って流れている。また、この両扇状地から伏流水の供給を受け排水河川として豊富な水量をほこる。

次に遺跡立地と地形について時代ごとに概観する。常願寺川右岸扇状地における最も古い遺跡は旧石器時代に遡り、上段段丘に位置する白岩藪の上遺跡（60）・吉峰遺跡（67）などが代表的なものである。縄文時代前期までの遺跡のはほとんどが上段段丘に位置し、その多くが縄文時代の最盛期である中期まで存続している。例外的に、岩崎野段丘上に縄文時代早期の遺物を出土した二ツ塚遺跡（19）・若宮A遺跡（35）が位置するが、これらの遺物は包含層出土で、当時の生活圏内ではあったもののこの場で定住した可能性は低い。低位段丘の岩崎野寺段丘までに定住が確認されるのは新扇状地が形成された縄文時代中期以降である。代表的な遺跡としては岩崎野遺跡（68）や先に触れた二ツ塚遺跡などがあり段丘上の遺跡は最盛期を迎える。縄文時代後・晩期になると中期と比べ遺跡の絶対数は少なくなる。特に高位段丘の上段段丘上では遺跡数は少くなり、集落は金剛新遺跡（58）など低位段丘である下段・岩崎野段丘を中心とした地域に移る。

弥生時代なるとこれまで段丘上で営まれた集落は、扇状地崩壊部や蛇行原の自然堤防上に移る。代表的な遺跡は、浦田遺跡をはじめ小平遺跡（2）・江上B遺跡（29）・正印新遺跡（32）などが挙げられる。この時代以降、再び段丘上に開発の手が伸びるのは古代、場所によっては中世までまたなければならない。常願寺川右岸流域では弥生時代前期の遺跡は確認されていないため詳細は不明であるが中・後期では常願寺川と上市川扇状地崩壊部が接する白岩川流域で多くの遺跡が営まれるようになる。古墳時代は弥生時代の遺跡の分布とほぼ同様な広がりを示す。代表的な遺跡は竹内大神堂古墳（8）・塚越古墳（12）や県内最大の円墳である稚児塚古墳（18）などが挙げられる。

古代では7世紀と11世紀は資料が少なく不明な点が多いが、8・9世紀は新扇状地上や蛇行原の自然堤防上を中心とし、弥生時代以降開発が行われなかった上段段丘上の立山町上末に上末古窯跡群（65）の操業が開始されるなど常願寺川右岸扇状地の全範囲で遺跡数が著しく増加する。なお、上末古窯跡群が廃棄された後、近世に至り再びこの地に越中瀬戸窯跡群（62）が操業を開始しており上末周辺は窯場としての条件が整っていた地域と言える。この時期成立した東大寺領大藏の莊比定地の一つに、浦田遺跡の隣接地の立山町泉・寺田地区が挙げられており、当遺跡の性格を考える上で重要な要素となる。古代の代表的な遺跡は先に触れた立山町上末古窯跡群・利田横枕遺跡（14）・辻遺跡（36）などが挙げられ、辻遺跡では都司・里正など古代律令制を示す木簡が出土している。

中世では古代の8・9世紀と同様、扇状地の全範囲で遺跡の分布が見られる。常願寺川が東偏し現流路に固定されるのはこの時期で、上市川が転流するのはもう少し後の近世初めであるが、ほぼ現地形の景観が形成され現集落の成

立につながる時期と言えよう。代表的な遺跡としては神田遺跡（33）・若宮B遺跡（34）・弓の庄城跡（52）、仏生寺城跡（7）などが挙げられる。

（2）浦田遺跡周辺の微地形

浦田遺跡は常願寺川扇状地の扇端部に位置し、南北に細長い微高地の北端に広がっているが、現在、遺跡周辺はほ場整備が行われており微地形の判断は難しい。大正時代の地形図や明治時代の地籍図には白岩川が支流の柄津川と合流した下流で顯著に蛇行流路跡が観察できる。現在この流路跡は富山市と舟橋村・上市町の行政区境となっている。

浦田遺跡が広がる微高地の東西両側にも埋没河道に起因すると思われる低湿地が見られる。西側の低湿地は地籍図にもその痕跡が認められ、北から「蛇掛」「東沼」「沼」などの低湿地を連想させる字名が細長く続いている。この埋没河道は付近を北流する高野川もしくは細川の旧河道と思われ、微高地はこの河道により浸食され蛇行崖を形成している。蛇行崖の一部は平成9・11年度に調査しており、詳細は後述するが、出土遺物やその堆積状況から旧河道は縄文時代に機能し、縄文時代後期にはその活動を停止して湿地化が進んだと考えられる。このことは縄文時代中期の常願寺川の新扇状地形成、これに伴う岩崎野段丘の成立とほぼ同時期に、この旧河道が活動して微高地を浸食する蛇行崖を形成したことを示している。

東側の低湿地は地形図では柄津川またはその支流の旧河道に浸食されている。平成9年度の調査では調査区の東端に南北に流れる谷地形を確認している。この谷地形は古代の流路と中世前半の区画溝を削平しており中世前期以降に形成されたと考えられる。しかし、この谷地形を河道の浸食に伴う低地の始まりとするか、すぐ東側を流れる農業用排水の旧流路であるか現時点では判断できない。東側の低地の詳細な形成時期に関しては不明であるが西側の低地が形成された時以降と考えて矛盾はない。この様に遺跡が広がる微高地は岩崎野段丘とほぼ同時期に形成され段丘先端部もしくはそこから伸びる自然堤防と考えられる。この地に最初に集落が営まれた弥生時代中期の景観は、微高地の東西を浸食していた河道はその活動をすでに停止した状態で河道内は低湿地化していたと考えられる。（高梨）

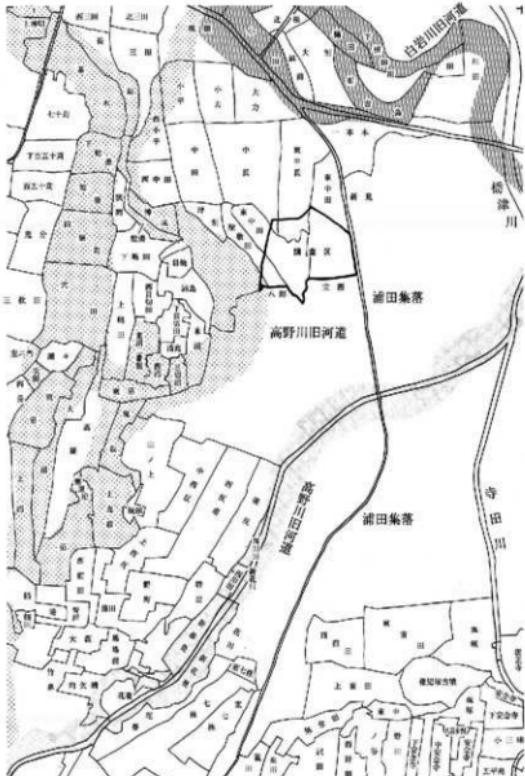


図4 調査地周辺の字割と旧流路の復元

第2章 調査の概要

1. 調査の方法

グリッドの設定 (図5) グリッドは2m方眼で、事業地内の全域をカバーできるように設定した。グリッドの基準には国家座標を用い、平成9年度の事業開始時点にX77,180Y13,500をX 0 Y 0として設定した。

調査区は、平成10・11年度を便宜上A～D地区とした。

発掘調査方法 調査内容は、a. 表土除去、b. サブレンチ掘削、c. 包含層掘削、d. 遺構検出・発掘、e. 遺構の記録写真撮影・実測図化、f. 平面図測量、g. 分析用サンプリング、h. 土壌洗浄である。

a. 表土除去 試掘調査結果に基づき、調査員立ち会いのもと重機による表土除去を実施した。表土は一部撤出し、その多くは調査区外にキャリアダンプを使って山積みした。

b. サブレンチ掘削 表土除去後、調査区内のグリッドに合わせて、10m毎のグリッド杭の東側および南側に幅30cm程度のサブレンチを設定した。さらに、杭を中心に幅30cm程度のセクションベルトを残し、すべてのセクションベルトで基本層序の観察・記録を行った。深さは、基本的に地山（4層）を若干掘り込む程度とした。

c. 包含層掘削 10m毎の柱で層序を確認しつつ入力によりスコップで行った。出土遺物は、グリッド毎に適宜取り上げた。

d. 遺構検出・発掘 人力によりジョレンやねじり録で遺構検出を行った。確認した遺構は、スプレーベンキでマークリングを行い、縮尺1/100で地区毎に概略図の作成を行った。遺構番号は、基本的に各地区毎に遺構の種類毎で番号をつけた。なお、清のように複数の地区にまたがるものについてはこの限りではない。A地区は1番から、B地区は一部遺構を除き101番から、C地区は一部遺構を除き301番から、D地区下層遺構は401から順につけた。しかし、D地区的上層遺構は不手際から1番から順につけてしまいA地区的遺構番号と重複してしまった。紛らわしいものは調査年度をカッコ書きにして付した。遺構は、埋土の埋積状況を観察・記録するためのセクションベルトを残し、明らかに搅乱と思われるもの以外は移植ゴテで発掘した。

e. 遺構の記録写真撮影・実測図化 セクション図はすべて1/20で図化した。掘立柱建物をはじめ建物の柱穴および小穴は、検出状況で1/10で平面図化し、空中写真測量後にすべてを断ち割った。その際、平面で柱底を確認できたものは柱底部分で、それ以外のものは中心部を通るように実施した。写真は、セクションについては基本的に35mmカメラで、個別の完掘写真や重要な箇所についてはプローニー版カメラも合わせて撮影した。全景・ブロック写真は、35mmカメラ・プローニー判カメラ・4×5インチ判カメラで合わせて撮影した。フィルムは、35mm・プローニー版は主にカラーと白黒で撮影し、一部カラースライドを使用した。4×5インチ判は、カラースライドと白黒を使用した。なお、ブロック・全景撮影に際しては、主にクローラータイプの高所作業車を使用した。

f. 平面図測量 上層遺構の平面図測量は、基本的に平板測量で行い、図化縮尺は1/40である。下層遺構の平面図測量にはアジア航測株式会社に空中写真測量を委託した。撮影にはヘリコプターを使用し、8×10インチ判で測量を行った。図化縮尺は1/20である。なお、一部遺構は1/10・1/20で手測量した。

g. 分析用サンプリング 樹種同定・歯X線写真撮影・珪藻・花粉・植物珪酸体・放射線炭素年代測定・ガラス玉蛍光X線分析非破壊法・「ガラス滓」の各分析を実施した。樹種同定分析は富山県林業技術センター塚本英子氏・樹種同定・歯X線写真撮影・珪藻・花粉・植物珪酸体・放射線炭素年代測定はパリノ・サーヴェイ株式会社・ガラス玉蛍光X線分析非破壊法・「ガラス滓」の分析は奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター遺物処理研究室長肥塚隆保氏にそれぞれお願いした。塚本氏およびパリノ・サーヴェイ株式会社には、現地で直接サンプリングをしていただいた。

1. 調査の方法

h. 土壌洗浄 埋没河道・古墳時代住跡周溝の埋積土は、一旦土嚢袋に詰めた後、ウォーターセパレーションを使用して洗浄した。乾燥後、内容物を採取した。

整理作業 作業内容には、a. 遺物整理作業 b. 図面整理作業 c. 写真整理作業がある。

a. 遺物整理作業 土器・石器は、調査に並行して現場プレハブにて水洗・注記作業を行い、土師器を中心にバイオインダー処理を施した。注記はポスターカラーを使用し、その後、遺構・グリッドごとに分け接合作業を行った。溝・建物周辺出土遺物などは、できるだけ年度・地区間の接合を試みた。実測は、遺物の時期や出土状況を勘案しながら、遺構出土のものを中心に行つた。井堰の各部材は、現場で計測・分析用サンプル採取後、㈱三菱ガス化学のRPシステムを使ってパックした。土壤洗浄の結果得られた微細遺物は、種類・地点毎に小ビニールに入れて保管している。

遺物の写真撮影は、主に4×5インチ判フィルムを使用し、ビューカメラでストロボ撮影をした。



図5 調査区区割及びグリッド割図

- b. 図面整理作業** 現場で製作した記録図面はB3版で約250枚にのぼった。各図面は、地区毎に断面図（基本的に1/20）、平面図（基本的に1/40）に分け、それぞれの図面の内容をタックシールを付け明記した。
- c. 写真整理作業** 現場で撮影した写真是、年度・地区・フィルムサイズ毎にネガアルバムに整理し、それぞれの内容をタックシールを付け明記した。遺物写真是、平成10・11年度分を1冊のアルバムに整理した。

2. 調査の経過

(1) 平成10年度調査の経過

A・B地区の重機による表土除去は、4月22日より開始した。除去した土砂および平成9年度調査の残土を搬出する必要があったため予想より時間を要し、終了したのは5月7日であった。5月11日より調査員2名、作業員40名程度、補助員3~4名の体制で発掘作業を開始した。当初は、遺構密度が高いことが予想されたA地区の調査を優先させながら調査を進めた。調査中、6月13日に隣接する立山町立北部小学校6年生の遺跡見学があった。また、6月15日より、県埋文センターで実施している埋蔵文化財専門職員研修の研修生1名が加わった。空中写真測量の日程が決まった7月中頃、SD01で井堰が確認された。梅雨末期の雨が心配されたが、7月24日には予定通りA地区の空中写真測量を実施した。7月28日には県埋文センター主催で小学生を対象とした「ふるさと考古学教室」の遺跡見学があり、8月1日現地説明会を実施した。調査の進捗状況が早いことから次年度調査区を一部満査することとなり、7月13日よりC地区表土除去開始した。A地区は、8月2日より柱穴・小穴の断ち割り作業や井堰部材の取り上げを実施し、8月11日に終了した。この遺跡は、当初遺構検出面を1面のみ想定していたが、B・C地区では、上・下2面が確認できた。B地区は、低位部のため降雨の度に水没し、排水が調査中常に課題となった。しかし、10月1日にB地区の空中写真測量を実施、10月5日には残務も終了した。C地区は、本格的な作業開始は8月1日明けからであった。SD307が予想以上に深かったことやサク状遺構の密度が高かったことから、時間がかかったが11月24日に空中写真測量を実施、11月25日に調査を終了した。

(2) 平成11年度調査の経過

遺跡の取り扱いの変更に伴い、村教委と県文化財課との協議の結果、約1,800m²を対象に調査を実施することになった。しかし、調査区がちょうどSD307の流路を縦割りするかたちになったため、拡張して約2,100m²をすることになった。重機による表土除去は、4月26日より開始した。調査区内は、表土の上に盛上がり約1mあったため時間を要した。G、W明けの5月10日より調査員2名、作業員25~35名程度、補助員2名で発掘調査を開始した。遺構検出面は、上・下2面確認された。当初、上面はSD307以外の遺構は少ないものと考えていた。しかし、サブレンチセクション観察・遺構精査の結果、基3・4層を削り残してつくられた水田畔が確認されたため、上面遺構の調査に予想以上の時間を要した。6月15日には舟橋村立舟橋小学校4~6年生の遺跡見学があった。下面遺構も、当初の予想を上回る遺構が確認され、特に埋没河道・古墳時代初めの住居跡に時間がかかることが予想された。上面の遅れに加え、下面でも遅れる可能性が出てきたため、村担当課と協議をもったが、工事の関係上、9月上旬までの調査終了を要望が強かった。そのため、遺構埋積土を一旦土嚢袋に詰めた後、ウォーターセパレーションを使用して洗浄することとした。空中写真測量は、当初8月1日前を予定していたが、降雨のため準備が間に合わず、結果8月19日に実施した。また、8月23日には現地説明会を実施し、その後、建物柱穴および小穴の断ち割りなど残務作業を行い、8月31日に終了した。土壤洗浄は、現地にて行った。約5,000袋を洗浄するのに8月20日頃から9月中旬までかかった。乾燥後に選別を行ったが、その作業には1ヶ月以上を要した。しかし、管玉作り関連遺物・石器・剣片・炭化米・種子など多くの成果を得ることが出来た。

(越前)

3. 基本層序

基本層序の性格と時期の決定は次の手順で行った。調査にあたり10mグリッドに従い断面観察用のサブトレーンチを設定した。トレーンチ断面で基本層序の垂直・平面的な広がりと遺構の掘り込み面を確認した後、包含層掘削に着手した。包含層掘削と共に伴う遺物の取上げは基本層序に従い、断面観察用の畦はすべての遺構を完掘するまで残し、遺構掘り込みと平面的な広がりを再確認している。各基本層位の帰属時期は包含層出土遺物と、断面観察による遺構の掘込み面とその遺構からの出土遺物との関係を整理し、層位間で矛盾が生じない時期を採用した。この項では各基本層位の性格や遺構・地形との関係、その堆積時期を一部推定を交えて述べる。なお、基本層位名は浦田遺跡において過去に行われた調査と同じであるが層序を理解する上で細分化した層がある。

今回の調査区の地形は、先の遺跡の立地と環境で述べたように、岩崎野段丘の先端部もしくはそこから延びる自然堤防上に位置し、東西両側を河川により浸食を受けている。調査区の地形は段丘・自然堤防の先端部である微高地（A・C地区）・後背低地（B地区）と埋没河道（D地区）の三つに分けられる。

基本層序は大きく1～4層の4つに分けた。1層が現表土、2層は褐灰色を基本とした遺物包含層、3層は有機質を多く含む黒色土の遺物包含層、4層は明黄褐色土の無遺物層といわゆる地山である。各時期の遺構は2・3層内から掘り込まれる。

1層は現表土で下層には鉄床が発達し、2層との層界は平坦面然である。

2層は旧水田耕作土とその鉄床でD地区を除くA・B・C地区に広がる。後背低地であるB地区では2層はさらにa～fの6層に細分化でき、ここでは3回の田直しの跡を確認した。a層は旧耕作土で直下のb層はこの鉄床となり、同様な関係がc層とd層、e層とf層にもある。2層の帰属時期は次のように判断した。最も新しい遺構であるSD102・104はa層上面から掘り込み、SD102からは越中瀬戸の皿（213）、SD104からは近代の陶磁器（216・217）が出土している。2層最下層であるf層から確実に掘り込む遺構は確認できなかったが、出土遺物のほとんどが中世後期の遺物に占められ、直下の3層からは中世後期の遺物は出土せず、最も新しい遺物が中世前半であるなどのことから2層の帰属時期はa～d層までは近代・近世、e・f層は中世後半と考えられる。なお、断面では水田畦畔と思われる盛り上がりをf層上面で確認しているが、その平面的な広がりは確認できなかった。D地区ではSD307の上に近世の水田畦畔が確認でき、同時期の水田畦畔が微高地に広がっている。微高地の一部では近世の畦畔下に別時期の畦畔を確認した。遺構の切り合い関係からSD307が機能していた時期の水田畦畔と考えられ、時期的にはB地区のf

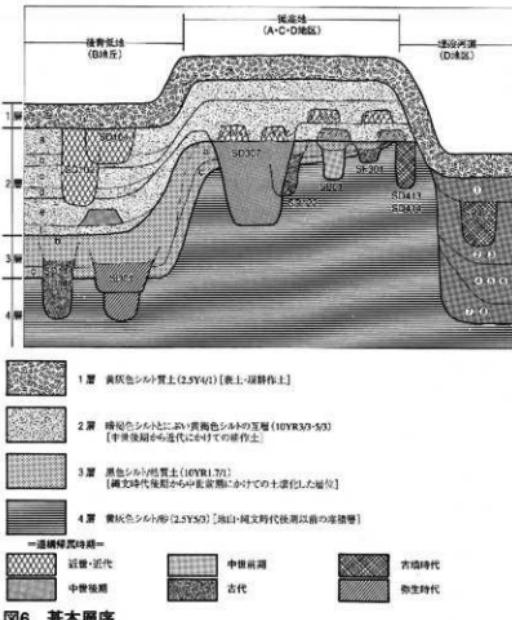


図6 基本層序

層上面で確認した中世後半の水田畦畔と同時期と考えられる。2層と3層の層界は平坦面然であり2層が3層上面の一部を削平した後堆積したと考えられ層位間は堆積の連続性はない。

3層は有機質に富み、ほぼ調査区全域に分布している。分布範囲等からa・b・cの3層に細分した。a層は微高地に分布し、後背低地に分布するb層と比較して砂の含有度が多いため区分したが、この土性の違いは地形種の違いによる堆積環境によるものと考えられ堆積時期などは同じである。c層は地山である4層との漸移層である。なお、D地区の埋没河道の覆土は3層と酷似するものの、現用水が基本層序を切断しているため相関関係は不明である。a・b層からは弥生時代中期から中世前期の遺物が出土している。この層では中世（S B01）古代（S D01・13・114・116・122）弥生時代（S D413・414）など各時代の遺構を確認した。これらの遺構の掘り込みは3a・b層中からで、さらに各時代ごとの遺構面に区分されるものと思われるが、遺構の立ち上がり部分は上部に行くに従い不明瞭になっていき肉眼による断面観察では時代ごとの区分は不可能であった。c層から掘り込む遺構は確認していないが層位内から縄文時代後期の土器が出土している。以上のことから3層は縄文時代後期以降地形的に安定したことにより4層が有機質化したものと考えられる。

4層はいわゆる地山で、B地区とC地区の境では確認面から約1.5m下まで4層が堆積しているを確認している。性格的には土性は地点により砂土からシルト質壤土と変化するが性格的には同質で、遺跡が広がる微高地の整形層と考えられる。平成9年度の調査ではこの後ふれる埋没河道の肩部から先土器（旧石器）時代と思われる石器が1点出土しているがこれまで述べてきたように遺跡が広がる微高地の形成時期等を考慮すれば周辺に先土器（旧石器）時代の遺跡が存在する可能性は低く、河道に伴う流れ込みとして判断するのが妥当と考えられる。

過去3年間の調査で噴砂跡を数カ所で確認した。B地区では噴砂が4層と3c層を切り3b層の中程で止まっているを確認した。3b層の堆積時期は弥生時代中期から中世前半までと長期間にわたるが、噴砂が中程で止まっているのを考慮すれば噴砂の時期は古代の可能性が高いものと思われる。D地区では2層内で地震痕跡が確認されたため、自然科学分析を行った。詳細は附編の自然科学分析を参照頂きたい。

埋没河道であるD地区的層序についての詳細は遺構の章で述べるが、それぞれの層位の帰属時期は出土遺物の分布状況と堆積状況を整理して4時期に分けた。上から、古墳時代以降の①層、弥生時代後期の②・④層、弥生時代中期の③・⑤・⑥層、縄文時代晚期頃の⑦・⑧層である。特に②・④層と③・⑤・⑥層の境にはマンガン斑の発達が見られ、出土遺物の垂直分布もこの層界で古墳時代以降の遺物の出土量は極端に減り、かわりに弥生時代中期の遺物の出土量が急激に増えるようになる。このことは縄文時代晚期の堆積である⑦・⑧層である程度埋没していた河道が再度河川作用により浸食・堆積し、①から⑥層が堆積した結果と思われる。最下層の⑦・⑧層と地山の4層との層界には漸移層が発達しており、堆積状況や遺物の出土状況は基本層位の3c層と酷似している。

（高梨）

4. 縄文・弥生・古墳時代

(1) 概 要

縄文時代後・晩期の遺物は、主に調査対象地西側を中心に散見できる。明確にこの時代の遺構と捉えられるものはない。なお、D地区で晩期の土器・玉類が出土した埋没河道や晩期の浅鉢が出土した土坑（SK418）があるが、後者は、土坑底面より浮いた出土であることから混入の可能性が高いと考えている。

弥生時代中期になると、D地区で土坑が数基散見できるほか、先述の埋没河道より中期（Ⅲ様式～Ⅳ様式初め）の遺物が多く出土している。この埋没河道の埋積土は、土壤洗浄を行い、管玉作り関連遺物・ガラス玉などを得ることが出来た。また、埋没河道東側一帯の古墳時代以降の遺構中にこの時期の遺物が目立つ。本來遺構があったものが中世後期の水田開発により削平されてしまったものと考えている。弥生時代後期には、A地区で井堰を伴う大溝（SD01）とそれに伴う溝を、D地区で最終末～古墳時代初めの溝を確認している。SD01中で確認された井堰は2基ある。1基は後期初め（猫橋式期）、もう1基は古墳時代初頭（古府クルビ期）と考える。しかし、この溝・井堰の時期決定には、いくつかの問題もある。これについては後で詳述するが、この報告では、SD01の時期を弥生時代後期～古代として扱う。

古墳時代には、D地区で古府クルビ期の住跡を3棟確認している。いずれも周溝を伴い、このうち1棟は埋没河道と切り合っており、これを切っている。この辺りは中世後期の水田開発に際し、地山が少なくとも15cmは削平されているため、いずれの住跡にも周堤等は確認されなかった。

以下、弥生・古墳時代の各遺構について地区毎に詳述する。

(2) A地区の遺構

a. 弥生時代

SD01 A地区を南東から北西に斜めに横切る溝である。この溝は、H9調査で南北の2カ所で続いている。現況で、幅3.0～5.0m深さ0.7～0.9m程度を測る。断面形は、逆台形を呈する。なお、十層断面観察により上部は削平されていることが分かる。また、X82Y84・X91Y78付近で時期が異なるSG01・02の2基の井堰が確認された。それぞれの井堰によって分水された水は、SD06・05へ流れる。また、全体に直線的である流路は、X97Y71付近で北に向きを変えそのまま直線的に北流する。これらは、人による溝の掘削・管理があったことを伺わせる。

概要の項で、「時期決定にいくつかの問題がある」とした点について詳述する。SD01の埋積土は、埋積状況・土質などより大きく3つに分けられる。下層部は、基本層序4層（以下、基本層序の各層は「基〇層」とする）に起因すると思われる黄灰色・灰黄色・ぶい黄色砂などと基3層に起因すると思われるシルト混じりの黒色・黒褐色砂の互層で、粗砂も多く混ざる。所によつては地山と見間違うほどで、検出段階の溝の肩部まではほこの土で覆われる。普段の水量はさほど多くないものの、たびたび大水の被害に被つたようである。中層部は、下層部よりシルトっぽい黒色・黒褐色砂を基本に黄灰色・灰黄色・黄褐色砂などが混ざる。この埋積土で埋まる溝は、下層部埋積土を切つており、両堆積土の堆積には時間的断絶があったことがわかる。また、川幅も狭く浅くなる。上層部は、より土壤化した黒色・黒褐色砂質シルトが埋積し、鉄分の沈着・植物の根の痕が多く確認できる。なお、2基の井堰は、中層部の完掘後あるいは下層部を掘り下げ中に木組みの上端が見え始めた。遺物は、下層部からは弥生時代後期（猫橋式期）～古墳時代初頭（古府クルビ期）の遺物のみが、中層部からはそれに古代（8世紀後半以降）の遺物が混じり、上層部からはさらに柱状高台の土師器皿（12世紀中頃）が出土している。ただし、遺物の総数としてはさほど多くない。さらに、井堰の部材数点を放射性炭素年代測定した結果も古墳時代初頭以前の値を示している（附載参考）。なお、上層部は、中世前期の掘立柱建物SB10-03に切られる。これらから、この溝の初現を弥生時代後期に求め、完全に埋没した時期を12世紀代と考えた。しかし、ここで問題となるのがその存続時期の長さである。この付近の地山である基4層は、粒子の比較的粗い黄褐色砂である。調査中も降雨の度に遺構の肩が崩れたり埋まつたりし、小さな流路が出来た。このような状況下で、SD01の存続期間は不自然なように思われ

る。「時期決定にいくつかの問題がある」としたのはこの点についてである。・応、下層部の流路埋没後も窪地として名残がみられたか、浅いながらも自然流路として残っていて、古代の時点で新たに掘り直されたか大水による開削で流路が生まれた可能性があると考えている。埋積土の自然科学分析等があれば解決できたかもしれません、後悔される点である。

SD06 X82Y84付近でSD01より分岐し、これに沿って北流する溝である。ただし、分岐点はSD01中層段階の流路に壊されている。平面検出状況・断面観察により、大きく2つの流れ（SD06-1・SD06-2）に分けられる。SD06-2の埋積土は、SD01より粗砂が多く混ざるもの SD01下層部と類似する。SD06-1の埋積土は、SD01中層部とよく似る。前者は、幅1.0～1.6m深さ0.5m前後を測る。なお、調査区内において底面のレベルはほとんど変わらない。断面形は、南側では「U」字形でいくぶん袋状となるが、北側では皿状を呈する。埋積状況より水量が多い時と少ない時とが幾度とあったようである。SD06底面とSD01底面の比高差は、20～30cm程度あり、井堰による分水機能が働いていたことを示すものであろう。後者は、幅0.7～1.0m深さ0.3m前後を測る。SD06-2よりさらにSD01に近いところを流れ、SD01肩部（中・下層部埋積土）を一部切る。

SD05 X91Y78付近でSD01より分岐し、北流する。ただし、分岐点付近はSD01中層段階の流路に壊されている。幅0.9～1.0m深さ0.4～0.5mを測る。埋積土の違いから、大きく2つに分けることが出来る。しかし、いずれも埋積状況がSD01下層部に似ていることから、SD01同様古墳時代初めには埋没していたと考えている。

SG01 SD01中のX82Y84付近で検出され、SD01の流れにやや斜行して構築されている。一部西側はSD01中層段階の流路に壊されているが、検出時点で長さ7.0m前後、基底幅2.0m程度、高さ0.5m前後を測る。井堰としては、上市町中小泉遺跡（弥生時代中・後期）【上市町教委1981】、小杉町南太閤山I遺跡（古墳時代5c）【県教委1983】、福光町梅原胡原堂遺跡（16c前半）【福光町教委1996】、大島町北高木遺跡（弥生時代）【未報告】に次いで県内5例目である。構造を見ると、まず、長さ1.0～1.4m程度・断面の1辺が7～10数cm程度の角材を鉛直方向に25cm程度の間隔で40～50cm程度の深さまで打ち込む（縦材）。次にその縦材を中心に同じ程度の長さで厚さ数cmの角材を斜めに打ち込み（斜め材）、さらに横木を渡して（横材）固定する。横材は、他の材より細く短いものが使われたようである。いわゆる直立型堰と合掌型堰の中間的な構造である。斜め材の一部にヨシ・アシ類の植物遺体が少量見られたが、これが井堰を構成する部材の一部であったかどうかは不明である。なお、構築部およびその後背部が40cm程度窓む。この部分の埋積土には粗砂・玉砂利が多く見られることや類別が中小泉遺跡以外にないことから、井堰が破棄されたあと水流によりえぐれた可能性が高いものと思われる。なお、井堰に直接伴う遺物の出土はなく、時期決定は検出状況・埋積土・自然科学分析結果などから推定するしかない。それらから弥生時代後期を考えている。

SG02 SD01中のX91Y78付近で検出された。遺存状況が極めて悪く、數本の杭が確認されたのみである。そのため、構造の詳細は不明であるものの、縦材と斜め材が確認できることからSG01と同様の構造であったと推測できる。また、構築部分と推測する窓みの形から、ほぼ南北方向に構築されたものと思われる。このことと、SD01中層段階の流路を考えあわせると、この時期のSD01はここで屈曲していたと推定できる。この井堰に直接伴う遺物の出土は見られない。しかし、SD01下層部埋積土中のSG02上面より古府クルビ期の赤彩壺が出土しており、これをこの井堰の下限と考えている。このことは、自然科学分析結果とも矛盾していない。

SG03 SD01中のX91Y76付近で確認された杭列である。現況は長さ2m余り、15～20cmの間隔で矢板状の板材を打ち込んでいる。SG02のすぐ北側に位置し、SD01中層段階の流路に壊されているが、本末はより南側まで延びてSD05との分水部付近の護岸だったと推測する。時期は、SG02と同時期と考えている。

(3) D地区の遺構

a. 弥生時代

埋没河道 今回の調査において、調査期間・湧水・調査区の形などの制限から十分な土層観察・遺構精査が出来た

とはいひ難い。そのため、埋没河道に切り合っていたと推測される古墳時代以降の遺構の確認が出来なかつた。そういった状況下で、確認できることについて述べる。調査は、玉作り関連遺物の出土を想定し、調査区に50cmメッシュを設定し（東西軸A～W・南北軸1～35）、上部から深さ5～7cm毎に①から順に土糞袋に詰めて取り上げそれを洗浄した。その結果、層序を無視した形となつたが、各層序の時期決定に際し多分に参考となつた。この埋没河道は、当遺跡範囲の西側境となるもので、H 9 調査でも確認されている。今回の調査における最深部は標高10.4m、肩部との比高差は1.4mを測る。底面は比較的平坦で傾斜も少ない。セクションの7・8層は、H 9 調査のSD70埋積土にあたり、5・6層はH 9 調査の2・3層にそれぞれ対応すると考える。埋積土は、他の遺構と異なりシルト分が多い砂質土である。2・4層と3・5・6層との境には鉄分・マンガン斑の沈着が多く見られ、埋没過程に断絶があつたことが推測できる。また、7・8層は、ヨシ・アシ類の地ド茶が多く見られる。出土遺物・埋積状況からその堆積時期は、7・8層は縄文時代晚期、3・5・6層は弥生時代中期、2・4層は弥生時代後期、1層は古墳時代以降の時期を考えている。ただし、1・2・4層の堆積時期が弥生時代中期～後期である可能性も否定できない。それは、1層に古代・中世の遺物が多く混じるのは、当該期の遺構が切り合っている可能性や中世後半以降の水田開発時に擾乱を受けた可能性、水田の耕作土の一部となっていた可能性があるためである。2・4層も埋没河道を切っている古墳時代初め（古府クルビ期）の住居跡に伴う遺物が混ざっているだけの可能性も否定できないためである。

出土遺物には縄文時代晚期・弥生時代中・後期・古墳時代初め・古代・中世の各時代のものが見られる。縄文時代晚期の遺物は、7・8層の出土で中屋II式期深鉢形土器・小玉がある。弥生時代中期の遺物は量的に最も多く、畿内III様式～IV様式初めの土器・石器が出士している。また、ガラス小玉・管工作り関連遺物（製品・未製品・磨製石錐・打製石錐・有孔円盤状石製品）、ヒスイ原石・荒削片などもある。これらは3・5層を中心に1・2・4層からの出土である。弥生時代後期・古墳時代の遺物は、量的に極く少量である。なお、天王山式系土器が2個体分出土している。その所属時期は、一般的には弥生時代後期とされている。しかし、これらの出上位置・層位が5層上部に相当していること、付近からは信州の栗林式土器を含む弥生時代中期の土器の出土しか見られないことなど、後期と即断しかねる状況にある。ガラス小玉は、奈良国立文化財研究所埋蔵文化センター遺物処理研究室長肥塚隆保氏による蛍光X線分析並破壊法の結果、カリガラスであることが確かめられている。なお、出土遺物の中に、一見「ガラス滓」ではないかと見受けられるガラス質の物質が大量に存在している。大きさは0.2mm程度の微小なものから4mm程度のものまである。形状は、不規則な多面体・球状・不整形などバラエティに富み、いずれも気泡が多くみられる。色調は、緑・深緑・黒などのものがある。その所属時期としては、出土層位より弥生時代中期を考えている。しかし、この物質をガラス小玉同様、肥塚氏に分析を依頼したところ、「ガラス滓」からは、クリストバライトが検出されており、人工的なものとすればかなり高い温度で加熱されたものと推定される。ガラスの製造にはこのような物質は牛じる事ではなく、ガラスの製造とは関係のないものである。』との所見を頂いた。しかし、この物質が何に起因するものであるかは不明のままである。

SK413 南北1.3m東西0.55mの楕円形、深さ0.3mで袋状の断面形を呈する土坑である。平面プランおよび壁面と地山との境は不明瞭である。これは、同時期の遺構（SK420～421）においてもいえる。南端に弥生時代中期（直様式）の土器が1個体潰れた状態で出土した。出土した土器は、その類例を長野県松木盆地周辺に求められそうである。

SD411-1・2 D地区中央部を北流する。本来1本の溝で、時期により多少東西に溝がふれた結果、数条の溝として検出されたものである。各溝は、幅40cm前後深さ25～30cm程度の溝である。SD411-1がSD411-2を切り、SF401は両溝を切る。調査区南側のSF401と重複する辺りでは、古代の遺物も若干見られるがサク状遺構の掘削に伴う混入である。南接する地区を1986・87年調査の際にも確認されている（立山町教育委員会1986・1987）。その際の調査結果や今回の出土遺物から、この溝の存続時期は弥生時代終末期～古墳時代初めと考えている。この溝は、その位置関係か

ら後述する住居跡群と有機的関連があったと思われる。

SD421 埋没河道を切るが、その部分のプランは明瞭に確認できない。出土遺物は弥生時代後期の土器がある。

小穴群 遺物の出土もなく、時期決定の決め手に欠けるため平面図には載せていないが、SD411西側を中心に多数の小穴群を確認している。これらのうち、直径15~20cm程度で輪郭が不明瞭なものが散見できる。SK413・420などの例からみて弥生時代の遺構と考えるのが妥当と思われる。埋没河道や占墳時代住居跡中の遺物量などから、本来あった弥生時代中期の遺構群は、中世後半の水田開発時に削平を受けたものと推測している。

b. 古墳時代

SB03・SD413 古墳時代初め（古府クルビ期）の住居跡で、SD413が周溝にあたる。周溝は隅丸方形に巡り、その中央部に4本柱の建物が建つ。プランはSB04・SD414の住居跡と重複する。調査区内において直接切り合い関係は確認できなかったが、SD418とそれぞれの溝との関係からSB04・SD414が新しい。SK406との切り合い関係ははっきりしないが、SK405には切られる。周溝の南西部が途切れることから、この部分が建物の出入り口であったと思われる。SK407は、この建物に伴う可能性があるものの性格は不明である。柱穴は、深さはSB04の柱穴と大差ないが、直径はやや小さい。4本中3本の柱穴で、柱の木質が残存しているのが確認できた。

出土遺物は少なく、団化可能なものは弥生時代中期の鉢（H11-64）程度である。

SB04・SD414 古墳時代初め（古府クルビ期）の住居跡で、SD414が周溝にあたる。周溝は円形に近い隅丸方形に巡り、その中央部に4本柱の建物が建つ。SB03・SD413と比べるとひとまわり小さくなるが、周溝幅・深さおよび柱穴規模はむしろ大きくなる。周溝は、SB03・SD413同様に南西部で途切れ、その部分でやや幅が広くなる。幅は約4mを測り、入り口部分と考えられる。なお、柱痕は確認できず、むしろ人為的に埋め戻したようであった。

周溝および柱穴内からは古府クルビ期の上器を中心に弥生時代中期の土器などが豊富に出土している。特に、入り口両側の周溝内からは大小の壺、赤彩高环、滑石製勾玉模造品、滑石製白玉などがまとまって出土している。また、P4からは拳大のヒスイの原石が出土した。

SB05・SD422 古墳時代初め（古府クルビ期）の住居跡で、SD422が周溝と考えている。SB05P1およびSD422は埋没河道を切る。しかし、SD422は、調査区西端で急に浅くなったり、東西で統一が未確認であるなど周溝とするには不確定要素が多いことを断っておく。

SB05P1から石包丁の小片と研磨途中のヒスイ片（H11-375）がSD422より出土しているのみで、時期は特定できない。

SD418 古墳時代初め（古府クルビ期）の溝で、SD413を切り SD422に切られる。住居跡の周溝の可能性もあるが、他の周溝と比較して浅いことや出土遺物がないことから断定しかねる。

SK405 南北1.9m東西0.9m深さ数cm程度の浅い土坑で、SD413を切る。埋積土には焼土・炭化物が比較的多く混ざるもの、底面・壁面に被熱した痕跡は認められなかった。

出土遺物には弥生土器があるが、この遺構の時期を表すものではない。なお、SB04・SD414に伴う遺構の可能性もある。

（越前）

表2 古墳時代住居跡一覧

建物番号	建物方向	建物規模	梁 行	梁行柱間	桁行柱間	桁 行 (平均)	周 溝 径 (平均)	周溝深さ (平均)	周 溝 幅
SB03	N-37° -W	1×1	3.32	3.32	3.34	3.34	13.6	0.23	0.25
SB04	N-43° -W	1×1	2.52	2.52	2.9	2.9	10.32	0.3	0.46
SB05	N- 8° -W	1×1	2.1	2.1	2.98	2.98	-	0.28	0.57

*長さの単位は、いずれもmである。

*建物方向は、桁行土跡が東北よりどれだけ振れるかを示したものである。

*梁行は北側を計測、桁行は西側を計測した。(ただし、SB05については、それぞれ東側および北側を計測)

*柱間は、柱痕が確認できたものを除き芯まで計測している。

5. 古代

(1) 概要

調査区を含むこの付近は、8世紀中頃に成立し10世紀末頃まで存続した「東大寺領大蔵荘」の比定地となっている。この荘園は、県内に多い東大寺領の荘園でも最も開発が進まなかつた荘園であったとされている。

調査の結果、5棟の掘立柱建物と大小の溝およびサク状遺構が確認された。掘立柱建物群は、すべてA地区で確認され、4棟はSD14に沿って整然と並んで確認された。この掘立柱建物群は、さらに南に延びておりH9調査でも3棟が確認されている。サク状遺構は、B・C・D地区を中心に調査区の1/2程度の面積で確認されている。また、SD14以降にサク状遺構がほとんど見られずそのあり方に興味が持たれる。遺構内出土の遺物は、一部の溝を除いてほとんどなく、各遺構の時期決定は包含層中の遺物および切り合い関係など相対的関係より行った。

包含層出土のものも含めて、7世紀代の須恵器が若干あるが遺物量が増えるのは8世紀後半であり、10世紀代のものまで各時期のものが出土している。ただし、調査区東側より西側出土の遺物の方が新しいものが多い。

以下、各遺構について詳述する。

(2) 掘立柱建物

SB04~07の4棟は、SD14に沿い建物方向を描え整然と並ぶ。その間隔は約4mを測る。同時期に存在していたSD01中からも、この時期の遺物は少ない。また、この時期の集落に一般的に見られる竪穴住居も確認されていない。これらのことから生活域ではないと推定され、建物群は倉庫と考えている。また、SB142も含めたこれらの掘立柱建物群は、付近の包含層出土遺物・SD14の時期から、8世紀後半~9世紀前半頃の時期を考える。

SB04 唯一の矩柱建物である。P10~P12は、梁行の柱列にズレが大きく、各柱穴は人為的に削められたような埋積状況を見せる。そのため、この部分は庇の可能性があるが、柱間が大きいことや他の建物の建物方向を考慮して東西棟と考えている。なお、柱穴はいずれも直徑30cm前後で規模に差はない。床面積は39m²である。

SB05・06 向建物の桁列にズレが少なく、両建物間は数十cmしかない。そのため、1棟の建物の可能性があるが、柱穴規格・柱間から2棟の建物とした。位置関係から見て、いずれも東西棟の建物と考える。SB06の各柱穴は、直徑40cm程度深さは20cm程度を測る。SB05の各柱穴は、直徑25cm程度と小さいが深さは20~30cm程度を測る。桁行の柱間はいずれも不規則である。床面積は、SB05が14m²、SB06が22.5m²を測る。なお、両建物が1棟とする33m²となる。

SB07 倉庫群と考えている4棟の建物中、最も建物規模が大きく柱列の歪みもほとんどない。柱穴の掘り方は基本的に方形で、1辺(直徑)55cm前後を測る。柱痕が確認できたものは少なく、埋積土は、灰黄色・にぶい黄色砂を基本としたものが多く、地山に樹めてよく似ている層もある。床面積は37m²である。

SB142 H9調査で確認された建物の統きである。3年間で確認された建物中最大である。SB04~07の建物方向とは向きがずれること、SD14に規制されていないことから時期差があるものと考えられる。身舎部分の柱穴の掘り方は、方形で1辺55~70cm程度である。南側に1間の庇がつくが、その部分の柱穴は直徑35cmと小さい。なお、P2~P5列およびP11~P14列の東側延長上3.2mのところに身舎柱穴と同規模の柱穴が存在する。H9調査時点ではP6~P14列までの建物として報告されている。しかし、P15~P16に加えP17の存在から庇の可能性がある。柱間が広い点が気に掛かるため、今回は可能性があるとして破線で表記するにとどめた。南側庇のみの建物とすると床面積は36.5m²、南・東側の2面庇と考えると床面積57m²となる。なお、梁行側に庇が付く建物は、1986・87調査においても確認されている(建物-I-05)。建物-I-05の床面積は2面庇としたときのSB142とはほぼ同じ57.5m²である。1986・87調査の報告からみると、建物-I-05はSB142の後身といえるかもしれない。

(3) 溝

SD01 詳述は、前節に述べたためここでは簡単に触れるにとどめる。中層部段階は掘立柱建物群と、上層部段階は

西側溝群とほぼ同時期にある。埋積状況から見るとさほど流量はなかったと思われる。井戸や護岸などの施設もなく、遺物の量もさほど多くない。この時期の利水状況がどの様であったかは不明である。

SD14 挖立柱建物群の西側約3.5mを北流する溝である。幅40~50cm深さ10cm前後を測る。北側で途切れるが、SD01に合流していたと思われる。削平を受けた可能性もあるが、サク状造構は、一部はSD14を切るが、その東側で明確な形で確認されていない。

出土遺物は、古代の遺物がなく中世（H10-17）・近世の遺物のみである。しかし、建物群との位置関係から古代の溝と考え、これらを混入と考えている。

西側溝群 SD115（SD115-1~7を含む）、SD122・123、SD133（133-1・2を含む）、SD404、SD406などの溝群を総称して呼称する。出土遺物から、これらの溝は9世紀中頃~10世紀前半の時期幅におさまると考える。これらの溝の中ではSD122・123が最も大きく、幅2.0m前後深さ0.3~0.4mを測る。それ以外の溝は幅0.5m~1.0m深さ0.3m前後を測る。それぞれの溝は複雑な切り合い関係があり、さらに中世以降の溝がこれらを切るという状況である。そのため、それぞれの溝の細かい新旧関係は把握できなかった。しかし、SD133・SD404が最も新しいものと考えている。埋積土は全般的に、大きく見ると土壤化してシルト分が多い黒褐色砂層と粗砂が多い層の互層となっている。

遺物は各溝から出土しているが、SD122・123およびSD404からの出上りが特に多い。弥生土器（中期~後期）がその大半を占め、古代の遺物は比較的少ない。古代の遺物の中では土師器碗・皿が多く見られ、赤彩されているものも多い。特記すべき遺物には、SD404出土で「勿」の可能性がある墨書き土器（H11-164）、SD122・123出土の弥生時代後期壺（H11-152）でシカがヘラ描きされているものがある。

④ サク状造構

北側の低位部を除くSD14の西側ほぼ全域で確認されている。幅十数cm~0.4cm深さ数cm~0.25cm長さ8~15m程度を測る比較的直線的な溝群である。その掘り込みが地山まで届かず、基3c層（漸移層）内で終わってしまうものが多い。そのため、漸移層が削平され残っていないエリアは確認できない場合が多い。調査区東側で未確認なのはこのためである可能性もある。調査区北側の低位部は、水田など別の利用がなされていたようである。

溝は、1.3~1.5m間隔で10条程度が一単位として捉えられる。溝方向の違いから、4~5グループに分けられる。ただし、同じ方向であっても他の造構との切り合い関係をみると必ずしも時期差を表しているとはいえない。さらに、遺物が極少ないうえ、その性格上その遺物が必ずしも造構の時期をあらわしているとは言い難いため、時期の特定は困難である。検出面では農具痕が確認でき、底面にも農具痕の凹凸が激しい。埋積土は、攪拌された基4層（黄灰色・黄褐色・灰黄色砂）ブロックと黒褐色・黒色のシルト分が比較的多く混ざる砂ブロックの混土である。 (越前)

表3 古代掘立柱建物一覧

建物番号	建物方向	建物規模	梁行	梁行柱間	桁行	桁行柱間	備考
SB04	N-74°-W	2×3	5.4	2.7+2.7	7.2	2.5+2.3+2.4	総柱建物
SB05	N-74°-W	2×2	4.0	2.0+2.0	3.5	2.3+1.2	変則的な柱間
SB06	N-74°-W	1×2	3.8	3.8	4.4	2.0+2.4	変則的な柱間
SB07	N-74°-W	2×3	5.2	2.6+2.6	7.1	2.3+2.2+2.6	
SB142	N-90°-W	3×3 (+1)	6.4	2.2+2.2+2.0	5.7(8.9)	1.7+2.0+2.0 (+3.2)	南側（および東側）1箇所の庇

*長さの単位は、いずれもm。

*建物規模の表記は、「梁行」×「桁行」である。

*建物方向は、桁行主軸が真北よりもだけ振れるかを示したものである。

*梁行は北側を計測、桁行は西側を計測した。柱間は、東端の柱穴を起点に計測している。

*柱間は、柱痕が確認できたものを除き芯まで計測している。

6. 中世

(1) 概要

大きく分けて前期（13世紀代）と後期～近世初頭（15世紀後半～17世紀初頭）の2時期がある。前期段階の遺構は基3c層および基4層上面で確認し、後期～近世初頭段階の遺構は3層上面で確認している。両時期の間には断絶があり、前期と後期～近世初頭とでは土地利用が大きく変わる。

前期段階は、調査区東側（A地区）でH9調査で確認された一辺約90mの方形に巡る溝（区画溝）の続きが確認され、内側にH9調査で確認された建物を含めて大小13棟の掘立柱建物が確認された。井戸など建物に付属する施設は確認されていない。建物群は区画内の南東部に集中して確認されている。また、調査区南西部（D地区）で3棟の掘立柱建物が確認された。うち2棟は重複しているが直接切り合った関係はない。その他、同時期と考えられる遺構は確認できない。各建物の柱穴内および区画溝（SD13）からは、時期決定が可能な遺物はない。そのため、掘立柱建物群およびSD13の時期決定は、主に包含層出土遺物より推測したことを断つておく。

後期段階になると、調査区中央（D地区・H9調査）に2棟の掘立柱建物およびそれに伴う井戸・土壙が確認される。同時期、建物の西側ではサク状遺構が確認され、さらに西側にはSD307・水田跡が確認された。水田跡が確認されたエリアは、近世前期以降も水田として利用され、近・現代に至る水田跡を確認している。断片的な確認ではあるが、この時期の水田畦畔を調査区北側（B地区）でも確認している。掘立柱建物周辺の比較的標高が高いエリアは畑作を、その他のエリアは水田を行っていたようである。

(2) 区画溝（SD13）

SD13は、H9調査でも確認されている区画溝と考えている溝である。幅2.5m前後深さ10～20cmを測る。底面は基本的に平坦だが、中央部がやや浅くなっている。この辺りは、基3層が遺存しておらず基4層上面での検出であることから、本来は少なくとも15～20cm程度は深かったと推測される。埋積土の觀察では、比較的シルト分が多い黒褐色砂と黄灰・暗黃灰色砂ブロックの混土の堆積が目立つ。ラミナ構造や細かい水平堆積といった水堆積したと考えられるような層は確認できなかった。ちなみに、H9調査の結果によると区画溝内側で一辺約86mを測る。同等の規模を今回の調査区内に求めると、X100列付近までが区画内であることになる。H9調査のSB190の存在から考えても妥当なところと考えられる。しかし、H10調査時にSD13は、X75Y69付近までしか確認されていない。これは、削平を受けたためとも考えられるが、底面の標高は12.05m前後を測る。同等の標高を後世の削平が地山まで及んでいない調査区北側において求めると、ほぼ3c層中にある。このため、南側で確認できたものが北側で確認できなかったことは、調査時に見落とした可能性も否定できない。

出土遺物をみてみると、H9調査で古代遺物を中心に中世遺物・近世遺物がある。また、H10調査では古代遺物と中世土器小片がある。しかし、H9調査の近世遺物が近世遺構と切り合っている付近からの出土であること、明らかにこの溝に規制されていると考えられる建物群の存在から中世段階のものとした。しかし、いずれの中世遺物も時期決定が可能なものではない。

(3) 掘立柱建物

a. 中世前期掘立柱建物

H10・11調査区内で確認された区画溝内の掘立柱建物は、大規模建物1棟と中規模建物2棟・小規模建物4棟の7棟および横1列が確認された。そのうち、調査区内で建物全体が確認できたものは5棟である。建物同士の重複はないが、建物方向やその位置関係から数時期に分けられる。建物方向・位置関係より考えるとSB01・03・08～11およびSB179・187（ともにH9調査）が同時期であるものと考えている。ここで大型建物としたものは床面積100m²以上のもの、中規模建物としたものは床面積が50m²以上100m²未満のもの、小規模建物としたものはそれ以下のものである。

H 9 年度調査区で確認されたものも含めてみてみると、SB09・12以外は大規模および中規模建物に小規模建物が 1 棟ないし 2 棟付随する。

区画溝西側で確認された 3 棟の建物のうち、少なくとも SB01 (H11)・SB06 (H11) は区画溝内の建物群とほぼ同時期と考えるが、SB02 (H11) は時期を違えると考える。

建物の柱穴平面プランをみるとほとんどすべての柱穴が多角形をなしている。これは、柱穴掘削の際の道具痕と考えられ、各辺は直線もしくはやや内湾する。多角形の 1 辺は数～25cm 前後とばらつきが多いが、10～15cm 程度の箇所が多い。このことから、掘削道具は幅 10～15cm 程度のものによると考える。この道具痕は、柱穴断ち割り断面においても確認されたものがあったが、明確に分かることはほんのいくつかであった。柱穴埋積土は、柱痕部分を除くと、多くが灰黄・浅黄色砂に黒・黒褐色砂板小ブロックが混ざる土である。これらの痕跡は、古代建物群においても方形の振り方をもつ建物以外のもので確認できる。1 辺あたりの長さは中世段階のものと差はみられず、掘り具に変化はなかったようである。柱穴規模は、大規模建物と中・小規模建物とで差がある。大規模建物は、その対角線上で 40cm 程度を、中・小規模建物は同 30cm 程度を測る。

SB01・SB09・SA01 SB02 と重複し、SB02・SA01 が付随する建物である。総床面積は 89m² を測り、区画溝内の建物中 3 番目の規模をもつ。柱穴の平面・断面から、同じ場所での建て替えがあったと思われる。柱列は整然と並ぶが、柱間には若干のばらつきがみられる。各柱穴間の規模に差はみられない。なお、SB01 より東 2.4m に位置し、桁方向に平行する SA01 は、各柱穴の規模は小さいが SB01 の各柱列と並びと同じくする。ここでは樋として扱ったが、SB01 の一部である可能性がある。SB09 は、SB01 の西約 2.8m に位置する。梁行柱列の並びは、SB01 梁行柱列と比べるとそれほど大きい。P11・P12 列を SB01P21-P24 列と揃えていることから SB01 と同時期の付属屋と考える。柱穴規模は、SA01 より大きいが SB01 と比べると若干小さい。なお、SA01 と極めて近接しているが、前後関係は明らかでない。各建物・樋の多くの柱穴で柱痕が確認された。SB09 の床面積は、36.5m² を測る。

SB02 概要でもふれたように区画溝内の建物群中唯一の個柱建物である。P1・P2 間の棟持ちにあたる箇所で柱穴は確認されなかつたが、P8 の存在から梁行 2 間の建物と考えている。柱穴規模は直径 30cm 程度と小型であるが、柱間は 3.0m 前後とやや広めである。また、建物方向は、区画溝の規制を受けていないようである。柱穴の平面プランは多角形をなし、柱痕もほとんどの柱穴で確認できた。柱穴内から出土遺物はなく、周辺においても時期差を見出せる遺物はないことから、具体的な時期は特定できない。しかし、SB01 の前身にあたる建物と考えている。床面積は 45m² を測る。

SB08 建物の多くが区画溝内東側に偏って位置している中で、唯一西側に位置する。柱列は整然としているが、各柱間は一定でない。床面積は 36.5m² を測る小規模建物である。他の小規模建物が大規模建物に付随して位置するなかで、この建物に付随する大型建物は確認できない。時期が異なるか建物の性格を示すものと考えられる。

SB12 区画内のほぼ中央に 1 棟だけ位置する 1 間 × 1 間の建物である。並みもあり柱間の他の建物に比べてやや狭いことから、建物とすること白体問題があるかもしれないが、周辺には柱穴がいくつかみられることから本末はもつと大きな建物であった可能性もある。

SB03 H 9 調査で確認された SB173 の続きで、H 10 調査では柱穴 3 個を新たに確認した。埋積土の観察から、P1・P2 は抜き取りあるいは人為的に埋めた痕跡が確認でき、P3 で柱痕が確認できた。しかし、P3 の柱痕は細く浅い。床面積は約 93m² を測る。東側 1m あまりの所に SB03 の付属建物と考える SB179 (H 9 調査) が位置する。

SB10 H 9 調査で確認された SB188 の続きで、H 10 調査で西側 1 間分新たに確認した。SB03 との間は約 2.5m である。なお、P28 は SD01 を切る。北側および西側 1 間分の柱穴が小規模であること、東側 1 間分の柱列は桁行柱列とのそれが大きいことからこの 3 間を底と考える。床面積は 111.7m² を測る区画内最大の建物である。

SB11 H 9 調査時には建物として認識されていなかった。しかし、H10調査の結果新たに1間分を確認したことから建物を1棟復元した。しかし、すぐ南側に隣接するSB187（H 9 調査）との距離を考えると、事実上1棟の建物と捉えるべきかもしれない。なお、SB11・SB187とSB10の間は約10mである。床面積は17.8m²を測る。SB11とSB187を1棟として捉えると、床面積は42.6m²を測る。

SB01 (H11) 調査区南端で確認された大規模建物で、一部調査区外へ延びる。区画溝内の建物の多くが南北棟であるのに対し、東西棟であると考えられる。柱穴は、中世後期のサク状遺構（SD433～439）に切られる。建物方向から考えると、区画溝内のSB01・03・08～11などと同時期であると考える。P1-P6列およびP19-P24列の柱穴は、他の柱列よりやや深めで、柱痕が確認できるものが多い。また、その南側に当たるP25-P29列は、柱穴規模も若干小さいことから底と考えている。床面積は116m²を測る。

SB02 (H11) 各柱間は狭く、特に梁行の柱間が極端に狭い。柱穴規模は20cm弱と小さい。4隅およびP2は、大きさの割には深くすべてで柱痕が確認できる。床面積6.6m²と他の建物と比べてはずば抜けて小さい。

SB06 (H11) 建物のほとんどが調査区外に延びるため詳細は不明である。東西棟と推定しており、北側1間は底と考えている。各柱間は狭く柱列もやや重むようである。

表5 中世掘立柱建物一覧

建物番号	建物方向	建物規模 (梁×軒)	梁 行	梁行柱間	桁 行	桁行柱間	備 考
SB01 (H 9-SB184)	N-6°-W	3×5	7.0	2.4×2.5×2.1	12.8	2.4×2.6×2.6 ×2.6×2.6	SB02と重複
SB02	N-15°-W	2×3	5.0	2.5×2.5	9.0	3.0×3.1×2.9	側柱建物
SB03 (H 9-SB173)	N-7°-W	4×4	9.2	2.3×5.0(2間分) ×2.3	10.1	2.7×2.6×2.5 ×2.3	南側に1間の底
SB08	N-9°-W	2×3	5.0	2.4×2.6	7.3	2.2×2.8×2.3	
SB09	N-7°-W	2×3	4.5	2.1×2.4	8.1	2.5×2.9×2.7	
SB10 (H 9-SB188)	N-7°-W	4×5	11.4	2.2×2.4×2.4×2.4 ×2.0	9.8	2.6×2.7×2.5 ×2.0	北側及び東西に 1間の底
SB11	N-84°-W	2×2	3.8	1.9×1.9	4.7	2.5×2.2	
SB12	N-2°-W	1×1	1.8		1.9		平面形は策
SA01	N-4°-W			東西2.3		南北2.2×2.4× 2.6	SB01の1部か
SB01(H11)	N-84°-W	4×5	10.2	2.1×2.8×3.0×2.3	11.4	2.2×2.5×2.5 ×2.0×2.2	側柱建物
SB02(H11)	N-19°-W	2×2	2.0	1.0×1.0	3.3	1.6×1.7	
SB06(H11)	N-71°-E	3×1	4.4	1.0×1.7×1.7	1.9		調査区外に延びる
椿円柱穴建物01(H11)	N-7°-E	1×1		4.2			中世後期
椿円柱穴建物02(H9)	N-4°-W	1×1		3.8			中世後期

*柱間の狭いほうを梁行としている。

* (H 9-SB)内の建物番号はH 9 調査時の建物番号、(H11)は、平成11年度調査で確認したことを表している。

*建物方向は、桁行主軸が真北よりどれだけ振れるかを示したものである。

*長さの単位は、いずれもm。

*建物規模の表記は、「梁行」×「桁行」である。

*梁行は、南北棟の建物は北側を東西棟の建物は東側を計測した。桁行は、南北棟の建物は西側を東西棟の建物は北側を計測した。柱間は、東端の柱穴を起点に計測している。

*柱間は、柱痕が確認できたものを除き芯々で計測している。

b. 中世後期建物および付属する遺構

この時期の建物は、H 9 調査で確認された分を含め 2 棟が確認された。ともに梁行・桁行ともに 1 間の掘立柱建物で、柱窓規模の割に大型の掘り方をもち、平面形が楕円形を呈する「楕円柱穴」の建物である。時期決定の決め手となる遺物の出土はない。これまでの研究成果から、両建物の梁行・桁行に企画性が高いことから 16世紀末～17世紀代の時期があげられるものと考えている。これは、建物に伴う遺構出土の遺物からも妥当なものと考えられる。

楕円柱穴建物01 H 11 調査区の南西端、H 9 調査区にまたがって確認された。建て替えと考えられる楕円柱穴建物 02 と重複するが、柱穴同士の切り合いがないため前後関係は不明である。どちらの建物に伴うか判然としないが、SK01（井戸）・SK02・SK15などの土壙が伴う可能性が高い。柱穴規模は、長軸 1.3m 前後、短軸 0.6～0.7m 程度、深さ 0.8～0.9m を測る。柱穴内からの出土遺物はない。

楕円柱穴建物02 H 9 調査の時点で建物と認識されていなかったためここで取り上げる。建物方向は SB01 と若干ずれる。柱穴規模は、長軸 1.2m 前後、短軸 0.5～0.6m 程度、深さ 0.4～0.5m を測る。出土遺物には SK116 より中世土師器皿があるが、時期を特定出来るものではない。

SK04・05・08・09・SK12～14・SK16・SK18 建物として復元できないが、その規模から楕円柱穴と考えられるものである。いくつかでは柱痕が確認できたことから、これらの土壙は、建物の柱穴となる可能性が考えられる。特に SK09・12 は、土壙間が 2.9m を測り、長軸方向を揃えており調査区南側へ延びる建物の可能性が高い。出土遺物は、SK04 より越中瀬戸が、SK10 より古代土師器が、SK18 からは中世土師器が出土している。

SK01 長軸 2.1m 短軸 1.0m 深さ 1.3m を測り、平面形は楕円形を呈する。西側は SD317（近世の溝）に切られる。この井戸には幅 30～45cm 深さ 15cm 程度の溝が接続する。SK01 との切り合いはみられず、溝の水は SK01 に流れ込んでいたと考えられる。溝の埋積土には、強い流水の跡は確認されていない。井戸は、湧水が激しく、土層断面図を見る前に崩落してしまったが、崩落前の土層観察で大きく 3 つに分層出来た。上層部は黄灰・灰黄色砂にシルト混じりの黒褐色砂極小ブロックが斑に混じる。中層はシルト分が多いオーリープ黒色砂に、ぶい褐色砂小ブロックが混ざり、下層は黒・黒オーリープ色砂質シルトで植物遺体が若干みられた。中・下層は、地山に起因すると思われる粗砂が比較的多く混ざる。出土遺物には古代土師器・越中瀬戸があるが、出土層位は残念ながら把握できていない。

SK02 長軸 80cm 短軸 70cm 深さ 80cm を測り、平面形は円形を呈する。埋積土は大きく 2 つに分層出来る。上部層は、黄灰・灰黄色砂にシルト混じりの黒褐色砂の極小ブロックがまだらに混じり、下層部は、黒褐色シルト質砂に明黄褐色・浅黄色砂極小ブロックが混ざる。最下層はボソボソした感があった。便所遺構の可能性もあると考え自然科学分析を行ったが、寄生虫卵などは検出されなかった。

c. 溝・水田遺構・サク状遺構

溝 中世段階において溝は、いずれも中期後半～近世初めの溝で、主に調査区西側において確認された。SD307 は基幹用水にあたり、これより取水する支線用水に SD02・03、SD08、17・115 がある。ただし、SD17・115 は近世の溝に切られるところが多い。SD307 西側では水田遺構が広がり、SD08 と SD115 の間にサク状遺構が確認できた。

SD307 H 9 調査区でも延長が確認されている。北側と南側とでは幅をはじめ様相がかなり異なる。北側においては、検出面で幅 7.3m 前後 深さ 0.8m 前後を測り、3 つ以上の流路が確認出来る。なお、上部 2 層は近世前期の水田遺構の埋積土である。水田遺構の層を除いても 3.5m 前後の幅がある。それに対し、南側では深さは変わらないものの近世前期の水田遺構の埋積土層が無く、幅も 2 m 以下になる。流路も 2 つが確認できるのみである。溝の幅や流路の数に変化がみられるのは F セクション付近 (X52Y43付近) からで、南からほぼ真っ直ぐに北流してきた溝は、これ以北では東西に掘れるようになる。埋積土は、地山に起因する黄灰・灰黄色砂と黒褐・暗灰黄色砂の互層で、比率的には前者の占める割合が高い。遺物の出土量は、他の遺構に比べ多く繩文土器から近世陶磁器に至るまでみられる。赤

彩上部器碗が多く、墨書き土器の中には「九字」の呪文を記したと考えるものや「蔽」の可能性があるものがある。ただし、量的に圧倒的に多い古代以前の遺物は混入品である。溝の時期としては、その初現を16世紀代に求めることが出来、17世紀初めには埋没したと考えられる。この溝は、この辺り一帯の基幹用水であり、現在も調査地南側を流れる用水の前身と考えられる。現在の用水は、常願寺川より取水する高野用水より分水している用水である。この高野用水は、何度も改修が行われており当初の流れとは異なることも十分に考えられるが、室町時代（大正の「石直し」以前）にすでに出来ていたと考えられている。SD307の初現と考えている時期に合致している点が注目される。さらに、字割・町村境をみてみると、ちょうどこの溝辺が境界となっている。先述の通り、古代の西側溝群が掘削されて以降、何条もの溝が、狭いエリアに繋り返し掘られている点も注目される点である。

SD02・03 SD307の西側に近接して北流するが、SD03は途中で不明瞭になる。さらに、SX06・08の北側ではSD09と流れを一にして西に向きを変える。ただし、SD09はSD03の続きとも考えられる。なお、SD03がSD02を切る。SD03は、地山に極めてよく似た土で堆積しており、意図的に埋めたかのようである。溝の存続時期は、SD03が中世後半、SD02は近世前期と考えられる。この溝は、この西側に広がる水田に水を供給していた用水と考えられる。

SD08 X48Y45付近でSD307より分かれれる。深さ数cm程度の極めて浅い溝で、H10調査区内では確認できなかった。切り合いや近世造構との関係から、SD307埋没後も溝として機能していた。溝の東側に広がるサク状造構に水を供給していた用水と考えられる。遺物は、弥生土器から越中瀬戸までみられ、中世段階のものが多い。

サク状造構 古代のサク状造構のように規則正しく溝が並ぶではなく、長さ・方向ともに不規則な溝がみられる。また、深さも浅く、凸凹も比較的少ない。サク状造構がみられるエリアは、SD307東側の30~40m幅のエリアで、尾根上に高いところである。この付近は、最近の地図でも畠地として利用されている。

水田遺構 SD307およびSD02・03に西側に広がる。畦畔は、基3・4層を削りだして作った高まりに土を盛り上げている。水田開墾時の掘削した基底面（以下、水田基底面）の標高は、基本的に西・北側へ向かって階段状に低くなっている。そのため、SX06の削平は基3b層中までにとどまるが、SX01では基4層（地山）を20cm程度削平している。大きさを把握できたものは2枚のみで、16~18m²程度の広さである。畦畔は、その上部がほとんど削平されており、残りのよい箇所でも盛土の痕跡が若干残る程度である。SX06とSX03・04間およびSX01~03とSX04・05間・SX05北側の畦畔は、幅50~70cm水田基底面との比高差10cm前後を測る大畦畔である。SX06とSX03・04間の畦畔は、SX04の田直しの際に徐々に削られ幅が狭くなっていたようである。各水田は、畦畔の内側に浅い溝が巡る。この溝は、途中途切れたり勾配がついていないことから、畦畔を盛る際に掘られたものと考えられる。各セクションの土層観察の結果、黄灰色砂にぶい黄色砂の極小・小ブロックと黒色砂極小ブロックが斑に混ざる層と、下層部のより暗色でぶい黄色砂・黒色砂の混ざりが少ない層が薄くみられる層がある。両層とも鉄分の沈着・マンガン斑が認められたものの、顕著な鉄床の発達はみられない。また、さほど土壤化しておらず、シルト分も比較的少ない。以上から、短いスパンで水田の作り替えが行われたか、水田開墾時の整地層で鐵床の下層部にあたる可能性が考えられる。H10調査で確認されたこの時期の畦畔は、X98Y55において基2層で確認された。この1カ所で断面で確認したのみであり、平面形・広がりは確認できていない。この畦畔部分の土層観察から、基3層を削り残して作られたものではなく、周りの土を盛り上げて作ったものであることがわかる。各SXからは、弥生時代中期から近世初めに至る遺物が出土した。弥生時代中期の遺物がかなりみられるが、ローリングを受けているものが多い。また、中・近世の遺物は極少ないが、出土遺物とSD307などとの関係から、この水田の存続時期を15世紀後半~17世紀初めと考えた。なお、水田遺構下層に、さらに古い時期の水田遺構の名残とみられる浅い凹みが確認された。しかし、どの程度時期を逆上れるかは不明である。

(越前)

7. 近世

(1) 概要

ここで近世として取り上げるのは、SD307が埋没して以降の時期のものである。この時期の以降は、南北に流れる溝と水田跡・サク状遺構のほかは、建物として復元できない小穴が確認できたのみである。

水田遺構が明確に確認できたのは、調査区西側のみである。この時期の水田畔・堆積土は、基2層にあたる。水田は、近世前期以降何度か田直しがなされている。近世後期の水田は、その上層部が洪水に起因すると推測される粗砂で覆われている。サク状遺構は、断片的に確認できたに過ぎないが、中世のサク状遺構と重複したエリアで確認されている。サク状遺構の埋積土中には焼土粒・炭化物がみられた。この時期、SD307は完全に埋没し、この付近で古代以来各時代で確認された溝群は、極細い溝を残すのみとなった。SD317がSD307に変わる基幹用水であった可能性もあるが、それにしては貧弱であるのは否めない。そのため、1986・87調査の北西部で確認されている落ち込みの肩部がこの時期の基幹用水で、そのまま現在の用水路の流路に重なっていると考える。

(2) 溝

SD100～113・SD317およびSD06・SD07など調査区内では多くの溝が確認できる。すべてが同時期に存在したわけではなく、また、その埋没段階も数時期に分けられる。比較的古い時期の埋積土（A）は、比較的シルトが混ざる黄灰・灰黄色砂にやはりシルトが混ざる黒褐・暗灰色砂がブロック状に混ざる。この土は、中世後期～近世初めの遺構の埋積土の中でも最終段階の埋積土によく似たものが確認できる。比較的新しい時期の埋積土（B）は、よりシルトが多く混ざり他の土のブロックの混入が少なくなる黄灰・灰黄色砂層が主体となる。また、この段階、酸化して橙がかかった粗砂層がいくつかの溝で確認できる。これは、近世後期の水田を覆っている粗砂と同じものと考えている。そして、最も新しい段階の埋積土（C）は、粗砂が主体となる層で埋没する。この溝は、中からガラス瓶やビニールなどが混ざる。各溝は、その埋積土の性質や埋積状況から、埋没最終段階を除きさほど強い流れではなかったようである。なお、Aは近世前期、Bは近世後期、Cは近・現代の埋積土と考えている。

出土遺物は、古代～近世に至るものが出土している。それぞれの遺物がどの埋積土からの出土であるかについては把握できていないが、近世の遺物は18世紀以前の遺物が多い。また、越中瀬戸がほとんどで肥前系陶器は極少量である。特に、初期伊万里・唐津は数点がみられる程度である。城端町善徳寺前遺跡【城端町教委1998】・福野町寺家新屋敷遺跡【福野町教委1987・1988】など同時期の遺跡では、肥前系陶器が一定量みられることが確認されている。この差は、白岩川支流の柄津川上流には越中瀬戸窯が存在し、白岩・柄津川は、製品の輸送に大きな役割を果たしていたことによると考えられる。このことは、白岩川流域および神通川下流の当該期の遺跡において、越中瀬戸が圧倒的な数量を占めていることから伺える。

(3) 水田遺構

SD307埋没後、その上部は水田として利用された。最も明確に平面形が確認できたのは、SD01とSD08に挟まれたSX07である。SX07はじめSD307上部の各水田は、数回の田直しが行われ、SD01西側には3層を削り残した畔が確認されたほか、中世後期～近世初めの水田埋積土を削り残した畔を確認した。しかし、個々の水田を確認するには至っていない。X53付近・Y40付近以西のこの時期の水田は、酸化して橙がかかった粗砂に一面覆われていた。この時期の水田埋積土は、肉眼観察においても土の動きが認められ、軌X線写真撮影分析によって地震痕跡であることが確かめられた。この地震は、1858年（安政5年）の飛越地震（通称、安政の大地震）が考えられる。また、水田を覆う砂は、飛越地震後に起こった大洪水時に堆積したものと考えていた。しかし、関連資料【立山カルアラ砂防博物館1998、立山町史下巻1984】・軌X線写真撮影分析の結果、大地震前の堆積であるという結論となった。（越前）

8. 出土遺物概要

出土遺物は平成10年度の調査では遺物整理箱で約40箱分、平成11年度の調査では箱分の計120箱が出土した。これに平成9年度の調査で出土した遺物を加えると、3ヶ年の調査の総出土遺物量は360箱となる。当報告書では平成10・11年度調査分の出土遺物を中心に掲載した。なお、巻末には参考資料として、遺物整理等の都合で掲載されなかった平成9年度調査分の遺物のうち代表的なものを掲載した。なお、出土遺物の計測数値など基本データーは観察表に盛り込んだため、本項では遺物の分類など全体的な事項を中心に記載する。

(1) 繩文時代の遺物

後・晩期の土器・石器が出土している。当該期の遺構は確認できず、多くは3cm層からの出土である。なお、晩期の深鉢（H11-1）や、小玉（H11-323・324）などは埋没河道最下層の出土である。H11-255は、口縁端部外面を肥厚させ頸部位に2条の沈線を巡らせる。口縁部には斜縄文が、胴部には縱縄文が施されている。後期前葉の気脛I式である。H9-23は、胴部上半部で直線的に外傾し、口縁部がわずかに内屈しないしあはば直立する波状口縁深鉢の口縁部片と考えられる。文様は、単節RSL縄文を施した後に屈曲部直上を幅1cmあまりで磨り消す。そのうえで、口縁端部に沿って沈線を施しその直下を棒状工具によって逆続刺穴する。また屈曲部にはヘラ状工具によって連続した刻みを施している。帰属時期については全容が不明であり尠然としないが、一応、後期中葉：酒見・井口I式期と考えたい。H11-1は、上半部が緩く張り出した胴部に「く」の字状に外折する口縁部を持つ深鉢である。口縁部は、口唇部内面を肥厚させて突起を表出し小波状口縁を呈する。また、内面端部には段を有する。胴部は、上半部に7条の平行沈線を巡らせる。頸部位の沈線間は地紋の縄文（単節LR）を磨り消し、その下位の沈線間は列直文と変形した鍵の手文が施されている。また、胴部内面上半部には炭化物が軽く付着する。形態・文様の特徴から晩期中葉：中葉II式期に比定できよう。H11-55は、SK418出土の晩期の浅鉢底部で、底部に網代痕が残る。H11-84・85は、外側は細かいLR縄文を施す。縄文の付きかたから、粘土が堅くなった時点で施文したとみられる。

なお、石器は、打製石斧が數点散発的に出土した以外は、SD411より蛇紋岩製の小型磨製石斧1点と埋没河道より蛇紋岩製の小玉が2点出土したのみである。

(2) 弥生時代中期の遺物

この時期の土器は、柳橋文土器を中心に、信州栗林式系土器・天王山式系土器が若干混ざる。その他、玉作り関連遺物や石礫・石包丁などの石器が多数出土した。口縁部を中心とした施文方法には、単に刻むだけのものと、波状を作り出すものがある。前者は、面取りした口縁端部を上方から刻むもの・下方から刻むもの・側方より刻みを施すものがみられる。後者は、先端の尖った工具により口縁端部に沿って沈線を巡らせ、口縁端部内側を押圧し連続した刻みを施し、小波状を表したもの・口縁端部内面を押圧し、波状を作り出したものがある。刻み・押圧はヘラ状の木口を用いる。口縁内面には、同様の工具を用いた羽状刺突文・肩状文・斜行單線による施文のほか、2枚1対の粘土粒貼り付けによる突起を施すもの・獣状工具による細かい波状文を描いたものがある。また、胴部上半部の施文には、頸部付近に沈線を施すもの（H11-8・H9-30・34）や簾疊文を施したもの（H11-10・37・38・77・103、H9-31・36・37）、柳橋で波状文・流水文を施したもの（H11-17・32・33・88）などがある。H11-152は、簡略化されたシカが描かれている。これらは、畿内第Ⅲ様式～第Ⅳ様式初めと考えている。H11-36・75は、栗林式系土器で、小破片は他にも散見される。口縁端部には指頭圧痕が残り、ヘラ状工具で数条の沈線を施す。H11-54は、土坑より単独出土した壺である。条痕文の地紋である。口縁端部を刻み、胴部上半に柳橋による横線を施し逆続して鋸歯状に区画する。この土器は、長野県松本市境窪遺跡〔松本市教委1998〕に類例を求めることが出来る。境窪遺跡では、「中期初頭の条痕紋土器から中期後半の栗林式土器への大きな変化の一部が捉えられるのではないかと考える。」としている。H11-20・31は、天王山式系土器である。20は、外側は全面に縄文を施し、内面は頸部より口縁部・口縁端部までに

縄文を施している。31は、口縁端部外面を刻み、外面は端部直下より沈線で連弧を描いたり交互刺突文を施す。胴部下半は明らかではないが、確認できる範囲ではヘラ状工具による斜行沈線を施す。

H11-325～348は、管玉製作に関連する遺物である。出土した未製品および製作に伴う剥片の形状等から、新潟県柏崎市下谷地遺跡〔新潟県教委1979〕において復元された管玉作りの工程と大差ないとと思われる。この工程にあてはめてみると、第3工程以降の遺物のみが出土している。さらに、量的にはその多くが第5工程以降のものである。ケサビ状石器の存在から、集落内の他の地点でそれ以前の工程が行なわれていたものと思われる。どの時点で完成品と判断するかは難しいが、製品には研磨が十分でなく後継が残るものが多くみられる。また、直径1mm長さ4mm以上の安山岩磨製石錐（H11-347）（下谷地遺跡で石錐、福井県下屋敷遺跡で玉錐と報告されているものと同じである。）や玉錐製で打製石錐の可能性があるものの（H11-341・342）が出土しているほか、その未製品（343～346）も出土している。磨製石錐の製作工程は、下谷地遺跡のそれと同じと思われる。県内では、同時期の遺跡である高岡市石塚遺跡〔高岡市教委1997〕からの出土があるが、径3mm長さ2.1cmと大きい。下屋敷遺跡では、大小の磨製石錐が出土している。大きなものは管玉用ではないのだろうか。管玉の孔は、直径1.2mm程度のものが多く、内側の観察が可能なもののすべてで穿孔痕が確認できる。なお、後期の管玉と考えているH10-267には穿孔痕がみられない。H11-330は、一端に浅いドーナツ状の窪みが確認できる。穿孔しかけて中止したか、穿孔のためにあたりをつけた痕と思われる。磨製石錐は、管玉の穿孔に使用されたものと考えられる。また、有孔円盤状石製品は、凝灰岩製である。県内における出土例は、磨製石錐同様、石塚遺跡のみである。具体的な使用方法は不明であるが、下屋敷遺跡・石塚遺跡など同時期の玉作りを行っている遺跡から出土していることから、玉作りの道具であると考える。

石器は、ほかに石包丁（H11-368・369、H9-101）、石鎌（H11-356～366）などがある。なお、石包丁は、岡化したもの以外にも小片が4・5点確認された。しかし、同一個体であるかは不明である。うち、H11-364・365は磨製石錐である。H11-356を除き、いずれも石材は安山岩を用いている。H11-370・H9-399は、スクレーパーで、刃部が摩滅し光沢が見られる。前者は凝灰岩、後者は粘板岩を用いる。石核の出土はないが、フレイク・チップが多く出土している。石材は、緑色凝灰岩・玉髓を除くと、ほとんどが安山岩である。

（3）弥生時代後期の遺物

猫橋式・法仏式・月影式の各時期のものがある。猫橋式期のものは、主にSD01（H10調査）下層部からの出土で、壺・高杯・無頸壺など（H10-1～4）がある。H10-1は、擬凹線を施す有段口縁壺で口縁端部はやや内傾し、つまみ上げられた断面が尖り気味になる。H10-2・4は、無形壺である。前者は焼成も良好で丁寧な作りだが、後者は焼成も甘くやや雑な作りである。H10-3は、口縁部の長さが短く、外反しながら急角度で立ち上がり、口縁端部は内面がやや肥厚する。法仏式～月影式期のものは、主に埋没河道上層部・調査区西側で散発的に出土した程度である。H10-5は、SG02上部で出土した赤彩された壺である。住居域ではなかったが、弥生時代後期以降は生産域としてよく利用されていたことが伺える。

（4）古墳時代の遺物

ほとんどは、住居跡周辺およびその付近からの出土である。SD413からは岡化が可能な当該期の遺物の出土はなかった。SD414からは豊富な遺物が出土しており、H11-65～68・69～72・352～355は一括出土である。高杯・器台はすべて赤彩が施されている。壺は、頸部の屈曲が緩くやや外反しながらやや長く延びる口縁をもつもの（H11-65・66）、頸部の屈曲は緩やかであるがやや外反しながら短く延びる口縁をもつもの（H11-72）、頸部を強く屈曲させ外形する口縁が比較的長く直線的に延びるもの（H11-67）がある。口縁端部の形状は、H11-66・67は尖らせ、H11-65・67は丸く納める。胴部形状は、H11-65・66は最大径を胴部中位や上方にもつ倒卵形、H11-67は最大径を胴部ほぼ中位にもつ球胴化が進んだ倒卵形である。H11-72はH11-67に類似した形状と考えている。H11-65・66は能登形壺、

H11-67・72は鏡内系の影響が認められる壺と考える。田嶋明人氏の研究成果【田嶋1986】によると、古府クルビ式期のものと考えられる。H11-68は、外面黒色で縦方向に丁寧にヘラミガキがされている。器壁は薄く、頸部は球形状の胴部より鉛直方向に立ち上がる。また、中・後期のものも少量ではあるがみられる。

滑石製勾玉模造品（H11-353～355）は、大きさに比して分厚く、未穿孔のもの（H11-355）もある。当初、未製品と考えたが、検討の結果、石製模造品と判断した。先述の一括上器・白玉とともに祭祀に使われたと考える。

(5) 古代の遺物

須恵器は壺身・壺蓋・壺・甕などがあり、食器具が多い。須恵器の多くは、柄津川上流の上末窯産のもの【富山大学考古学研究室1989】とみられる。壺身は一部に大型・深身のものがあるが、口径11～12cm前後のものが多い。8世紀後半～9世紀前半と考える。西側出土のものには、口徑に差はないが器高が低く直線的に外傾するものが多く見られ、9世紀後半と考える。壺蓋つまみは宝珠形が多いが、潰れて扁平になりボタン状になっているものが多い。頂部外面の調整は、頂部と縁部の境を帯状に削る帶状ヘラケズリを行うものが多い。なお、H11-262・263は、頂部外面切り離し時の回転糸切り痕が明瞭に残る。前者は8世紀後半～9世紀前半、後者は9世紀後半と考える。

土師器は碗・皿・小甕・長胴甕があり、やはり食器具の占める割合が多い。碗・皿は赤彩されているものが多く、黒色処理されたものはほとんどない。碗は、底部はいずれも糸切り痕を残し、外面体部下半をヘラケズリするもの（H10-36）も若干ある。全体が復元出来たものは多くないが、器高は比較的低いものが多い。皿は量的に少なく、有高台と無高台の両方がある。古代土器研究会の研究成果【古代土器研究会1997】や富山市南中田D遺跡の成果【県埋文センター1991】から、土師器碗・皿は、9世紀後半～10世紀前半のものと考えている。全体に、調査区東側出土のものは8世紀後半～9世紀前半頃のものが多く、西側出土のものは9世紀後半～10世紀前半のものが多い。（越前）

(6) 中世の遺物

中世土師器・珠洲・瀬戸美濃・輸入陶器などが出土しており、正確な器種構成は出していないが一般的な集落で見られる器種構成を示していると思われる。

出土遺物の分類に関しては中世土師器に関しては富山県の土師器編年（宮田1997）を参考にして分類を行った。珠洲に関しては青岡安鶴氏の分類（青岡1996）、瀬戸美濃分類は藤沢良祐氏の分類（藤沢 1994・1996）、輸入陶磁器の分類は太宰府の編年をそれぞれ用いた。

中世土師器はロクロ整形（A類）と非ロクロ整形（B類）に一分し、口縁・全体の形態から以下のように分類し、観察表に示した。なお、中世土師器については遺物の遺存状態が悪く残存率が1/4以下のものが大半を占め、そのため全体の形態が明確にわかるものは少なかつた。可能な限り図化し掲載したが、十分に分類し得なかったものもあり、かなり主観的な分類と言わざるを得ないことを先に断つておく。

ロクロ整形（A類）

A 1類 柱状高台の底部糸切り。底部のみの出上で全体的なプロポーションは不明である。

非ロクロ整形（B類）

口縁端部の調整は、B 1～B 3類は二段ナデB 4～B 11は一段ナデである。

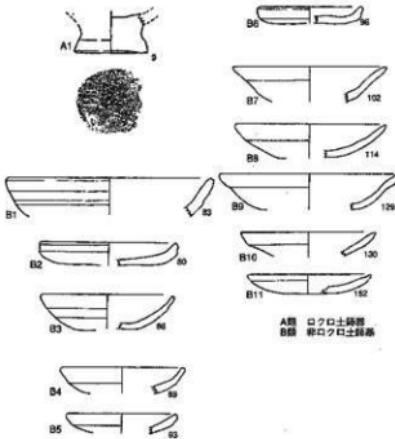


図7 中世土師器分類図

B 1 類 口縁部に幅の広い二段ナデを施す。

口縁部しか出土しておらず全体的な形態は不明だが器種には大小がある。

B 2 類 口縁部に狭い二段ナデを施す。全体的な形態はB 6 類に似る。

B 3 類 口縁部に広く軽い二段ナデを施し、器高が深く、碗形態になるもの。

B 4 類 口縁部は一段ナデで端部をつまみ上げるもの。器種は小のみ。

B 5 類 口縁端部にはっきりとした一段ナデを施すもの。

B 6 類 短い体部が垂直に立ち上るいわゆるコースター型のもの。

B 7 類 体部がやや外反して立ち上がり碗状の形態を持つもの。

B 8 類 一段ナデで器形が碗状の形態をなすもの。

B 9 類 口縁部は強く外反し水平に近い面を作り出し端部は上方に小さくつまみ上げ、受け口状のもの。全体的な形態は平底のものが多い。

B 10 類 口縁端部が肥大し、器高が浅いもの。

B 11 類 口縁端部の調整は軽く一段ナデを施すもしくはほとんど無調整のもの。器種には大小がある。

出土した中世土師器の垂直分布は、基3a層からはA 1 類・B 1 ~ B 6 類が出上り、基2層からはB 7 類からB 11 類までの出土が多いという傾向が見られた。各分類の帰属時期は富山県の中世土師器編年からA 1 ~ B 1 ~ 3 類は12世紀中から後半、B 4 ~ 6 類は13世紀代、B 7 ~ 11 類は小破片が多く器種の特徴が捕らえ難いため大まかに中世後半と考えたい。出土水平分布に関しては偏った分布ではなく全域から出土している。

H10-8・9はSD01の最終埋没土から出土している。また、平成9年度調査区では埋没したSD01上に方形区画を巡らせた建物群が建設されている。このことは12世紀中頃にはSD01は完全に埋没し、地上からはその痕跡が消滅していることを示している。建物群の建設時期はSD01の埋没時期や方形区画内の基3層出土遺物から考えて12世紀後半から13世紀代と考えられる。

珠洲はIV・V期のものが基2層から出土し、I・II期のものはわずかに基3層から出土している。H10-188は壺T種の肩部破片で印花文が叩打されている。H10-191は壺T種の胴部破片で12弁の花弁をもつ菊花状の印花文が叩打されている。H11-320は珠洲3期の口縁部破片で破損後、中央部に刻みを入れ錐もしくは砥石などに再利用したものと思われる。H10-202~204は八尾焼とおもわれる瓷器系陶破片。H10-206は美濃焼幕式花瓶である。

輸入陶器の出土量は少量である。時期的には中世前半（12~13世紀代）のものが多く、中世後半のものは極端に少ない。この差は、中世前期には住居域として使用されているが、後期では畠や水田などの生産域として使用された土地利用の差を示していると思われる。

(7) 近世の遺物

越中瀬戸、越中丸山焼、瀬戸、肥前系陶磁器などが出土している。遺物の垂直分布はそのほとんどが基1・2層からの出土で、わずかにSD307などから出土している。出土水平分布はB・C地区の微高地と低湿地の境目で多く出土しており、これは数回行われた田直しで遺物が高地から低地へ移動した結果と考えられる。出土遺物の大半は越中瀬戸が占めている。浦田遺跡の側を流れる橋津川上流には越中瀬戸窯の彦右衛門窯・山下窯などに代表される各窯跡が江戸時代をつうじて操業しており、越中瀬戸の出土割合が多いのも窯元に近いという地理的要因によるものと思われる。越中瀬戸の器種としては丸皿が最も多く、その他ひだ皿・向付・茶入・碗・建水水差などが出土している。先述したように、近世に入り調査範囲は集落が営まれておらず水田や畠などの生産域として使用されており、これらの遺物は南側に広がる集落域から廃棄されたと考えられる。

（高梨）

表6 出土遺物観察表
遺物観察表（平成10年度調査分）

番号	地名	丸	1	遺物番号	出土場所	種類	目	径	幅	高	色	測	備考	
1	A	76	58	SD01	花巻市立芳	瓦	15.0				灰白色	X77Y95 3号山上と結合		
2	A	77	59	SD01	花巻市立芳	無軸車	9.5	2.5		12.9	灰黑色	豊富な表面に付着する。内面ナメ調整		
3	A	80	71	SD01	花巻市立芳	轆轤	26.7				浅灰色	SD01 X77Y95, X78Y86 3号山上と結合		
4	A	74	91	SD01	花巻市立芳	小筒				1.0	灰白色	手づくね		
5	A	94	76	SD01	花巻市立芳	筒	10.4				灰白色	外丸に内輪側に施す。外側表面に粗い手ざわり		
6	A	91	77	SD01	花巻市立芳	筒	12.4				灰白色	施す手ざわり		
7	A	87	86	SD01	花巻市立芳	筒				5.5	灰白色	内面にハケノ調整		
8	A	87	89	SD01	花巻市立芳	筒					灰白色	丸形に丸め		
9	A	91	92	SD01	花巻市立芳	筒			5.2		灰白色	丸形に丸め		
10	A	51	69	SD02	花巻市立芳	筒					灰白色	丸形に丸め		
11	A	41	69	SD02	花巻市立芳	筒					灰白色	丸形に丸め		
12	A	82	89	SD02	花巻市立芳	筒	11.3				灰白色	丸形に丸め		
13	A	84	89	SD02	花巻市立芳	筒					灰白色	丸形に丸め		
14	A	86	89	SD02	花巻市立芳	筒	12.3				灰白色	丸形に丸め		
15	A	84	89	SD07	花巻市立芳	筒					灰白色	丸形に丸め		
16	B	96	42	SK06	中村上原部	筒	9.5			2.2	灰白色	丸形に丸め		
17	A	78	73	SK14	中村上原部	筒	10.0			2.4	灰白色	丸形に丸め		
18	B	99	64	SD115	中村上原部	筒	9.0			13.0	灰白色	丸形に丸め		
19	B	70	62	SD117	中村上原部	筒			3.3		灰白色	丸形に丸め		
20	C	74	42	SD122	花巻市立芳	筒	15.7				灰白色	丸形に丸め		
21	C	95	33	SD10-2	花巻市立芳	筒	11.1			4.6	6.3	灰白色	丸形に丸め	
22	C	65	97	SD006	花巻市立芳	筒					灰白色	丸形に丸め		
23	C	65	35	SD007-2	花巻市立芳	筒					灰白色	丸形に丸め		
24	C	65	35	SD007	花巻市立芳	筒					灰白色	丸形に丸め		
25	C	65	39	SD007	花巻市立芳	筒	11.5				灰白色	丸形に丸め		
26	C	66	32	SD007-4	花巻市立芳	筒	11.4				灰白色	丸形に丸め		
27	C	62	26	SD007	花巻市立芳	筒	6.9			1.7	灰白色	丸形に丸め		
28	C	68	33	SD007-1	花巻市立芳	筒	14.9				灰白色	丸形に丸め		
29	C	65	36	SD007-4	花巻市立芳	筒					灰白色	丸形に丸め		
30	C	61	37	SD007-4	花巻市立芳	筒					灰白色	丸形に丸め		
31	C	60	32	SD007-1	花巻市立芳	筒					灰白色	丸形に丸め		
32	C	79	37	SD007	花巻市立芳	筒	24.0				灰白色	丸形に丸め		
33	D	83	55	SD007	花巻市立芳	筒	14.0				灰白色	丸形に丸め		
34	A	76	88	SD007	花巻市立芳	筒	15.8				灰白色	丸形に丸め		
35	B	91	45	SD007	花巻市立芳	筒	18.5				灰白色	丸形に丸め		
36	A	95	23	SD007	花巻市立芳	筒	12.9	5.7	4.2		灰白色	丸形に丸め		
37	B	61	61	SD007	花巻市立芳	筒			1.0		灰白色	丸形に丸め		
38	A	66	24	SD007	花巻市立芳	筒	20.2				灰白色	丸形に丸め		
39	C	65	40	SD007	花巻市立芳	筒	23.2				灰白色	丸形に丸め		
40	A	64	73	SD007	花巻市立芳	筒					灰白色	丸形に丸め		
41	D	68	35	SD007	花巻市立芳	筒					灰白色	丸形に丸め		
42	A	63	75	SD007	花巻市立芳	筒					灰白色	丸形に丸め		
43	B	95	64	SD007	花巻市立芳	筒					灰白色	丸形に丸め		
44	D	90	55	SD007	花巻市立芳	筒	27.5				灰白色	丸形に丸め		
45	B	96	70	SD007	花巻市立芳	筒	18.6				灰白色	丸形に丸め		
46	B	86	35	SD007	花巻市立芳	筒	12.0				灰白色	丸形に丸め		
47	D	90	64	SD007	花巻市立芳	筒	12.7				灰白色	丸形に丸め		
48	B	100	45	SD007	花巻市立芳	筒	11.7				灰白色	丸形に丸め		
49	B	85	41	SD007	花巻市立芳	筒	13.7				灰白色	丸形に丸め		
50	B	94	61	SD007	花巻市立芳	筒	15.0				灰白色	丸形に丸め		
51	B	95	64	SD007	花巻市立芳	筒	16.3				灰白色	丸形に丸め		
52	B	95	47	SD007	花巻市立芳	筒					灰白色	丸形に丸め		
53	B	92	64	SD007	花巻市立芳	筒					灰白色	丸形に丸め		
54	B	99	69	SD007	花巻市立芳	筒	13.2			2.7	灰白色	丸形に丸め		
55	B	53	62	SD007	花巻市立芳	筒	13.3			2.8	灰白色	丸形に丸め		
56	B	103	62	SD007	花巻市立芳	筒					灰白色	丸形に丸め		
57	B	92	69	SD007	花巻市立芳	筒					灰白色	丸形に丸め		
58	B	96	38	SD007	花巻市立芳	筒					灰白色	丸形に丸め		
59	B	93	64	SD007	花巻市立芳	筒	6.8				灰白色	丸形に丸め		
60	A	86	77	SD007	花巻市立芳	筒	6.1				灰白色	丸形に丸め		
61	B	97	62	SD007	花巻市立芳	筒	11.3	7.4	3.9	灰白色	丸形に丸め			
62	B	84	48	SD007	花巻市立芳	筒			12.5		灰白色	丸形に丸め		
63	C	64	36	SD007	花巻市立芳	筒	17.8				灰白色	丸形に丸め		
64	C	70	63	SD007	花巻市立芳	筒	11.0	6.3	3.6	灰白色	XSDY33と結合			
65	C	66	48	SD007	花巻市立芳	筒	12.7	7.2	4.5	灰白色				
66	B	95	87	SD007	花巻市立芳	筒	7.8				灰白色			
67	C	70	81	SD007	花巻市立芳	筒	5.4				灰白色	丸形に丸め		
68	C	70	42	SD007	花巻市立芳	筒	10.8	7.7	3.0	灰白色	丸形に丸め			
69	C	66	25	SD007	花巻市立芳	筒	11.5	2.9	7.7	灰白色	丸形に丸め			
70	C	66	30	SD007	花巻市立芳	筒	11.8	9.0	4.0	灰白色	丸形に丸め			
71	C	65	33	SD007	花巻市立芳	筒	12.0	8.4	3.2	灰白色	丸形に丸め			
72	A	84	87	SD007	花巻市立芳	筒	8.0	3.1	灰白色		丸形に丸め			

8. 出土遺物概要

遺物観察表 (平成10年度調査分)

番号	施設名	X	Y	遺物番号	出土部位	層	地	基	口	径	高	幅	厚	色	種	備
73	C				瓦片等	1層	瓦質地	板	30	22.8	20.0	1.5	灰白	陶器		
74	C	96	55	瓦片等	2層	瓦質地	板	28	9.0	2.8	薄青		陶器			
75	B	92	56	瓦片等	2層	瓦片等	瓦	26		6.4	灰		陶器			
76	C	89	36	瓦片等	3層	瓦質地	板	24		5.0	灰		陶器	赤鉄留り 体積7才に相当、ヘラ跡有調整		
77	C	72	41	瓦片等	3層	瓦質地	板	22		7.2	灰		陶器			
78	R	95	41	瓦片等	2層	瓦質地	板	21	2.9			灰オーバー	口神の内外面に自然施			
79	A	78	35	瓦片等	3層	瓦質地	板	20	11.8	11.9	28.8	灰青	陶器にカッコ銘と卓下盤へハラ跡有調整			
80	D	95	60	瓦片等	2層	瓦片等	瓦	19		9.4	1.6	灰青地	D 2層 二段ナダ ナマク0.5cm			
81	R	86	53	瓦片等	3層	瓦上端部	瓦	18		12.2	2.3	灰青地	B 1層 二段ナダ ナマク0.5cm 有直面として使用			
82	R	95	55	瓦片等	3層	瓦片等	瓦	17		11.6	2.3	灰青	B 1層 二段ナダ ナマク0.5cm			
83	C	74	37	瓦片等	3層	瓦上端部	瓦	16		14.6		灰	D 1層 二段ナダ ナマク0.5cm			
84	A	92	35	瓦片等	3層	瓦上端部	瓦	15		18.5		灰	D 1層 二段ナダ ナマク0.5cm 内側木口のハリで調			
85	A	91	45	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	14	15.6			灰	B 1層 二段ナダ ナマク0.5cm 通路を少しつまみ上			
86	C	79	45	瓦片等	3層	小元土台部	瓦	13	9.5		2.6	灰青	B 3層 二段ナダ ナマク0.5cm			
87	D	93	62	瓦片等	3層	中段土台部	瓦	12	7.8			灰	D 4層 二段ナダ ナマク0.5cm			
88	C	74	56	瓦片等	3層	中段土台部	瓦	11		9.0		灰	D 4層 二段ナダ ナマク0.5cm 肩斜をつまみ上る			
89	S			瓦片等	2層	下段土台部	瓦	10	8.7		2.0	灰	B 5層 二段ナダ ナマク0.5cm 通路を柱につまみ上			
90	G	82	61	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	9	5.9		1.4	灰青	B 5層 二段ナダ			
91	C	57	52	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	8	6.8		1.6	灰青地	D 3層 沈ナダ ナマク0.5cm			
92	R	84	87	瓦片等	1層	中段土台部	瓦	7	7.4		1.6	灰青	B 5層 二段ナダ ナマク0.5cm			
93	A	77	72	瓦片等	3層	小元土台部	瓦	6	7.9		1.7	灰青灰	B 5層 二段ナダ ナマク0.5cm			
94	B	84	58	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	5	6.6	6.5	1.2	灰青	B 6層 ナマク0.5cm コースター等引抜く			
95	C	67	53	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	4	8.6	6.4	0.9	灰青	B 6層			
96	C	65	55	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	3	7.2	5.1	1.2	灰青	B 6層 ナマク0.5cm 内側木口ハリで調			
97	C	95	69	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	2	6.7	4.9	1.0	灰青	B 6層 ナマク0.5cm 内側外とも張付有 打削灰 ワニスラー型ヒバ			
98	B			瓦片等	2層	中段土台部	瓦	1	7.8	3.0	0.6	灰青	B 6層 ナマク0.5cm コースター 埋			
99	R	56	44	瓦片等	3層	中段土台部	瓦	0	9.0		1.2	灰青	B 6層 二段ナダ ナマク0.5cm 灰青を柱につまみ上			
100	C	63	41	瓦片等	3層	中段土台部	瓦	-1	8.4	6.0	1.7	灰	B 6層 二段ナダ			
101	D	66	50	瓦片等	3層	中段土台部	瓦	-2	10.0		1.6	灰青	B 6層 ナマク0.5cm 打削灰			
102	R	92	43	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	-3	10.8			灰	B 7層 ナマク0.5cm 内側木口ハリで調			
103	R	93	63	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	-4	7.9		1.3	灰白	B 9層			
104	A	94	66	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	-5	7.4		1.9	灰青地	B 9層			
105	B	82	29	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	-6	2.9		2.0	灰	H 5層 二段ナダ ナマク0.5cm 与田4口ハナ有			
106	B	102	32	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	-7	8.4		1.6	灰青	B 5層 二段ナダ ナマク0.5cm 与田4口ハナ有			
107	D	96	57	瓦片等	3層	中段土台部	瓦	-8	8.0		2.0	灰青	B 5層 二段ナダ			
108	C	66	55	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	-9	8.0		1.5	灰	B 5層 二段ナダ			
109	B	98	56	瓦片等	3層	中段土台部	瓦	-10	10.0			灰青	B 5層 二段ナダ ナマク0.5cm			
110	D	99	58	瓦片等	3層	中段土台部	瓦	-11	10.0			灰	B 5層 二段ナダ			
111	H	98	68	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	-12	11.0			灰青	B 5層 二段ナダ ナマク0.5cm 与田4口ハナ有			
112	H	98	68	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	-13	15.0			灰	D 5層 二段ナダ ナマク0.5cm			
113	B	46	43	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	-14	10.0		2.6	灰青	B 5層 二段ナダ ナマク0.5cm			
114	H	101	30	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	-15	10.8		2.4	灰青	H 5層			
115	C	56	35	瓦片等	3層	中段土台部	瓦	-16	10.0			灰	D 5層			
116	R	84	50	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	-17	12.0			灰	B 6層 二段ナダ ナマク0.5cm			
117	C	75	43	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	-18	12.5			灰	B 6層 二段ナダ ナマク0.5cm			
118	C	66	55	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	-19	14.7			灰青	B 6層 二段ナダ ナマク0.5cm			
119	C	93	67	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	-20	15.0			灰青	B 6層 二段ナダ ナマク0.5cm			
120	S	98	68	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	-21	10.0			灰青	B 6層 二段ナダ ナマク0.5cm 内窓に覆付有 调明			
121	C	59	57	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	-22	11.7		2.0	灰	B 9層			
122	B	100	58	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	-23	11.5			灰青	D 5層 二段ナダ ナマク0.5cm			
123	B	96	45	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	-24	9.0		2.3	灰青	B 9層 二段ナダ ナマク0.5cm			
124	B	90	63	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	-25	8.5			灰青	B 9層 二段ナダ ナマク0.5cm			
125	B	80	67	瓦片等	3層	中段土台部	瓦	-26	8.7		1.8	灰	B 9層 二段ナダ			
126	B	82	59	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	-27	9.0		1.5	灰青	B 4層 二段ナダ ナマク0.5cm			
127	B	88	54	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	-28	8.8		1.8	灰青	B 4層 二段ナダ ナマク0.5cm			
128	A	29	65	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	-29	9.0		2.2	灰青	D 5層			
129	A	60	50	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	-30	10.8		1.9	灰青	B 9層			
130	B	45	41	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	-31	13.0		2.7	灰	B 9層			
131	C	94	66	瓦片等	3層	中段土台部	瓦	-32	9.6		10.2	灰青	B 10層 二段ナダ ナマク0.5cm			
132	H	99	55	瓦片等	3層	中段土台部	瓦	-33	9.0		1.5	灰青	B 10層 二段ナダ ナマク0.5cm 番前に側付有			
133	B	91	60	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	-34	9.6			灰青	B 10層 二段ナダ ナマク0.5cm			
134	H	86	31	瓦片等	3層	中段土台部	瓦	-35	9.5			灰青	B 10層 二段ナダ ナマク0.5cm			
135	C			瓦片等	2層	中段土台部	瓦	-36	7.4		1.3	灰青	B 10層			
136	B	94	40	瓦片等	3層	中段土台部	瓦	-37	7.8		1.5	灰白	B 10層			
137	B	98	55	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	-38	7.8			灰青	B 10層 二段ナダ ナマク0.5cm			
138	B	96	47	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	-39	7.8		1.6	灰青	D 10層 二段ナダ ナマク0.5cm			
139	B	96	52	瓦片等	3層	中段土台部	瓦	-40	8.0		1.8	灰青	D 10層 二段ナダ ナマク0.5cm			
140	B	104	58	瓦片等	2層	中段土台部	瓦	-41	9.5		2.2	灰青	D 10層 二段ナダ ナマク0.5cm			

遺物觀察表（平成10年度調査分）

番号	施設名	X	Y	施設番号	出土層次	種類	量	U	T	断面	標高	地	地質	地名	備考
142	B	100	41		瓦含層	2巻	中生土印模	且		10.8		17-30m 黄土		130m-一般ナメ ナメ幅0.7cm	
143	B	98	45		瓦含層	2巻	中生土印模	且		10.8		1.5	灰岩		30m-一般
144	C	79	42		瓦含層	2巻	中生土印模	且		9.5		1.4	灰岩		20m-一般ナメ ナメ幅0.8cm
145	B	85	44		瓦含層	2巻	中生土印模	且		13.6		1.8	灰岩		10m-一般ナメ ナメ幅1.0cm
146	B	96	54		瓦含層	2巻	中生土印模	且		12.0			灰質		10m-一般
147	B	97	39		瓦含層	2巻	中生土印模	且		11.6		2.4	灰岩		10m-一般
148	B	99	58		瓦含層	2巻	中生土印模	且		6.6		3.2	灰岩		10m-一般
149	B	97	39		瓦含層	2巻	中生土印模	且		3.8		3.8	灰質		9-11m-一般ナメ ナメ幅0.6cm 内外層に厚さ有り 地内ナメナメ
150	B	64	65		瓦含層	2巻	中生土印模	且		7.8			灰白		21-25m-一般ナメ ナメ幅0.5cm 植被に厚さ有り 施用
151	B	84	43		瓦含層	2巻	中生土印模	且		7.8			灰白		B12巻-一般ナメ ナメ幅0.7cm
152	B	85	41		瓦含層	2巻	中生土印模	且		8.8			灰白		21-25m-一般
153	B	97	56		瓦含層	2巻	中生土印模	且		8.8			灰岩		21-25m-一般ナメ
154	A	97	73		瓦含層	2巻	中生土印模	且		8.8		1.4	灰岩		15-18m-灰岩 十ナメ幅0.8cm 深度測定不可有 施用に厚さ有り 地内ナメ
155	B	81	46		瓦含層	2巻	中生土印模	且		7.6		1.5	灰岩		15-18m-一般ナメ ナメ幅0.5cm 略度判別不明確
156	B	61	46		瓦含層	2巻	中生土印模	且		6.0		1.1	灰岩		15-18m-一般ナメ ナメ幅0.5cm 略度測定不明確
157	B	99	41		瓦含層	2巻	中生土印模	且		6.8			灰岩		15-18m-一般ナメ
158	B	98	53		瓦含層	2巻	中生土印模	且		10.0		2.0	灰岩		15-18m-一般ナメ ナメ幅0.5cm 深度測定不明確
159	B	103	55		瓦含層	2巻	中生土印模	且		9.6			灰白		21-25m-一般
160	B	103	53		瓦含層	2巻	中生土印模	且		9.8		1.3	灰白		21-25m-般ナメ ナメ幅0.7cm
161	B	79	52		瓦含層	2巻	中生土印模	且		11.0		1.6	灰白		21-25m-一般ナメ ナメ幅0.5cm
162	D	95	66		瓦含層	2巻	中生土印模	且		11.0		1.1	灰白		21-25m-一般ナメ ナメ幅0.5cm
163	B	100	57		瓦含層	2巻	中生土印模	且		9.8		2.0	灰岩		21-25m-般ナメ
164	B	84	49		瓦含層	2巻	中生土印模	且		11.0		2.0	灰岩		21-25m-般ナメ
165	D	101	56		瓦含層	2巻	中生土印模	且		13.0		2.0	灰岩		21-25m-般ナメ
166	C	66	94		瓦含層	2巻	中生土印模	且		16.8			灰岩		深度に内厚有り
167	C	70	80		瓦含層	2巻	中生土印模	且		3.2			泥炭化		12-15m紀
168	C	71	80		瓦含層	2巻	中生土印模	且		13.6			灰白		12-15m紀
169	B	82	47		瓦含層	2巻	中生土印模	且		18.8			灰白		深部が外方に向外高台となる V-4m 頂部鉢形 周辺で土質変化
170	B	83	50		瓦含層	2巻	中生土印模	且		3.2			灰白		削出-凸凹 内外面剥離に日跡 15m紀
171	C	73	65		瓦含層	2巻	中生土印模	且					オリ-ソ沢		内部に墨字を刻む限りにする E-2m 縦 12m紀後半
172	C	45	53		瓦含層	2巻	中生土印模	且		13.6			泥炭		山腹斜面で外方斜面、壁面が小さくちぎれがある 地質記号 14-16m紀後半
173	B	71	58		瓦含層	2巻	中生土印模	且		15.6			オリーブ灰		21-25m-般ナメ
174	B	97	50		瓦含層	2巻	中生土印模	且		15.6			赤オリーブ		21-25m-般ナメ
175	C	70	39		瓦含層	2巻	中生土印模	且		15.6			オリーブ灰		16-18m紀
176	B	94	56		瓦含層	2巻	中生土印模	且		13.6			オリーブ灰		16-18m紀
177	B	94	60		瓦含層	2巻	中生土印模	且		18.8			雑草		16-18m紀後半
178	C	63	57		瓦含層	2巻	中生土印模	且		20.0			オリーブ灰		同変態系 E-1-D-1 縦 12m紀後代
179	B	96	59		瓦含層	2巻	中生土印模	且				灰		14m紀前半	
180	B	103	65		瓦含層	2巻	中生土印模	且				オリーブ灰			
181	B	97	68		瓦含層	2巻	中生土印模	且				灰		14m紀後半 キリヌリ	
182	B	89	51		瓦含層	2巻	中生土印模	且				灰		14m紀後半	
183	A	76	61		瓦含層	2巻	中生土印模	且				灰		古礫発見	
184	A	65	61		瓦含層	2巻	中生土印模	且				灰		古礫発見	
185	B	81	45		瓦含層	2巻	中生土印模	且				灰		古流痕	
186	B	82	39		瓦含層	2巻	中生土印模	且				灰		古流痕	
187	A	99	75		瓦含層	2巻	中生土印模	且				灰		古流痕	
188	C	60	60		瓦含層	2巻	中生土印模	且				灰		古流痕	
189	B	95	63		瓦含層	2巻	中生土印模	且				灰		洋詩文あり 古面	
190	B	83	62		瓦含層	2巻	中生土印模	且				灰			
191	B	80	60		瓦含層	2巻	中生土印模	且				灰		新都市立文専店 XH9775と併合 1-3階	
192	B	90	70		瓦含層	2巻	中生土印模	且		9.4			灰		窓主徒 V階
193	B	94	59		瓦含層	2巻	北東上層	すり鉢					14-15m-般		
194	B	90	42		瓦含層	2巻	底層	すり鉢					V階		
195	D	39	48		瓦含層	2巻	瓦質土	すり鉢					瓦		
196	A	67	61		瓦含層	2巻	底質	被					瓦		
197	A	78	61		瓦含層	2巻	底質	被					瓦		
198	A	90	76		瓦含層	2巻	底質	すり鉢		21.5			瓦		XTT190と併合 上筋抜手
199	B	72	67		瓦含層	2巻	底質	すり鉢		25.0			瓦		ク羅庭手
200	B	59	62		瓦含層	2巻	底質	すり鉢		26.7			瓦		V階
201	B	73	62		瓦含層	2巻	底質	すり鉢		30.4			瓦		ク羅庭手
202	A	90	56		瓦含層	2巻	八字?	瓦					14-15m-般		壁面の凹凸感などあり
203	B	87	48		瓦含層	2巻	八字?	瓦					瓦		XH9754-2階と併合
204	A	96	54		瓦含層	2巻	八字?	瓦					瓦		202-2階 1階
205	C	67	53		瓦含層	2巻	底質	八字?		25.5			瓦		オリーブ質
206	C	61	49		瓦含層	2巻	底質	透式花瓶					オリーブ質		14-15m-般
207	A	70	57		瓦含層	2巻	底質	八字?					瓦		14-15m-般
208	D	67	58		SD/04		瓦質			9.6	3.6		瓦白		御影石(江戸御影)・(江戸御影)
209	B	102	68		SD/05		瓦質						瓦白		(江戸)瓦
210	A	71	61		SD/03		瓦質						瓦白		瓦内ハゲ付瓦内ハゲ付瓦内ハゲ付瓦内ハゲ付瓦内ハゲ付瓦内ハゲ付瓦内ハゲ付
211	B	63	53		SD/06		瓦質						瓦白		瓦内ハゲ付瓦内ハゲ付瓦内ハゲ付

8. 出土遺物概要

遺物観察表(平成10年度調査分)

番号	地図名	X	Y	測量番号	出土部位	種類	形状	口径	底	高さ	色	質	備考		
													横	縦	直
212	C	64	35	SD107	扇中腰戸	鉢	圓	-	斜	2.8	-	灰白色の鉢 内底面に鉢印のあり 創込み高台			
213	B	69	46	SD107	扇中腰戸	鉢	圓	11.5	5.4	2.2	灰	灰白色の鉢 内底面に鉢印のあり 創込み高台			
214	C	60	60	SD107-1~306	扇中腰戸	鉢	圓	13.8	5.6	3.4	灰	灰白色の鉢 内底面に鉢印のあり 創込み高台			
215	C	56	58	SD107-2~306	扇中腰戸	鉢	圓	15.0	-	-	灰白	灰白色の鉢 外面に施の私の印跡が確認している			
216	D	90	66	SD104-1~95	扇中腰戸	卓り鉢	圓	29.0	-	-	灰白	灰白色の鉢 外面に施の私の印跡が確認している			
217	B	88	61	SD104	扇中腰戸	卓り鉢	圓	26.0	17.0	17.0	灰白	灰白色の鉢 外底面に印記のあり 創込み高台			
218	E	91	69	SD104	2階	盆	圓	9.8	4.0	2.4	灰白色	灰白色の盆 内底面に輪郭あり			
219	B	87	38	SD104	扇中腰戸	鉢	圓	10.8	4.8	2.2	灰	灰白色の鉢 丸形 内底面に灰い底止め 形状と異な			
220	B	100	59	SD104	扇中腰戸	鉢	圓	11.6	-	-	灰	灰白色の鉢 丸形 内底面に灰い底止め 形状と異な			
221	D	85	51	SD104	扇中腰戸	鉢	圓	11.4	6.8	2.5	灰	灰白色の鉢 丸形 内底面に灰い底止め 形状と異な			
222	B	100	51	SD104	扇中腰戸	鉢	圓	11.5	5.6	2.9	灰	灰白色の鉢 丸形 内底面に灰い底止め 形状と異な			
223	B	100	51	SD104	扇中腰戸	鉢	圓	10.4	6.0	2.2	灰白	灰白色の鉢 丸形 内底面に灰い底止め 形状と異な			
224	D	88	60	SD104	扇中腰戸	鉢	圓	11.4	-	-	灰	灰白色の鉢 丸形 内底面に灰い底止め 形状と異な			
225	B	91	63	SD104	2階	盆	圓	11.6	5.6	2.6	灰	灰白色の盆 倒れこみ台			
226	B	97	85	SD104	2階	成り腰戸	鉢	15.0	-	-	灰白	灰白色の鉢			
227	B	99	59	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	圓	11.0	4.0	2.7	灰	灰白色の鉢 丸形 両端に凹凸			
228	B	90	58	SD104	2階	扇中腰戸	鉢	10.5	-	-	灰	灰白色の鉢			
229	B	96	47	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	圓	12.0	-	-	灰白	灰白色の鉢			
230	D	96	54	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	圓	13.0	-	-	灰	灰白色の鉢			
231	B	99	65	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	圓	12.8	11.0	3.3	灰	灰白色の鉢			
232	B	100	57	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	圓	15.0	-	-	灰	灰白色の鉢			
233	B	101	46	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	圓	15.5	-	-	灰	灰白色の鉢			
234	B	94	52	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	肉付	5.4	-	-	灰	灰白色の鉢 内底面に施の私の印跡のあり			
235	B	93	48	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	肉付	4.0	-	-	灰	灰白色の鉢			
236	D	103	53	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	肉付	4.2	-	-	灰	灰白色の鉢			
237	F	94	53	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	肉付	5.0	-	-	灰	灰白色の鉢			
238	B	88	45	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	肉付	4.4	-	-	灰	灰白色の鉢			
239	B	96	30	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	ひだ鉢	11.8	-	-	灰	灰白色の鉢			
240	B	92	48	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	肉付	9.5	-	-	灰	灰白色の鉢			
241	B	95	58	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	肉付	8.0	-	-	灰	灰白色の鉢			
242	D	99	56	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	肉付	10.5	-	-	灰	灰白色の鉢			
243	B	91	60	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	肉付	10.0	-	-	灰	灰白色の鉢			
244	B	93	42	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	肉付	11.0	-	-	灰	灰白色の鉢			
245	B	100	45	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	蓋入	5.0	-	-	灰	灰白色の鉢			
246	B	96	50	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	蓋入	9.0	-	-	灰	灰白色の鉢			
247	S	102	45	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	蓋入	9.5	-	-	灰	灰白色の鉢			
248	B	88	40	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	蓋入	10.5	-	-	灰	灰白色の鉢			
249	B	97	62	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	蓋入	9.6	-	-	灰	灰白色の鉢			
250	B	64	55	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	蓋入	11.0	-	-	灰	灰白色の鉢			
251	B	95	67	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	蓋入	13.0	-	-	灰	灰白色の鉢			
252	C	66	60	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	大皿	-	-	-	灰	灰白色の鉢			
253	B	94	47	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	人皿	24.0	-	-	灰	灰白色の鉢			
254	D	104	65	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	深水玉皿	12.0	-	-	灰	灰白色の鉢			
255	B	89	50	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	深水玉皿	12.0	-	-	灰	灰白色の鉢			
256	B	84	43	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	破つぎ口	11.0	-	-	灰	灰白色の鉢			
257	B	99	65	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	破つぎ口	11.5	-	-	灰	灰白色の鉢			
258	B	100	70	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	破つぎ口	12.6	-	-	灰	灰白色の鉢			
259	B	94	52	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	破つぎ口	12.8	-	-	灰	灰白色の鉢			
260	B	89	40	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	破つぎ口	12.8	5.4	5.4	灰	灰白色の鉢			
261	B	86	61	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	破つぎ口	-	-	-	灰	灰白色の鉢			
262	A	100	72	SD104	4号	盆	圓	-	-	-	灰	灰白色の鉢			
263	B	63	55	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	盆	11.4	-	-	灰	灰白色の鉢			
264	B	67	56	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	盆	11.6	-	-	灰	灰白色の鉢			
265	B	84	43	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	盆	10.6	6.4	4.3	灰	灰白色の鉢			
266	B	102	41	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	盆	-	-	-	灰	灰白色の鉢			
267	B	95	68	SD104	扇中腰戸	扇中腰戸	盆	-	-	-	灰	灰白色の鉢			

遺物観察表(平成9年度調査分)

番号	地図名	X	Y	測量番号	出土部位	種類	形态	口径	底	高さ	色	質	備考		
													横	縦	直
1				SD14-6	扇中腰戸	鉢	盤	-	-	-	灰				
2		37	68	SD103	扇中腰戸	鉢	盤	11.4	-	-	灰				
3		63	108	SD103	扇中腰戸	鉢	盤	11.6	-	-	灰				
4		63	109	SD103	扇中腰戸	鉢	盤	13.0	-	3.0	灰	にぶい黒			
5		57	68	SD108	扇中腰戸	鉢	盤	11.6	-	-	灰白				
6		57	66	SD103	扇中腰戸	鉢	盤	12.6	8.0	3.5	にぶい黒				
7		54	62	SD109	扇中腰戸	鉢	盤	11.6	-	-	灰				
8		60	71	SD109	扇中腰戸	鉢	盤	10.6	6.4	4.3	灰				
9		33	63	SD105	扇中腰戸	鉢	盤	12.0	-	-	灰				
10		57	64	SD106	扇中腰戸	鉢	盤	11.8	-	-	灰				
11		56	61	SD106	扇中腰戸	鉢	盤	12.6	-	-	灰				
12		57	57	SD106	扇中腰戸	鉢	盤	10.4	5.2	5.1	灰	灰白色			

遺物観察表（平成9年度調査分）

番号	測区名	X	Y	遺物番号	出土層位	種類	形状	径	深	底	質	色	調	備考
13	57 64	SD006		遺物器	环			12.6	7.2		4.8	灰白		
14	65 108	SD006		遺物器	环			15.6				灰		
15	62 108	SD001		土器器	瓶型							に赤い斑点		
16		SD029		遺物器	瓶			12.0				灰		
17	89 91	SD031		土器器	瓶型			18.0				黄褐色		
18	90 99	SD031		遺物器	环				6.0			灰		
19	59 102	SD030		中空な骨器	瓶			11.4				に赤い斑点		
20	59 98	SD030		中空な骨器	瓶			11.8				灰白		
21	58 95	SD030		骨器	瓶							灰		
22	54 64	SD032		遺物器	瓶				4.0			口閉器 口張り口子 瓶詰み高台 瓶残		
23	69 65	51	2号	地上上部	漆器							に赤い斑点	漆文模様	
24	42 34	私食器	2号	私食器	瓶							に赤い斑点		
25	38 35	私食器	2号	私食器	瓶							に赤い斑点		
26	32 34	私食器	2号	私食器	瓶							に赤い斑点	外から内に向けての変化あり	
27	47 30	私食器	2号	私食器	瓶			26.0				に赤い斑点		
28	42 37	私食器	2号	私食器	瓶							黒		
29	28 35	食合器	2号	食合器	瓶			24.6				に赤い斑点		
30	42 43	食合器	2号	食合器	瓶			16.0				灰黒色		
31	39 34	吉吉器	2号	吉吉器	瓶							灰黒	側面下半ヘラミガタあり	
32	44 24	食合器	2号	食合器	瓶			15.8				漆器		
33	45 23	私食器	2号	私食器	瓶							漆器		
34	41 25	私食器	2号	私食器	瓶			30.8				に赤い斑点	XSY24 2号と合合	
35	37 24	食合器	2号	食合器	瓶			2.6				灰黒色		
36	39 25	私食器	2号	私食器	瓶							黒底		
37	34 25	私食器	2号	私食器	瓶							に赤い斑点		
38	34 21	食合器	2号	食合器	瓶							に赤い斑点	側部ヘラミガタ	
39	34 24	私食器	2号	私食器	瓶				4.0			黒底		
40	43 24	私食器	2号	私食器	瓶				6.0			に赤い斑点		
41	55 63	食合器	2号	土器器								に赤い斑点		
42	66 70	私食器	2号	土器器	瓶							に赤い斑点		
43	60 101	吉吉器	2号	吉吉器	瓶							に赤い斑点		
44	53 63	私食器	2号	土器器	瓶							に赤い斑点		
45	61 70	私食器	2号	土器器	瓶							に赤い斑点		
46	62 108	私食器	2号	土器器	瓶							に赤い斑点		
47	85 90	食合器	2号	土器器	瓶			14.6				漆器		
48	62 20	私食器	2号	土器器	瓶			16.2				漆器		
49	62 29	私食器	2号	土器器	瓶			30.0				に赤い斑点		
50	63 23	私食器	2号	土器器	瓶							黒		
51	94 89	私食器	2号	私食器	瓶			11.2			2.0	灰		
52	101 79	吉吉器	2号	吉吉器	瓶			11.5			2.4	灰		
53	69 29	私食器	1号	吉吉器	瓶			11.2			2.4	灰		
54	39 75	吉吉器	2号	吉吉器	瓶			11.6			3.1	灰		
55	88 92	私食器	2号	吉吉器	瓶			12.6				灰白		
56	61 70	私食器	2号	吉吉器	瓶			19.8				灰		
57	61 106	私食器	2号	吉吉器	瓶			13.8				灰		
58	90 99	吉吉器	2号	吉吉器	瓶			10.8				灰		
59	58 75	私食器	2号	吉吉器	瓶			11.0				灰		
60	61 72	私食器	2号	吉吉器	瓶			11.4				灰		
61	66 27	私食器	2号	吉吉器	瓶			11.5				灰白		
62	69 31	吉吉器	2号	吉吉器	瓶			12.6				灰白		
63	68 38	吉吉器	2号	吉吉器	瓶			13.5				灰白		
64	57 68	私食器	2号	吉吉器	瓶			15.6				灰		
65	66 30	私食器	2号	吉吉器	瓶			9.6			2.5	灰		
66	42 35	私食器	2号	吉吉器	瓶						4.0	灰		
67	55 76	私食器	2号	吉吉器	瓶			12.8				灰		
68	56 76	私食器	2号	吉吉器	瓶			11.1			2.7	灰	墨田山群 墨田十石	
69	57 63	私食器	2号	吉吉器	瓶			11.0	7.0		3.2	灰		
70	64 27	私食器	1.5号	吉吉器	瓶			11.4	7.6		2.6	灰白		
71	86 91	私食器	2号	吉吉器	瓶			11.2	6.0		6.6	灰白		
72	58 64	吉吉器	2号	吉吉器	瓶			10.8	7.0		3.4	灰		
73	56 77	吉吉器	2号	吉吉器	瓶			11.6	8.0		3.5	灰黒		
74	65 72	吉吉器	2号	吉吉器	瓶			11.8	9.0		7.2	灰白		
75	64 27	私食器	1号	吉吉器	瓶			11.0	6.4		3.3	灰		
76	61 72	吉吉器	2号	吉吉器	瓶			11.2	7.6		3.8	灰		
77	89 91	吉吉器	2号	吉吉器	瓶			10.5	7.0		4.0	灰		
78	55 75	吉吉器	2号	吉吉器	瓶			11.0	7.2		4.5	灰白		
79	63 37	吉吉器	2号	吉吉器	瓶			10.6	6.8		4.3	灰白		
80	61 70	吉吉器	2号	吉吉器	瓶				9.1			灰白		
81	57 66	吉吉器	2号	吉吉器	瓶			15.0	7.4		6.2	灰		
82	64 30	吉吉器	1.5号	吉吉器	瓶			11.2	6.4		5.8	灰		
83	61 72	吉吉器	2号	吉吉器	瓶			12.0	8.0		4.3	灰		
84	55 62	吉吉器	2号	吉吉器	瓶			10.6	6.0		4.5	灰		
85	61 72	吉吉器	2号	吉吉器	瓶			11.8	7.0		6.6	灰		

8. 出土遺物概要

遺物観察表（平成9年度調査分）

番号	発見場所	X	Y	遺物番号	出土位置	種類	形	材	口	縁	底	身	高	色	圖	備考
86	83 30	佐々木	2号室	漆器	漆器	环								灰白		
87	90 94	佐々木	2号室	漆器	环									灰		
88	47 256	佐々木	2号室	漆器	环									灰		
89	91 36	佐々木	1号室	漆器	环									灰		
90	37 48	佐々木	1号室	漆器	环									灰		
91	93 46	佐々木	2号室	漆器	漆器	环								灰		
92	100 82	佐々木	2号室	漆器	漆器	环								灰		にぶい黒
93	102 78	佐々木	2号室	漆器	漆器	环								灰		
94	95 86	佐々木	2号室	漆器	漆器	环								灰		
95	77 107	佐々木	2号室	漆器	漆器	环								灰		
96	110 70	佐々木	2号室	漆器	漆器	环								灰		V字
97	90 96	佐々木	1号室	漆器	漆器	环								灰		
98	54 79	佐々木	2号室	漆器	漆器	环								灰		
99	63 111	佐々木	2号室	漆器	漆器	环								灰		工場
100	99 77	佐々木	2号室	漆器	漆器	环								灰		内堀田に本が付着している。紅葉として使用か?
101	41 25	佐々木	2号室	漆器	漆器	环								灰		地紋有 石塗との可能性あり

遺物観察表（平成11年度調査分）

番号	発見場所	X	Y	遺物番号	出土位置	種類	形	材	口	縁	底	身	高	色	圖	備考
1	D	佐々木	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
2	D	佐々木	施設内	漆器	漆器	环								白		白山や短
3	D	佐々木	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
4	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
5	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
6	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
7	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
8	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
9	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
10	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
11	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
12	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
13	D	96 27	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
14	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
15	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
16	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
17	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
18	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
19	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
20	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
21	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
22	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
23	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
24	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
25	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
26	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
27	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
28	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
29	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
30	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
31	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
32	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
33	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
34	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
35	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
36	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
37	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
38	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
39	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
40	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
41	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
42	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
43	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
44	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
45	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻
46	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻手-丸記符手-つまみ文
47	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻手-丸記符手-つまみ文
48	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻手-丸記符手-つまみ文
49	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻手-丸記符手-つまみ文
50	D	施設内	施設内	漆器	漆器	环								灰		織文彫刻手-丸記符手-つまみ文

遺物觀察表（平成11年度調査分）

番号	地名	X	Y	遺物番号	出土場所	種類	特徴	目	征	年	特征	備考	備考	
51	D			遺100番	半蔵十室部	瓦		12			6			
52	D			遺101番	半蔵十室部	瓦		13			6			
53	D			遺102番	半蔵十室部	瓦		20			6			
54	D	G1	G2	SK413	半蔵十室部	瓦		16			6			
55	D			SK418	半蔵十室部	瓦		24			6			
56	D	46.48	41.42	SDM41-1	半蔵十室部	瓦		13			6			
57	D	48	42	SDM41-1	半蔵十室部	瓦		15			6			
58	D	44	44	SDM411	半蔵十室部	瓦		21			6			
59	D	43	44	SDM411	半蔵十室部	瓦		24			6			
60	D	32	40	SDM411-1	半蔵十室部	瓦		15			6			
61	D	47	43	SDM411-1	半蔵十室部	瓦		15			6			
62	D	32	40	SDM411-1	半蔵十室部	瓦		17			6			
63	D	47	41	SDM411-2	半蔵十室部	瓦		21			6			
64	D	45	35	SDM413	半蔵十室部	瓦		20			6			
65	D	40	35	SDM414-	半蔵十室部	瓦		13			6			
66	D	21	37	SDM414	半蔵十室部	瓦		18			6			
67	D	40	35	SDM414-2	半蔵十室部	瓦		13			6			
68	D	42	37	SDM414	半蔵十室部	瓦		19			6			
69	D	12	37	SDM414	半蔵十室部	瓦		9			6			
70	D	42	37	SDM414	半蔵十室部	瓦		10			6			
71	D			半蔵十室部	半蔵十室部	瓦		19			6			
72	D	12	37	SDM414	半蔵十室部	瓦		20			6			
73	D	42	37	SDM414	半蔵十室部	瓦		11			6			
74	D	43	27	SDM414	半蔵十室部	瓦		5			6			
75	D	42	37	SDM414	半蔵十室部	瓦		17			6			
76	D	40	35	SDM414-3	半蔵十室部	瓦		21			6			
77	D			SDM414 (復元?)	半蔵十室部	瓦		21			6			
78	D	49	35	SDM414-3	半蔵十室部	瓦・灰		21			6			
79	D	42	37	SDM414	半蔵十室部	瓦		15			6			
80	D	40	35	SDM414-3	半蔵十室部	瓦		14			6			
81	D			SDM415-2	半蔵十室部	瓦		18			6			
82	D			SDM415-3	半蔵十室部	瓦					6			
83	D			SDM415-3	半蔵十室部	瓦		5			6			
84	D	45	31	SDM15-4	純文化層?						6			
85	D	45	31	SDM15-4	純文化層?						6			
86	D	46	47	SDM15-1	純文化層?						6			
87	D	46	37	SDM15-1	純文化層?						6			
88	D	46	34	SDM15-2	純文化層?						6			
89	D	41	28	SDM15-2	半蔵十室部	瓦		16			6			
90	D	11	28	SDM15-2	半蔵十室部	瓦		9			6			
91	D	41	28	SDM15-2	半蔵十室部	瓦		9			6			
92	D	14	43	SDM12-123	虎塚土器	瓦		11	T		3	灰	古代、地元灰	
93	D	16	45	SDM12-123	虎塚土器	瓦		12			3	灰	古代後期～中期灰	
94	D	48	46	SDM12-2	虎塚土器	瓦		8			3	灰	古代、中期灰	
95	D	44	50	SDM12-123, SDM06-1	虎塚土器	瓦		22			3	灰	古代後期 (法化)	
96	D	43	50	SDM12-123	虎塚土器	瓦		15			3	灰	古代後期～中期灰	
97	D	55.5	42.4	SDM12-123	虎塚土器	瓦		14			3	灰	古代、中期灰	
98	D	47	47	SDM12-123	半蔵十室部	瓦		12			3	灰	古代	
99	D	49	48	SDM12-123	半蔵十室部	瓦		5			3	灰	古代、中期灰	
100	D	44	50	SDM12-123	半蔵十室部	瓦		12			3	灰	古代、中期灰	
101	D	45	47	SDM12-123, SDM04, SDM05, SDM07	半蔵十室部	瓦		12			3	灰	古代後半、瓦灰	
102	D	46	47	SDM12-123	半蔵十室部	瓦		8			3	灰	古代、中期灰	
103	D	44	50	SDM12-123	半蔵十室部	瓦		6			3	灰	純文化、地元灰	
104	D	38	53	SDM12-123	半蔵十室部	瓦		12			3	灰	古代後半	
105	D	40	51	SDM12-123	半蔵十室部	瓦		26			3	灰	古代後半	
106	D	38	52	SDM04, SDM07/1号, SDM07-2	半蔵十室部	瓦		14	5	3	灰	古代後半	古代後半	
107	D	38	52	SDM04	半蔵十室部	瓦		15			3	灰	古代後半	
108	D	38	52	SDM04	半蔵十室部	瓦		6			3	灰	古代後半	
109	D	38	52	SDM04	半蔵十室部	瓦		11			3	灰	古代後半	
110	D			SDM04, SDM07/1号, SDM07-2	半蔵十室部	瓦		13	7	4	灰	古代後半～中期灰	古代後半	
111	D	38	52	SDM04	半蔵十室部	瓦		12			3	灰	古代後半	
112	D	38	52	SDM05	半蔵十室部	瓦		12			3	灰	古代後半	
113	D	38	52	SDM05	半蔵十室部	瓦		6	6	4	灰	古代後半	古代後半	
114	D	40	51	SDM06	半蔵十室部	瓦		10			4	灰	古代後半	古代後半
115	D	47	53	SDM1-1	二重部	瓦		28			4	灰	古代後半	古代後半
116	D	45	44	SDM11	半蔵十室部	瓦		13			4	灰	古代後半	古代後半
117	D	49	41	SK404	半蔵十室部	瓦		10			4	灰	古代後半	古代後半
118	D	46	39	SDM06	半蔵十室部	瓦		19			4	灰	古代後半	古代後半
119	D	36	37	SK408	半蔵十室部	瓦		19			4	灰	古代後半	古代後半
120	D	45	39	P533				34			4	灰	古代後半	

8. 出土遺物概要

遺物観察表（平成11年度調査分）

番号	発見場所	X	Y	遺物番号	出土部位	種類	種類	口径	底径	深度	鉢底	色・調	備考			
													高さ	底面	鉢底	
121	D	30	53	SND01	中空土器	直	直					茶褐色	绳文後期(乳突式)			
122	D	45	45	SND007-2	中空土器	直	直					茶褐色				
123	D	27	29	SND007-1	中空土器	直	直					茶褐色				
124	D	56	58	SND007-4	中空土器	直	直					茶褐色				
125	D	27	16	SND007-4	中空土器	直	直					茶褐色				
126	D	53	41	SND007-2	小口土器	直	直	14				茶褐色				
127	D	49	46	SND007	中空土器	直	直	9				茶褐色	遺物そしまみ上げ			
128	D	50	41	SND007	陶器	直	直					灰	灰			
129	D	52	42	SND007-4, SND004	陶器	直	直					灰	切削痕付			
130	D	47	66	SND007-2	陶器	直	直					灰	燒成良好			
131	D	57	58	SND007-1	陶器	直	直	12				灰	12㌢×3.5㌢ 烧成好			
132	D	56	53	SND007	陶器	直	直	21				灰	灰			
133	D	49	45	SND007-2	陶器	直	直	15				灰	折腹(内凹) 内側は焼成による變色激しい おろし目と柔らか目			
134	D	43	49	SND007-2	陶器	直	直	18				灰	1周 手らしき目			
135	D	50	43	SND007-2	陶器	直	直	10				灰	折腹(内凹) 陶器記入			
136	D	56	41	SND007-2	粘土類	直	直	11	4			灰	泥質(手打)			
137	D	48	45	SND007-1	粘土類	小板	直	13				灰	泥質(手打)			
138	D	43	48	SND007-4	陶器	直	直	55				灰	直形			
139	D	59	38	SND007-4	土器	上縁	1.0 (大西) 4.6 (篠田)	1.0 (大西) 4.6 (篠田)					灰			
140	D	49	43-	SND007-2	陶器	折A	折A	10	6	3	灰	8世紀後半～9世紀前期				
141	D	47	47	SND007	陶器	折A	折A	12	7	2	灰	9世紀後半～9世紀中期				
142	D	43	68	SND007-2	陶器	折A	折A	12				灰	8世紀後半～9世紀中期 焼成良好			
143	D	50	44	SND007-2	陶器	折A	折A	12				灰	8世紀後半～9世紀中期			
144	D	37	31	SND007	陶器	片	片	12				灰	9世紀後半 上木製			
145	D	37	32	SND007-4	陶器	片	片	12				灰	9世紀後半 地盤(内凹)			
146	D	47	45	SND007-2	陶器	片	片	11				灰	8世紀後半～9世紀前期 焼成良好			
147	D	45	46	SND007, SND007-2, SND004, SDH122-123	陶器	片B	片B	11	6	4	灰	8世紀後半～9世紀中期				
148	D	38	52	SND007-4	陶器	片	片	12				灰	8世紀後半			
149	D	39	51	SND007, SND007-2, SDH004	陶器	片B	片B	12	6	6	灰	8世紀後半～9世紀中期				
150	D	47	45	SND007-2, 28.30	陶器	片B	片B	16	8	7	灰	8世紀後半				
151	D	55	41	SND007-5	陶器	直	直	10				灰	9世紀後半 造成や小糸			
152	D	36	52	SND007	陶器	折A	折A	11	6	4	灰	8世紀後半～9世紀中期				
153	D	50	44	SND007-2	陶器	片	片	12				灰	9世紀後半 焼成良好			
154	D	38	52	SND007-2	陶器	片	片	12				灰	9世紀後半 焼成良好			
155	D	49	42	SND007-4	陶器	片	片	13				灰	9世紀後半～9世紀中期 焼成良好			
156	D	36	53	SND007	陶器	直	直	30				灰	9世紀後半			
157	D	38	51	SND007, SND007-2-4	土器	破	破	11	6	4	灰	10世紀前半 焼成不良				
158	D	38	32	SND007-9	土器	破	破	12				灰	9世紀後半 土器底部付着 焼成不良			
159	D	39	30	SND007	土器	破	破	13	7	4	灰	9世紀後半				
160	D	36	32	SND007	土器	直	直	26				灰	9世紀後半 スズ(内凹部) 内斜面部 垂や人字の内丸			
161	D	36	32	SND007	土器	直	直	22				灰	9世紀後半 内斜面部付着 口端部をつまみ出す			
162	D	36	32	SND007, SDH004	土器	直	直	22				灰	10世紀前半 内斜面部付着 口端部をくまむ			
163	D	36	32	SND007-2	土器	直	直	22				灰	10世紀前半 造成不良			
164	D	38	32	SND007-P	土器	直	直	22				灰	9世紀後半～10世紀前半 焼成 不まぶ室跡 燃焼跡			
165	D	38	32	SND007-4	土器	直	直	22				灰	10世紀後半			
166	D	41	51	SND007-4	陶器	直	直	24				灰	10世紀後半 焼成不良 はり付け合着 高台付近より残存			
167	D	52	52	SND007	陶器	直	直	20				灰	10世紀後半			
168	D	51	42	SND007-1	陶器	直	直	30				灰	灰オーバー			
169	D	44	48	SND007-1	陶器	直	直	18				灰	9世紀後半～10世紀前半			
170	D	55	43	SND007-1	土器	直	直	27				灰	9世紀後半～10世紀前半			
171	D	46	47	SND007-2	土器	直	直	17				灰	9世紀後半 造成不良			
172	D	36	52	SND007-2	土器	直	直	19				灰	9世紀後半			
173	D	51	43	SND007-2	土器	直	直	21				灰	9世紀後半～10世紀前半			
174	D	36	52	SND007	土器	直	直	22				灰	9世紀後半			
175	D	39	53	SDH005	中空土器	直	直	11				灰	9世紀後半			
176	D	39	52	SDH005	中空	直	直	22				灰	9世紀後半			
177	D	49	58	SDH007	中空土器	直	直	22				灰	9世紀後半			
178	D	51	56	SDH026-1	中空土器	直	直	20				灰	9世紀後半			
179	D	60	56	SDH026	中空土器	直	直	8				灰	9世紀後半			
180	D	49	49	SDH01	窓型	直	直	20				灰	刀削記入			
181	D	40	35	SDH01	窓	直	直					灰	9世紀後半			
182	D	42	34	SDH01	窓	直	直	22				灰	9世紀後半			
183	D	42	34	SDH01	窓	直	直	18				灰	9世紀後半			
184	D	43	33	SDH01	窓	直	直	11				灰	9世紀後半			
185	D	42	34	SDH01	窓	直	直	16				灰	9世紀後半			
186	D	41	42	SDH01	窓	直	直	10				灰	9世紀後半～9世紀中期 焼成不良			

遺物觀察表（平成11年度調査分）

番号	地区名	X	Y	遺物番号	所在部位	種類	基種	口径	底径	高さ	色	備考	
												形	質
187	○	49	48	SD04	地中盤	灰	片	12			灰	8世紀後半～9世紀前半 純正良好	
188	○	46	48	SD04	地中盤	灰	片	10			灰	8世紀後半～9世紀前半 純正良好	
189	○	46	48	SD04	地中盤	灰	片	7			灰	8世紀後半～9世紀前半 純正良好	
190	○	45	48	SD04	地中盤	灰	片	9			灰	8世紀後半～9世紀前半 純正良好	
191	○	45	41	SD05	地中盤	灰	片	9	5	2	灰	8世紀後半～9世紀前半 純正良好	見込みにトシノイ痕アラ
192	○	42	40	SD05	地中盤	灰	片	10	4	3	灰	8世紀後半～9世紀前半 純正良好	8世紀後半～9世紀前半 純正良好
193	○	43	41	SD05	地中盤	灰	片	9			灰	8世紀後半～9世紀前半 純正良好	8世紀後半
194	○	41	43	SD04	SD07-2, N04	地中盤	灰	44			灰	8世紀後半	
195	○	43	42	SD05	地中盤	灰	片	12			灰	8世紀後半～9世紀前半 純正良好	
196	○	47	45	SD05	地中盤	灰	片	10			灰	8世紀後半	古代 銅鏡地質
197	○	64	43	SD05	地中盤	灰	片	27			灰	8世紀後半～9世紀前半 純正良好	
198	○	49	41	SD05	地中盤	灰	片	16			灰	8世紀後半	内壁(破損)
199	○	30	41	SD05	地中盤	灰	片	21			灰	8世紀後半～9世紀前半 純正良好	
200	○	66	45	SD02	1号	灰	片	14			灰	8世紀後半	8世紀後半
201	○	39	54	SD05	灰	丸粒	丸	9			灰	8世紀後半	コンニャク印彌
202	○	40	50	SD06	小中央部	灰	片	13			灰	8世紀後半	
203	○	40	51	SD06	地中盤	灰	片	13			灰	8世紀後半	
204	○	38	57	SD06	SD07	地中盤	灰	16	8	4	灰	8世紀後半～9世紀前半 純正良好	
205	○	40	51	SD06	地中盤	灰	片	15			灰	8世紀後半	無地子(ミカタ)モ
206	○	40	51	SD06	地中盤	灰	片	15			灰	8世紀後半	古文
207	○	40	51	SD06	地中盤	灰	片	17			灰	8世紀後半～10世紀初	
208	○	37	52	SD05	SD07	地中盤	灰	10			灰	8世紀後半～10世紀初	
209	○	39	51	SD07	地中盤	灰	片	12			灰	8世紀後半	
210	○	36	51	SD07	地中盤	灰	片	8			灰	8世紀後半	
211	○	36	53	SD07	SD07	土御門	灰	11			灰	8世紀後半	内壁少々付着
212	○	37	51	SD07	地中盤	灰	片	12			灰	8世紀後半	
213	○	40	51	SD07	地中盤	灰	片	30			灰	8世紀後半	
214	○	40	51	SD07	地中盤	灰	片	9			灰	8世紀後半	
215	○	43	47	SD02-2	地中盤	灰	片	1.1(穴) 2.8(最大)			灰	8世紀後半	
216	○	56	41	SD07	1号	地中盤底風	灰	10			灰	8世紀後半	
217	○	57	38	SD07	1号	地中盤	灰	10			灰	8世紀後半	
218	○	41	50	SD07	1号	地中盤	灰	11	4	3	灰	8世紀後半	地中盤
219	○	54	40	SD07	1号	地中盤	灰	10			灰	8世紀後半	地中盤
220	○	45	48	SD007	1号, 2号	地中盤	灰	11	5	2	灰	8世紀後半	墨書き、墨擦り
221	○	55	46	SD007	1号	地中盤	灰	10	5	3	灰	8世紀後半	リード: 黒灰
222	○	39	51	SD007	1号	近豆陶器?	灰?				灰	8世紀後半	リード: 黒灰
223	○	43	49	SD007	1号	地中盤	灰	30			灰	8世紀後半	内壁
224	○	56	44	SD007	1号	中世上部器	灰	10			灰	8世紀後半	
225	○	47	47	SD007	1号	近豆陶器	灰A	11	7	4	灰	8世紀後半～9世紀前半 純正良好	
226	○	31	42	SD007	1号	地中盤	灰	9			灰	8世紀後半～9世紀前半 純正良好	
227	○	36	51	SD007	1号	地中盤	灰	10			灰	8世紀後半	
228	○	42	49	SD007	1号	地中盤	灰	44			灰	8世紀後半	
229	○	51	58	SD05	地中盤	小盤	片	10			灰	8世紀後半	
230	○	50	49	SD05	地中盤	小盤	片	11	5	3	灰	8世紀後半	墨書きあり(文字不明)
231	○	56	59	SD05	地中盤	小盤	片	6			灰	8世紀後半	近豆
232	○	49	44	SD07	地中盤	小盤	片	12			灰	8世紀後半	内壁: 銀
233	○	49	45	SD07	地中盤	近豆	片	6			灰	8世紀後半	8世紀後半～9世紀前半 純正良好
234	○	66	37	SD012	地中盤	灰	片	11	5	3	灰	8世紀後半	リード: 黒灰(青灰)
235	○	53	58	SD017	地中盤	灰	片	11			灰	8世紀後半	内壁
236	○	54	58	SD017	地中盤	灰	丸紙	10	4	2	灰	8世紀後半	内壁
237	○	46	56	SD017P	地中盤底風	灰	片	14			灰	8世紀後半	
238	○	31	58	SD017	地中盤	灰	片	1			灰	8世紀後半	リード: 黒灰
239	○	55	58	SD017	地中盤	灰	片	10	5	3	灰	8世紀後半	見込みに墨書き
240	○	52	58	SD017	地中盤	灰	片	4			灰	8世紀後半	
241	○	51	56	SD017	地中盤	小盤	片	8			灰	8世紀後半	内壁: 銀(黒い虹色のもの)が付着
242	○	51	36	SD017	地中盤	小盤	片	9			灰	8世紀後半	内壁: 銀
243	○	46	56	SD017	地中盤	小盤	片	9			灰	8世紀後半	内壁: 銀
244	○	51	58	SD017	地中盤	小盤	片	10			灰	8世紀後半	内壁: 銀
245	○	54	58	SD017	地中盤	小盤	片	11			灰	8世紀後半	内壁: 銀

8. 出土遺物概要

遺物観察表（平成11年度調査分）

番号	施設名	X	Y	遺物名	出土部位	種類	特徴	上	柱	梁	板	瓦	筒	丸	圓	備考
246	D	31	95	S1006	廻り踏口	下で鉢				12						財：比較 類：施設
247	D	49	96	S1017	踏口	下り梯		35								形態 おりさじ
248	D	52	96	S1017	踏口	臺										遺産
249	D	52	98	S1017	踏口	臺										に古い貴重 物が充てん
250	D	54	96	S1017	踏口	坪蓋										主床
251	D	49	96	S1017	踏口	坪蓋	河内	19								平安時代、内側に引廻溝、軒面窓か、造成直切
252	D	38	39	S1017	踏口	坪蓋	坪A	11	8			3	天井リーブ		9世紀後半、磚瓦や瓦片	
253	D	54	96	S1017	踏口	坪蓋	坪B									石舟瓦等一ヶ月を経て、造成直切だが既成れどあり
254	D	95	55	S1017	踏口	坪蓋	小寺									9世紀後半か
255	D	54	90	1017	踏口	坪蓋	坪C									施設直接
256	D	43	35	歩道	歩道上	歩		27								に古い窓枠 歩きの跡
257	D	46	33	1017	踏口	坪蓋	歩	16								窓枠の跡
258	D	39	35	1017	踏口	坪蓋	歩	27								余生の痕
259	D	49	40	1017	踏口	坪蓋	坪上	18								築作時期（模型E）
260	D	52	95	あせ	坪蓋	坪蓋	坪D									9世紀後半、内側に窓枠があり
261	D	49	49	1017	踏口	坪蓋	坪E									9世紀後半
262	D	52	90	1017	踏口	坪蓋	坪F									9世紀後半、坪E以上
263	D	49	32	1017	踏口	踏口	坪蓋									9世紀後半～9世紀前半
264	D	45	45	1017	踏口	踏口	坪G									9世紀後半～9世紀前半
265	D	52	37	1017	踏口	踏口	坪H									9世紀後半～9世紀前半
266	D	57	47	1017	踏口	踏口	坪I									9世紀後半
267	D	50	41	1017	踏口	踏口	坪J									9世紀後半～9世紀前半
268	D	46	45	1017	踏口	踏口	坪K									9世紀後半～9世紀前半
269	D	58	43	1017	踏口	踏口	坪L									9世紀後半、内面側化構成 実底直切
270	D	60	44	1017	踏口	踏口	坪M									9世紀後半
271	D	36	52	1017	踏口	踏口	土塗									9世紀後半～10世紀前半
272	D	41	42	1017	踏口	踏口	土塗									9世紀後半～10世紀前半
273	D	59	47	1017	踏口	踏口	土塗上									9世紀後半
274	D	59	38	1017	踏口	踏口	土塗上									9世紀後半
275	D	52	59	1017	踏口	踏口	土塗上									に古い窓枠
276	D	51	52	1017	踏口	踏口	土塗上									窓枠
277	D	55	44	1017	踏口	踏口	土塗上									に古い窓枠+黒漆 内面スス付窓
278	D	55	47	1017	踏口	踏口	土塗上									内面スス付窓
279	D	60	43	1017	踏口	踏口	土塗上									内面スス付窓
280	D	38	49	1017	踏口	踏口	土塗上									9世紀後半
281	D	58	41	1017	踏口	踏口	土塗上									9世紀後半
282	D	59	41	1017	踏口	踏口	土塗上									9世紀後半
283	D	59	47	1017	踏口	踏口	土塗上									9世紀後半
284	D	58	46	1017	踏口	踏口	土塗上									9世紀後半
285	D	56	48	1017	踏口	踏口	土塗上									9世紀後半
286	D	55	44	1017	踏口	踏口	土塗上									9世紀後半
287	D	59	45	1017	踏口	踏口	土塗上									9世紀後半
288	D	54	49	1017	踏口	踏口	土塗上									9世紀後半
289	D	57	50	1017	踏口	踏口	土塗上									9世紀後半
290	D	52	47	1017	踏口	踏口	土塗上									9世紀後半
291	D	59	47	1017	踏口	踏口	土塗上									9世紀後半
292	D	52	57	1017	踏口	踏口	土塗上									9世紀後半
293	D	57	43	1017	踏口	踏口	土塗上									9世紀後半
294	D	52	53	1017	踏口	踏口	土塗上									9世紀後半
295	D	50	60	あせ	踏口	踏口	土塗上									9世紀後半 内外面スス多く付着
296	D	50	45	1017	踏口	踏口	土塗上									に古い窓枠
297	D	58	48	1017	踏口	踏口	土塗上									に古い窓枠
298	D	57	30	1017	踏口	踏口	土塗上									に古い窓枠
299	D	56	43	1017	踏口	踏口	土塗上									9世紀後半
300	D	38	31	1017	踏口	踏口	土塗上									9世紀後半 内外面スス
301	D	58	46	1017	踏口	踏口	瓦									9世紀後半
302	D	43	35	1017	踏口	踏口	瓦									9世紀後半
303	D	52	47	1017	踏口	踏口	瓦									9世紀後半
304	D	60	45	1017	踏口	踏口	瓦									9世紀後半
305	D	52	54	1017	踏口	踏口	瓦									9世紀後半
306	D	56	43	1017	踏口	踏口	瓦									9世紀後半
307	D	59	45	1017	踏口	踏口	瓦									9世紀後半
308	D	54	44	1017	踏口	踏口	瓦									9世紀後半
309	D	31	58	1017	踏口	踏口	瓦									9世紀後半
310	D	54	51	1017	踏口	踏口	瓦									9世紀後半
311	D	40	48	1017	踏口	踏口	瓦									9世紀後半

遺物觀察表（平成11年度調査分）

名号	施設名	X	Y	遺物番号	出土場所	種類	形態	口 径	太 壁	節 筒	色 調	備 考
312	D	53	36	馬糞便	2号	成中直切	直筒	7	4	1	黒	
313	D	50	48	サブトシ	成中直切	直筒	直筒	8			淡黄	
314	D	54	39	馬糞便	2号	成中直切	直筒	14			黒	
315	D	55	47	馬糞便	2号	成中直切	直筒	6.2 (不定)			黒(底青) 黄(底青+角)	うすい色調
316	D	55	39	馬糞便	2号	成中直切	直筒	10			黒(底青) 黄(底青+角)	見込みに角形(12mm)の跡印あり
317	D	44	35	SXあご	糞便	糞便	糞便	8			黒(底青) 黄(底青+角)	10世紀代
318	D	40	35	馬糞便	2号	糞便	糞便	12			黒(底青) 黄(底青+角)	10世紀代
319	D	49	39	馬糞便	糞便	糞便	糞便	1			黒(底青) 黄(底青+角)	10世紀代
320	D	49	45	馬糞便	2号	糞便	糞便	9 (不定)	4.6 (不定)		黒	日没の落着場
321	D	47	31	馬糞便	2号上部	糞便	糞便	2.4 (不定)			黒	近傍
322	D	53	39	馬糞便	糞便	糞便	糞便	2.4 (不定)			黒	中世
377	D	38	49	馬糞便	3号上部	糞便	糞便	40			黒	おろし石と金 山地に堆積 狩先史
378	D	56	34	みせ	八咫	米	米				黒(底青+白) 黄(底青+白) 淡灰や不規則	
379	D	57	42	馬糞便	3号上面	八咫?	米				黒(底青+白) 黄(底青+白)	
380	C	50	57	サブトシ	糞便	糞便	糞便	9			黒(底青+白) 黄(底青+白) 沖縄文化	
383	C	50	52	馬糞便	砂土層	糞便	糞便				黒灰	純文様
384	C	48	58	馬糞便	2号	土壤	土壤	1.4 (不定)	4.4 (不定)		黒青	

五類・石器計測表（平成11年度調査分）

遺物番号	施設名	X	Y	標本番号	出土場所	形態	大きさ	幅	厚	深	穴径	石材	備考
323	D			成中直切	H-10-10	円筒		6.2			1.2-2.3-3.8	滑石	
324	D			成中直切	セキB-13	円筒		9			3.3-2.2-2.7	滑石	
325	D			成中直切	L-22-2	円筒		9	5	3		滑石	すり切らばあき
326	D			成中直切	H-10-1-3	円筒		7	2.0	1.5		滑石	山形
327	D			成中直切	セキD-7-7	円筒		10	3	5		滑石	滑石
328	D			成中直切	K-14-5	円筒		16.5	4.5	4		滑石	滑石(奥) 穴開け尖端
329	D			成中直切	G-15-4	円筒		2.5	2.5	2.5		滑石	滑石(奥) 穴開け尖端
330	D			成中直切	K-15-6	円筒		6.6	2.8×2.6			滑石	滑石(奥)
331	D			成中直切	セキC	円筒		5.2	2	2		滑石	六角
332	D			成中直切	セキ-1-1	円筒		3	2	2		滑石	滑石(奥) 白
333	D			成中直切	G-9-3	円筒	3.42	7	2.6×2.4		1	滑石	滑石(奥)
334	D			成中直切	セキD-9	円筒	4	2			L-1	滑石	下限近傍
335	D			成中直切	G-6-6	円筒	3.6	1.3×2.3			L-1	滑石	滑石(奥) (白)
336	D			成中直切	セキ-20-1	円筒	5	2.2			L-1	滑石	滑石(奥) (白)
337	D			成中直切	E-3-15	円筒	6.6	2.3×2.3			L-1	滑石	滑石(奥) (白)
338	D			成中直切	K-20-1	円筒	8	2.3×2.0			L-1	滑石	滑石(奥) (白) 片側削
339	D			成中直切	L-23-1	円筒	8.2	2.2×2.4			L-2	滑石	成中孔 研磨少く
340	D			成中直切	L-16-1	円筒	12.6	2.4×2.6			L-1, E	下, 4	緑色鉄刃
341	D			成中直切	I-14-7	円筒	17	3.5	4.5			当面	
342	D			成中直切	J-17-2	円筒	22	6	5			二段	
343	D			成中直切	G-18-5	円筒	9	2	1.5			安山岩	上島山
344	D			成中直切	K-17-4	円筒	9	3	2.5			安山岩	本島山
345	D			成中直切	セキH-3	円筒	10	2	2			安山岩	本島山 上島はほづらに難観
346	D			成中直切	E-8-6	円筒	10.5	2.5	2.5			安山岩	本島山 基盤を斜く上島
347	D			成中直切	J-18-6	円筒	4				1	安山岩	斜面八角形 金河原
348	D			成中直切	F-7-3	円筒	86		20		6	滑石	斜面八角形 金河原
349	D			成中直切	R-13-1	円筒		4.6			1.8	滑石	
350	D			成中直切	H-22-1	円筒		4.2			1.4	滑石	
351	D			成中直切	H-22-5	円筒		3.5			1.1	滑石	
352	D			成中直切	SDH-1-C	円筒		5			1.1	滑石	
353	D			成中直切	R-13-1	円筒	1	8	7			滑石	
354	D			成中直切	F-7-3	円筒		8	4		巨大3.5	滑石	
355	D			成中直切	R-13-1	円筒		10.5	8	4	巨大3.5 巨小3.5	滑石	
356	D			成中直切	H-22-1-4	円筒		13.0	0.5	9		滑石	上島山
356	D			成中直切	H-20-2	円筒		32.5	16	5		チベテー	
357	D			成中直切	H-27-R-3	円筒		35	19	5		安山岩	内面削り難観
358	D			成中直切	H-27-R-30	円筒		21.5	16.5	4		安山岩	本島山
359	D			成中直切	G-19-3	円筒		28	9	4		安山岩	焼成加工
360	D			成中直切	F-16-6	円筒		24.5	18.5	4		安山岩	焼成加工
361	D			成中直切	P-15-9	円筒		19	1.5	4.5		安山岩	焼成加工
362	D			成中直切	M-27-1	円筒		22	19	5.5		滑石	本島山 錆御乳頭面(片茎加工)
363	C	43	37	成中直切	R-20.4	円筒		29.5	12	4		安山岩	焼成加工
364	D			成中直切	E-15-8	円筒		25	7	2.5		安山岩	
365	D			成中直切	M-16-2	圓筒		30	11	3		安山岩	本島山

玉類・石器計測表（平成11年度調査分）

遺物番号	地区名	X	Y	遺物番号	測定部位	面積	長さ	幅	厚さ	穴径	石材	備考
366	D			366	G-14-8	石抜	28	15	4	安山岩	朱漆品 両面加工	
367	D			367	J-23-1	削片	19	30	4	安山岩	石製な形もしくはスチレイバー	
368	D			368	I-14-2	石抜丁	18	30	6	安山岩	欠損品 斬削面も磨いている	
369	D	41	38	369	SD413	石丸丁	40	53.5	7	安山岩		
370	D	41	38	370	SD413	石丸	99	62	19	安山岩		
371	D	46	34	371	SD412	石丸	107	24	22	安山岩	後削面	
372	D	58	50	372	SDX11上部	研削跡か？	46	16	10	安山岩	後削面	
373	D	42	51	373	SD122(123)	打削石斧	106	85	9	安山岩		
374	D	52	39	374	SD411-2	椎乳石斧	33	25	12.5	安山岩	丸棒状	
375	D	42	29	375	SD420	削片	20	21	5	ヒスイ	光側斜面あり	
376	D			376	SDX12	セセキE-6	ガラス玉	4.2×3.6	3.2	2×1.6	ガラス玉	ブリル・ブラー
381	D	52	58	381	SD317	研谷	91	26	14	安山岩	仕上げ済み	
382	D	58	48	382	SD411	研磨上部	131	60	30	安山岩	仕上げ済み	
385	D			385	SDW4P-4	研谷	60	42	48	ヒスイ		
386	D	45	47	386	SDX222(123)	C棒	61	27	21	安山岩		
387	D	61	37	387	SD3067	研削	24	45	33	山灰陶隕石		
388	D			388	G-9-4	石丸	37	35	28	安山岩		
389	D	41	38	389	SD413	削片				ヒスイ	光側斜面	
390	D			390	410H鉋頭	削片				ヒスイ	光側斜面	
391	D	45	34	391	SD111	削片				ヒスイ	光側斜面	
392	D			392	SDX12	セセキE-9	削片			ヒスイ	光側斜面	
393	D			393	SDX14-E	削片				ヒスイ	光側斜面	
394	D			394	SDX12	G-6-8	打削石包丁か？	34	38	3	安山岩	
395	D			395	F-17-7	打削石包丁か？	23	31	6	安山岩		
396	D			396	J-19-3	石鏟	14	12	3	安山岩		
397	D			397	E-3-9	石鏟	15	15	4	安山岩	朱漆品	
398	D			398	J-19-2	ツヤビリ石器	16	14	5	オヤード		
399	D	91	37	399	SD424	削片				青碧	仕上げによる刃こりれ 光沢あり	

第3章 まとめ

1. まとめ

3年間の調査で東部山地造成事業地内および主要地方道立山水橋線道路改良事業地の調査が終了した。また、1986・87年調査も含めると、浦田遺跡北端部を延べ約18,200m²を調査したことになる。ここでは、これらもあわせて成果をまとめると。ただし、1986・87調査およびH9調査の結果については、一部H10・11調査結果にあわせて改変していることを了承されたい。また、事実記載の章と重複した内容となっている点も併せて了承願いたい。

A. 繩文時代の遺物は、後・晩期になってみられるようになる。量的には晩期の方が多い。埋没河道最下層より土器・石器が出上しているほか、調査区西側を中心に広い範囲で散発的に土器・石器が出土している。しかし、明らかにこの時期と断定できる遺構は確認できなかった。生活圏には入っていたものの、居住域にはなっていなかつたと考えられよう。

B. 埋没河道からは、弥生時代中期の遺物がまとまった量で出土した。出土状況から付近から投棄されたものと考えている。出土土器は、櫛描文土器を主体とするもので、天王山式系土器が数個体出土しているほか、信州地方の栗林式系土器が少量みられる。また、上坑からの単独出土であるが、長野県松本盆地周辺に類例が求められる条痕の地紋に櫛描文を施す土器がある。この土器は、栗林式系土器に先行する時期のものと考えられている。これらは、比較的長期にわたり信州地方との一定の交流があったことを伺わせるものである。なお、天王山式土器は、1986・87調査においても小破片が出土している。帰属時期は諸説あり断定しがたいが、他の在地土器は、畿内第Ⅲ様式～第Ⅳ様式初めの時期にあたる。

C. 埋没河道からは、土器とともに弥生時代中期の玉作り関連遺物が出土している。有孔円盤状石製品や磨製石錐の県内における出土例は少なく、高岡市石塚遺跡がある程度である。但し、形状・大きさにはかなり違いが見受けられる。また、玉作りの道具としての打製石錐は、県内初例である。管玉未製品は、すべて角柱状削片を作る段階（第3工程）以降のもので、原石・荒削段階のものは出土していない。磨製石錐の未製品が確認され、管玉と類似した製作工程である。打製石錐は、顕微鏡観察の結果でも明確な使用痕は確認できなかったが、その形状や新潟県・福井県の類例などからそう判断した。石材は、磨製石錐は安山岩製、打製石錐は正斜面である。これは下屋敷遺跡・下谷地遺跡でもみられる特徴で何らかの意識が働いていたようである。埋没河道出土の管玉は、穿孔痕がはっきりと確認できた。H10調査で出土した鉄石英製管玉未製品には穿孔痕が認められない。磨製石錐および管玉の穿孔痕は、弥生時代中期中東頃の一時期のみに確認できるらしい（福井県埋文センター富山氏のご教授による）。また、ヒスイの原石・荒削段階のものが多くみられた。製品の出土はないが一部研磨されているものも確認できた。

D. 埋没河道内から出土した「ガラス質物質」は、「ガラス製造とは関係のないもの」という科学分析の結果が出た。分析で検出されたクリストバライトは、各種火山岩の空隙に産する石英の結晶変態の一型で、融点は1,700°である。このことから、火山噴出物の可能性も指摘されたが、弥生時代中期頃の立山・白山など近隣の火山の爆発的噴火は確認できない。大規模な焼き烟でも出来る可能性はあるらしいが、その証拠は得られていない。また、出土状況やローリングによる摩滅は認められないことから二次堆積とは考えがたい。そのため、今回出土した「ガラス質物質」の成因は明らかに出来なかつたが、人為的な成因の可能性が高いものと考えている。

F. 1986・87調査でも弥生時代中期段階の土器と土坑群が確認されている。いずれも径・長軸0.65～1.7m短軸0.55～1.0mと大型だが、深さは0.1～0.55mとばらつきがあるものである。これらは、円弧を描くように確認されて

いる。土坑内の遺物の出土も比較的多いが、性格など詳細は不明である。

G. これまでの調査で多くの弥生時代中期段階の遺物が出土しているが、住居跡・建物跡は確認されていない。埋没河道東側では、古墳時代初めの住居跡や中世後期の水田跡から多くの弥生時代中期の遺物が出土している。また、この付近では、弥生時代に属すると考える小穴が多く確認されている。これらのことから、当該期の集落本体は調査区のさらに南にあったと思われるものの、調査区内の遺構は、後世の削平によって消滅した可能性が高いと考えている。

H. SD01内から、弥生後期（推論式期）の井堰（SG01）と弥生時代終末～古墳時代初めの井堰（SG02）・護岸（SG03）を確認した。井堰から分水した水はSD06・SD05に流れ。調査区北側低位部では、水田畦畔は確認できなかったが、自然科学分析によってプラントオバールが検出されている。SD06は、調査区北側の低位部に広がっていたと考えている水田に水を供給していたと考えている。1986・87調査で住居跡の周溝の可能性が指摘されている溝がある以外、明確な住居跡・建物は確認されていない。当概期の遺物の出土量もさほど多くなく、この帯は広く生産域として利用されていたと考える。そして、生産域としての利用は、これ以降現代に至るまで断続的になされる。

I. SG01は、県内では上市町中小泉遺跡で確認された弥生時代中期後半のものに次いで古いものである。遺存状況が良く、1. 太い縦杭を打つ 2. 縦杭部分で合掌形になるように杭材を斜めに打ち込む 3. 斜め材に横材を添えて補強する という木組みがほぼ復元出来た。その構造は、堅固な作りであるといえる。県内でこれまで確認された他の遺跡のものが、自然木を多用しているのに対し、使用されていたすべての材が製材されていた。それらの中には転用されたものは見受けられない。

J. 古墳時代初め（古府クルビ期）の周溝が巡る4本柱の住居跡が3棟確認された。うち2棟は、周溝が開口する南側が出入り口と推定される。SB04の周溝（SD414）の出入り口付近で遺物が多く出土した。上師器の大小の甕・赤彩高环・滑石製勾玉石製模造品・白玉がセットで出土している。住居跡は、埋没河道を切っており、この頃までに埋没河道は完全に埋没し、乾地化していたことが分かる。調査区東側は、SD01・井堰の存在からみて生産域であった。SD411-1・2は、居住域と生産域の境界と考える。

K. H 9～H11年調査で確認された8棟の掘立柱建物（A群）は、8世紀後半～9世紀前半である。うち7棟は倉庫で、残る1棟は、比較的大型で庇をもつ建物であることから倉庫の管理施設など少し異なった性格を考えている。この建物に類似した建物が1986・87調査でも確認されており、その特異性が指摘されている。また、このときの調査では、9世紀後半の掘立柱建物群（B群）が17棟確認されている。重複が多くみられ、短期間に何度も建て替えられたことがうかがえる。なお一部の建物は10世紀代にはいる可能性があると思われる。B群は、A群に比べてその配置に規則性はみられない。しかし、倉庫群と庇をもつや大型の建物の存在から、A群からB群へ移動した可能性を考える。

L. 古代のサク状造構は、SD14（A地区）以西および北側低位部分以外ほぼ全域で確認できた。なお、中世後期の水田跡が確認できたエリア以西は、削平のため確認できていない。北側低位部分は、水田域と考えている。また、切り合い・溝方向よりいくつかのグループに分けられるが、時期毎の抽出までには至っていない。また、1986・87年調査で確認された平行な小溝群は、弥生時代後期と報告されているが、他の遺構との関係より古代のものとすべきと考えている。

M. 古代遺物には、須恵器壺身・壺蓋・甕・甕、土師器長胴甕・小甕・鍋・碗・皿がある。灰釉・綠釉陶器はみあたらない。須恵器の多くは上末窯窓のものである。9世紀後半以降の土師器碗は、赤彩を施しているものが多い。墨書きは、須恵器のみにみられ数量的に少ない。具体的な文字は少なく、除蔽に関係するものが多い。また、数点

出土した硯は、すべて転用硯である。

N. 調査区周辺は、古代において東大寺領大藏莊の莊域に含まれる可能性がある。莊園は、8世紀中頃に設置され、9世紀に最も開発が進み、10世紀のうちに廃絶した。なお、この莊園は、越中の東大寺領の中でも最も開発が及ばなかった莊園とされている。一連の調査では莊園と遺跡を結びつける遺構・遺物は確認できなかった。しかし、一帯は8世紀後半以降永続的に耕作がなされており、莊園の一角を占めていた可能性を考える。

O. B地区で基3層途中まで吹きあがり平面的に広がる噴砂が確認された。噴砂は、他の地点でも数カ所で確認されているが、断面の確認ができたのは1カ所のみである。また、基3層と基4層の層界が地震の影響で波打っている。D地区で実施した軟X線写真分析により新旧2回の大地震が確認されている。新しいものは1858年の飛越地震と推定できる。古いものは弥生時代～古代の間に起きており、古代後半の可能性が高いと考えている。

P. 中世前期（13世紀代）は、様相が一変し、方形の区画溝とその内側の13棟の掘立柱建物群および同時期の区画溝外の掘立柱建物が確認された。調査区内は主に居住域として利用されていた。建物方向や位置関係からみて、SB01（SB184）・SB03（SB173）・SB179・SB08・SB09・SB10（SB188）・SB11・SB187・SB12が同時期の建物と考えている。床面積100m²以上の大型建物および50m²以上100m²未満の中規模建物に小規模建物が付随する配置がされている。区画溝は、幅2.0m程度で1辺80數mを測る。しかし、深くても20cm程度と浅く、北辺は確認されなかった。建物位置や方向などから区画溝とするのが妥当と判断したものである。

Q. 中世後半～近世初め（16世紀～17世紀初め）は、再び主に生産域として利用される。梢円柱穴建物・井戸などを中央南端で確認したほか、調査区西側を中心に溝・水田跡・サク状遺構を確認した。2棟の梢円柱穴建物は、重複し、建て替えと考えられる。時期は、16世紀代を考えている。これに伴い井戸・土坑が確認されている。

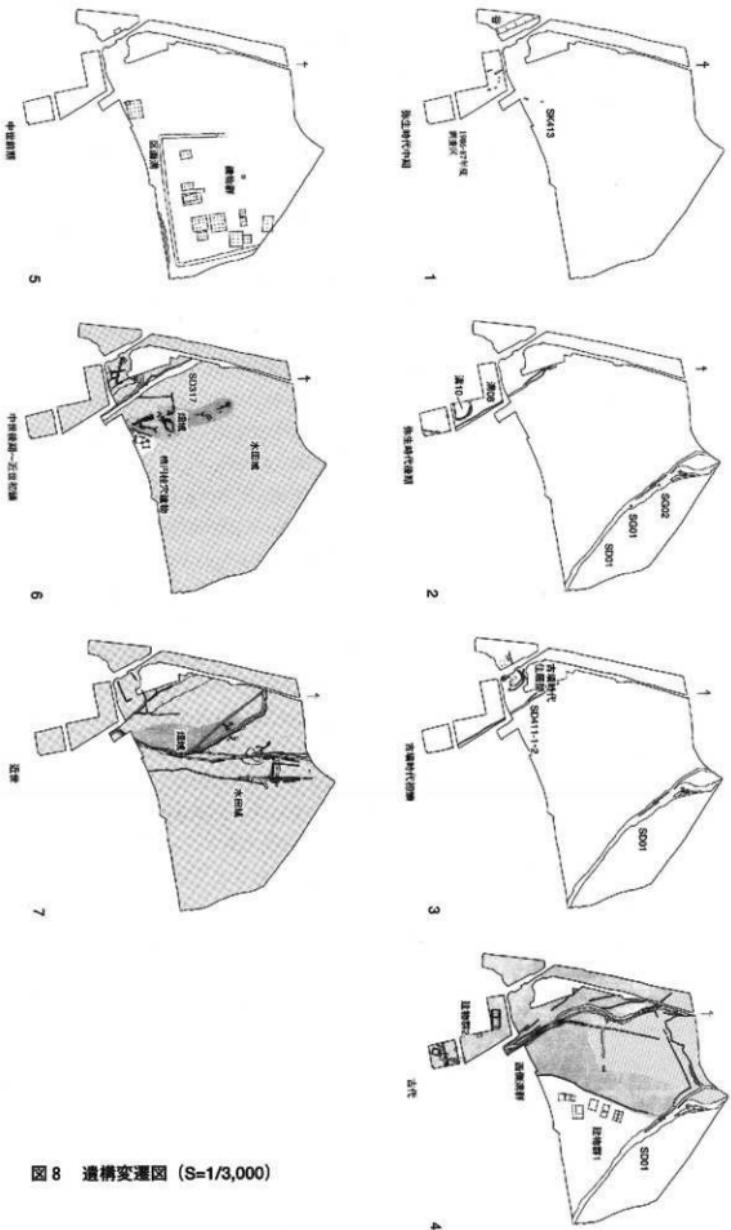
R. 現在、この付近一帯の基幹用水は、調査区の南端に沿って流れている。この用水は、常願寺川より取水している高野用水を分水している。立山町史下巻によると、高野用水は室町時代（天正の「石直し」以前）にすでに出来ていたと考えられている。SD307は、現在の基幹用水の前身と考えられ、用水の開削時期とSD307の始まる時期がほぼ合致している点が注目される。さらに、宇割・換地前の町村境をみてみると、ちょうどSD307付近が境界となっていることが分かる。SD307は、近世初めには埋没した後は水田として利用されている。境界がSD307を意識したとすると、その起源は中世末～近世初めに求められる。

S. 中世後半～近世初めの水田跡は、調査区西側および北側の低位部で確認された。平面的に確認できたのは、基3・4層を畦畔部分を削り残しながらつくっている西側のみである。北側では、畦畔が断片的に確認できたのみである。この後、現代に至るまで、一帯は水田として利用される。同様に、サク状遺構は、建物のすぐ西側の高位部で確認された。この辺りは、最近の上地利用状況を見ても畑地として利用されていたところが多い。

T. 近世になると建物は確認されず、調査地内はすべて水田・畑地として利用されていた。SD307は埋没し、その上部は水田として利用されている。土地利用状況は、最近までのそれと変わらない。近世後期の水田は、南西部を中心に洪水に起因すると思われる粗砂に覆われている。なお、1858年（安政5年）の飛越大地震のものと考えている地震痕跡は、この砂層に影響を与えていている。

（越前・高梨）

1. ま と め



引用・参考文献

- 海津正倫 1997『沖積低地の古環境学』 古今書院
「角川日本地名大辞典」編纂委員会 1978『角川地名大辞典 16 富山県』 角川書店
上市町教育委員会 1981『北陸自動車道遺跡調査報告－上市町遺構編－』
△ 1984『北陸自効車道遺跡調査報告－上市町木製品・総括編－』
財团法人富山県文化振興財団 1994『梅原胡摩室遺跡発掘調査報告（遺構編）』
齊藤淳治 1998『大学テキスト日本の扇状地』 古今書院
城端町教育委員会 1998『善徳寺前遺跡発掘調査報告』
鈴木隆介 1997『建設技術者のための地形読図入門 第1巻 読図の基礎』 古今書院
鈴木隆介 1998『建築技術者のための地形読図入門 第2巻 低地』 古今書院
高岡市教育委員会 1997『市内遺跡調査概報VI』－平成8年度、石塚遺跡の調査他－
田嶋明人 1988『IV考察』『漆町遺跡I』右川県立埋蔵文化財センター
立山カルアラ砂防博物館 1998『越中立山大霧崩れ』
立山町 1984『立山町史』
立山町教育委員会 1987『让遺跡・浦田遺跡発掘調査概要』
△ 1988『浦田遺跡』－第2次発掘調査報告－
立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1989『立山町埋蔵文化財分布調査報告IV』
堂口 諭 1980『富山平野東部の段丘地形』富山県地学・地理学研究論集 第7集 富山地学会
富山県教育委員会 1983『都市計画街路七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要』
富山県埋蔵文化財センター 1991『南中田D遺跡発掘調査報告書』
富山大学人文学部考古学研究室 1989『越中上末墓』
新潟県教育委員会 1979『北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 下谷地遺跡』
日本土壤肥料学会土壤教育委員会編 1998『土をどう考えるか－新たな環境教育教材－』 古今書院
日本ペドロジー学会編 1997『土壤調査ハンドブック改訂版』 博友社
東日本埋蔵文化財研究会・山梨県考古学協会 1998『治水・利水遺跡を考える－人は水とどのようにつきあってきたか－』第7回東日本埋蔵文化財研究会
深井三郎 1959『沖積世以降における越中海岸線の変化と地形』富山県の地理学的研究 第3集 富山地理学会
△ 1980『住居域の発展からみた富山平野の形成過程－埋蔵文化遺跡と河川の変遷－』富山県地学・地理学研究論集 第7集 富山地学会
福井県教育庁埋蔵文化財センター 1988『下屋敷遺跡 堀江十束遺跡』
福野町教育委員会 1988『寺家新屋敷遺跡』
△ 1989『寺家新屋敷遺跡II』
福光町教育委員会 1995『富山県福光町梅原胡摩室遺跡群III』
舟橋村教育委員会 1988『富山県舟橋村浦口遺跡発掘調査報告書』舟橋村埋蔵文化財調査報告書2
△ 1988『富山県舟橋村浦田遺跡発掘調査報告書』舟橋村埋蔵文化財調査報告書3
北陸古代土器研究会 1997『北陸の10・11世紀代の土器様相』
本郷真紹 1996『IV古代莊園岡各論 6 越中c 越中国新川郡大蔵開田地図・大蔵村墾出地図』『日本古代莊園圖』東京大学出版会
町田 貞 他 1996『地形学事典』二宮書店
松田賢一郎 1980『常盤寺川の河岸段丘』富山県地学・地理学研究論集 第7集 富山地学会
松本市教育委員会 1998『境窪遺跡・川西開田遺跡I・II』
宮田進一 1997『第4章 越中国の様相 第2節 越中国における土器器編年』『中近世の北陸』北陸中間土器研究会

附載 自然科学分析

樹種同定識別結果

富山県林業技術センター・木材試験場

資源利用課 研究員 塚本 英子

1. 資料

遺物出土材 5点

(SG1-7、SG1-31、SG2-14、SG3-12、SG3-17)

2. 識別方法

試料より木口、柾目、板口面の薄切片をカッターナイフで切り出し、それをガムクロラールで封入し、樹種識別用プレパラートを作製した。顕微鏡下で出土木の組織を観察し、組織的特徴から樹種の同定を行った。また、観察した顕微鏡像を撮影記録した（撮影倍率10×、25×、50×、100×）。

3. 識別結果

1) スギ *Cryptomeria japonica* D. Don スギ科 (SG 1-7、SG2-14、SG3-12)

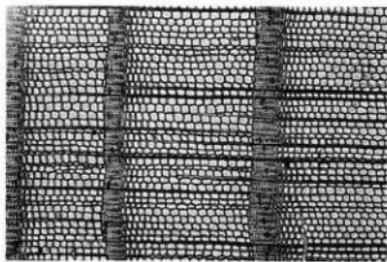
仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹。早材と晩材は明瞭で、早材から晩材への移行はやや急で、晩材部分が比較的多い。樹脂細胞は早材と晩材の境界付近および晩材部に偏在し、接線状にやや並ぶ傾向が見られる。分野壁孔はスギ型で、1分野に1～3個見られる。

2) トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 (SG1-31)

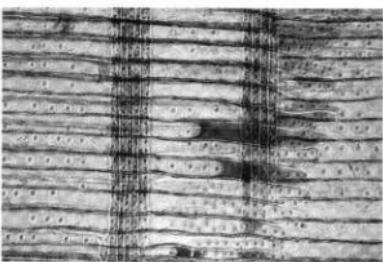
大型（直徑150～350 μm）の道管が年輪のはじめに単独ないし2個複合して2～3層並び、晩材部では小道管が散在状に配列する環孔材。道管は單穿孔で、内腔にはチロースが存在し、複合道管壁が多い。軸方向柔細胞には、道管を取り囲む周囲柔組織と年輪の終わりにターミナル柔組織が見られる。放射組織は平伏細胞のみからなる同性で、1～3細胞幅をもつ。

3) コナラ属クスギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科 (SG3-17)

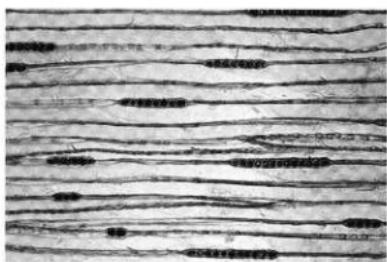
大型（直徑約250～400 μm）の道管が年輪のはじめに単独で1～3数層並び、晩材部では厚壁で円形をした小道管が放射状に配列する環孔材。道管は單穿孔で、内腔には泡状のチロースが存在する。軸方向柔細胞には、道管を取り囲む周囲柔組織と短い接線状に連なる短接線状柔組織が見られる。放射組織は平伏細胞のみからなる同性で、單列放射組織と広放射組織の2種類の幅のものが見られる。



SG1-7X10



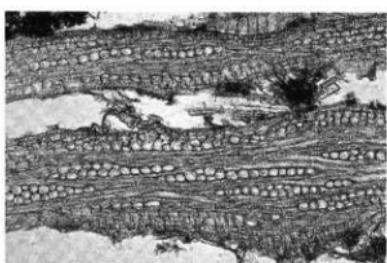
SG1-7X25



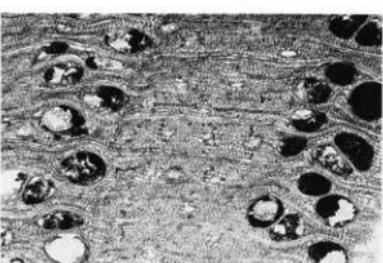
SG1-7X25



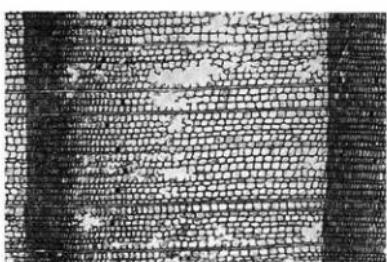
SG1-31X10



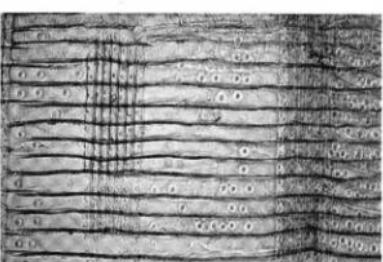
SG1-31X25



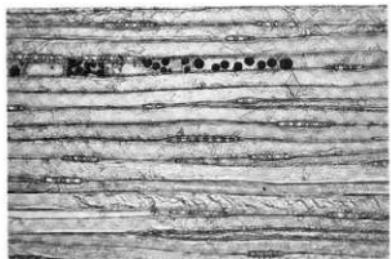
SG1-31X10



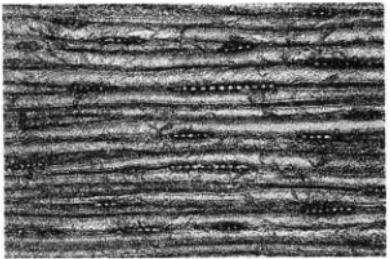
SG2-14X10



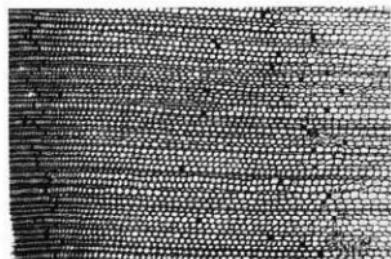
SG2-14X25



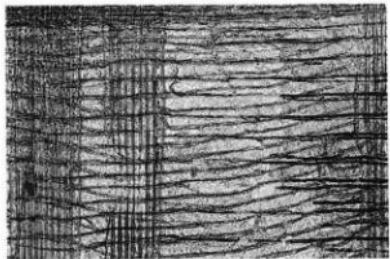
SG2-14X25



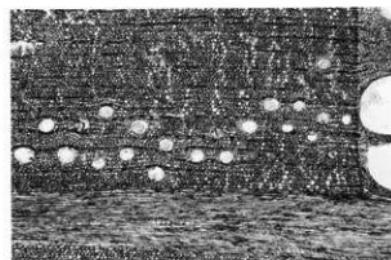
SG3-12X25



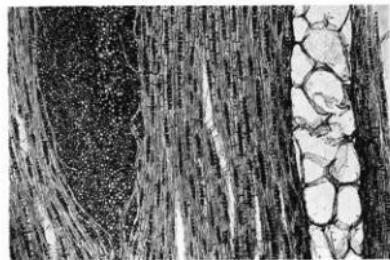
SG3-12X10



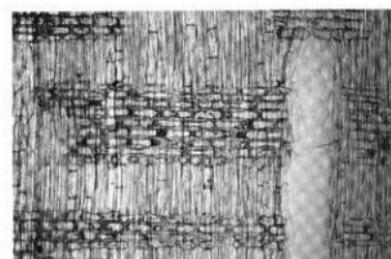
SG3-12X25



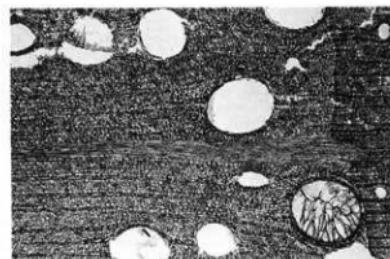
SG3-17X10



SG3-17X10



SG3-17X25



SG3-17X10

浦田遺跡の自然科学分析

<目 次>

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに.....	p. 50
I. 弥生時代終末～古墳時代初頭の溝跡 (SD01) に関する検討	p. 50
1. 試料.....	p. 50
2. 分析方法.....	p. 50
3. 結果.....	p. 50
4. 考察.....	p. 51
II. 中世～近世の溝跡の性格とその近辺の土地利用状況に関する検討	p. 52
1. 試料.....	p. 52
2. 分析方法.....	p. 53
3. 結果.....	p. 54
4. 考察.....	p. 63
III. 中世のトイレ遺構の可能性がある土坑の性格検討	p. 66
1. 試料	p. 66
2. 分析方法	p. 66
3. 結果	p. 66
4. 考察	p. 66
引用文献.....	p. 67

<図表・図版一覧>

表 1 放射性炭素年代測定および樹種同定結果
表 2 微化石分析試料
表 3 2 地点・SD307 の珪藻分析結果
表 4 排水路内の珪藻分析結果
表 5 2 地点・SD307・SK02 の花粉分析結果
表 6 2 地点・SD307 の植物珪酸体分析結果
表 7 B 地区各地点の植物珪酸体分析結果

図 1 1・2 地点の断面図
図 2 各地点の植物珪酸体分析層位
図 3 2 地点・SD307 の主要珪藻化石群集
図 4 2 地点・SD307・SK02 の花粉化石群集
図 5 2 地点・SD307 の植物珪酸体群集と組織片の産状
図 6 B 地区低地部の植物珪酸体組成
図 7 煙作 (?)・溝の植物珪酸体組成

図版 1 木材
図版 2 木材・珪藻化石(1)
図版 3 硅藻化石(2)
図版 4 硅藻化石(3)
図版 5 花粉化石
図版 6 植物珪酸体
図版 7 植物珪酸体
図版 8 軟 X 線写真(1)
図版 9 軟 X 線写真(2)

浦田遺跡から出土した木材の年代と樹種

はじめに

浦田遺跡は常願川扇状地の扇端部に位置する、弥生時代および中世～近世の複合遺跡である。今回の発掘調査では、弥生時代後期初頭から古代に至る溝跡、古代の建物跡、中世～近世の溝跡、近世の水田跡など多数の遺構が確認されており、本地域の土地利用状況に関する情報が蓄積されてきている。そこで、今回はこれらの遺構の性格や年代観、当時の土地利用状況に関する情報を得ることを目的として、自然科学分析調査を実施する。調査課題は、1) 弥生時代～古墳時代初頭の溝跡（SD01）の年代観と井堰および護岸構築材に関する検討、2) 中世～近世の溝跡の性格とその近辺の土地利用状況に関する検討、3) 中世のトイレ遺構の可能性がある土坑の性格検討であり、以下に課題別に報告する。なお、本報告は平成10年度・11年度に実施した自然科学分析成果をまとめたものである。

I. 弥生時代終末～古墳時代初頭の溝跡（SD01）に関する検討

SD01溝跡は、堆積状況から大きく2時期（古段階・新段階）に区分されている。新段階の埋積土からは古代（8世紀後半以降）～中世初頭（11世紀）までの遺物が出土している。一方、古段階の溝路跡からは、井堰（SG01,02）や溝の護岸（SG03）が検出されている。このうち、井堰の上層部からは、弥生時代終末～古墳時代初頭の壺が出土している。ここでは、SG01～03の構築部材について、放射性炭素年代測定を行い、構築時期に関する資料を得る。また、これらの樹種同定を行い、用材選択および年代測定を評価する際の資料とする。

1. 試料

試料は、古段階の溝跡（SD01）から検出された井堰（SG01,SG02）と護岸（SG03）から出土した構築部材合計5点である。各試料の詳細は測定結果および同定結果と共に表1に記した。

2. 方法

(1) 放射性炭素年代測定結果

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室が行った。

(2) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

3. 結果

放射性炭素年代測定結果および樹種同定結果を表1に示す。年代測定結果は、1600～2210yBPであった。また、木材はいずれも針葉樹で、2種類（スギ・クロベ）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞がほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・クロベ (*Tsuga standishii* (Gord.) Carriere) ヒノキ科クロベ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はスギ型～ヒノキ型で、1分野に1～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

表1 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

遺構名	試料番号	試料の質	同定結果	年代	Code No.
SG01（井堰）	7	生木	スギ	2060±60	Gak-20066
SG01（井堰）	53	生木	クロベ	2210±70	Gak-20331
SG02（井堰）	7	生木	スギ	1660±80	Gak-20332
SG02（井堰）	15	生木	スギ	未測定	
SG03（護岸）	16	生木	スギ	1600±110	Gak-20333

1) 年代値測定値は、1950年を基点とした年数で、同位体効果の補正を行った値

2) 放射性炭素の半減期は、LIBBY の5570年を使用した

4. 考察

(1) 年代について

清跡内の井堰 SG01の構築材は2,210yBP・2,060yBP、井堰 SG02の構築材は1,660yBP、護岸 SG03の構築材は1,600yBPであった。SG02と SG03の測定値は、誤差範囲で一致しており、ほぼ同時期の構築および使用が示唆される。これらの年代は、およそ3世紀末～4世紀中頃に相当する。SG02の上層部からは、弥生時代終末～古墳時代初頭の茎が出土しており、年代測定結果とも大きな矛盾はない。これらの結果から、遺構の構築および使用年代は、弥生時代後期～古墳時代初頭頃の可能性がある。

一方、SG01の年代値は2点でほぼ同様の年代を示した。年代値は紀元前3～5世紀頃に相当し、他の遺構とは約400～600年ほど古い年代を示している。発掘調査所見では、いずれの遺構も同時期と考えられており、これらの年代測定結果は発掘調査所見と異なる。推定年代よりも古い年代が得られた場合、古材の再利用や樹齢の問題などが考えられる（東村、1990）。

今回の試料については樹種同定も行われている。その結果を見ると、SD01はクロベとスギであった。いずれも針葉樹で、とくにスギは長寿の木として知られており、各地に巨木・名木が数多く存在する（沼田、1984）。このような樹種の中心に近い木材を利用した場合、実際の伐採年と差が出るため、実際よりも古い年代を示すことになる。今回の結果についても、そのような樹齢の問題により、実際の構築および使用年よりも古い年代を示している可能性がある。また、SG02および SG03の構築材もスギであった。そのため、これらの遺構についても、樹齢の問題により、実際には弥生時代以降に構築された可能性がある。今後、樹皮がついている木材があれば、その樹皮付近の試料についても年代測定を行いたい。また、構築材にはスギが多く見られることから、大型の部材で樹皮が付いた試料があれば、年輪年代学の応用で伐採年を知ることが可能である（奈良国立文化財研究所、1990）。今後年輪年代の応用についても検討したい。

(2) 用材について

井堰および護岸の構築材は、SG01点がクロベ・スギ、SG02と SG03がスギであった。いずれも針葉樹材であり、加工性や耐水性に優れた木材を選択した可能性がある。SG01のみ異なる種類が認められたことから、用材選択が異なっていた可能性があるが、スギが利用されていることをみれば、基本的には同様の用材選択であったと考えられる。

北陸地方では、これまでに行われた調査でもスギ材が多数利用されている様子が明らかになっている（飯島・長谷川、1984；鈴木・能城、1988、1992、1993；鈴木ほか、1994；パリノ・サーヴェイ株式会社、1994、1995）。その背景には、埋没林の調査などから低地を中心にスギが広く分布していたと考えられること（石井・山家、1934；植田・辻、1990）が挙げられる。これらの結果から、本遺跡周辺についてもスギ材の入手が容易な環境であったことが推定される。

II. 中世～近世の溝跡の性格とその近辺の土地利用状況に関する検討

調査区南西部では中世～近世にかけて利用されていたとみられる溝跡(SD307)、およびその周間に水田跡が確認されている。溝跡は、その埋積状況から少なくとも3回の掘り直しが行われていることが窺える。最初の段階の埋積物下部からは中世の遺物、最終段階の溝埋積物からは16世紀～17世紀初頭の遺物が出上していることから、本溝が完全に埋没するのは17世紀と考えられている。一方、調査区北東部に位置するB地区の低地部でも同時期の水田跡、微高地部分で畠跡の可能性がある縦・横に並んだ小溝が検出されている。

ここでは中・近世およびそれ以前の時期の土地利用状況、特に溝内の水域環境や水田の様態や消長、畠作物の種類に関する情報を得ることを目的として珪藻・花粉・植物珪酸体分析を実施する。また、水田部分では耕作土の状況や断面で確認された地層の変形に関する情報を捉るために軟X線写真撮影観察を行う。

1. 試料

今回の調査は、調査区南西部と調査区北東部(B地区)の2カ所で実施する。各調査地区別に層序および試料について記載する。

(1) 調査区南西部(D地区)

調査区南西部で確認された水田跡の模式断面図を図1に示す。最下位の⑥層は淘汰の良い明褐色微粒砂混じり細粒砂層からなる。本層上位のC層との層界は変形しており、横方向・縱方向に移動した痕跡が認められる。C層とH層は一連の堆積物であり、黒褐色細粒砂質シルトからなる。擾乱作用の影響を受けている。A層は灰褐色シルト質中～細粒砂からなり、下位層との層界は変形し、層界付近に挟在する黄灰色のシルトブロック土も変形している。その上位の①層は褐色中粒砂混じりシルト質微粒砂からなる。本層は擾乱作用の影響を受けている。発掘調査の結果、⑥層上面で区画溝、H層上面で畦畔が確認されている。また①層は18世紀頃の水田耕作土であることが推定されている。試料は、本断面に2ヶ所の地点を設定し(1地点・2地点)、各地点より柱状試料を採取した。1地点の試料は軟X線写真撮影観察、2地点の試料は微化石分析試料とした。分析層準は表2・図1に示す。

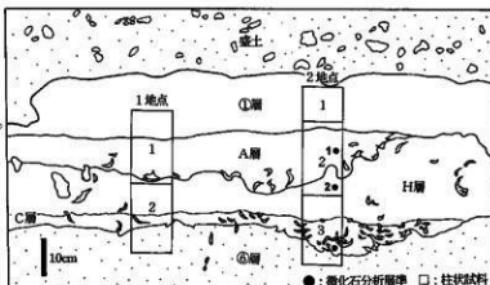


図1 1・2地点の断面図
●：微化石分析標準 □：柱状試料

SD307溝跡は、上記したように堆積状況から3段階に区分される。いずれも砂質堆積物により埋没しており、層準によってはトラフ横斜交疊理が形成されている。試料は、各段階の溝埋積物より層位試料として採取した。分析は各段階の溝底近くの堆積物について実施する(表2)。

(2) 調査区北東部(B地区)

B地区の堆積物は、大きく4層に区分されている。上位から、現耕作土の①層、中・近世の耕作土とされる②層、弥生時代～中世の遺物包含層を含む③層、地山の④層である。これらの土層は、酸化鉄の産状や調査区内の分布状態から、さらに細分されている。排水用施設と付随する溝跡は③層上面に認められ、水田跡が流路の西側に分布することが想定されている。

試料は、調査区内に設定した4ヶ所の地点(便宜上、Loc.1～Loc.4とした)より、各層より層位試料として採取し

た。Loc.1で5点(試料番号1～5)、Loc.2とLoc.3で各3点(試料番号1～3)、Loc.4で4点(試料番号1～4)である(図2)。このうち、Loc.2では近世の畦畔跡の下位にSD116がみられ、Loc.3では③d層上面には畦畔がみられ、酸化鉄の集積が顕著である。このほか、排水路覆土と付随する溝跡覆土、B地区西端の微高地部で確認された緩傾斜並ぶ小溝覆土から、各々2カ所の地点より試料を採取した(排水路覆土1・2、小溝1・2)。これら採取試料のうち、表2に示す層準について珪藻分析・植物珪酸体分析を実施する。

表2 微化石分析試料

地 区	地 点	試 料 号	層 名	標 考	分 析 項 目			
					軟	D	P	PO
D地区	1地点	1	①～A	柱状試料	●			
		2	H～⑥	柱状試料	●			
	2地点	1	①		●	●	●	●
		2	A		●	●	●	●
		3	H		●	●	●	●
	SD307	3	3A	第3段階の溝	●	●	●	●
B地区		5	7	第2段階の溝	●	●	●	●
		12	21	第1段階の溝	●		○	
		1	2f	水田耕作土		●		
		2	3a			●		
	Loc.1	3	3a			●		
		4	3g			●		
		5	3h			●		
	Loc.2	2	3b			●		
		3	3d	SD116覆土		●		
	Loc.3	1	3b			●		
	Loc.4	1	3b			●		
排水路	2	3d	溝跡			●	●	
	小溝	1	3c	糞路の可能性あり			●	
		2	3c			●		

●: 分析層準 ○: 概要層準

軟: 軟X線写真撮影観察 D: 粒度分析 P: 花粉分析 PO: 植物珪酸体分析

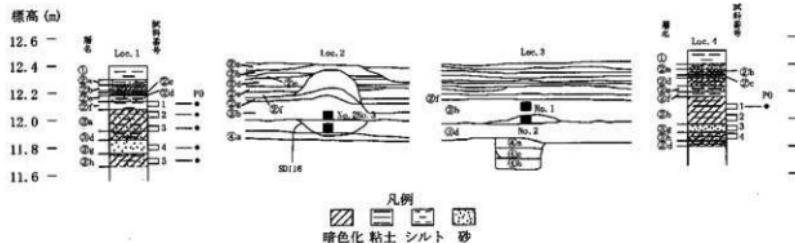


図2 各地点の植物珪酸体分析層位
試料採取位置を●あるいは■で示す。

2. 分析方法

(1) 硅藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。種の同定は、K.Krammer and Lange-Bertalot (1986・1988・1991a・1991b)、K.Krammer (1992)などを用いる。

同定結果は、海水～汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集団を作成する。また、産出した化石が現地性か異地性かを判断する目安として完形殻の出現率を求め考察の際に考慮した。なお、淡水生種についてはさらに細かく生態区分し、

塩分・水素イオン濃度 (pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。堆積環境の解析にあたって、淡水生種については安藤 (1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内 (1991)、汚濁耐性については、Asai,K.&Watanabe,T. (1995)、生活型などについては VOS,P.C.& DE WOLF,H. (1993) の環境指標種を参考とする。

(2) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液 (臭化亜鉛:比重2.2) による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトトリル処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残液をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は絶花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基数とした百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

(3) 植物珪酸体分析

試料中の植物珪酸体は、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理 (70W, 250kHz, 1分間)、沈定法、重液分離法 (ボリタングステイト、比重2.4) の順に物理・化学処理を行って分離・濃集する。これを検鏡しやすい濃度に希釈して、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、ブリュウラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞に由来した植物珪酸体 (以下、短細胞珪酸体と呼ぶ) や葉身機動細胞に由来した植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ) を、近藤・佐瀬 (1986) の分類に基づいて同定・計数する。

(4) 軟X線写真撮影観察

土層断面より採取したブロック状の試料を、幅7cm、長さ20cm、厚さ1cmの板状の試料を分離、成形して軟X線写真の撮影を行った。撮影は、ニッテツ・ファインプロダクツ釜石文化財保存処理センターの協力を得た。

3. 結 果

3-1. 硅藻分析

(1) 調査区南西部

結果を表3・図3に示す。2地点とSD307南側では、いずれも珪藻化石が普通に産出する。完形殻の出現率はともに70%前後で、化石の保存状態は良く、大部分が水生珪藻からなる。以下に、地点別に珪藻化石群集の特徴を述べる。

・2地点

水田区画溝の埋積物とされる試料番号3は、淡水性種の生態性の特徴は他試料に近似するが、貧塩好塩性種 (小量の塩分がある方が生育に適する種) や真+好流水性種 (流水域に生育する種) が多産する点で異なる。広域塩性種の *Rhopalodia gibberula* が約20%と多産し、好流水性の *Cymbella turgidula* var. *nipponica* や *Fragilaria vaucheriae*、流水不定性の *Cocconeis placentula*、*Cymbella silesiaca*、*Eunotia pectinalis* var. *minor*、*Gomphonema parvulum* が5%前後産出する。このうち、*Fragilaria vaucheriae* は河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘、崩壊地、自然堤防、後背湿地などに特異的に出現することが多く、他の地域には認められない、あるいは出現しても主要でない中～下流性河川指標種群 (安藤, 1990) である。

珪群構成率である試料番号2は、貧塩不定性種 (少量の塩分であれば耐えられる種)、真+好酸性種～真+好アルカリ性種、流水不定性種が優占あるいは多産する。特に多産する種類は認められず、広域塩性種の *Rhopalodia gibberula*、流水不定性の *Cocconeis placentula*、*Cymbella naviculiformis*、*Cymbella silesiaca*、*Eunotia pectinalis* var. *minor*、*Frustulia*

表3 珪藻分析結果(1)

種類	生態性状		環境指標種	2地点			SD307南側		
	塙分	pH		1	2	3	3	5	12
Diploneis smithii (Breb.) Cleve	Euh-Meh		E2	-	-	-	-	-	1
Fragilaria brevistriata Grunow	Ogh-Meh	al-ii	l-ph	U	-	-	-	-	1
Gyrosigma nodiferum (Grun.) West	Ogh-Meh	al-ii	ind		-	2	-	-	-
Navicula capitata var. hungarica (Grun.) Ross	Ogh-Meh	al-ii	r-ph	U	-	-	-	2	-
Nitzschia frustulum (Kuetz.) Grunow	Ogh-Meh	al-ii	ind		-	-	-	-	2
Nitzschia levidens var. victoriae Grunow	Ogh-Meh	al-ii	ind	U	-	-	-	1	-
Nitzschia obtusa var. scalpelliformis Grunow	Ogh-Meh	al-ii	ind	S	-	1	-	-	-
Nitzschia palea (Kuetz.) Smith	Ogh-Meh	ind	S		4	-	-	3	1
Rhopalodia gibberula (Ehr.) O. Müller	Ogh-Meh	al-ii	ind		13	13	33	16	13
Achnanthes biorellii Germain	Ogh	ind	ind	unk	-	2	-	-	-
Achnanthes convergens H. Kobayasi	Ogh	ind	ind	r-ph	T	-	-	1	-
Achnanthes exigua Grunow	Ogh	ind	al-ii	ind	S	2	-	-	1
Achnanthes lanceolata (Breb.) Grunow	Ogh	ind	ind	r-ph	K, T	-	1	-	-
Achnanthes minutissima Kuetzing	Ogh	ind	al-ii	ind	U	-	-	1	2
Achnanthes oblongula Ostrup	Ogh	ind	ind	ind	T	-	-	-	1
Achnanthes oestrupii (Cle.) Hustedi	Ogh	hob-ac	l-ph			-	2	-	1
Achnanthes rostrata Ostrup	Ogh	ind	al-ii	r-ph	U	-	1	1	2
Achnanthes subhudsonis Hustedi	Ogh	ind	ind	r-ph	T	1	-	-	-
Achnanthes suchlandii Hustedi	Ogh	ind	ind	ind	T	-	-	-	2
Achnanthes spp.	Ogh	unk	unk		-	-	-	-	4
Amphipleura pellucida Kuetzing	Ogh	ind	al-ii	l-bi		-	1	-	-
Amphora affinis Kuetzing	Ogh	ind	al-ii	ind	U	8	1	1	3
Amphora pediculus (Kuetz.) Grunow	Ogh	ind	al-bi	ind	T	-	-	1	-
Anomooneis brachysira (Breb.) Grunow	Ogh	ind	ac-ii	l-ph	O, T	-	2	5	7
Anomooneis styriaca (Grun.) Hustedi	Ogh	ind	ac-ii	l-ph		-	2	-	2
Anomooneis vitrea (Grun.) Ross	Ogh	hob-ac	l-ph	T		-	-	1	-
Aulacoseira alpigena (Grun.) Krammer	Ogh	hob-ac	l-ph	N, U		5	-	-	1
Aulacoseira ambiguus (Grun.) Simonsen	Ogh	ind	al-ii	l-bi	N	6	4	-	3
Aulacoseira crassipunctata Krammer	Ogh	ind	ac-ii	l-ph		-	1	-	-
Aulacoseira italica (Ehr.) Simonsen	Ogh	ind	al-ii	l-ph	U	1	-	-	-
Caloneis aerophila Bock	Ogh	ind	al-ii	ind	RA	-	2	1	6
Caloneis bacillium (Grun.) Cleve	Ogh	ind	al-ii	r-ph	U	3	1	-	1
Caloneis hyalina Hustedi	Ogh	ind	ind	ind	RA	3	-	1	-
Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh	ind	ind	l-ph	RB	1	-	-	1
Caloneis molaris (Grun.) Krammer	Ogh	ind	ind	ind		-	-	1	-
Caloneis silicula (Ehr.) Cleve	Ogh	ind	al-ii	ind		2	-	1	2
Caloneis silicula var. minuta (Grun.) Cleve	Ogh	ind	al-ii	ind		3	1	-	4
Ceratoneis arcus Kuetzing	Ogh	hob	ind	r-bi	K, T	-	-	1	-
Ceratoneis arcus var. recta (Cle.) Krasske	Ogh	ind	ind	r-bi	T	-	-	3	-
Cocconeis piacentina (Ehr.) Cleve	Ogh	ind	al-ii	ind	U	-	7	9	2
Cocconeis placentula var. lineata (Ehr.) Cleve	Ogh	ind	al-ii	r-ph	T	1	-	-	2
Craticula cuspidata (Kuetz.) D.G. Mann	Ogh	ind	al-ii	ind	S	1	1	-	1
Craticula halophila (Grun. ex V. Heurck) D.G. Mann	Ogh	ind	al-ii	ind		1	-	-	-
Cymbella amphioxys (Kuetz.) Grunow	Ogh	ind	ac-ii	l-ph		-	-	16	8
Cymbella cuspisata Kuetzing	Ogh	ind	ind	ind		-	-	1	-
Cymbella gracilis (Ehr.) Kuetzing	Ogh	ind	ind	l-ph	T	-	3	4	-
Cymbella mesiana Cholnoky	Ogh	ind	al-bi	l-bi	O	2	-	-	5
Cymbella minutissima Hilse ex Rabh.	Ogh	ind	ind	r-ph	K, T	-	-	2	-
Cymbella naviculariformis Auerswald	Ogh	ind	ind	ind	O	1	7	-	1
Cymbella perpusilla A. Cleve	Ogh	hob-ac	l-ph			-	1	2	3
Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh	ind	ind	ind	T	13	16	12	9
Cymbella sinuata Gregory	Ogh	ind	ind	r-ph	K, T	1	1	6	-
Cymbella sinuata fo. antiqua (Grun.) Reimer	Ogh	ind	ind	l-ph		-	1	-	-
Cymbella subaequalis Grunow	Ogh	ind	al-ii	l-ph	O, T	-	-	2	1
Cymbella tumida (Breb. ex Kuetz.) V. Heurck	Ogh	ind	al-ii	ind	T	1	4	1	2
Cymbella tumida var. gracilis Hustedi	Ogh	ind	al-ii	r-ph	T	-	1	-	-
Cymbella turgidula Grunow	Ogh	ind	al-ii	r-ph	K, T	6	-	4	4
Cymbella turgidula var. nipponica Skvorizow	Ogh	ind	al-ii	r-ph	T	-	-	8	-
Cymbella spp.	Ogh	unk	unk			-	-	-	3
Diatomella hymalea (Lyng.) Heiberg	Ogh	hob	ind	r-bi	K	-	-	1	-
Diploneis finnica (Ehr.) Cleve	Ogh	ind	ac-ii	l-ph		-	1	1	-
Diploneis minuta Petersen	Ogh	ind	ind	ind	RI	-	1	-	-

表3 珪藻分析結果(2)

種類	生態性		環境指標種	2地点			SD307南側		
	鹽分	PH		1	2	3	3	5	12
Diploneis ovalis (Hilse) Cleve	Ogh-ind-al-il	ind		2	3	4	-	2	2
Diploneis parma Cleve	Ogh-ind	ind		1	-	-	-	-	1
Epithemia adnata (Kuetz.) Brebisson	Ogh-ind-al-bl	ind		-	1	-	-	-	-
Eunotia arcus var. bident Grunow	Ogh-ind-ac-il	l-ph		-	1	-	10	-	-
Eunotia bilunaris (Ehr.) Mills	Ogh-hob-ac-il	l-ph		-	1	-	6	-	-
Eunotia duplicoraphis H. Kobayasi	Ogh-hob-ac-il	l-ph		-	-	1	1	-	-
Eunotia exigua (Breb.) Grunow	Ogh-hob-ac-bl	l-ph	P	-	-	-	-	-	2
Eunotia fallax A. Cleve	Ogh-hob-ac-bl	ind	RA	-	-	1	-	-	-
Eunotia flexuosa (Breb.) Kuetzing	Ogh-hob-ac-il	l-ph	O	-	-	1	-	-	1
Eunotia formica Ehrenberg	Ogh-hob-ac-il	l-bl		-	-	1	-	-	-
Eunotia incisa W. Smith ex Gregory	Ogh-hob-ac-il	ind	O	-	6	3	-	-	4
Eunotia parallela Ehrenberg	Ogh-hob-ac-bl	ind		-	-	-	1	-	-
Eunotia pectinalis var. minor (Kuetz.) Rabh.	Ogh-hob-ac-il	ind	O	2	8	13	7	-	2
Eunotia praerupta Ehrenberg	Ogh-hob-ac-il	l-ph	RB, O, T	-	1	1	-	-	-
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	1	-	-	1
Fragilaria bicapitata A. Mayer	Ogh-bl	ind	l-bl	-	1	-	-	-	-
Fragilaria capucina Desmazières	Ogh-ind-al-il	ind	T	-	2	1	4	-	3
Fragilaria capucina var. gracilis (Oestr.) Hust.	Ogh-ind-al-il	l-ph	T	-	1	-	1	-	-
Fragilaria construens (Ehr.) Grunow	Ogh-ind-al-il	l-ph	U	7	-	-	-	-	-
Fragilaria construens fo. ventier (Ehr.) Hust.	Ogh-ind-al-il	l-ph	S	1	1	-	-	-	1
Fragilaria exigua Grunow	Ogh-ind	ind	l-ph	1	2	-	1	2	8
Fragilaria planata Ehrenberg	Ogh-ind-al-il	l-ph	S	1	-	-	-	-	-
Fragilaria planata var. lancettula (Schum.) Hust.	Ogh-ind-al-il	ind	S	-	2	3	-	-	1
Fragilaria pseudogigantii H. Kob. & Idei	Ogh-unk	unk	r-ph	S	-	-	1	-	-
Fragilaria ulna (Nitzsch) Lange-Bertalot	Ogh-ind-al-il	ind		-	3	2	-	-	-
Fragilaria ulna var. arcus (Kuetz.) Lange-B.	Ogh-ind-al-il	l-ph	T	-	-	-	1	-	-
Fragilaria vaucheriae (Kuetz.) Petersen	Ogh-ind-al-il	l-ph	K, T	1	1	9	-	2	4
Frustulia rhomboides var. amphileuroides (Grun.) De Toni	Ogh-hob-ac-il	l-ph		-	-	1	1	3	-
Frustulia rhomboides var. saxonica (Rabh.) De Toni	Ogh-hob-ac-il	l-ph	O	-	3	1	12	1	4
Frustulia rhomboides var. saxonica fo. capitata (A. Mayer) Hust.	Ogh-unk	unk	unk	RB	-	1	1	3	-
Frustulia vulgaris (Thwait.) De Toni	Ogh-ind-al-il	ind	U	1	8	2	-	-	1
Frustulia weinholdii Hustedt	Ogh-ind-al-il	ind		-	1	-	-	-	-
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	1	1	-	-
Gomphonema angustum Agardh	Ogh-ind-al-il	ind		-	-	-	-	-	1
Gomphonema clevii Fricke	Ogh-ind-al-bl	r-ph	T	-	-	-	1	1	-
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind-al-il	l-ph	O, U	-	-	2	4	2	-
Gomphonema helveticae Brum	Ogh-unk	ind	r-ph	T	-	1	-	-	1
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	6	10	9	11	12
Gomphonema productum (Grun.) Lange-B. & Reichardt	Ogh-ind-al-il	ind		1	-	-	-	-	-
Gomphonema pumilum (Grun.) Reichardt & Lange-B.	Ogh-ind-al-il	ind		-	4	2	-	-	2
Gomphonema sphaerophorum Ehrenberg	Ogh-ind-al-il	ind	T	-	1	-	1	1	-
Gomphonema truncatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	T	-	-	1	-	-
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	1	-	-	5
Gyrosigma scalpoides (Rabh.) Cleve	Ogh-ind-al-il	r-ph		-	1	1	-	-	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind-al-il	ind	RA, U	8	1	1	-	1	1
Hantzschia vivax (W. Smith) Prengelio	Ogh-ind-al-il	ind		-	-	-	1	-	-
Meridion circulare var. constrictum (Ralfs) V.H.	Ogh-ind-al-il	r-bl	K, T	-	1	1	-	-	-
Navicula angusta Grunow	Ogh-ind-ac-il	ind	T	-	1	-	1	-	-
Navicula bryophila Boye-Petersen	Ogh-ind-al-il	ind	RI	1	-	-	-	2	-
Navicula confervacea (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind-al-bl	ind	RB, S	1	-	-	-	-	-
Navicula constans var. symmetrica Hustedt	Ogh-unk	unk	unk	1	-	-	-	-	-
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind-al-il	ind	RA, T	-	-	-	-	1	4
Navicula contenta fo. biceps (Arnett) Hustedt	Ogh-ind-al-il	ind	RA, T	-	1	-	-	-	-
Navicula cryptocephala Kuetzing	Ogh-ind-al-il	ind	U	1	-	-	-	-	1
Navicula cryptotenella Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	T	1	2	-	1	-
Navicula elginiensis (Greg.) Ralfs	Ogh-ind-al-il	ind	O, U	1	-	-	-	-	-
Navicula elginiensis var. cuneata H. Kobayasi	Ogh-ind-al-il	ind		1	-	-	-	-	-
Navicula elginiensis var. neglecta (Krass.) Pat.	Ogh-ind-al-il	r-ph	U	55	6	2	2	29	3
Navicula hasta var. gracilis Skvorzow	Ogh-ind-al-il	l-ph		-	1	1	-	-	1
Navicula lapidosa Krasske	Ogh-ind	ind	RI	1	-	1	-	-	2
Navicula mobilensis var. minor Patrick	Ogh-ind-al-il	ind		-	1	1	-	-	-
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind-al-il	ind	RA, S	-	2	-	1	-	-

表3 珊藻分析結果(3)

種類	生態性			環境指標種	2地点			SD307南側		
	塗分	pH	流水		1	2	3	3	5	12
<i>Navicula placenta</i> Ehrenberg	Ogb-ind-al-ii	Ind	R1	-	-	-	1	-	-	-
<i>Navicula pseudobryophila</i> Hustedt	Ogb-ind-ind	Ind	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Navicula pseudolanceolata</i> Lange-Bertalot	Ogb-ind-al-ii	Ind	U	-	3	-	-	-	-	3
<i>Navicula pseudoscutiformis</i> Hustedt	Ogb-ind-al-ii	Ind	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Navicula radiosa</i> Kuetzing	Ogb-ind-ind	Ind	U	-	2	1	-	-	-	-
<i>Navicula senjoensis</i> H.Kobayasi	Ogb-unk-unk	unk	-	1	-	-	-	-	-	5
<i>Navicula subcostulata</i> Hustedt	Ogb-ind-ind	Ind	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Navicula tokyoensis</i> H.Kobayasi	Ogb-ind-ind	I-ph	R1	-	1	-	-	-	-	-
<i>Navicula venerabilis</i> Bohn & Hellerman	Ogb-ind-al-ii	I-ph	-	3	1	-	-	-	-	-
<i>Navicula viridula</i> (Kuetz.)Kuetzing	Ogb-ind-al-ii	r-ph	K, U	-	-	-	-	3	-	-
<i>Navicula viridula</i> var. <i>rostellata</i> (Kuetz.)Cleve	Ogb-ind-al-ii	r-ph	K, U	-	-	-	-	-	-	2
<i>Navicula</i> spp.	Ogb-unk-unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	2
<i>Neidium affine</i> (Ehr.)Cleve	Ogb-hob-ac-ii	I-bi	-	-	-	-	-	3	-	-
<i>Neidium affine</i> var. <i>longiceps</i> (Greg.)Cleve	Ogb-hob-ac-ii	I-bi	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Neidium alpinum</i> Hustedt	Ogb-unk-unk	Ind	RA	-	-	-	-	3	1	-
<i>Neidium ampliatum</i> (Ehr.)Krammer	Ogb-ind-ind	I-ph	-	1	3	13	6	-	-	-
<i>Neidium bisulcatum</i> (Lagerst.)Cleve	Ogb-ind-ac-ii	Ind	R1	1	-	1	-	-	-	1
<i>Neidium hercynicum</i> A.Mayer	Ogb-ind-ind	Ind	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Neidium iridis</i> (Ehr.)Cleve	Ogb-hob-ac-ii	I-bi	O	-	1	-	1	-	-	-
<i>Neidium iridis</i> var. <i>amphigomphus</i> (Ehr.)V.Heurck	Ogb-hob-ac-ii	I-bi	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Nitzschia amphibia</i> Grunow	Ogb-ind-al-bi	Ind	S	17	-	-	-	1	-	-
<i>Nitzschia brevissima</i> Grunow	Ogb-ind-al-ii	Ind	RB, U	-	1	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia fonticola</i> Grunow	Ogb-ind-al-ii	Ind	U	-	1	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia</i> spp.	Ogb-unk-unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	2
<i>Pinnularia acrosphaeria</i> W.Smith	Ogb-ind-al-ii	I-ph	O	2	-	-	1	4	-	-
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogb-ind-ind	Ind	RA	-	2	1	-	-	-	1
<i>Pinnularia brauni</i> (Grun.)Cleve	Ogb-hob-ac-bi	I-ph	-	-	-	2	2	-	-	-
<i>Pinnularia brauni</i> var. <i>amphicephala</i> (A.Mayer)Hust.	Ogb-hob-ac-bi	I-ph	S	1	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia brebissonii</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogb-ind-ind	Ind	U	-	-	-	-	-	-	2
<i>Pinnularia brevicostata</i> Cleve	Ogb-ind-ac-ii	Ind	-	-	1	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia divergens</i> W.Smith	Ogb-hob-ac-ii	I-ph	-	-	-	1	1	2	-	-
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ogb-ind-ac-ii	Ind	O	-	2	1	10	5	1	-
<i>Pinnularia gibba</i> var. <i>linearis</i> Hustedt	Ogb-hob-ac-ii	Ind	-	-	-	-	-	5	-	-
<i>Pinnularia gracilis</i> Hustedt	Ogb-hob-ac-ii	Ind	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Pinnularia graciloides</i> Hustedt	Ogb-hob-ac-ii	Ind	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Pinnularia hemiptera</i> (Kuetz.)Cleve	Ogb-hob-ind	I-ph	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia imperatrix</i> Mills	Ogb-hob-ac-ii	I-ph	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia julma</i> Kramer & Metzeltein	Ogb-unk-unk	unk	-	3	-	2	-	-	-	-
<i>Pinnularia mesolepta</i> (Ehr.)W.Smith	Ogb-ind-ind	Ind	S	1	3	1	3	1	-	-
<i>Pinnularia microstauron</i> (Ehr.)Cleve	Ogb-ind-ac-ii	Ind	S	1	-	-	2	1	1	-
<i>Pinnularia neomajor</i> Krammer	Ogb-ind-ac-ii	I-bi	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia nodosa</i> Ehrenberg	Ogb-hob-ac-ii	I-ph	O	4	-	-	-	3	-	-
<i>Pinnularia pisciculus</i> Ehrenberg	Ogb-hob-ac-ii	Ind	-	-	-	-	3	2	1	-
<i>Pinnularia rupestris</i> Hantzsch	Ogb-hob-ac-ii	Ind	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Pinnularia schoenfelderi</i> Krammer	Ogb-ind-ind	Ind	R1	8	5	2	6	8	5	-
<i>Pinnularia Schroederii</i> (Gust.)Krammer	Ogb-ind-ind	Ind	R1	2	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia stomatophora</i> (Grun.)Cleve	Ogb-ind-ac-ii	I-ph	-	1	2	1	-	-	-	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogb-ind-ac-ii	Ind	RB, S	5	1	-	-	-	-	1
<i>Pinnularia substomatophora</i> Hustedt	Ogb-hob-ac-ii	I-ph	-	-	2	2	-	1	-	-
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.)Ehrenberg	Ogb-ind-ind	Ind	O	-	1	4	4	4	-	5
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogb-unk-unk	unk	-	-	1	-	-	1	-	-
<i>Rholosphenia abbreviata</i> (Ag.)Lange-B.	Ogb-hil-al-ii	r-ph	K, T	-	-	4	-	-	-	-
<i>Rhopalodia gibba</i> (Ehr.)O.Muller	Ogb-ind-al-ii	Ind	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Rhopalodia quisumburgiana</i> Skvorzow	Ogb-hil-al-ii	Ind	-	-	2	-	-	3	1	-
<i>Sellaphora bacillum</i> (Ehr.)Mann	Ogb-ind-al-ii	Ind	U	-	1	-	-	-	-	-
<i>Sellaphora laevissima</i> (Kuetz.)Mann	Ogb-ind-ind	Ind	-	-	-	2	2	4	-	-
<i>Sellaphora pupula</i> (Kuetz.)Mereschkowsky	Ogb-ind-ind	Ind	S	3	3	2	5	3	-	-
<i>Sellaphora pupula</i> fo. <i>capitata</i> (Skvorzow & Mayer)	Ogb-ind-ind	Ind	U	-	-	-	1	1	-	-
<i>Sellaphora rectangularis</i> (Greg.)Lange-B. & Met.	Ogb-ind-ind	Ind	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis anceps</i> Ehrenberg	Ogb-ind-ind	Ind	T	-	-	-	2	3	1	-
<i>Stauroneis japonica</i> H.Kobayasi	Ogb-unk-unk	unk	T	-	1	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis lauenburgiana</i> Hustedt	Ogb-ind-al-ii	Ind	-	-	-	-	-	1	-	-

表3 珪藻分析結果(4)

種類	生態性			環境指標種	2地点			SD307南側		
	塩分	pH	流水		1	2	3	3	5	12
<i>Stauroeis lauenburgiana</i> fo. <i>angulata</i> Hustedt	Ogh-ind	al-ii	ind	-	-	1	-	-	-	-
<i>Stauroeis legumen</i> (Ehr.) Kuetzing	Ogh-hob	ac-ii	ind	-	1	-	-	-	-	-
<i>Stauroeis legumen</i> var. <i>nipponica</i> (Skv.) H. Kobayasi	Ogh-hob	ac-ii	l-ph	-	2	-	-	-	-	-
<i>Stauroeis nobilis</i> fo. <i>denseserrata</i> H. Kobayasi	Ogh-hob	ac-ii	l-ph	-	-	-	2	-	-	-
<i>Stauroeis obtusa</i> Lagerstedti	Ogh-ind	ind	RB	-	1	-	-	-	3	-
<i>Stauroeis phoenixenteron</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	al-ii	l-ph	0	-	-	2	3	-	-
<i>Stauroeis smithii</i> Grunow	Ogh-ind	al-ii	r-ph	U	-	-	1	1	-	-
<i>Stauroeis tenera</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	RB	-	-	2	-	-	2	-
<i>Surirella angustia</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-ii	r-bi	U	1	1	-	-	-	-
<i>Surirella bohemica</i> Maly	Ogh-ind	ind	unk	-	1	-	-	-	-	-
<i>Surirella linearis</i> W. Smith	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	1	1	-	-
<i>Surirella robusta</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ind	l-bi	-	-	-	1	-	-	-
<i>Synedra inaequalis</i> H. Kobayasi	Ogh-ind	al-ii	r-bi	J, K, T	-	-	1	-	-	-
<i>Tabellaria flocculosa</i> (Roth) Kuetzing	Ogh-hob	ac-ii	l-bi	T	-	4	-	-	3	-
海水生種合計					0	0	0	0	0	0
海水～汽水生種合計					0	0	0	0	0	1
汽水生種合計					0	0	0	0	0	0
淡水～汽水生種合計					17	16	33	16	20	10
淡水生種合計					192	198	176	198	197	196
珪藻化石数					209	214	209	214	217	207

凡例

H.R. : 塩分濃度に対する適応性
 Ogh-Meh : 波水～汽水生種
 Ogh-hii : 貧塩好塩性種
 Ogh-ind : 貧塩不定性種
 Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種
 Ogh-unk : 貧塩不明種

pH: 水素イオン濃度に対する適応性
 al-bi : 真アルカリ性種
 al-ii : 好アルカリ性種
 ind : pH不定性種
 ac-ii : 好酸性種
 ac-bi : 真酸性種
 unk : pH不明種

C.R. : 流水に対する適応性
 l-bi : 止水性種
 l-ph : 好止水性種
 ind : 流水不定性種
 r-ph : 好流水性種
 r-bi : 真流水性種
 unk : 流水不明種

環境指標種群

J: 上流域河川指標種, K: 中～下流域河川指標種, N: 濱沼河川指標種, 0: 沼澤湿地付着生種 (以上は安藤, 1990)

S: 好汚濁性種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種 (以上は Asai, K. & Watanabe, T., 1986)

R: 陸生珪藻 (RA:A群, RB:B群, RI群, 伊藤・堀内, 1991)

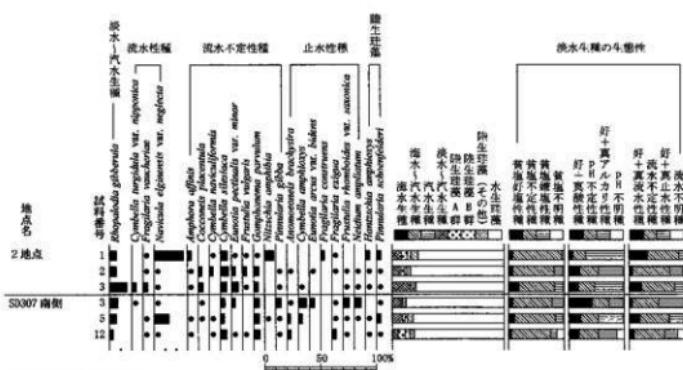


図3 主要硅藻化石群集

汽水～淡水生種度分布：各種度出率・先形度出率は全体基数、淡水生種の先形性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は3%未満の試料について検出した種数を示す。

vulgaris、*Gomphonema parvulum* が5%前後産出する。このうち、*Cymbella naviculiformis* と *Eunotia pectinalis* var. *minor* は沼よりも浅く水深が1m前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や更に水深の浅い湿地で優勢な出現の見られる沼沢湿地付着生種群（安藤、1990）である。

畔の上位層である試料番号1は、貧塩不定性種、真+好アルカリ性種（アルカリ性の水域に生育する種）、流水不定性種（流水にも止水にも生育する種）、真+好流水性種が優占あるいは多産する。産出種の特徴は、好流水性の *Navicula elginensis* var. *neglecta* が30%と優占し、塩分に対する適応性が高く汽水域～淡水域まで生育する広域塩性種の *Rhopalodia gibberula*、流水不定性の *Amphora affinis*、*Cymbella silesiaca*、*Nitzschia amphibia* が5～10%産出することである。このうち、*Nitzschia amphibia* は有機汚濁の進んだ富栄養水域に一般的な好汚濁性種（Asai,K. and Watanabe,T., 1995）である。

・ S D 307

試料番号3は、貧塩不定性種、真+好酸性種（酸性水域に生育する種）、流水不定性種と真+好止水性種（止水域に生育する種）が優占、あるいは多産する。特に産出の目立つ種類は見られず、広域塩性種の *Rhopalodia gibberula*、流水不定性の *Cymbella silesiaca*、*Eunotia pectinalis* var. *minor*、*Frustulia vulgaris*、*Gomphonema parvulum*、*Pinnularia gibba*、好止水性種である *Cymbella amphioxys*、*Eunotia arcus* var. *bidentata*、*Frustulia rhomboides* var. *saxonica*、*Neidium ampliatum* が5%前後産出する。このうち、*Eunotia pectinalis* var. *minor*、*Pinnularia gibba*、*Frustulia rhomboides* var. *saxonica* は沼沢湿地付着生種群である。

試料番号5は、貧塩不定性種、真+好酸性種～真+好アルカリ性種、流水不定性種が優占あるいは多産する。産出種の特徴は、好流水性の *Navicula elginensis* var. *neglecta* が約15%と多産し、広域塩性種の *Rhopalodia gibberula*、流水不定性の *Cymbella silesiaca* や *Gomphonema parvulum*、好止水性の *Anomoeoneis brachysira* や *Cymbella amphioxys* が5%前後産出する。

試料番号12は、貧塩不定性種、真+好酸性種～真+好アルカリ性種、流水不定性種が優占、あるいは高率を占める。

表4 B地区排水路内の珪藻分析結果

種類	生長性			環境指標種	排水路 覆土 2
	季分	pH	淡水		
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.) Müller	Ogh-Meh	a1-11	Ind		2
<i>Achaeuttites crenulata</i> Grunow	Ogh-ind	a1-b1	1-ph	T	1
<i>Craticula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	Ind	2
<i>Cymbella sinuata</i> Gregory	Ogh-ind	ind	r-ph	K, T	1
<i>Cymbella tumida</i> (Grev. ex Kuetz.) V. Heurck	Ogh-ind	a1-11	ind	T	1
<i>Diploneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		5
<i>Fragilaria ulna</i> (Nitzsch) Lange-Bertalot	Ogh-ind	a1-11	ind		1
<i>Fragilaria</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		4
<i>Gomphonema parvulum</i> var. <i>lagenula</i> (Kuetzing) Frenguelli	Ogh-ind	ind	r-ph	S	1
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	a1-11	Ind	RA, U	4
<i>Neidium ampliatum</i> (Bhr.) Kramer	Ogh-ind	ind	1-ph		2
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	Ind	RA	1
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-11	ind	O	1
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		8
海水生種合計					0
海水～汽水生種合計					0
汽水生種合計					0
海水～汽水生種合計					2
淡水生種合計					32
珪藻化石总数					34

凡例

H.R.: 塩分濃度に対する適応性	pH: 水素イオン濃度に対する適応性	C.R.: 流水に対する適応性
Ogh-Meh: 淡水生種～汽水生種	al-b1: 真7.0付近種	1-ph: 好止水性種
Ogh-ind: 貧塩不定性種	al-11: 好7.0付近種	ind: 流水不定性種
Ogh-unk: 貧塩不明確	ind: pH不定性種	r-ph: 好流水性種
	ac-11: 好酸性種	unk: 流水不明確
	unk: pH不明確	

環境指標種

K: 中～下流性河川指標種	0: 沼澤湿地付着生種	(以上は安藤、1990)
R: 好汚濁性種	U: 広適性種	T: 好流水性種 (以上はAsai, K. and Watanabe, T., 1995)
R: 隆生珪藻	RA: 隆生	RA: 伊藤・塙内、1991)

特に産出の目立つ種類は見られず、広域塩性種の *Rhopalodia gibberula*、流水不定性の *Cymbella silesiaca*、*Gomphonema parvulum*、好止水性種である *Fragilaria exigua*、が5%前後産出する。

(2) 調査区北東部(B地区)

結果を表4に示す。排水路覆土の試料番号2は、検出された珪藻化石が34個体と非常に少ない。これら検出された珪藻化石の多くは壊れたり、溶解している。少ないながらも産出した種類には、流水域に特徴的に産出する流水指標種や、陸上の好気的環境に耐性のある陸生珪藻など、様々な環境を指標する種類が混在している。

3-2. 花粉分析

調査区南西部の花粉分析結果を表5・図4に示す。組成は、2地点とSD307とともに類似する。以下に、地点別に産状を述べる。

・2地点

草本花粉の割合が高く、特に試料番号1では高率である。木本花粉は、3試料ともマツ属の割合が非常に高い。その他、試料番号1ではスギ属が、試料番号2・3ではハンノキ属がやや多い。草本花粉ではイネ科の割合が高く、上位になるほど顕著である。その他、カヤツリグサ科、ヨモギ属などの草本類や、栽培種であるソバ属も検出される。

・SD307南側

2地点と同様に草本花粉の割合が高く、シダ類胞子も多い。また、花粉化石の保存状態は全体的に悪い。木本花粉では2地点と同様、マツ属の割合が非常に高い。草本花粉ではイネ科やカヤツリグサ科の割合が高いものの、シダ類胞子の検出個数が多いため、全体としては減少したよう見える。

3-3. 植物珪酸体分析

(1) 調査区南西部

結果を表6、図5に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。以下に、地点別に産状を述べる。

表5 2地点・SD307・SK02の花粉分析結果

種類	試料番号	1	2	3	SD307南側	5	SK02
		1	2	3	3	5	3
木本花粉							
マツ属		1	-	-	-	-	-
クマザサ		1	6	4	4	8	23
ツガ属		2	6	4	4	8	2
トウヒ属		-	-	-	1	1	2
マツ属	148	147	147	86	73	65	-
クマザサ・マツ属		36	4	5	1	2	2
スギ属		1	-	10	2	-	5
イネ科・イヌガヤ科・ヒノキ科		1	-	1	-	-	1
ヤナギ属		1	-	2	-	1	2
クマミズク		2	-	1	1	3	-
ババノキ属		-	1	2	6	6	-
ハンノキ属		12	76	67	2	4	5
ブナ属		2	3	2	21	5	2
コナラ属・コナラ系属		13	8	18	7	3	-
コナラ属・アカガシ系属		-	-	-	-	-	-
クリ属		1	-	-	1	4	1
ニレ属・ケヤキ属		2	2	-	5	1	-
ツノクチ・ムクノキ属		-	1	1	-	1	-
ウルシ属		-	-	1	-	-	-
カエデ属		-	-	1	-	-	-
シバキ属		-	-	1	1	-	-
フジ属		-	-	1	-	1	-
ツツジ属		-	-	2	-	-	-
イボタノキ属		-	1	-	-	-	-
リコガム		-	-	1	-	-	-
草本花粉							
サジョモダカ属		-	-	-	-	1	-
イネ科	497	217	139	194	135	118	-
カヤツリグサ科	15	9	26	329	30	9	-
ナシエタリ属・ウナギナツカミ属	-	-	1	-	3	1	-
シバ属	-	-	2	5	4	15	-
カザケ科	2	-	-	-	-	2	-
ナデシコ科	-	-	-	-	1	-	-
キントクイ属	-	-	-	-	1	-	-
キンボウゲ科	-	-	-	-	1	-	-
タケニグサ属	-	-	-	-	2	-	-
アブナラ科	7	2	2	-	-	-	-
シロツメクサ属	-	-	-	-	1	-	-
フウロソウ属	-	-	-	-	2	-	-
アリノトウガサ属	-	-	2	74	30	5	-
オミナエシ属	-	-	9	21	18	4	-
イネ科	14	2	6	2	4	6	-
キク科	5	-	5	26	21	18	-
タンポポ科	-	-	-	-	-	-	-
不明花粉	-	1	14	1	-	-	-
シダ類		-	-	-	12	-	-
シダ類胞子	75	33	109	414	481	469	-
合計							
木本花粉		222	252	269	158	144	103
草本花粉		537	231	195	662	240	170
不明花粉		2	1	1	44	1	0
シダ類胞子	75	33	109	426	481	469	-
総計(不明を除く)	R34	516	563	1250	878	751	-

木本花粉

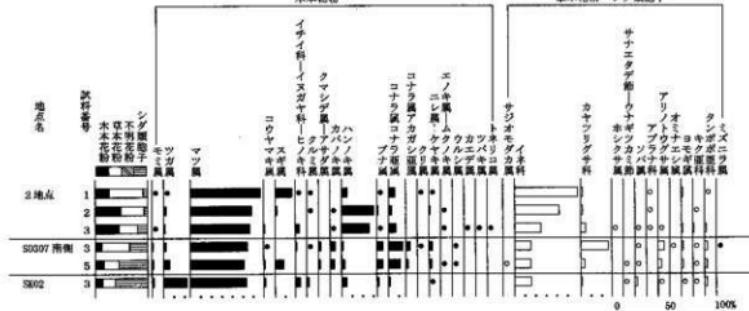


図4 2地点・SD307・SK02の主要花粉化石群集

出現率は、木本花粉は木本花粉化群数、草本花粉・シダ類胞子は絶対数より不明花粉を除く数を基準として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

表6 2地点・SD307の植物珪酸体分析結果

種類	地点名	2地点		SD307南側		
		試料番号	1	2	3	4
イネ科葉部短細胞珪酸体						
イネ族イネ属		93	137	40	14	21
キビ族チゴザ属		1	-	1	2	2
タケ亜科		22	25	23	17	14
ヨシ属		8	17	88	51	51
ウシクサ族コブナギサ属		1	3	4	7	10
ウシクサ族ススキ属		26	34	41	30	26
イチゴツナギ亜科		6	8	9	13	8
不明キビ型		40	44	54	44	36
不明ヒゲバ型		28	33	21	15	18
不明ダンチク型		41	32	30	30	29
イネ科葉身機動細胞珪酸体						
イネ族イネ属		77	55	16	26	30
タケ亜科		4	4	16	21	18
ヨシ属		-	5	31	20	32
ウシクサ族		21	25	30	41	38
不明		16	17	23	39	27
合計						
イネ科葉部短細胞珪酸体		266	333	311	223	215
イネ科葉身機動細胞珪酸体		118	106	116	147	145
総計		384	439	427	370	360
組織片						
イネ属頸節珪酸体		10	14	-	1	4
イネ属短細胞列		13	46	12	4	8
イネ属機動細胞列		-	2	-	-	-

・2地点

各試料から栽培植物のイネ属が検出され、特に畔の上位層である試料番号1や畔野穀成土の試料番号2で産出が目立つ。この他に、タケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出される。区画溝の埋積物である試料番号3ではヨシ属やウシクサ族の産出が目立つが、試料番号1・2ではヨシ属の割合が低下し、イネ属とともにタケ亜科やウシクサ族の産出が目立つ。

・SD307南側

試料番号5(底部)・3(3A層)はヨシ属をはじめとして、イネ属やタケ亜科、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められ、同様な産状である。また、2地点と比較すると、イネ属とヨシ属の産状を除いて、近い産状である。

(2) 調査区北東部

結果を表7、図6・7に示す。以下に、各地点毎に産状を述べる。

Loc.1

各試料からは、植物珪酸体が検出される。保存状態は、試料番号1・2が良好であるが、試料番号3・4・5では悪く表面に多数の小孔(溶食痕)が見られる。

試料番号5(③h層)・4(③g層)・3(③a層下部)では、タケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などがわずかに検出される。また、試料番号3では、栽培植物のイネ属もわずかに認められる。試料番号2(③a層上部)・1(②f層)でも同様な種類が認められるが、イネ属の産出が目立つ。また、稚穂に形成されるイネ属頸節珪酸体や葉部に形成される短細胞列も、わずかに認められる。

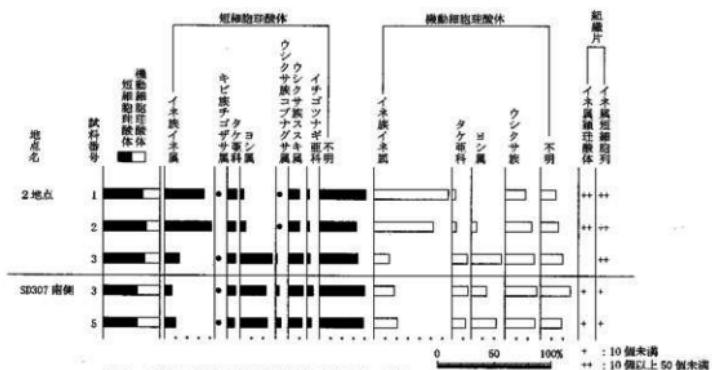


図5 2地点・SD307の植物珪酸体群集と組織片の産状

尚記載は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基準として百分率で算出した。なお、●は1%未満の種類を示す。また、組織片の産状を後出個数により+、++の記号で示す。

Loc.2

各試料からは植物珪酸体が検出され、試料番号2で保存状態が良好であるが、試料番号3では悪い。

試料番号3 (SD116埋積上) では、タケア科、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギア科などが検出され、ヨシ属とウシクサ族の産出が目立つ。また、イネ属の機動細胞珪酸体も、わずかに認められる。上位の試料番号2 (③b層) でも同様

な種類が認められ、イネ属

短細胞もわずかに検出される。

Loc.3

植物珪酸体の保存状態は、試料番号1で良好であるが、試料番号2では悪い。

試料番号2 (③d層:畦畔?) では、ヨシ属、ウシクサ族がわずかに検出されるに過ぎない。上位の試料番号1 (③b層) でも同様な種類が認められるが、ヨシ属の産出が目立つ。また、イネ属も認められる。

Loc.4

試料番号1 (③b層) では、植物珪酸体の保存状態が良好である。タケア科、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギア科などが検出され、ヨシ属とウシクサ族の産出が目立つ。また、イネ属も認められ、特に機動細胞珪酸体の産出が目立つ。

排水路覆土

試料番号2では、植物珪酸体

表7 B地区各地点の植物珪酸体分析結果

種類	Loc.1					Loc.2			Loc.3		Loc.4		排水路 覆土	小計
	1	2	3	4	5	2	3	1	2	1	2	1	2	
イネ科葉部短細胞珪酸体														
イネ属イネ属	52	10	-	-	-	14	-	9	-	11	2	-	-	-
キビ族チゴザサ属	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
タケア科	15	1	-	-	-	3	13	6	-	4	4	1	-	-
ヨシ属	37	81	9	14	6	81	114	107	9	69	150	116	16	-
ウシクサ族コブナグサ属	5	3	-	-	-	4	4	7	-	6	3	2	1	-
ウシクサ族ススキ属	38	44	3	2	-	34	18	62	2	38	18	39	4	-
イチゴツナギア科	6	2	-	1	-	5	4	5	-	12	5	3	2	-
不明	38	40	10	3	1	38	29	39	-	33	20	34	12	-
不明イシバ型	12	14	2	1	-	23	22	9	-	21	11	12	7	-
不明グンチャク型	24	22	2	-	-	31	16	23	-	20	10	9	5	-
イネ科葉部機動細胞珪酸体														
イネ属イネ属	60	25	1	-	-	18	7	13	-	39	12	1	1	-
タケア科	11	10	2	2	3	5	10	16	-	9	9	1	2	-
ヨシ属	10	31	10	4	5	17	42	41	14	20	51	64	15	-
ウシクサ族	22	41	9	3	-	35	30	46	10	60	24	44	6	-
シバ属	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明	9	23	3	2	-	31	23	33	-	37	19	10	2	-
合計														
イネ科葉部短細胞珪酸体	228	217	26	21	7	233	220	268	11	214	223	216	47	-
イネ科葉部機動細胞珪酸体	104	130	25	11	8	106	112	149	24	165	115	120	26	-
總計	332	347	51	32	15	339	332	417	35	379	338	336	73	-
組織片														
イネ科葉部珪酸体	7	4	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-
イネ属珪酸体	3	3	-	-	-	3	-	2	-	2	-	-	-	-

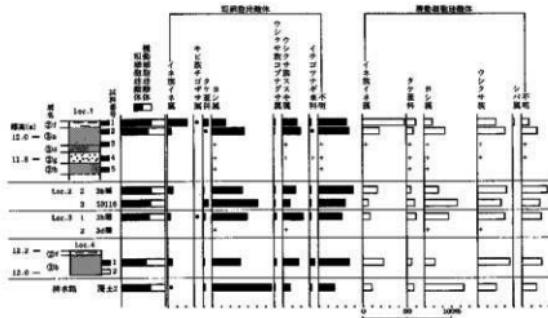


図6 B地区各地点の植物珪酸体分析結果
出率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉部機動細胞珪酸体の総数を百分率で算出した。
なお、中には未分類の種類。これはイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉部機動細胞珪酸体で100個未満で検出された種類を示す。

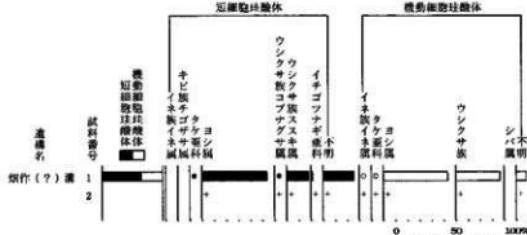


図7 畦作(?)層の植物珪酸体組成
出率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉部機動細胞珪酸体の総数を百分率として算出した。
なお、○●は1%未満の種類。+はイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉部機動細胞珪酸体で100個未満で検出された種類を示す。

の保存状態が悪い。ヨシ属とウシクサ族の産出が目立ち、タケ本科やイチゴツナギア科も検出される。また、イネ属も認められる。

・小溝

植物珪酸体の保存状態は、両試料で悪い。いずれも、イネ属が認められるものの、検出個数はわずかである。また、ヨシ属とウシクサ族の産出が目立つ。

3-4. 軟X線写真観察

調査区南西部の1地点の軟X線写真を図版6・7に示す。本地点の堆積物は、上位より、褐色泥混じり粗粒～中粒砂、褐灰色泥混じり細粒砂、黒褐～暗褐色細粒砂質シルト、黄褐灰色微粒～細粒砂の各層に区分される。図版6の写真は褐色泥混じり粗粒・中粒砂層から黒褐～暗褐色細粒砂質シルト層最上部、図版7の写真がその下位の堆積物に相当する。以下に、下位より各層の堆積構造について述べる。

明褐色微粒砂混じり細粒砂層（⑥層）：堆積物は比較的淘汰が良く、平行葉理が発達する。平行葉理は上位層から統一され、縦方向の植物根の擾乱作用により寸断する部分がある。上部の平行葉理は変形している。この変形は、上位層からの連続するロード構造である。

黒褐色細粒砂質シルト層（C・H層）：本層は2回の変形を受けている。下位の変形は本層下部から中上部にかけての変形で、本層の下位層で認められた変形構造に連続するものである。下部は下位層との間で生じたロード構造、その上位には堆積物の流動で生じたフレーム構造が認められる。堆積構造は変形しているものの、本層準で認められる縦方向の植物根は変形していない。これは本植物根が変形後のものであることを示す。また、本植物根の形状は栽培種のイネの植物根に近似する。上位の変形は、このフレーム構造直上の下に凸な層理面より上位で認められる。この層準より上位では、本層の上位層からの荷重によるロード構造が発達する。このように本層の構造は変形しているものの、生物擾乱構造も認められる。

褐灰色泥混じり細粒砂層（A層）：本層の構造も変形している。この変形は下位層から連続するものであり、下部がロード構造、上部が堆積物の流動によるフレーム構造である。本層中の植物根は、この変形の影響を多少なりとも受けている。また、変形する前の構造としては生物擾乱作用が及んでいたことが窺える。

褐色中粒砂混じりシルト質微粒砂層：著しい擾乱作用の影響を受ける。ペッド状の構造が認められる。細い植物根と太い植物根が認められる。太い植物根は樹木や大型の草本植物に由来する可能性がある。

4. 考 察

4-1. 調査区南西部

(1) 溝周辺の土地利用状況

SD307溝跡周辺の低地堆積物は、先述したように明褐色微粒砂混じり細粒砂層（⑥層）、黒褐色細粒砂質シルト層（C・H層）、褐灰色泥混じり細粒砂層（A層）、褐色中粒砂混じりシルト質微粒砂層（①層）の4つの層に区分される。ここでは、上記した各分析結果に基づいて、各層の成因や堆積時・後の環境や土地利用状況について検討する。

発掘調査底面で確認された⑥層は淘汰の良い明褐色微粒砂混じり細粒砂層からなる。本堆積物の構造は肉眼では塊状に見えたが、軟X線写真撮影では平行葉理構造が確認された。また、本層は調査区の広い範囲に連続して分布している。これらことから、本層は河川の氾濫などにより広範囲に堆積物とみられる。本堆積物中には、植生などの生物擾乱の影響はほとんど認められなかったが、上位層との層界が変形しているものの明瞭であったこと、層界付近に中粒砂のブロック土が連続して堆積していることから、堆積後に氾濫などの影響を受け、本堆積物上部が浸食されていることが考えられる。このように本層およびその後の氾濫堆積は、調査区内の地理的条件を大きく変化させる契機となったとみられ、下記する後背湿地性堆積物の堆積を促進することになったと思われる。

ところで、本層上部では平行兼理構造が変形しており、その変形構造は上位の黒褐色細粒砂質シルト層まで連続していた。この変形構造は、上位層との層界付近で渦巻き状に流動したロード構造を呈し、その上部の縱方向に粒子が移動したフレーム構造に連続している。調査断面においてもこのうちのロード構造は広範囲に認められた。このような変形構造の原因としては、地震動による変形が推定される。地震の発生層準は下記するH層上部の堆積時期とみられる。

C層とH層は一連の堆積物で黒褐色細粒砂質シルト層からなる。本層も調査区の広範囲に堆積しており、生物擾乱作用の影響を受けており、腐植が著しく集積している。また、C層・H層中の珪藻化石群集は、塩分を含む河口汽水域や複数の豊富な温泉などに多く生育する *Rhopalodia gibberula* が多産し、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種が多産する特徴を示した。これらのことから、本堆積物は富栄養な沼沢地～湿地のような状態で堆積したことが推定される。本堆積物の分布状況から、調査区一帯が後背湿地のような土地条件へ変化したとみられる。また、堆積物中に砂質ブロック土を挟在することや、珪藻化石群集において中～下流性河川指標種群が含まれていることから、しばしば河川の氾濫の影響を受けることであったことが推定される。さらに区画溝では、中～下流性河川指標種群を含む流水性種の割合が高かったことから、水流の影響を受けていることが推定される。

また、本堆積物中には上記した下位層から連続する変形構造の直上に別の変形構造が認められる。この変形構造は上位層であるA層まで連続しており、層界付近でロード構造、その上位でフレーム構造を呈する。このような変形構造もまた地震動に起因する可能性が高く、そうだとすれば地震の発生層準はA層堆積後、①層が堆積するまでの間の時期と推定される。下位の変形構造が確認される層準の植物根が変形構造の影響を受けていなかったのは、地震の影響を受けたのがH層上部の堆積期であることを示唆する。

このような沼沢地～湿地が形成された当初（C層堆積期）は、植物珪酸体組成および花粉化石群集の特徴から、大型の抽水植物であるヨシ属が繁茂していたことが推定される。また、ウシクサ族、イチゴソナギ亞科などのイネ科、アブラナ科、アリノトウグサ属、ヨモギ属などの草本植物なども湿地内やその周辺の高燥な場所に分布していた可能性がある。また、木本花粉化石群集で高率に出現したハンノキ属も湿地林や河畔林を構成する要素を含むことから、ここでのハンノキ属も調査区内に局的に分布していた可能性がある。

A層からは栽培種のイネ属の植物珪酸体やソバ属の花粉化石が検出された。このことは本時期に調査地点ないし、その近辺で稲作や畑作が行われていた可能性を示唆する。栽培種イネ属植物珪酸体の出現率は、本層準上位のH層層準では50%以上と優占するようになり、これとは逆にヨシ属が減少する。これらのこととは、本湿地帯で行われていた稻作の規模が拡大したことや、稻作地として長期間にわたって利用されていたことを示している可能性が考えられる。

H層の褐色中粒砂混じりシルト質微粒砂層（A層）は、珪藻化石群集において好流水性種が多産する特徴を示したことから、その成因として河川の流水が流入するような状況下で堆積したことが推定される。ただし、陸生珪藻の種群が認められることや、生物擾乱作用が及んでいることからみて、堆積後は植生に覆われたことが推定される。本層中からも栽培種のイネ属植物珪酸体が高率に出現したことから、本層堆積層も稲作が行われていたことが推定される。

①層の褐色中粒砂混じりシルト質微粒砂層は著しい擾乱作用の影響を受けている。本層準については植物珪酸体分析を実施していないが、擾乱作用により生じたとみられるベッド状の構造が確認されることから、耕作など人为的な擾乱の影響が及んでいることが推定される。発掘調査所見では、本層が近世の水田耕作土であったと指摘されており、堆積微細構造から推定される所見は調和的である。

このように調査区は後背湿地となった頃から、稲作地として利用されていたことが推定される。SD307溝跡埋積物からも栽培種のイネ属植物珪酸体が多産しており、後述するように木本花粉化石群集の特徴から清滌植物と水田地点の堆積物が同時期の可能性があることから、本溝跡は稲作に伴う施設の可能性がある。

(2) 周辺の森林植生

SD307溝跡および2地点の木本花粉化石群集は類似した特徴を示しており、マツ属が優占する特徴を示した。マツ属花粉は風媒花でかつ花粉生産量が膨大であり、広域的な植生を反映している要素とされる。このような広域要素は堆積物の層序対比を行う際に利用され、同じような組成を示す層準では生層序対比される。したがって、今回のSD307溝跡堆積物と2地点の堆積物は生層序学的に対比される。

ここでのマツ属花粉は保存状態が悪いものの、形態的には復縫管束亞属に近似するものが多い。マツ属復縫管束亞属にはクロマツ・アカマツの2種類があり、いずれも常緑樹である。特にアカマツは、人為的な伐採や山火事などによって生じた空間において二次林を形成する要素であり、しばしば山地に植林される種類でもある。これらのこと考慮すると、稻作が行われていた当時の遺跡周辺の植生は二次林や植林などに起因するマツ林であった可能性がある。また、随伴して出現するスギ属やハンノキ属、コナラ亜属などは、湧水帯や沢筋などに分布する種類であり、當時も扇状地上に分布していたことが推定される。

(3) 溝跡の埋積環境

SD307溝は、上記したように最低でも3回の掘り直しがあったことが堆積状況から推定される。最初の段階の溝埋積植物では、珪藻化石群集は特定の種群が優占せず、異なる環境を指標する種群が低率に出現する特徴を示した。このような特徴を示す珪藻化石群集は混合群集と呼ばれ、河川の氾濫堆積物や水田耕土などで認められる場合が多い群集である。のことと、溝埋積植物であることを合わせ考えると、本層は短期間に溝内に埋められた洪水性の堆積物の可能性がある。

第2段階の溝埋積植物の珪藻化石群集は好流水性種が占める割合が増加するものの、止水性種や陸生珪藻など異なる環境を指標する種群も群集構成種として認められることから、混合群集といえる。したがって、本層もまた流水の影響を受けて、周囲の異なる環境の堆積物が侵食され、再堆積した堆積物と考えられる。

第3段階の溝埋積植物下部の珪藻化石群集は、真+好酸性種が多産し、沼澤湿地付着生種群を含む流水不定性種も多産した。このことから、本層が堆積する頃の溝内は弱酸性を呈した沼沢地～湿地のような状態であったことが推定される。

以上、溝の埋積環境について述べてきたが、本溝は洪水等の被害を受け、短期間に埋没することがしばしばあった可能性がある。

4-2. 調査区北東部

(1) 稲作の消長

弥生時代～中世の遺物包含層を含む③層上面に認められた排水用施設と、これに付随する溝跡の西側には、水田の分布が想定されている。また、植物珪酸体分析の概査では、近現代の水田耕作土直下層で、イネ属の植物珪酸体が認められている。

今回の調査では、③層～②層下部にかけてのイネ属の出現傾向を把握するために設定したLoc.1では、③a層上部と②f層で保存状態が良好なイネ属が産出し、稲穂に形成されるイネ属珪酸体や短細胞列もわずかに認められた。また、水田層とされる層位を対象としたLoc.2・3・4でも、②f層直下の③b層でイネ属が検出、あるいは検出個数が増加する傾向が見られた。しかし、③a層より下位ではイネ属が全く検出されなかった。

これらのことから、③a層あるいは③b層は稻作耕土として利用されていたことが推定される。また、湿润な場所に生育する大型の抽水植物のヨシ属が多産したことから、水田稻作であったと思われる。

③層の下部層では、植物珪酸体の検出個数が少なく、植物珪酸体が取り込まれにくかったと考えられる。しかし、検出される種類は同様であり、ヨシ属やタケ科などのイネ科植物が生育していたことがうかがえる。

(2) 排水路内の状態

B区にみられた排水用施設に付随する溝内では、珪藻化石や植物珪酸体の保存状態が悪かった。また、少ないながらも産出した珪藻化石には、流水域に特徴的に産出する流水指標種だけでなく、陸上の好氣的環境に耐性のある陸生珪藻など、いろいろな環境を指標する種類が混在している。このような珪藻化石の産状から、溝内は常に水の流れる状態ではなかったことがうかがえる。また、微化石の検出個数が少ないとから、溝内は堆積速度が速い、すなわち構築された後、比較的短期間に埋積されたと思われる。なお、イネ属も産出することから、溝内に水田稻作土の流入が示唆され、水田から溝へ水の流入があった可能性がある。

(3) 畑作物の確認

B地区西端の畑跡の可能性がある小溝では、2地点で植物珪酸体の産状を調べたが、保存状態が悪く、栽培植物ではイネ属がわずかに認められるに過ぎなかった。そのため、イネ属の栽培、あるいは敷き藁などの形で利用されたことが示唆されるが、断定には至らない。また、ムギ類やキビ類などのイネ科作物に由来する植物珪酸体は認められず、これらの栽培は考えにくい。畑が構築された時期は明確ではないが、イネ科以外のマメ類や根菜類などの栽培も考慮して、花粉分析や種子分析を行い、遺構の性格をさらに検討したい。なお、ヨシ属とウシクサ族が、畑跡の周囲に生育していたらしい。

III. 中世のトイレ遺構の可能性がある土坑の性格検討

調査区南部では近世初頭の土坑が確認されている。本土坑は、その検出状況からトイレ遺構の可能性が考えられている。ここでは、その可能性の寄生虫卵分析により検証する。

1. 試料

近世初頭の土坑（SK02）は、すり鉢状を呈し、砂を主体とした碎屑物で埋積されている。試料は埋積物の上部（試料番号1）、中部（試料番号2）、底部（試料番号3）の3層準から1点ずつ採取された。今回は底部の試料番号3について寄生虫卵分析を実施する。

2. 分析方法

試料の一部を水で薄めてグリセリンで封入して、プレパラートを作製し、光学顕微鏡下で観察したが、寄生虫卵は検出されなかったため、花粉分析と同様の手法を用いて寄生虫卵を濃集した。なお、堆積物1ccあたりの検出個数を求めるために、分析過程の各所で重量や容積の測定を適宜行った。

3. 結果

試料中からは、寄生虫卵が全く検出されない。しかし、花粉化石は多少検出される。そのため、試料中の花粉化石の産状を他の花粉分析の結果とともに、表4・図3に示す。

花粉化石の傾向は、2地点やSD307などと類似した組成を示す。しかし、化石の保存状態はこれらの遺構の花粉化石と比較して悪い。また、シダ類胞子の割合も高い。

4. 考察

SK02からは、トイレ遺構としての機能を示唆する寄生虫卵が全く検出されなかった。本邦でのトイレ遺構を対象とした調査では、寄生虫卵のほか、食糞性昆虫、魚骨、栽培植物の種実などが検出され、寄生虫卵の個数は5,000個／ccを越える場合が多い（金原・金原、1994）。一方、トイレ遺構以外の場所では寄生虫卵が検出されない、もしくは検出されたとしても100個未満であることが多い（金原・金原、1994）。そのため、今回の結果を見る限り、本土坑はトイレ遺構と特定することはできない。

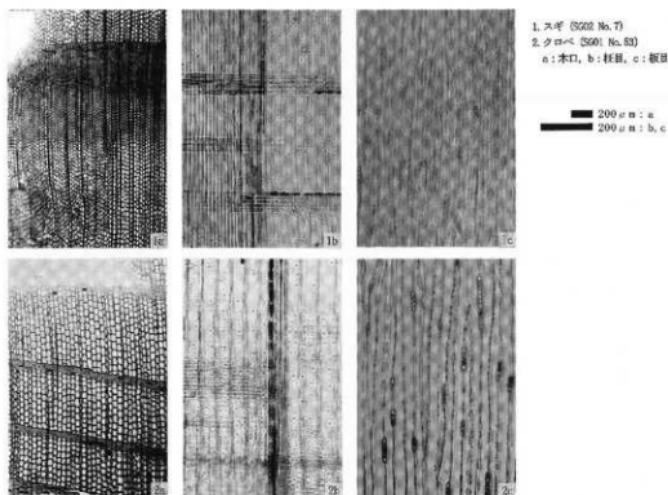
なお、本試料中の花粉化石は他の遺構と比較して保存状態が悪かった。このような産状は、埋積後に風化作用の影

響を受けていることを示唆するものであり、有機物である寄生虫卵も埋積後に分解消失している可能性がある。今後、本遺構の性格に関する情報を得るためにリン酸や窒素など残留成分の分布状況の調査を実施していきたい。

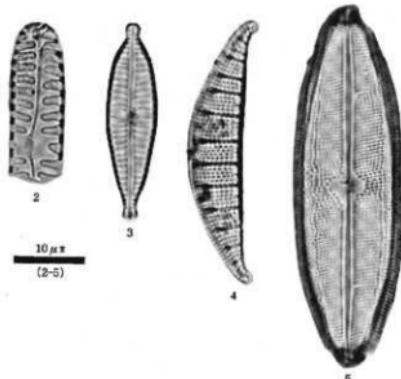
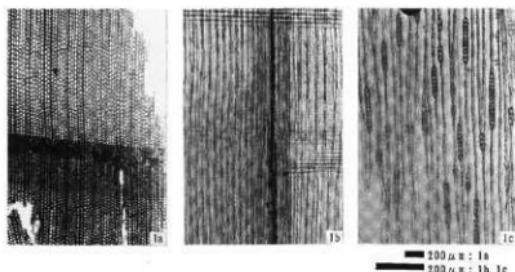
引用文献

- 安藤・男 (1990) 淡水珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理, 42, p. 73-88.
- Asai,K. and Watanabe,T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophytic and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, p.35-47.
- 伊藤良永・堀内誠 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用。珪藻学会誌, 6, p. 23-45.
- 飯島泰男・長谷川益夫 (1984) 木製品の樹種。「北陸自動車道遺跡調査報告 一上市町木製品 (本文)・總括編」, p. 89-96.
- 石井逸太郎・山家基治 (1934) 富山県魚津海岸に於ける埋没化石林。史跡名勝天然記念物, 9, p. 274-279.
- 金原正明・金原正子 (1994) 堆積物中の情報の可視化、可視化情報, 14, p. 9-14.
- 近藤謙三・佐藤 隆 (1986) 植物珪藻類分析、その特性と応用。第四紀研究, 25, p. 31-64.
- Krammer,K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26, p.1-353., BERLIN·STUTTGART.
- Krammer,K. and Lange - Bertalot,H. (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae.
Band 2/1 von: Die Süßwasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer,K. and Lange - Bertalot,H. (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae,
Bacilariaeae, Surirellaceae. Band 2/2 von: Die Süßwasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer,K. and Lange - Bertalot,H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales,
Fragilariaeae, Eunotiaceae. Band 2/3 von: Die Süßwasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer,K. and Lange - Bertalot,H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae,
Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von: Die
Süßwasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- Lange - Bertalot,H. unter Mitarbeit von A.Steindorf (1995) Rote Liste der Kieselalgen
(Bacillariophyceae) Deutschlands. Schr. - R.f.Vegetationskde.H.28 000-000 BN.
Bonn - Bad Godesberg p.1-31.
- 奈良国立文化財研究所編 (1990) 年輪に歴史を読む 一日本における古年輪学の成立一. 195p., 同朋舎.
- 沼田 真編 (1984) 日本の天然記念物 5 植物 III. 186p., 講談社.
- パリノ・サーヴェイ株式会社 (1994) 針原東遺跡から出土した木製品の材同定。「小杉町針原東 遺跡発掘調査報告」, p.141-154. 富山県小杉町教育委員会。
- パリノ・サーヴェイ株式会社 (1995) 分析調査の結果。「石川県小松市 平向梯川遺跡 I 梯川 改修工事関係埋蔵文化財調査報告書1」, p.91-112. 社団法人石川県埋蔵文化財保存協会。
- 鈴木三男・能城修一 (1988) 田名遺跡出土木製品の樹種の調査結果について。「田名遺跡」, p.56-70. 三方町教育委員会.
- 鈴木三男・能城修一 (1992) 金沢市西向・南新保遺跡出土木製品の樹種。「金沢市西向・南新保 遺跡III」, p.285-290.
- 鈴木三男・能城修一 (1993) 石川県徳前C遺跡出土木製品の樹種。「徳前C遺跡」, p.65-83. 石川県立埋蔵文化財センター.
- 鈴木三男・能城修一・西尾典子 (1994) 羽咋市吉崎・次場遺跡出土木製品の樹種。「吉崎・次場 遺跡 第13次発掘調査」, p.171-187. 石川県羽咋市教育委員会.
- 東村武信 (1990) 改訂 古考古学と物理化学. 212p., 学生社.
- 植田弥生・辻 賢一郎 (1990) 福井県三方町牛屋遺跡から出土した弥生時代以降の木材遺体群。植物地理・分類研究, 38, p.43-50.
- Vos,P.C. and H.de Wolf (1993) Reconstruction of sedimentary environments in Holocene coastal deposits of the southwest Netherlands; the Poortvliet boring, a case study of palaeoenvironmental diatom research. Twelfth International Diatom Symposium, p.297-296.

図版1 木材

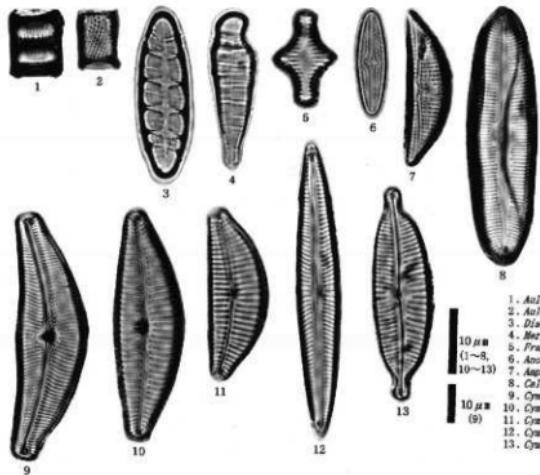


図版2 木材・珪藻化石(1)



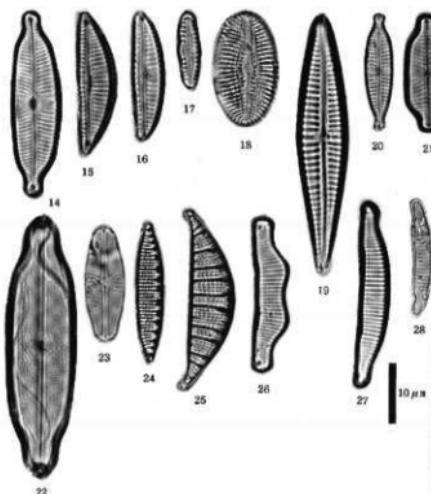
L. 久那 (SG-2-15) a : 木口, b : 横目, c : 板目
2. *Planularia borealis* Ehrenberg (海水路 硅土)
3. *Gomphonema parvulum* var. *laguna* (Kuetzing) Preussell (海水路 硅土)
4. *Rhopalodia gibberula* (Bhr.) O. Müller (海水路 硅土)
5. *Nodidium amplatum* (Bhr.) Kraemer (海水路 硅土)

圆版3 珊藻化石(2)



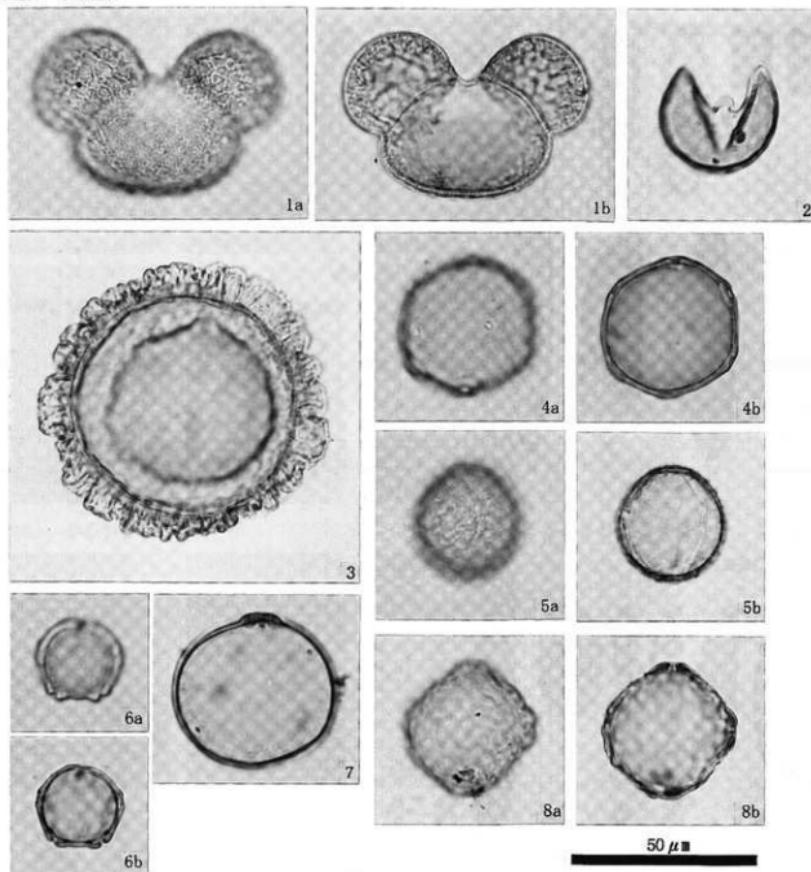
1. *Aulacoseira alpigena* (Grun.) Krammer (SD307南壁:5)
2. *Aulacoseira ambigu* (Grun.) Sillesen (SD307南壁:5)
3. *Actinocyathus hyalostomus* (Hustedt) (2地点:3)
4. *Actinocyathus hyalostomus* (Hustedt) (2地点:3)
5. *Beaufortia circinalis* var. *constricta* (Ralfs) V. Heurck (SD307南壁:3)
6. *Anomoeocystis brachysira* (Bréb.) Grunow (2地点:1)
7. *Fragilaria construens* (Bréb.) Grunow (2地点:1)
8. *Caloneis silicula* (Bréb.) Cleve (2地点:1)
9. *Cymbella tenuida* (Bréb.) ex Kuetz. V. Heurck (SD307南壁:5)
10. *Cymbella turgidulus* Grunow (2地点:1)
11. *Cymbella turgidulus* var. *simplicata* Skvortsov (SD307南壁:3)
12. *Cymbella amphioxys* (Kuetz.) Grunow (2地点:2)
13. *Cymbella verticaliformis* Kaurwald (SD307南壁:5)

圆版4 珊藻化石(3)



14. *Cymbella naviculiformis* Kaurwald (2地点:2)
15. *Cymbella silesiaca* Bleisch (2地点:1)
16. *Cymbella perplexilla* C. Cleve (2地点:2)
17. *Cymbella sinuata* Grunow (SD307南壁:5)
18. *Diatoma ovalis* (Bréb.) Grunow (SD307南壁:3)
19. *Cymbella gracilis* (Bréb.) Kuetzing (SD307南壁:3)
20. *Gambonema parvulum* Kuetzing (2地点:3)
21. *Jucivula elegans* var. *angulata* (Krasz.) Patrick (2地点:1)
22. *Nedima septatum* (Bréb.) Krammer (2地点:3)
23. *Schizopagurus angustatus* (Bréb.) Krammer (SD307南壁:5)
24. *Wittmannia mucronata* Grunow (2地点:1)
25. *Rhegmatodea gibberula* (Bréb.) O. Waller (2地点:1)
26. *Rimostis erosa* var. *bifida* Grunow (2地点:3)
27. *Rimostis pectinalis* var. *minor* (Kuntz.) Rabenhorst (SD307南壁:5)
28. *Rimostis incisa* W. Smith ex Gregory (SD307南壁:5)

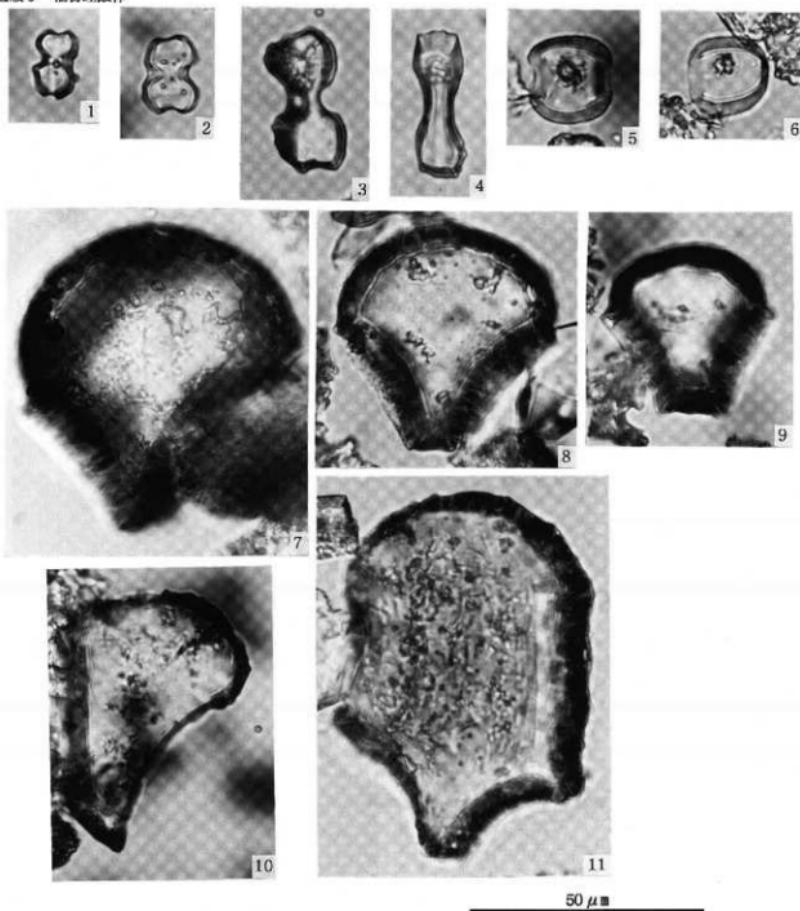
図版5 花粉化石



1. マツ属(2地点; 1)
3. ツガ属(2地点; 1)
5. コナラ属コナラ亜属(2地点; 1)
7. イネ科(2地点; 1)

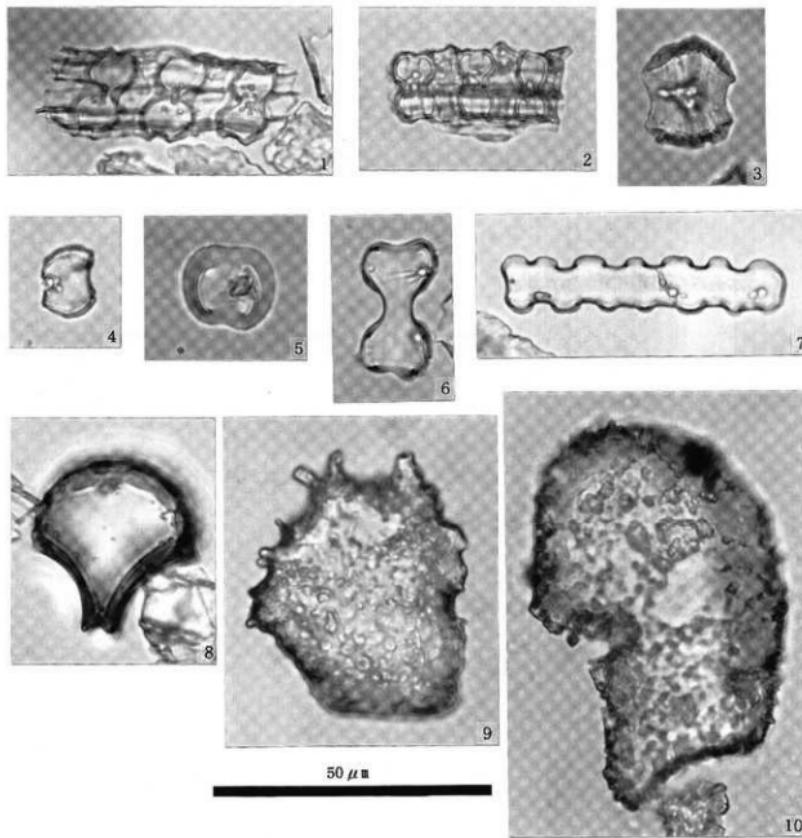
2. スギ属(2地点; 1)
4. クルミ属(2地点; 1)
6. ハンノキ属(2地点; 1)
8. ニレ属—ケヤキ属(2地点; 1)

図版6 植物珪酸体



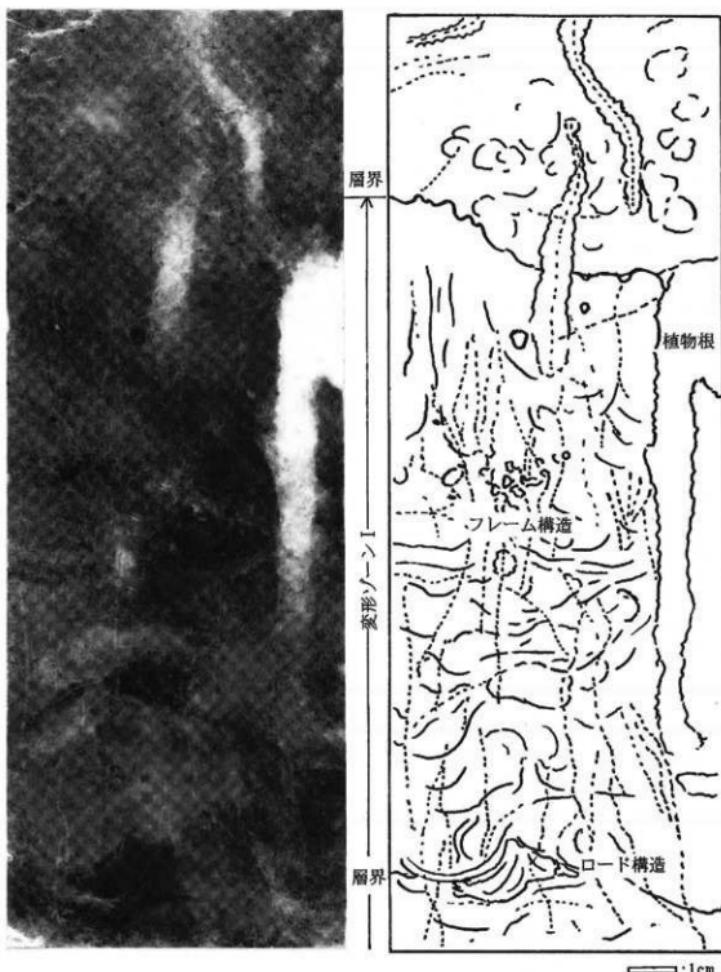
1. イネ属短細胞珪酸体 (Loc. 1;2)
3. ススキ属短細胞珪酸体 (Loc. 1;3)
5. ヨシ属短細胞珪酸体 (Loc. 1;1)
7. イネ属機動細胞珪酸体 (Loc. 3;1)
9. イネ属機動細胞珪酸体 (Loc. 1;1)
11. ヨシ属機動細胞珪酸体 (Loc. 3;1)
2. イネ属短細胞珪酸体 (Loc. 2;2)
4. コブナグサ属短細胞珪酸体 (Loc. 1;1)
6. ヨシ属短細胞珪酸体 (Loc. 3;1)
8. イネ属機動細胞珪酸体 (Loc. 2;2)
10. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (Loc. 1;3)

図版7 植物珪酸体



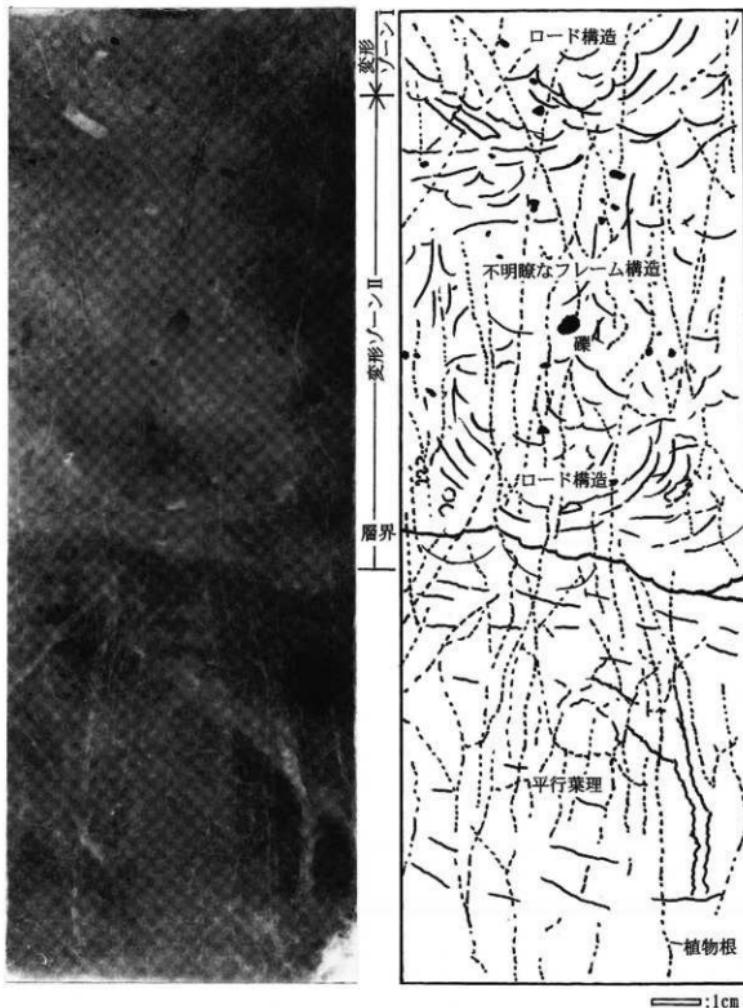
1. イネ属短細胞列 (2地点:1)
2. イネ属短細胞列 (SD307南壁:3)
3. チゴザサ属短細胞珪酸体 (SD307南壁:3)
4. タケ亜科短細胞珪酸体 (SD307南壁:3)
5. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (2地点:3)
6. ススキ属短細胞珪酸体 (2地点:3)
7. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (2地点:3)
8. イネ属機動細胞珪酸体 (2地点:1)
9. タケ亜科機動細胞珪酸体 (SD307南壁:3)
10. ヨシ属機動細胞珪酸体 (2地点:3)

図版8 級X線写真(1)



層界より下位の黄褐色微粒～細粒砂層は平行葉理が発達するが、上部は上位層からの荷重により変形する（ロード構造）。この変形構造は本層上位の黒褐～暗褐色細粒砂質シルト層下部にも及んでいる。下部がロード構造、その上位が堆積物の流动で生じたフレーム構造からなり、その上位に別の変形構造であるロード構造が認められる。堆積構造は変形しているが縦方向の植物根は変形していない。また、生物擾乱作用の痕跡が認められる。

図版9 軟X線写真(2)

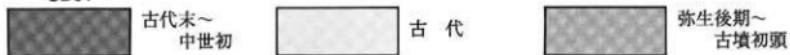


下位の層界付近に上位層からの荷重によるロード構造が発達する。その上位には堆積物の流動によるフレーム構造が認められ、この変形構造は上位の層界まで続く。本層中の植物根は、変形作用の影響を多少受け波打つ。生物擾乱作用も及んでいる。最上位の褐色泥混じり粗粒～中粒砂も生物擾乱作用の影響を受けるが、変形の影響は及んでいない。

図 版

遺構図関係凡例

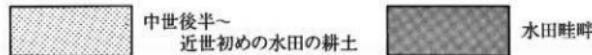
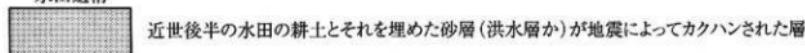
SD01



建物柱穴



水田遺構



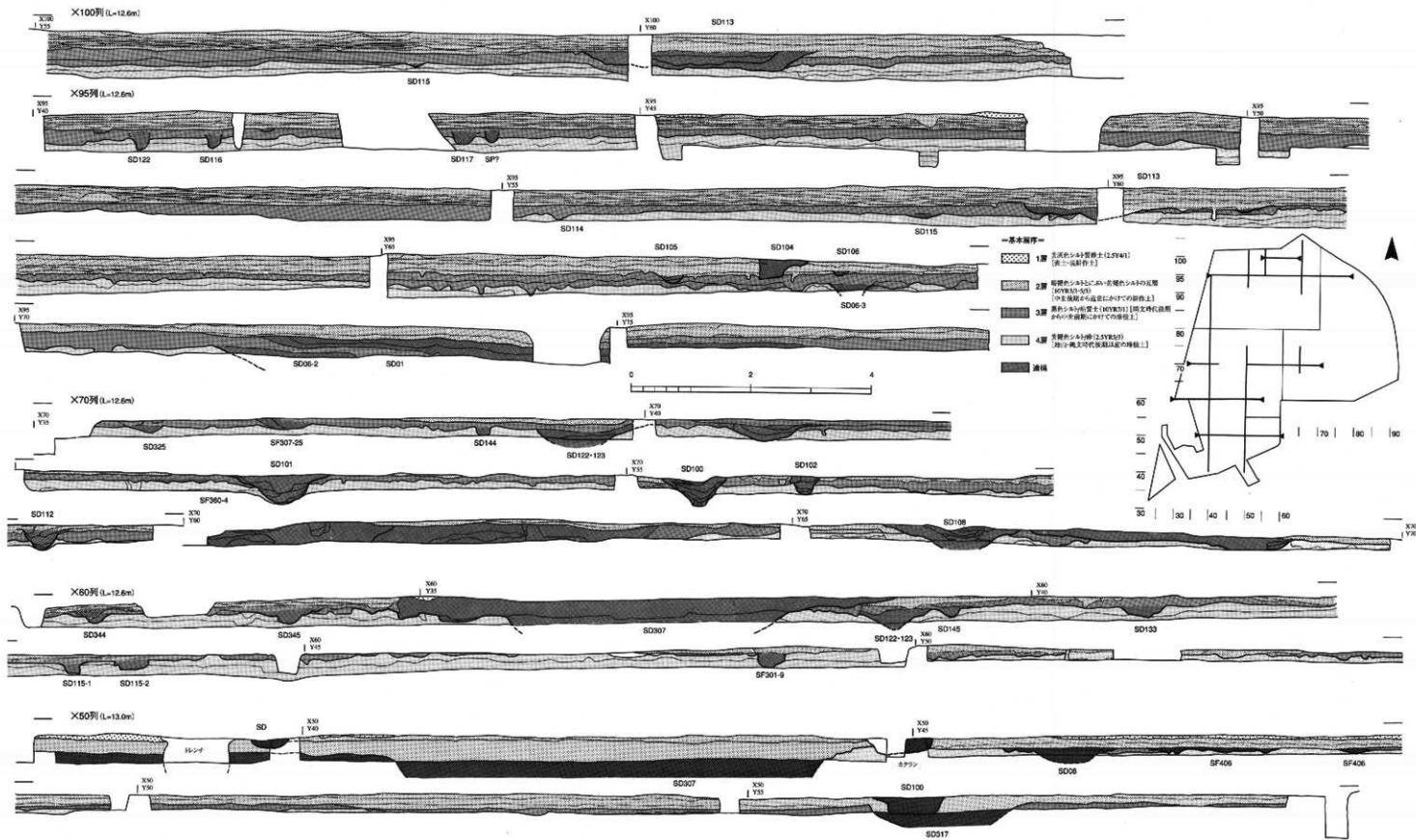
遺物図関係凡例

種別

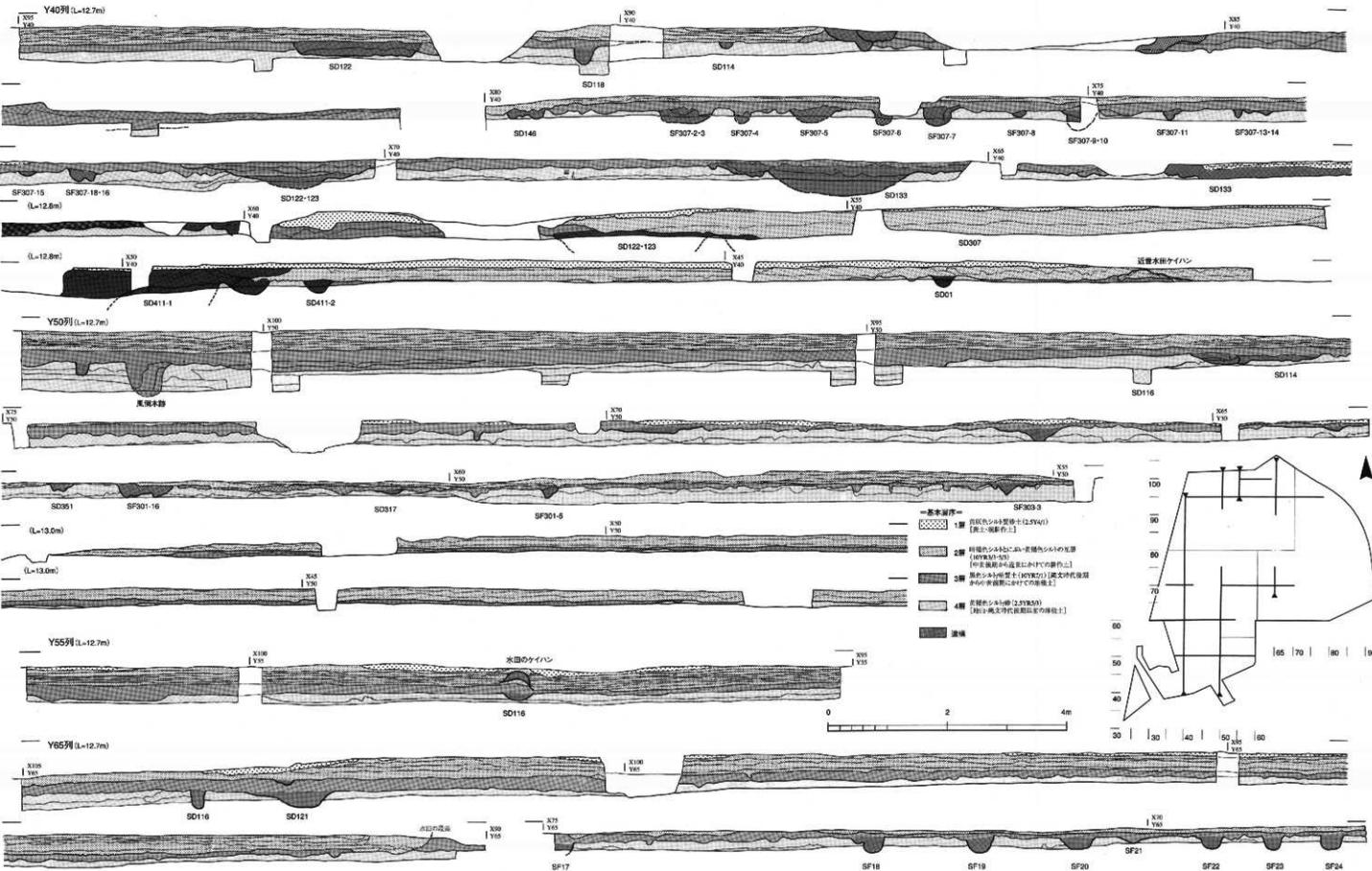


付着物

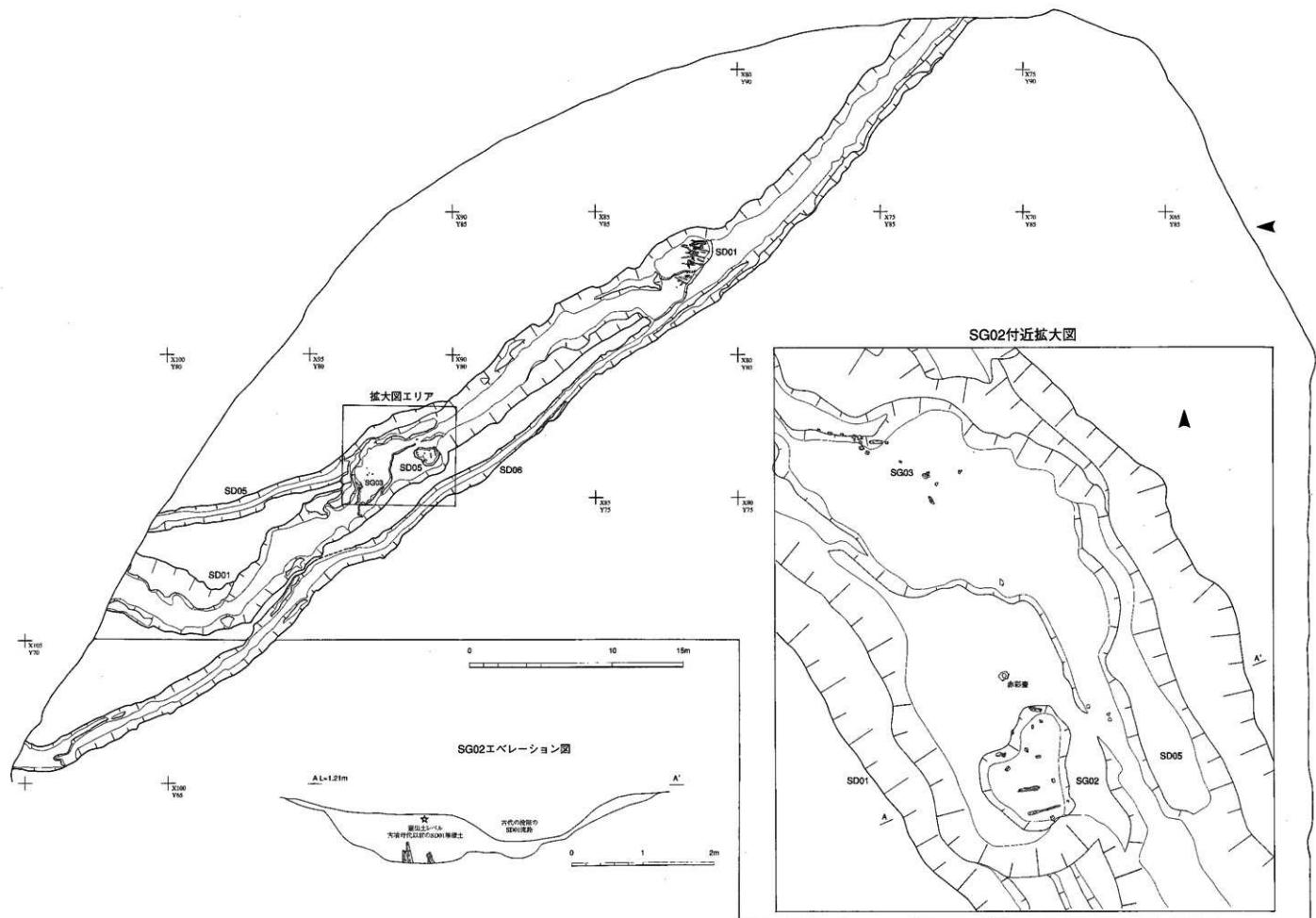




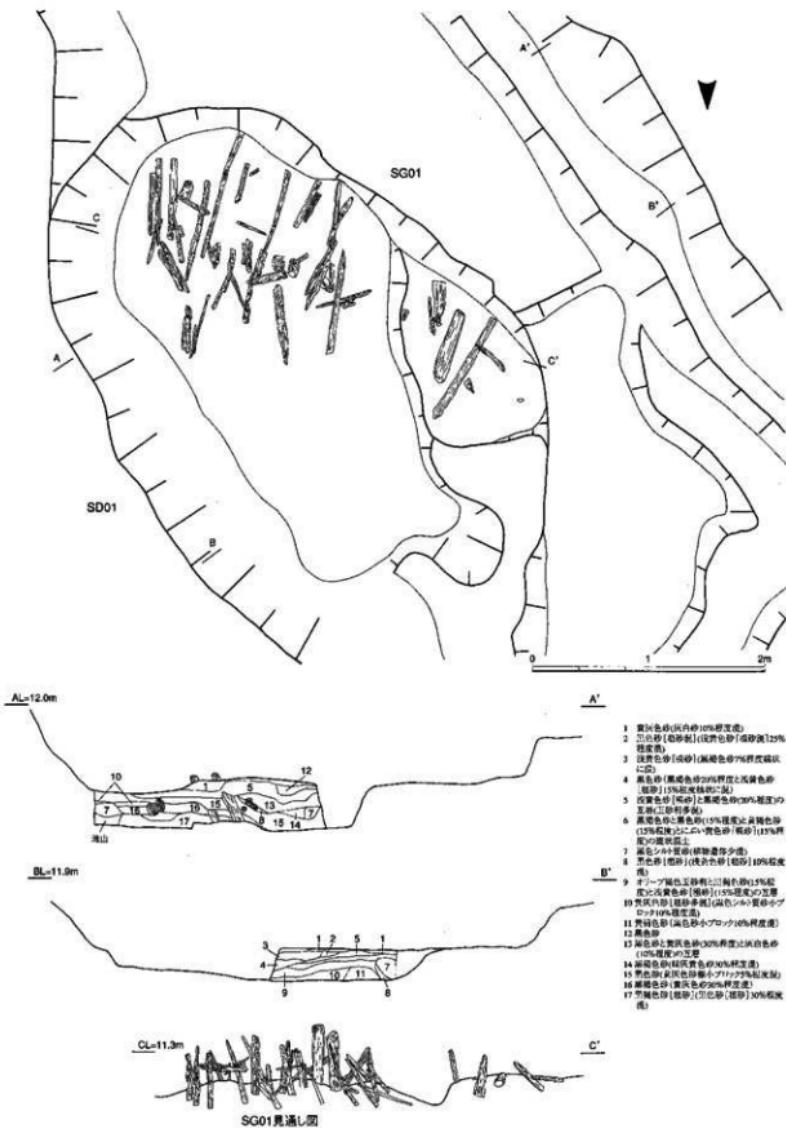
I版1 X軸グリッド断面図



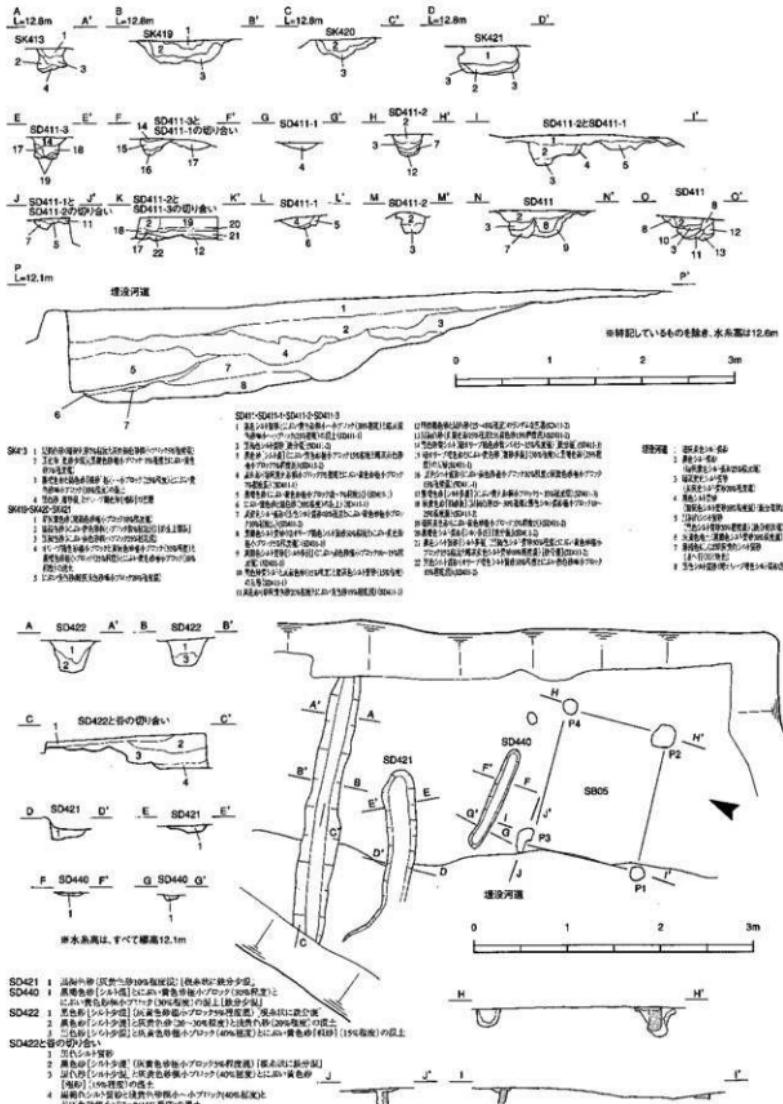
図版2 Y軸グリッド断面図



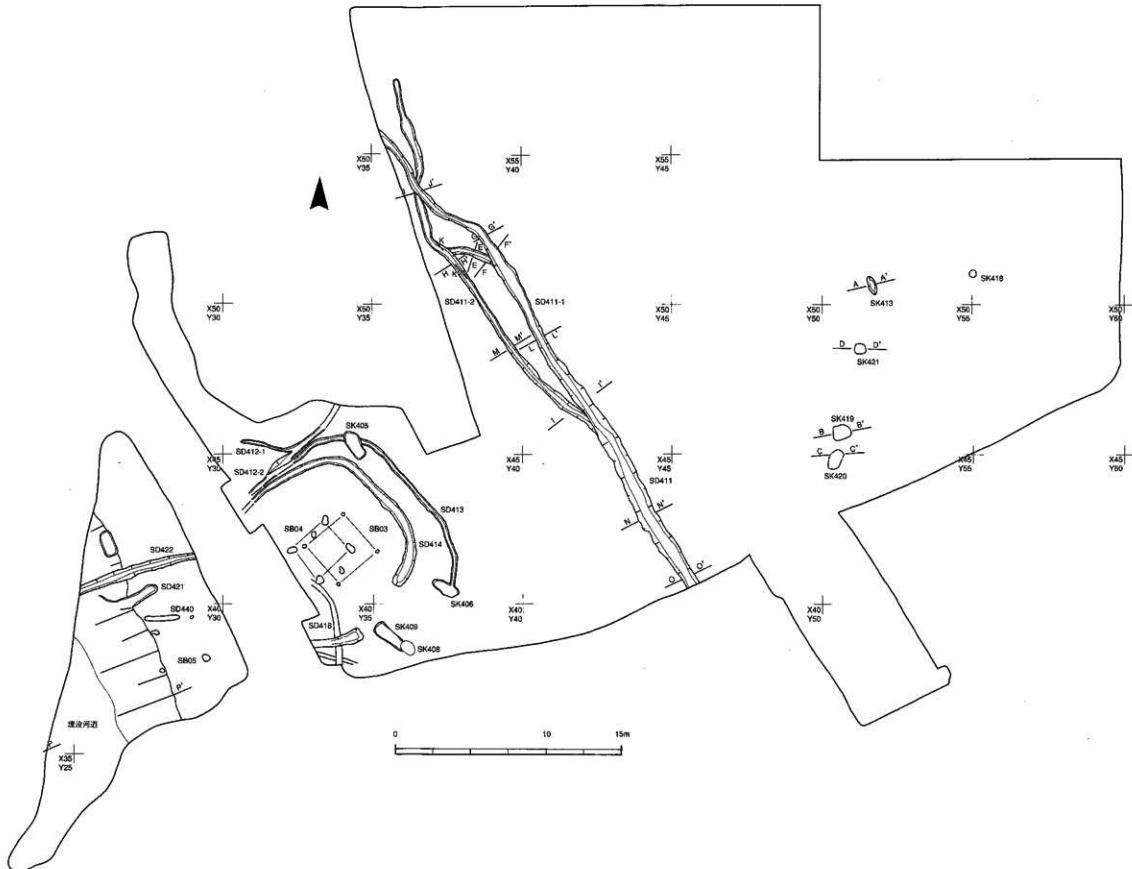
図版3 遺構図(1)(A地区弥生・古墳時代)



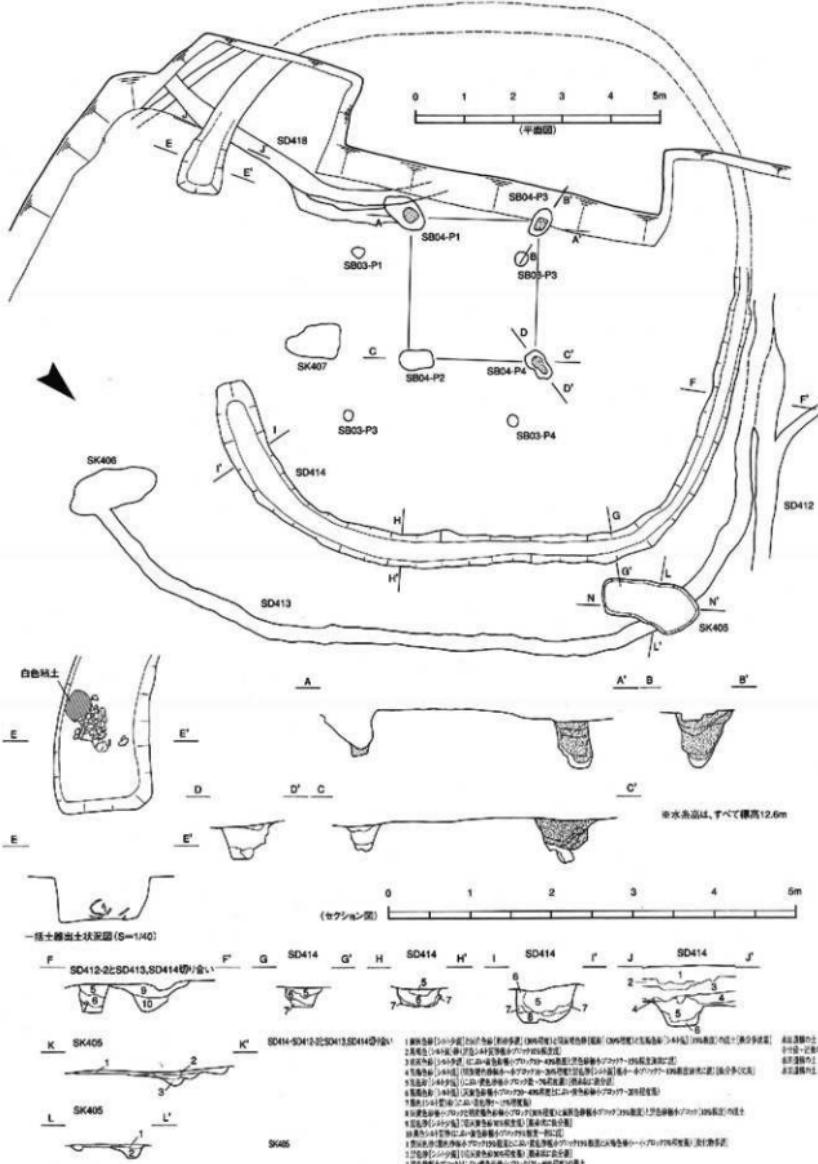
図版4 透構図 (2) (A地区弥生時代)



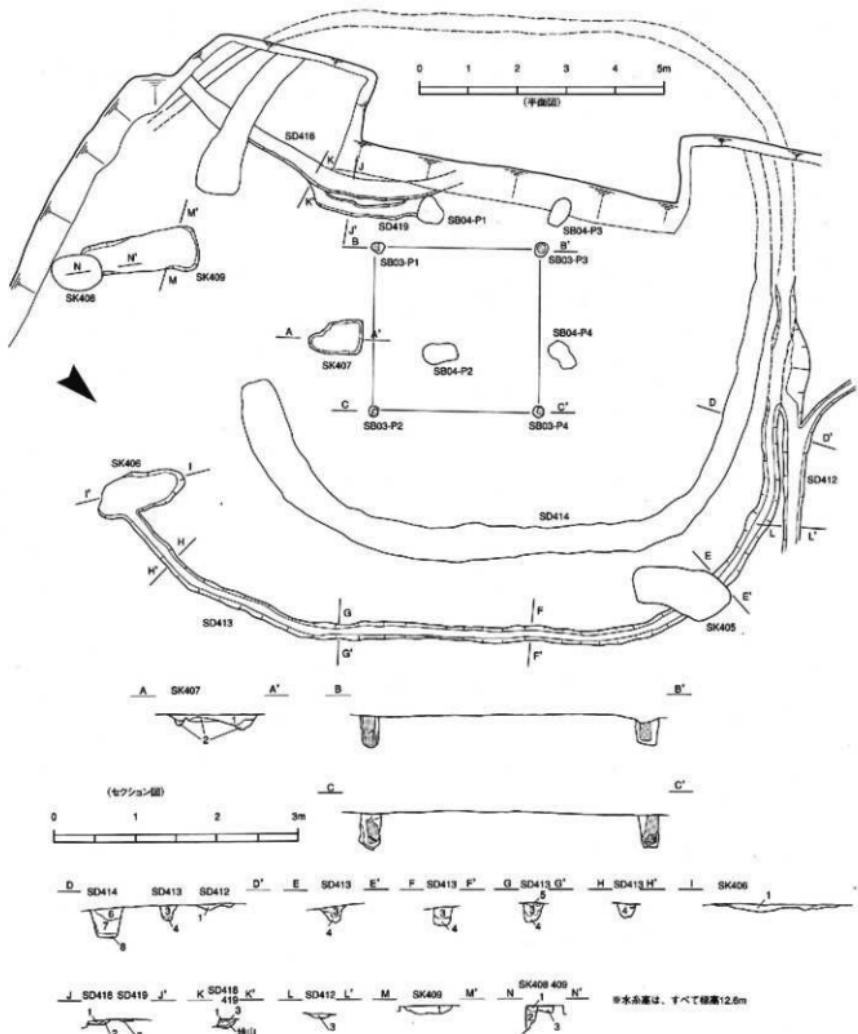
図版5 遺構図 (3) (D地区弥生・古墳時代)



図版6 遺構図(4)(D地区弥生・古墳時代)

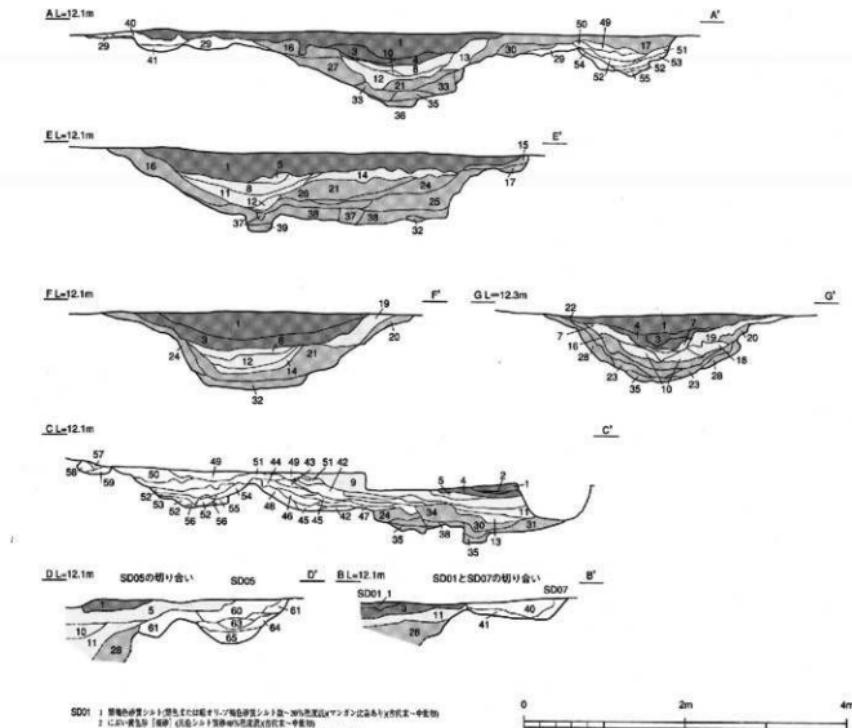


図版7 造構図(5)(D地区古墳時代)



- 1 黒色砂 [シルト] 及黒褐色砂 (30%程度) 及黒褐色砂 (30%程度) に混入 黄色砂砾小ブロック (10%程度) の層土
2 黑色砂 [シルト] 及黒褐色砂小ブロック (30%程度) 及黒褐色砂小ブロック (10%程度) の層土
3 黑色砂 [シルト] 及黒褐色砂 (30%程度) 及黒褐色砂小ブロック (10%程度) の層土
4 黑色砂 [シルト] 及黒褐色砂 (30%程度) 及黒褐色砂小ブロック (10%程度) の層土
5 黑色砂 [シルト] 及黒褐色砂小ブロック (10%程度) 及黒褐色砂小ブロック (10%程度) の層土
6 黑色砂 [シルト] 及黒褐色砂小ブロック (10%程度) 及黒褐色砂小ブロック (10%程度) の層土
7 黑褐色砂 [シルト] 及黒褐色砂小ブロック (10%程度) 及黒褐色砂小ブロック (10%程度) の層土
8 黑色砂 [シルト] 及黒褐色砂 (5%程度) の層土

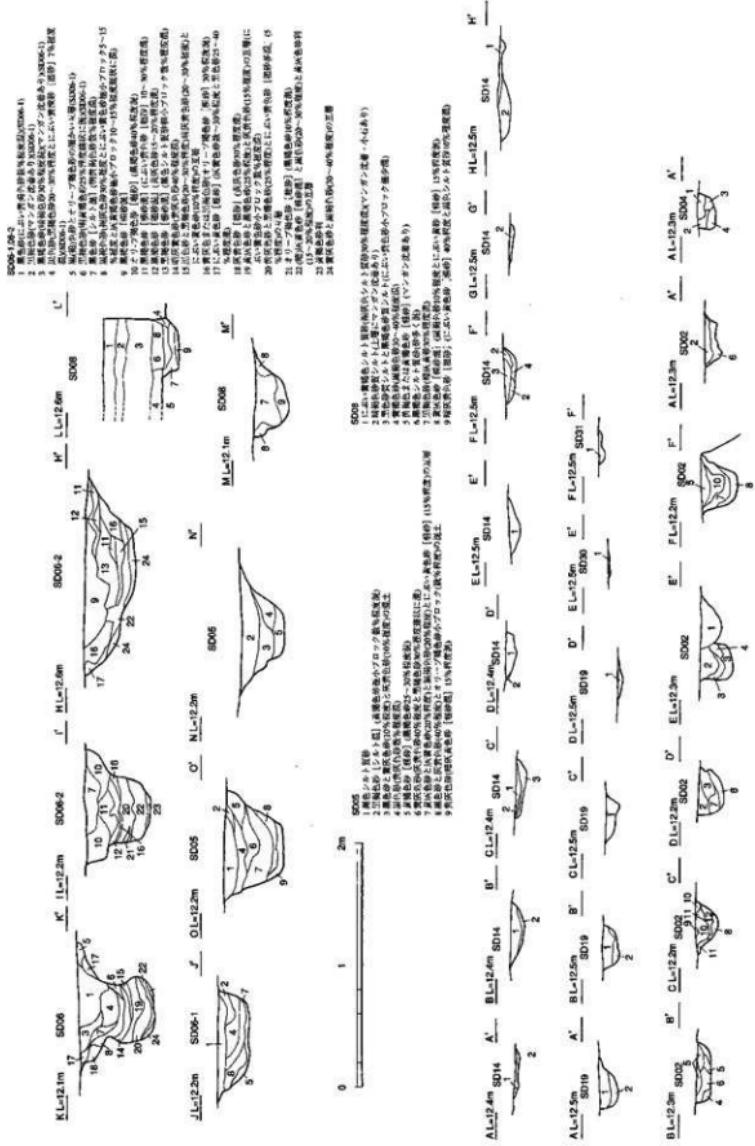
図版8 遺構図 (6) (D地区占培時代)



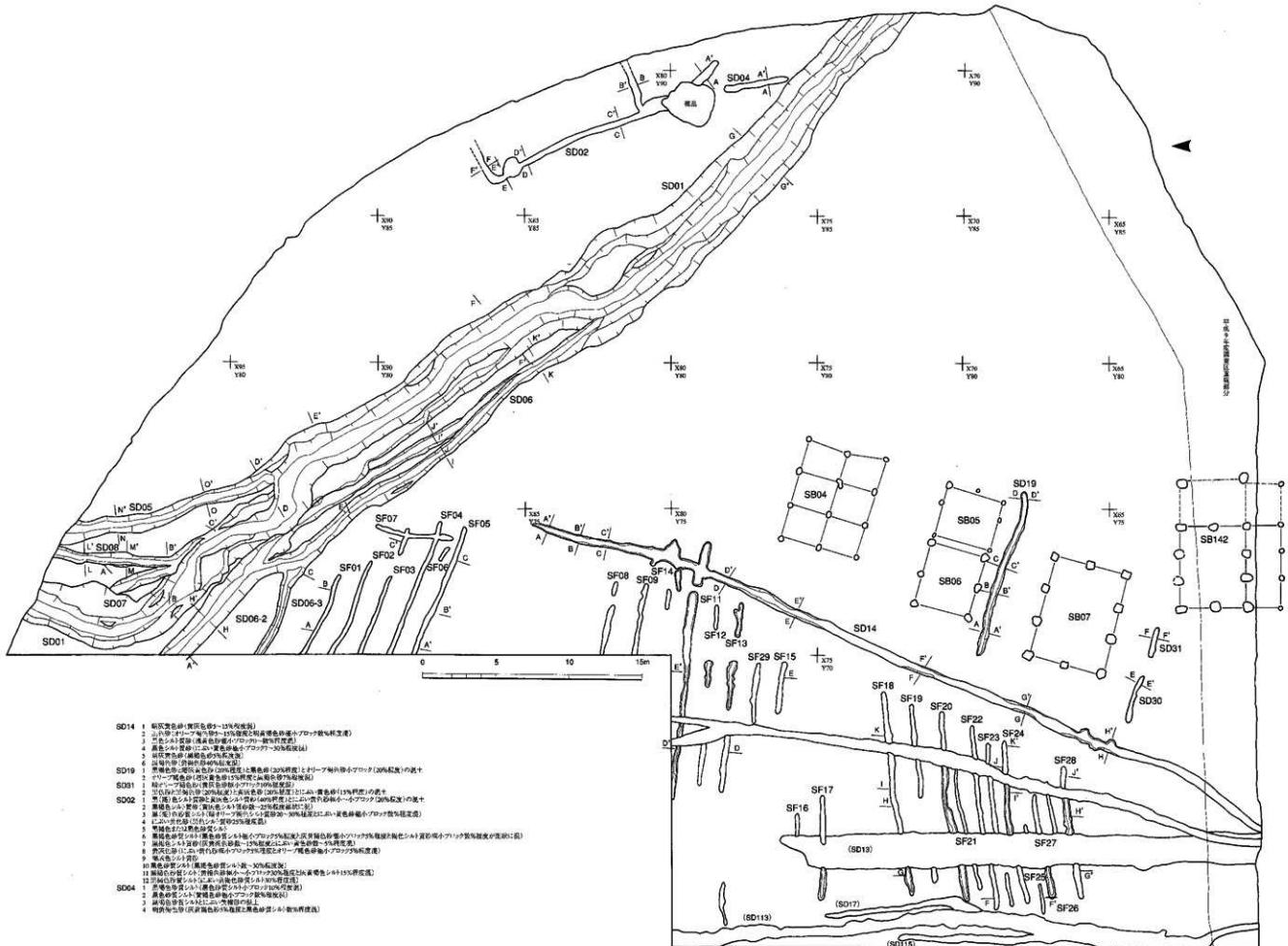
- SD01 1 黒褐色少シント(透水性)または粘土岩・薄色少シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 2 黄褐色少シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 3 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 4 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 5 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 6 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 7 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 8 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 9 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 10 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 11 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 12 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 13 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 14 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 15 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 16 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 17 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 18 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 19 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 20 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 21 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 22 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 23 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 24 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 25 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 26 C-D透水性(マラン)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 27 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 28 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 29 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 30 C-D透水性(マラン)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 31 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 32 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 33 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 34 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)

- 35 黑褐色少シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 36 黑褐色少シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 37 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 38 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 39 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 40 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 41 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 42 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 43 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 44 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 45 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 46 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 47 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 48 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 49 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 50 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 51 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 52 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 53 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 54 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 55 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 56 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 57 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 58 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 59 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 60 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 61 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 62 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 63 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 64 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)
- 65 黑色シント(透水性)～30%透水性(マラン)にあり(古生代～中生代)

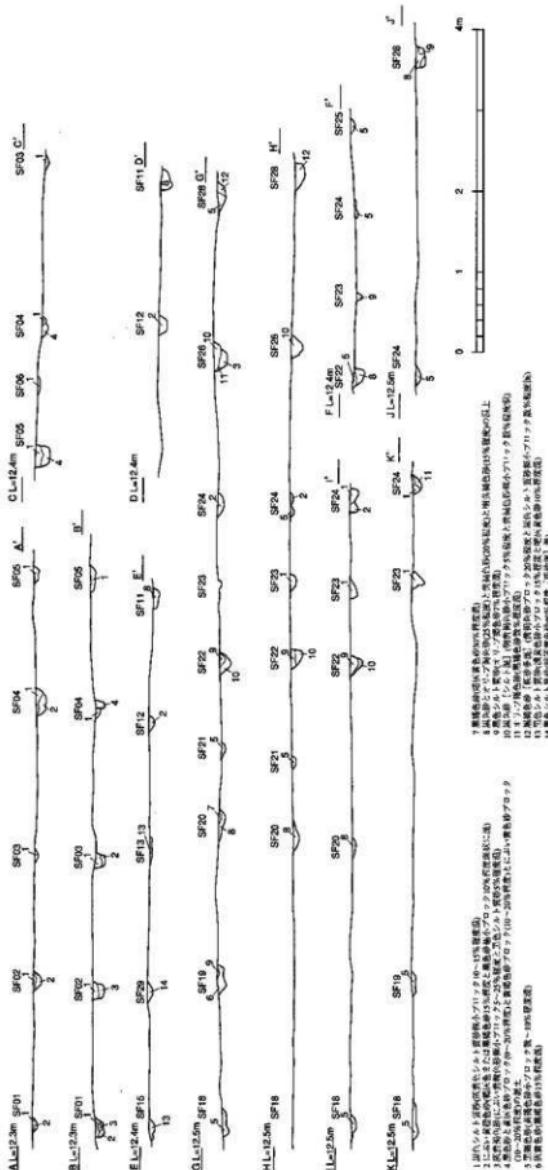
図版9 構造図(7)(A地区SD01)



図版10 造構図 (8) (A地区古代、一部弥生・古墳時代含む)

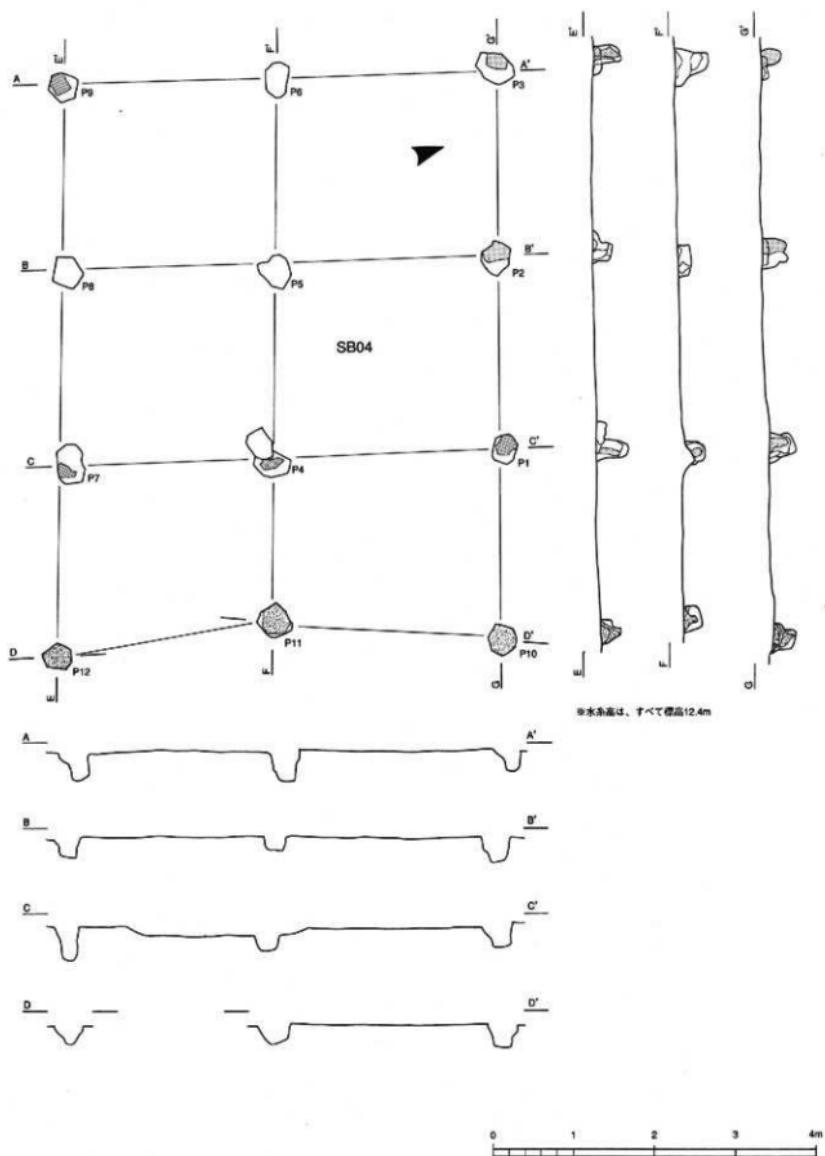


図版11 遺構図 (9) (A地区古代)

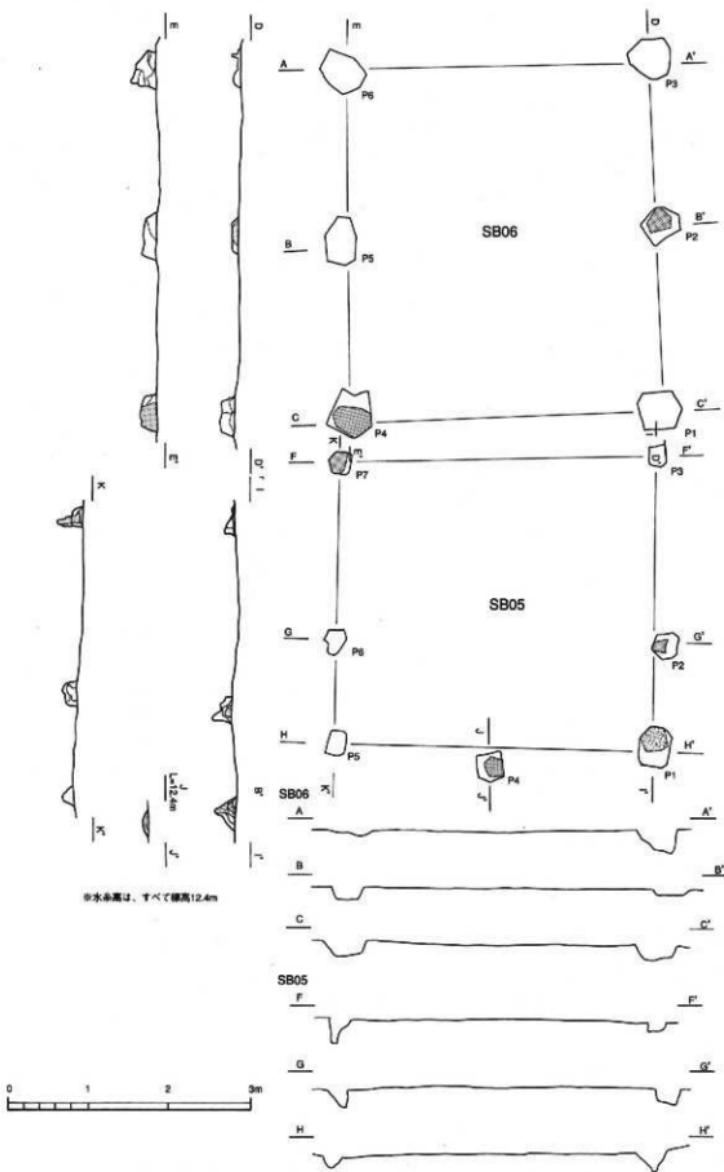


図版12 遺構図 (10) (A地区古代)

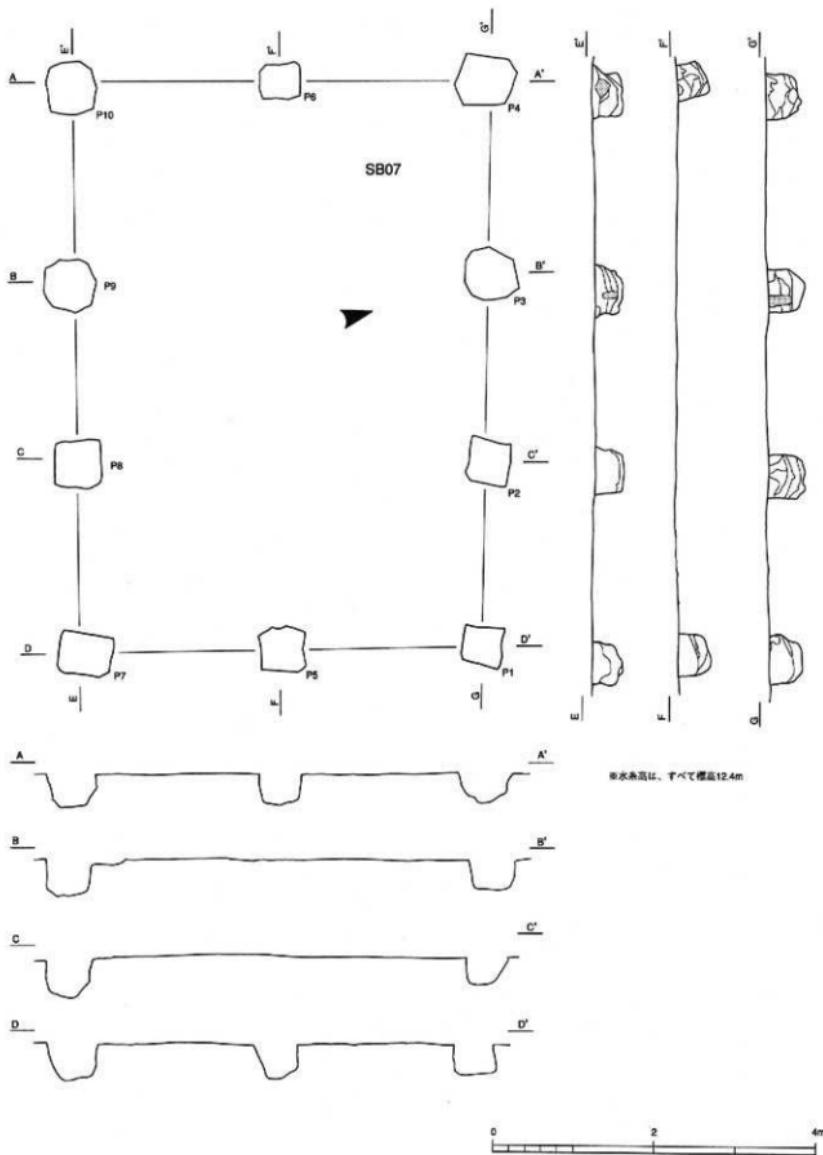
1. 屋内シートを設置したシート床板の上に、アーチ型の柱頭を有する柱頭柱。2. リブ付の柱頭柱。3. リブ付の柱頭柱。4. リブ付の柱頭柱。5. リブ付の柱頭柱。6. リブ付の柱頭柱。7. リブ付の柱頭柱。8. リブ付の柱頭柱。9. リブ付の柱頭柱。10. リブ付の柱頭柱。11. リブ付の柱頭柱。12. リブ付の柱頭柱。13. リブ付の柱頭柱。14. リブ付の柱頭柱。15. リブ付の柱頭柱。16. リブ付の柱頭柱。17. リブ付の柱頭柱。18. リブ付の柱頭柱。19. リブ付の柱頭柱。20. リブ付の柱頭柱。21. リブ付の柱頭柱。22. リブ付の柱頭柱。23. リブ付の柱頭柱。24. リブ付の柱頭柱。25. リブ付の柱頭柱。26. リブ付の柱頭柱。27. リブ付の柱頭柱。28. リブ付の柱頭柱。29. リブ付の柱頭柱。30. リブ付の柱頭柱。31. リブ付の柱頭柱。32. リブ付の柱頭柱。33. リブ付の柱頭柱。34. リブ付の柱頭柱。35. リブ付の柱頭柱。



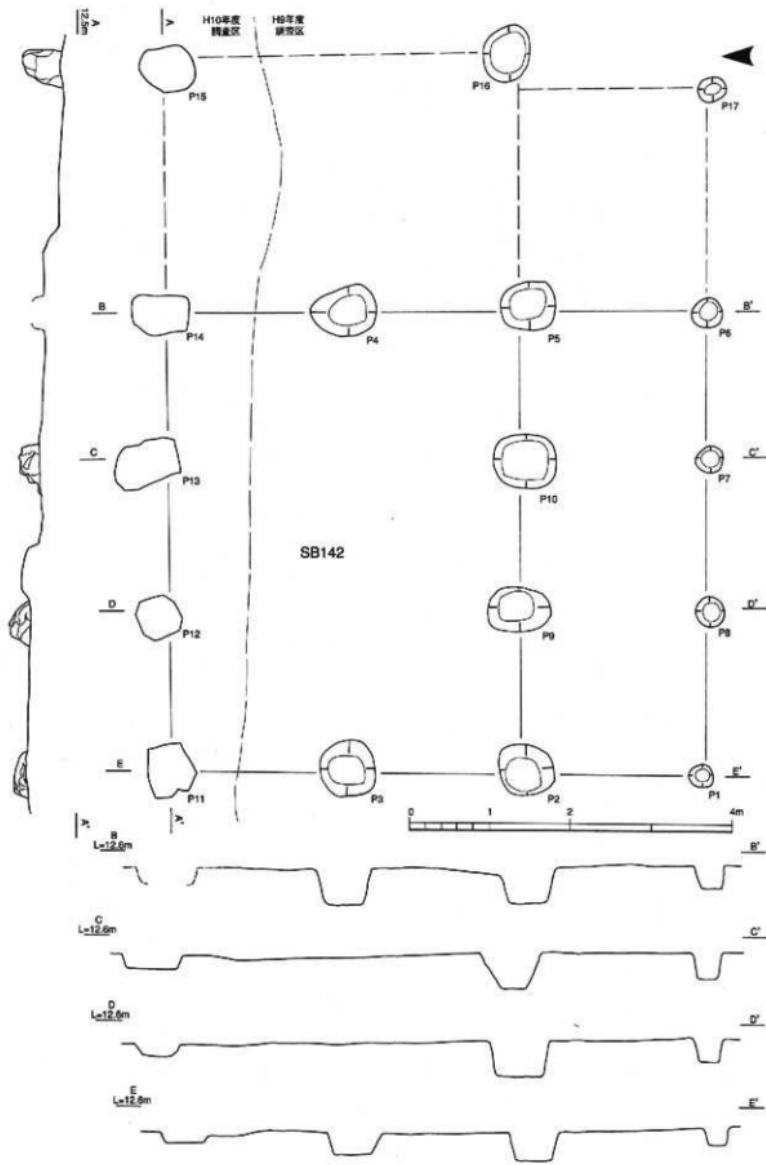
図版13 遺構図 (11) (A地区古代)



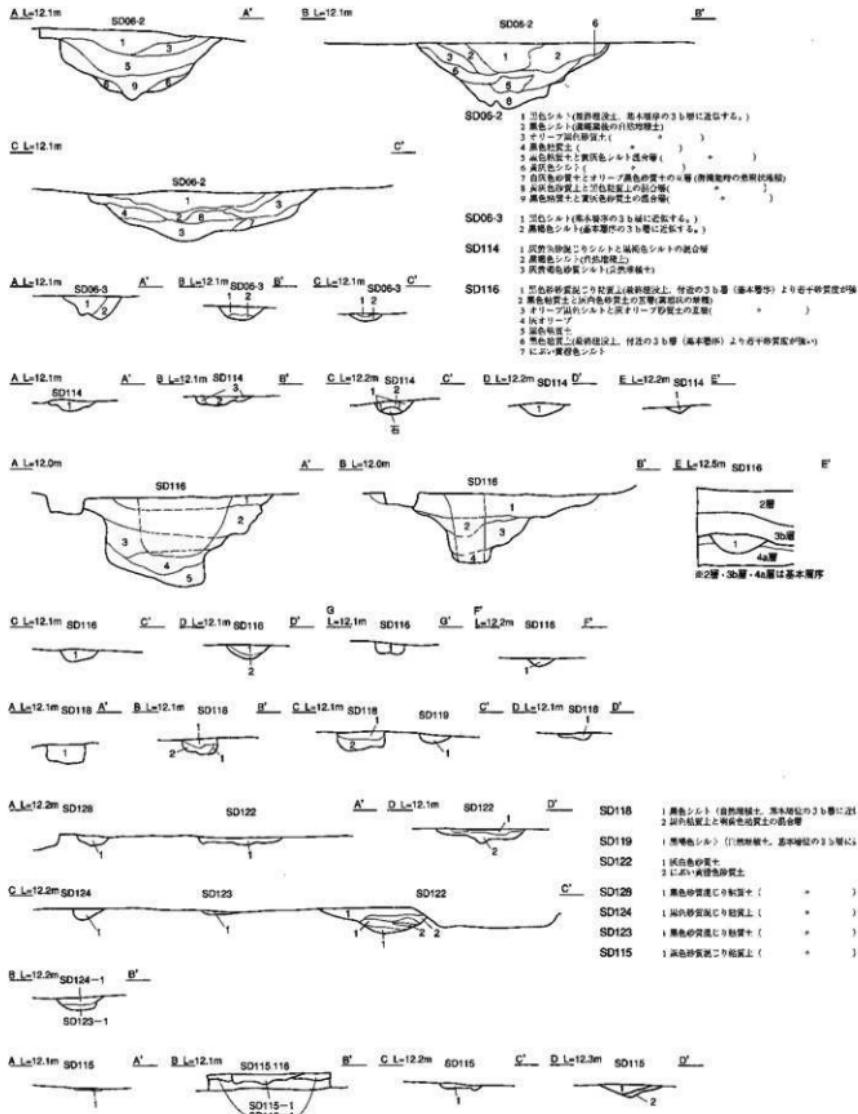
図版14 遺構図 (12) (A地区古代)



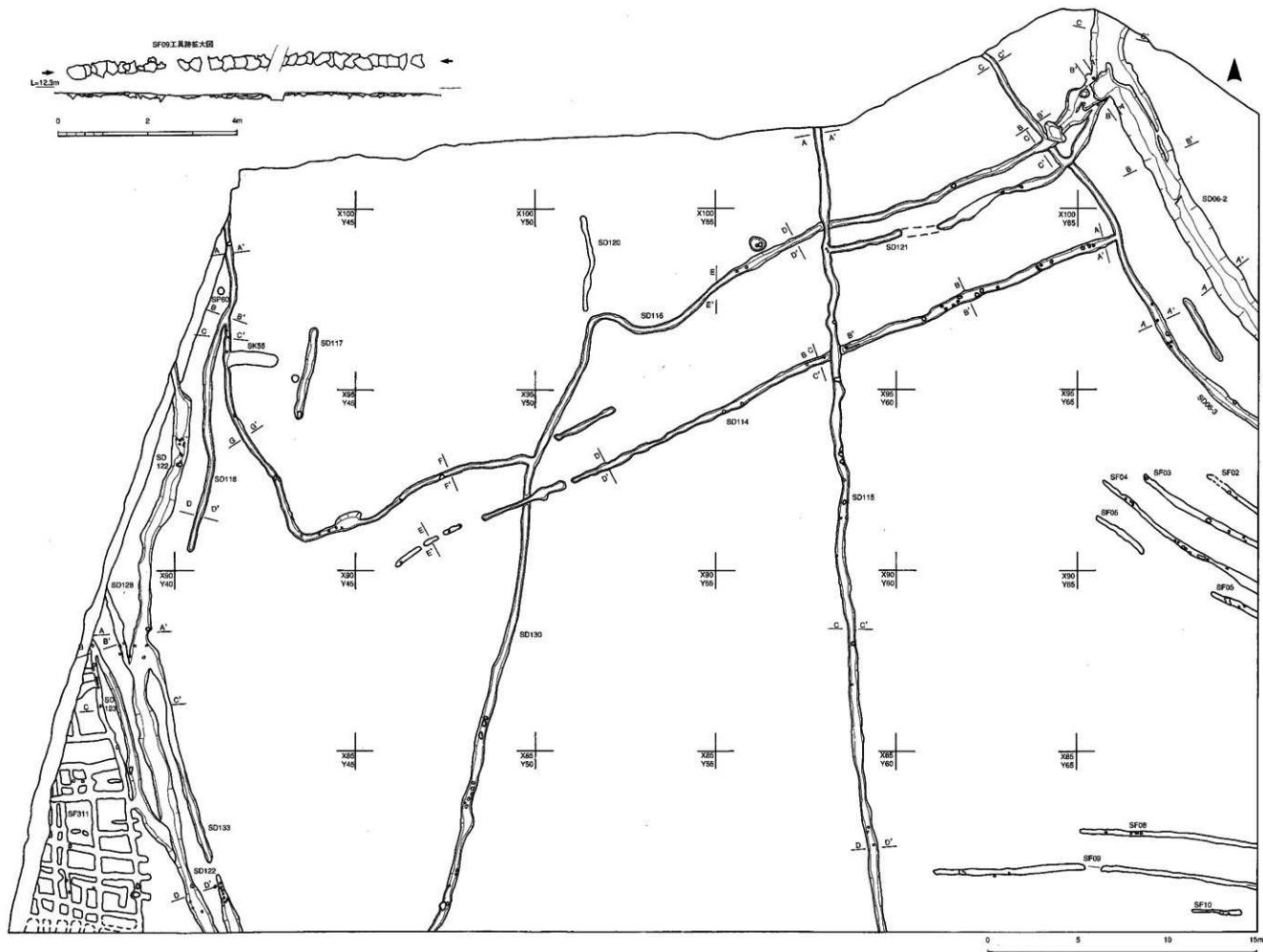
図版15 遺構図 (13) (A地区古代)



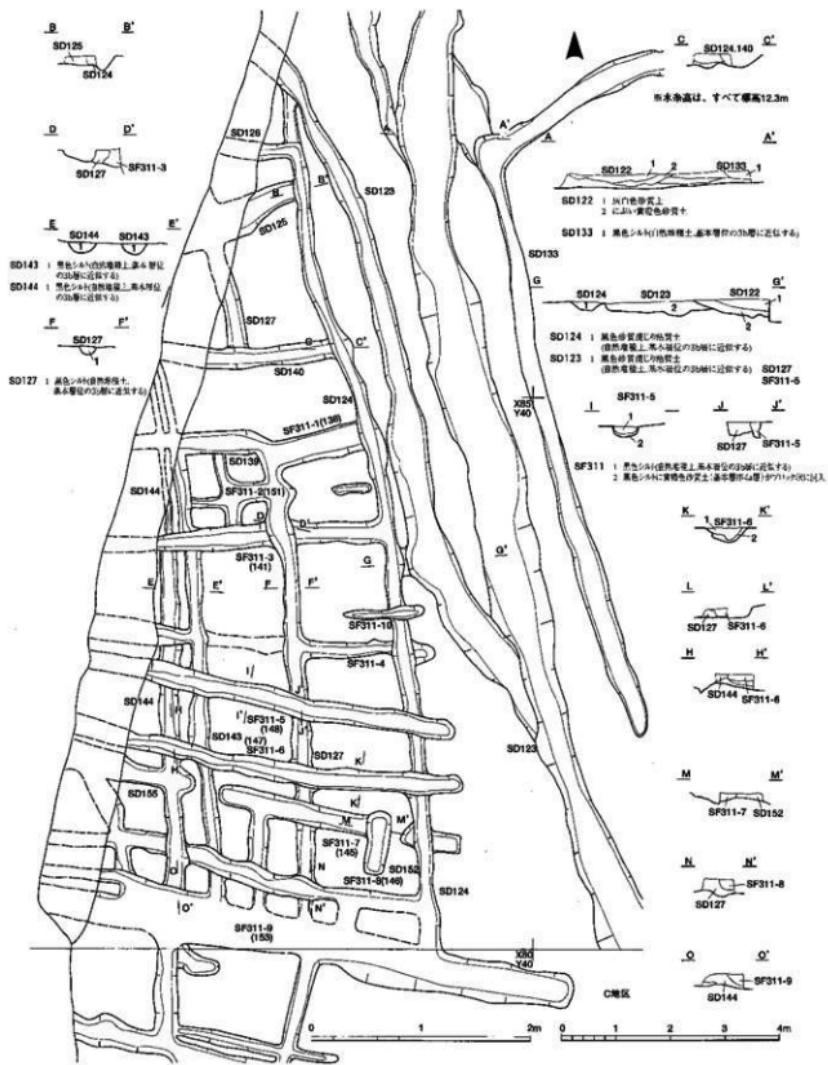
図版16 遺構図 (14) (A地区古代)



図版17 遺構図 (15) (B地区古代)

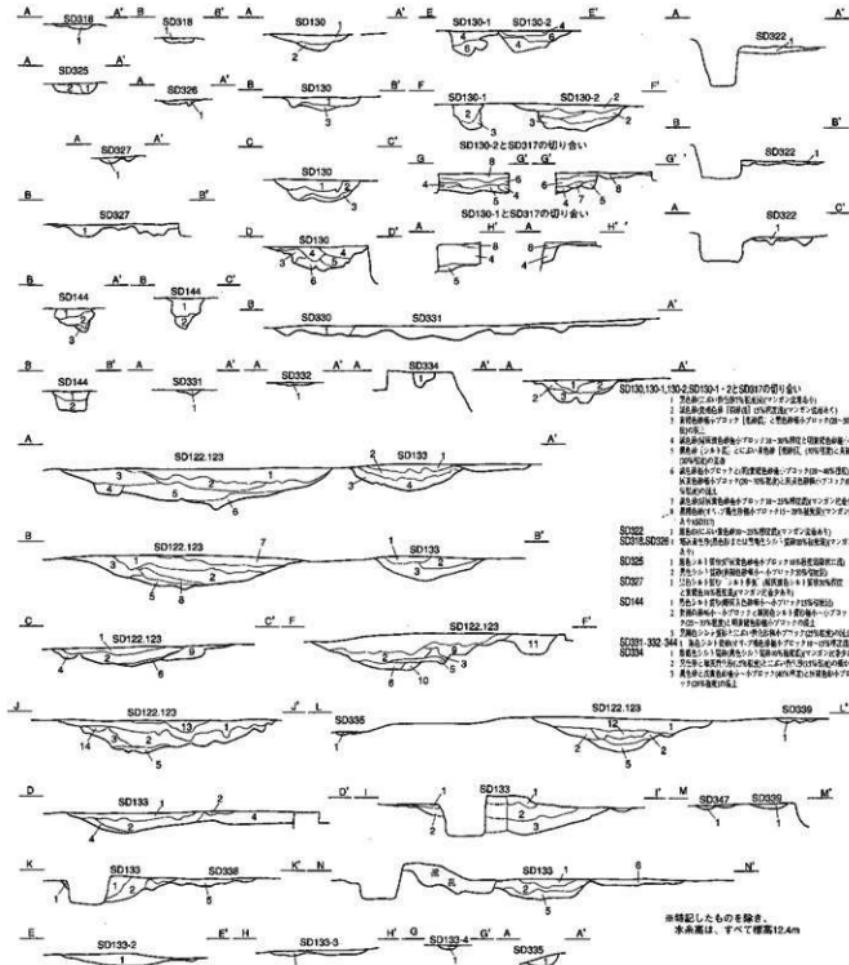


图版18 造構図(16)(B地区古代)



*SF311-8特にに黄土を含む土壌の層+底盤内に黑色シルトを含む土壌が複数で存在する。例の1つは層厚に比べて底盤内に含む部分や底盤上の堆积方式などで判別した。このため切り抜いて作図をせず底盤上に記してある。付記しない。

図版19 遺構図 (17) (B地区古代)



SD300-331 1 黒色シルト質粘土質頁岩(薄片小・小ブリック20~30%程度)に互い頁岩層小ブリック2~20%程度のSD330#や明色

SD331 1 黄褐色・淡褐色30%程度と暗褐色30%程度のSD331#

2 に互い黄褐色(薄緑)・暗褐色30%程度のSD331#

3 黄褐色シルト質頁岩(薄片小・小ブリック10~20%程度)と暗褐色シルト質頁岩(30%程度)のSD331#

4 黄褐色シルト質頁岩(薄片小・小ブリック10~20%程度)と暗褐色シルト質頁岩(30%程度)のSD331#

5 雜灰岩質シルト質頁岩(薄片小・小ブリック10~20%程度)と暗褐色シルト質頁岩(30%程度)のSD331#

6 雜灰岩質シルト質頁岩(薄片小・小ブリック10~20%程度)と暗褐色シルト質頁岩(30%程度)のSD331#

7 黄褐色シルト質頁岩(薄片小・小ブリック10~20%程度)と暗褐色シルト質頁岩(30%程度)のSD331#

8 黃褐色シルト質頁岩(薄片小・小ブリック10~20%程度)のSD331#

9 側面下部頁岩層小ブリック20~30%程度と黑色細粒小ブリック(10%程度)とに互い黄色細粒小ブリック(10%程度)に互い黄色細粒小ブリック(10%程度)のSD330#

10 黄褐色もしくは褐色シルト質頁岩(薄片小・小ブリック10~20%程度)と黑色細粒小ブリック(10%程度)に互い黄色細粒小ブリック(10~20%程度)のSD330#

11 黄褐色もしくは褐色シルト質頁岩(薄片小・小ブリック10~20%程度)と黑色細粒小ブリック(10~20%程度)に互い黄色細粒小ブリック(10~20%程度)のSD330#

12 オリーブ色細粒シルト質頁岩(薄片小・小ブリック10~20%程度)と黑色細粒シルト質頁岩(薄片小・小ブリック10~20%程度)のSD330#

13 淡褐色シルト質頁岩(薄片小・小ブリック10~20%程度)と黑色細粒シルト質頁岩(薄片小・小ブリック10~20%程度)のSD330#

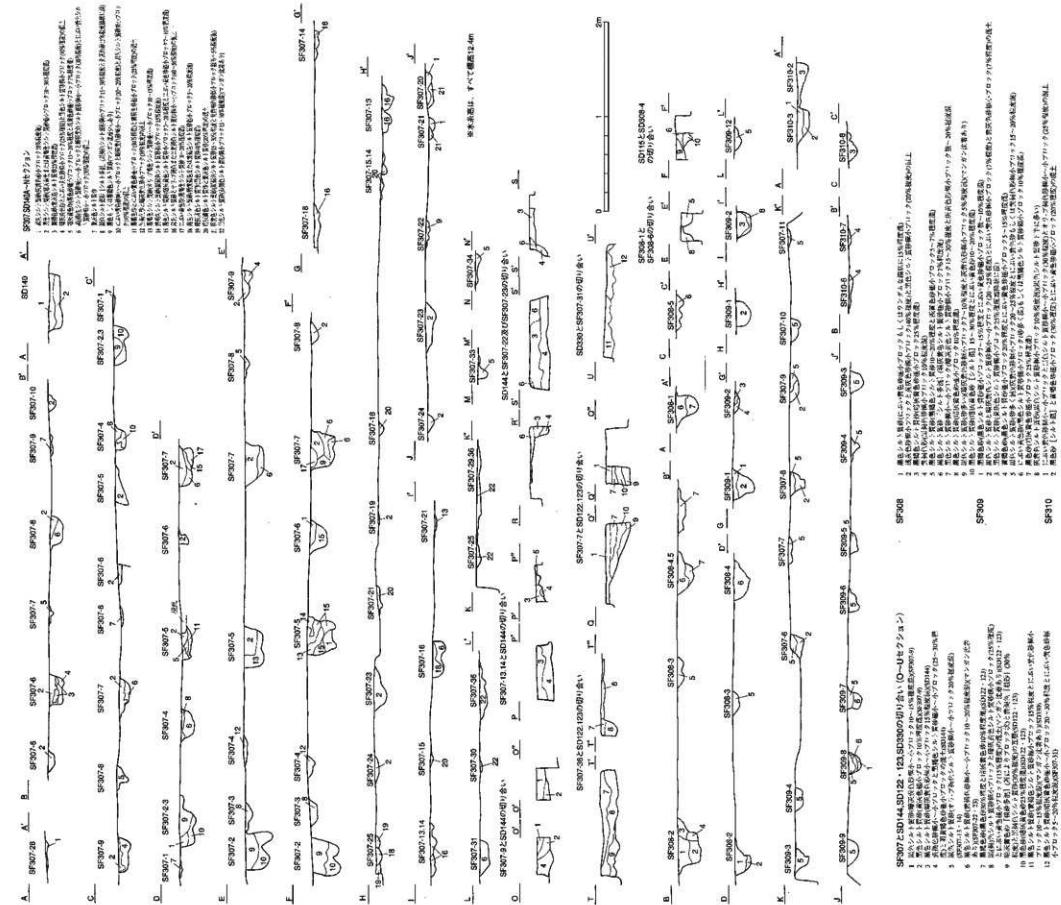
14 黑褐色シルト質頁岩(薄片小・小ブリック10~20%程度)に互い黄色細粒小ブリック10~20%程度のSD330#

未記載したものと除き、
水系高さはすべて標高24m

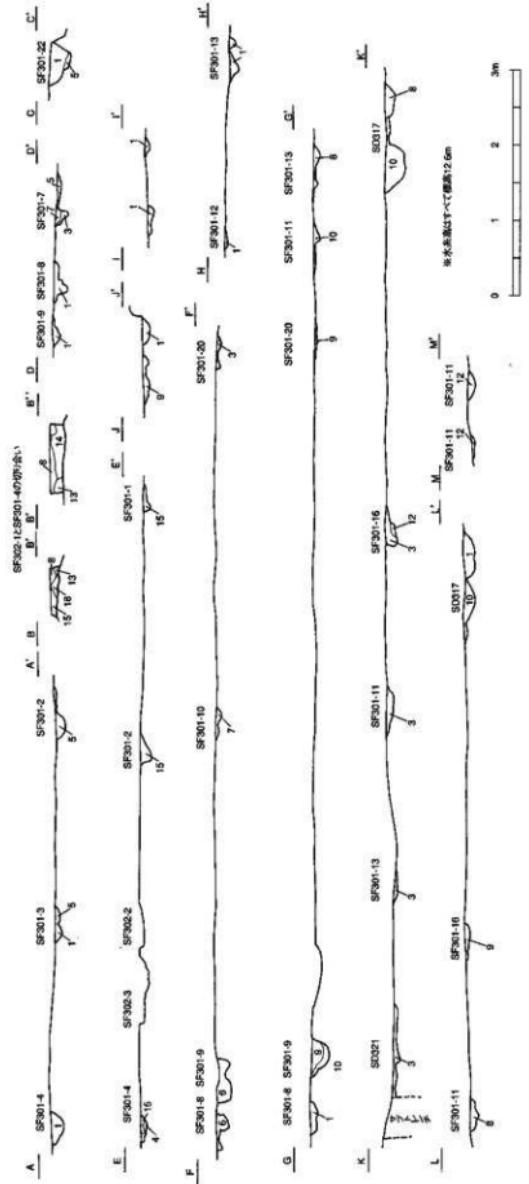
図版20 造構図 (18) (B地区古代)



図版21 遺構図(19)(C地区古代)

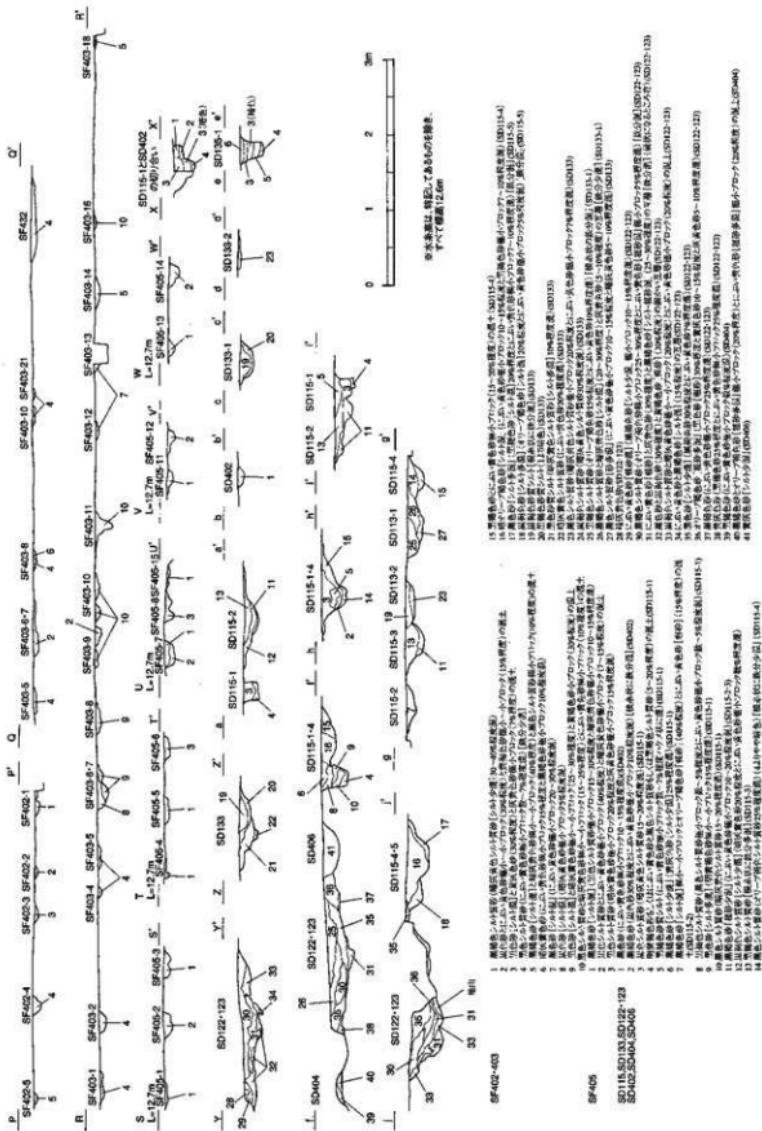


図版22 遺構図 (20) (C地区古代)



図版23 透構図 (21) (C地区古代)

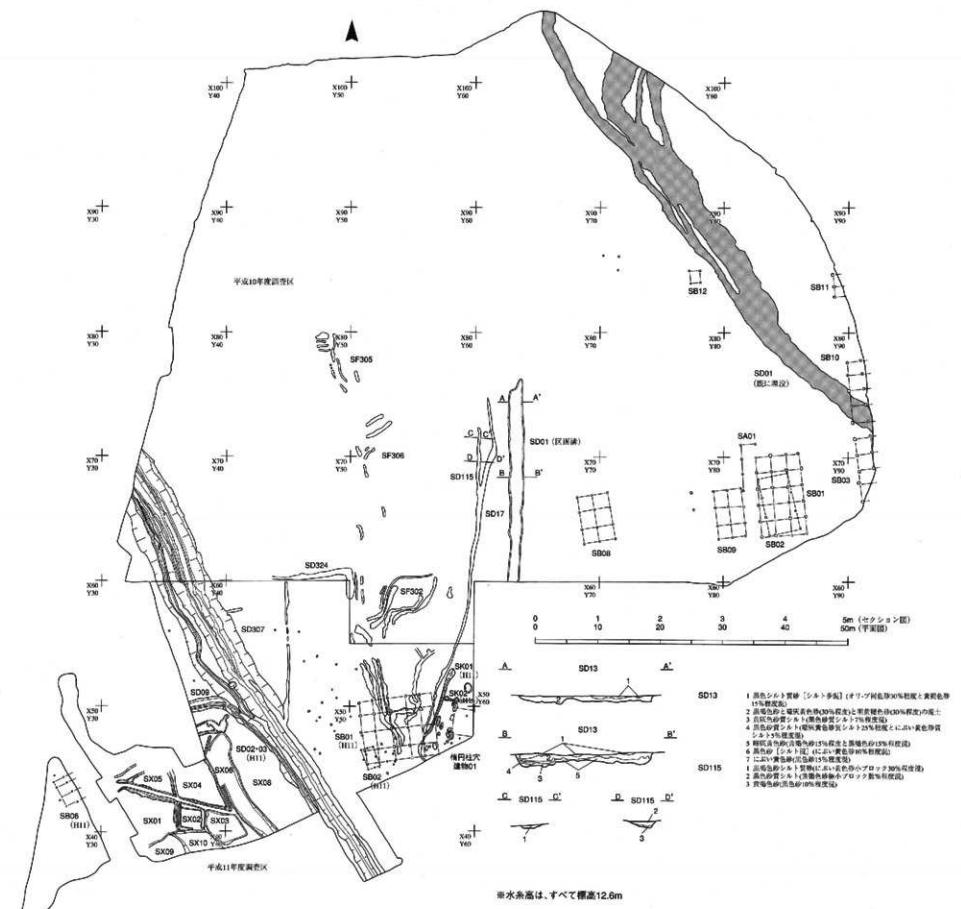
1. 三日月形のアーチ状の斜面を有する複数の層をもつ複数の窓状のアーチ状の窓孔に、淡い褐色の薄いトーア層を含む。L1. 二段の
2. 褐色のトーア層。L2. ブラックトーア層。
3. 黄褐色に変色した薄いトーア層。
4. 厚い褐色のトーア層。
5. 厚い褐色のトーア層。
6. 厚い褐色のトーア層。
7. 厚い褐色のトーア層。
8. 厚い褐色のトーア層。
9. 厚い褐色のトーア層。
10. 厚い褐色のトーア層。
11. 厚い褐色のトーア層。
12. 厚い褐色のトーア層。
13. 厚い褐色のトーア層。
14. 厚い褐色のトーア層。
15. 厚い褐色のトーア層。
16. 厚い褐色のトーア層。
17. 厚い褐色のトーア層。
18. 厚い褐色のトーア層。
19. 厚い褐色のトーア層。



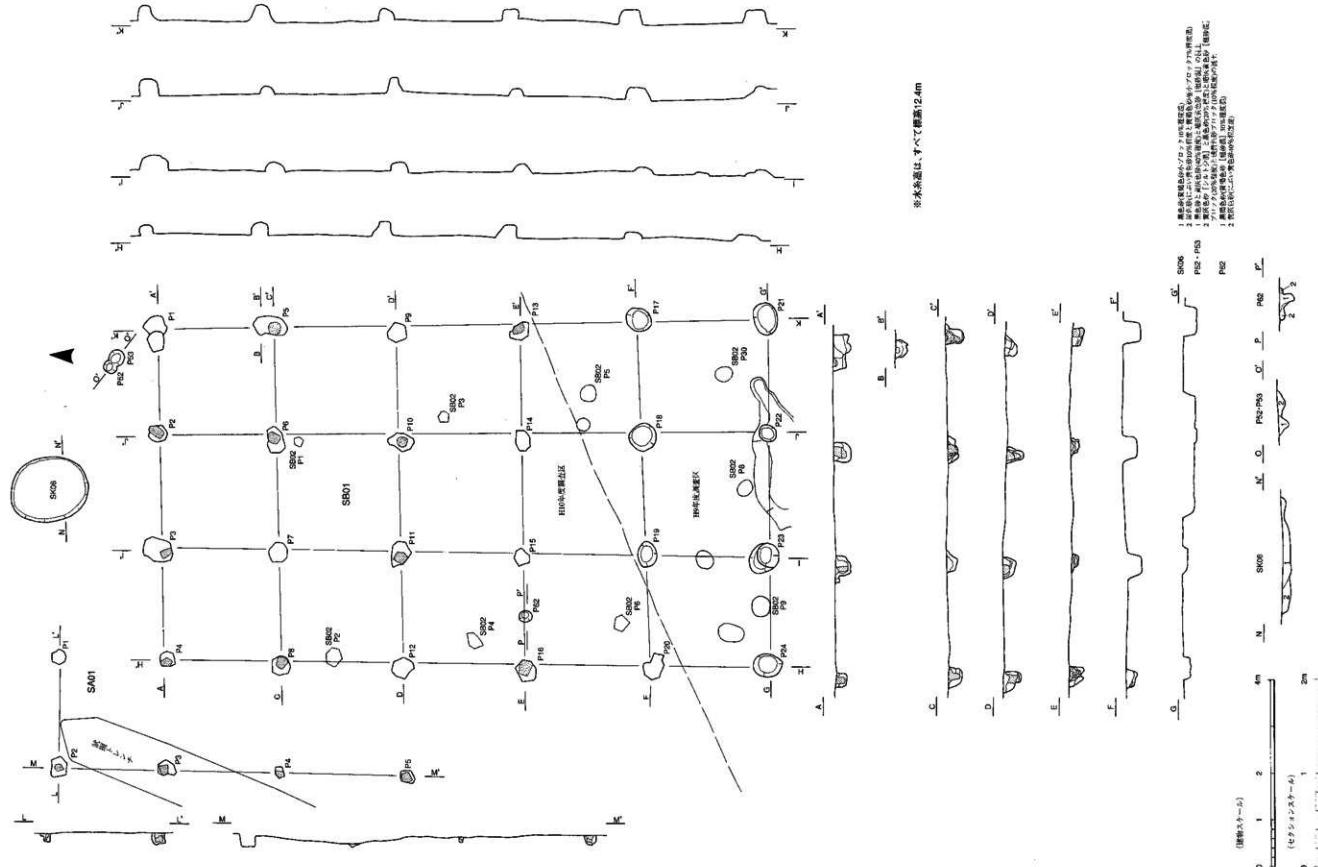
図版24 遺構図 (22) (D地区古代)



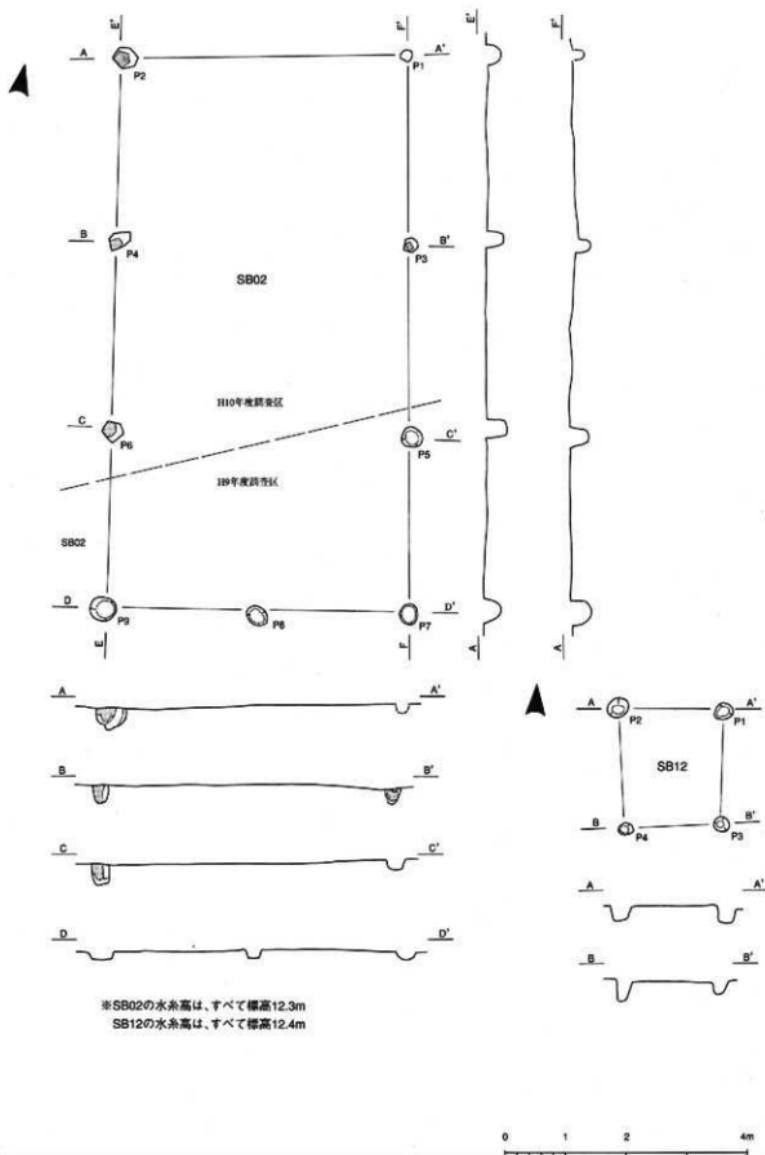
図版25 遺構図 (23) (D地区古代)



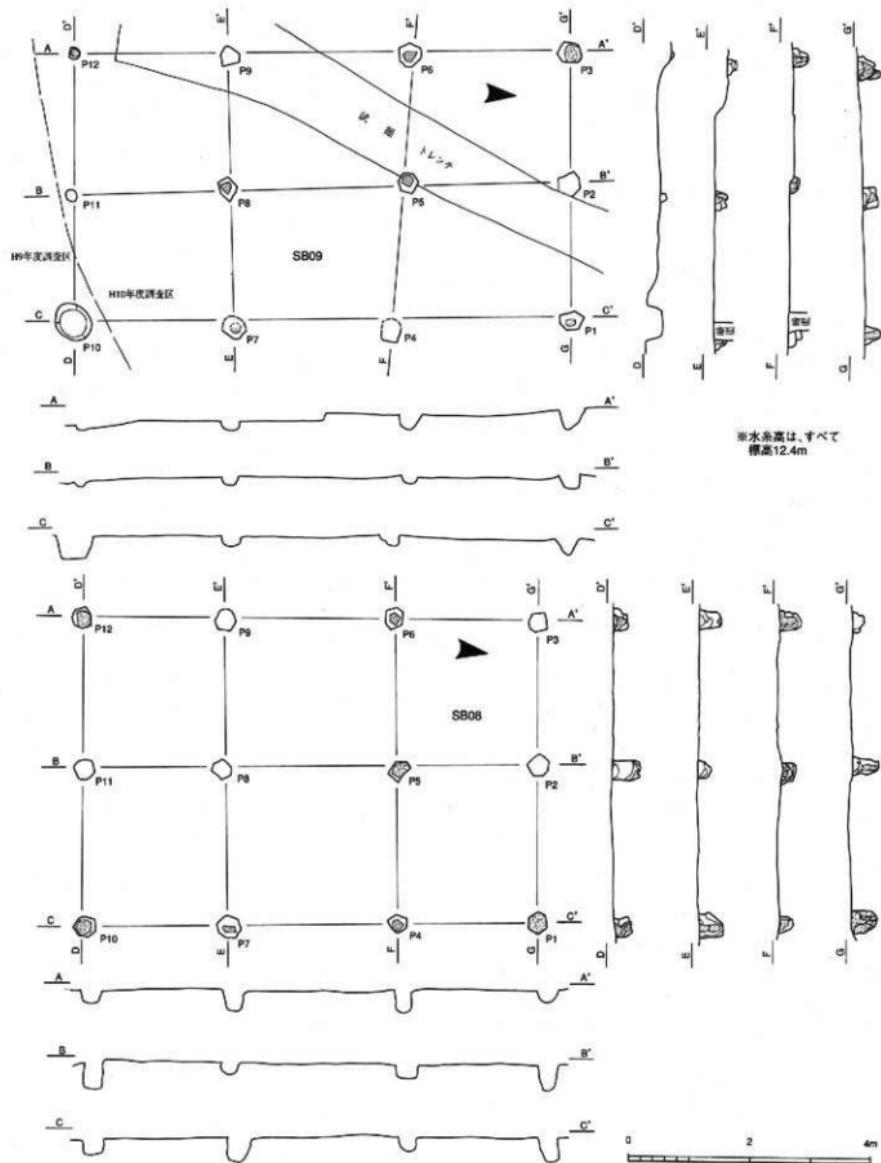
図版26 遺構図(24)(中世)



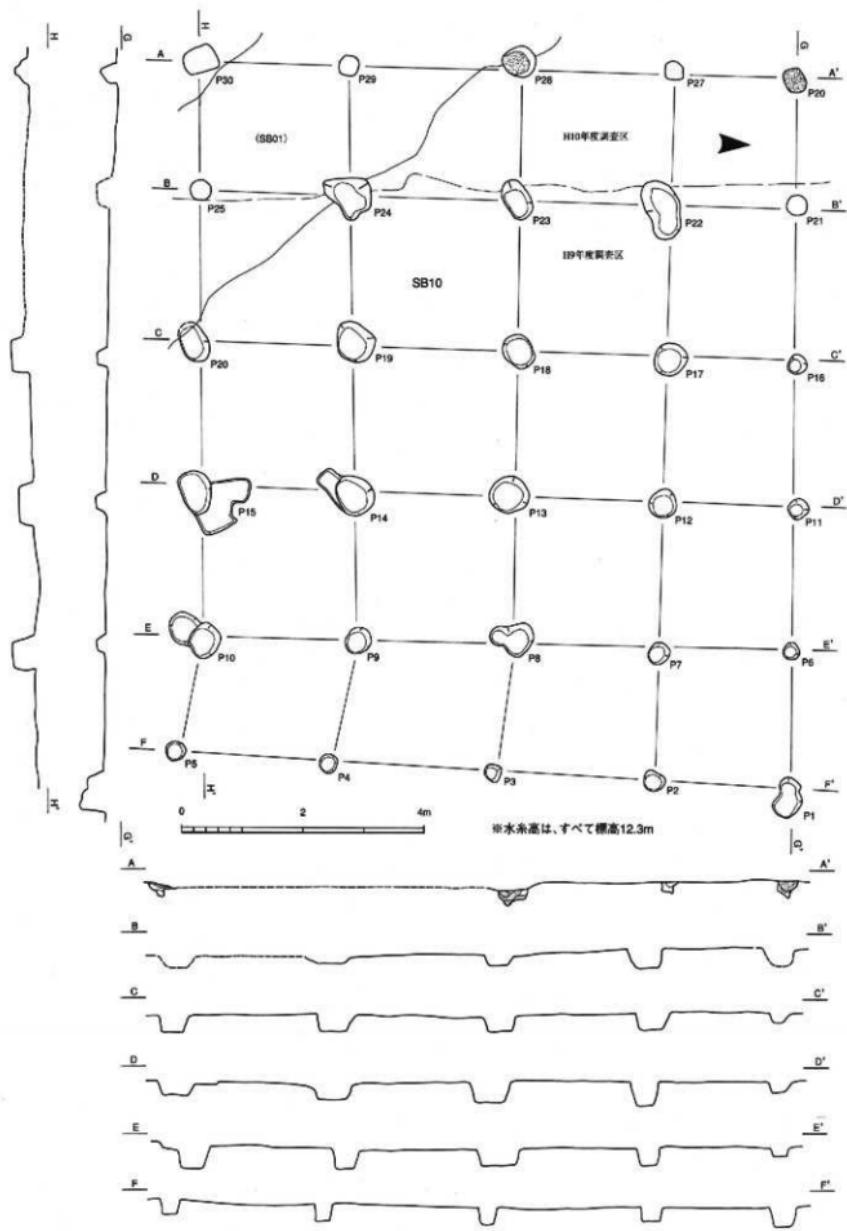
図版27 造構図(25)(中世)



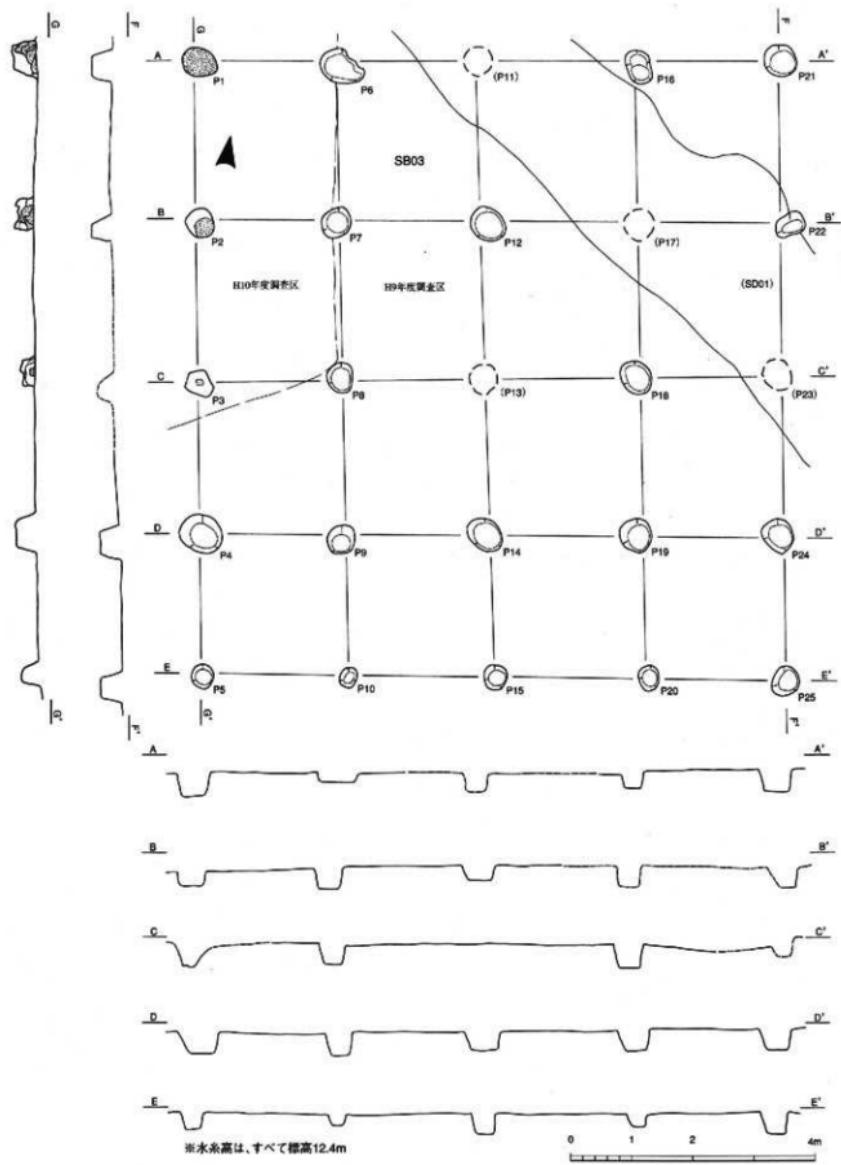
図版28 造構図 (26) (中世)



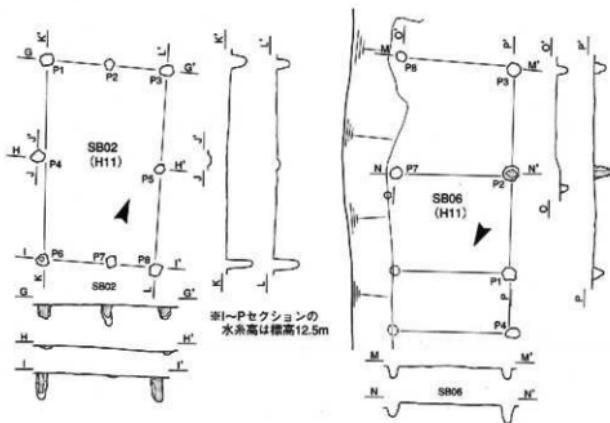
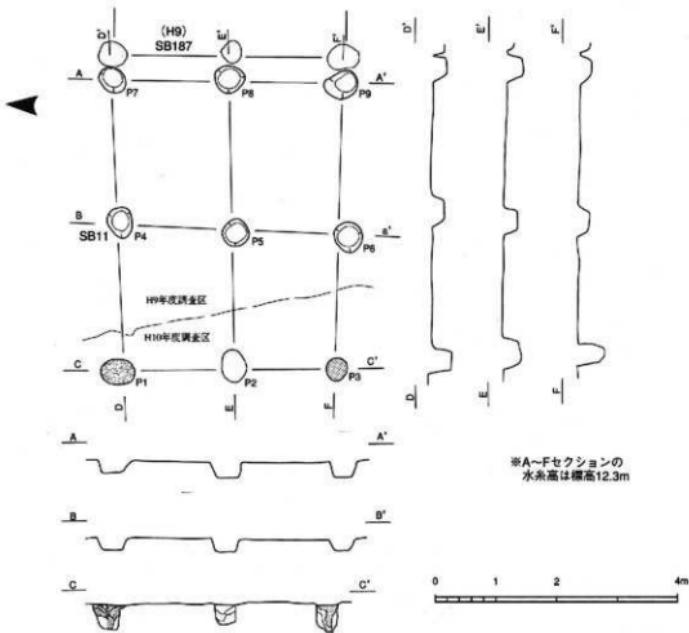
図版29 造構図 (27) (中世)



図版30 遺構図 (28) (中世)

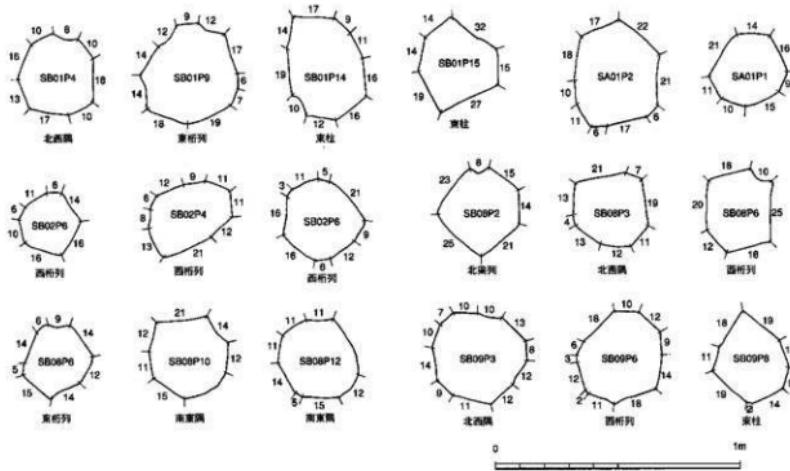


図版31 遺構図 (29) (中世)

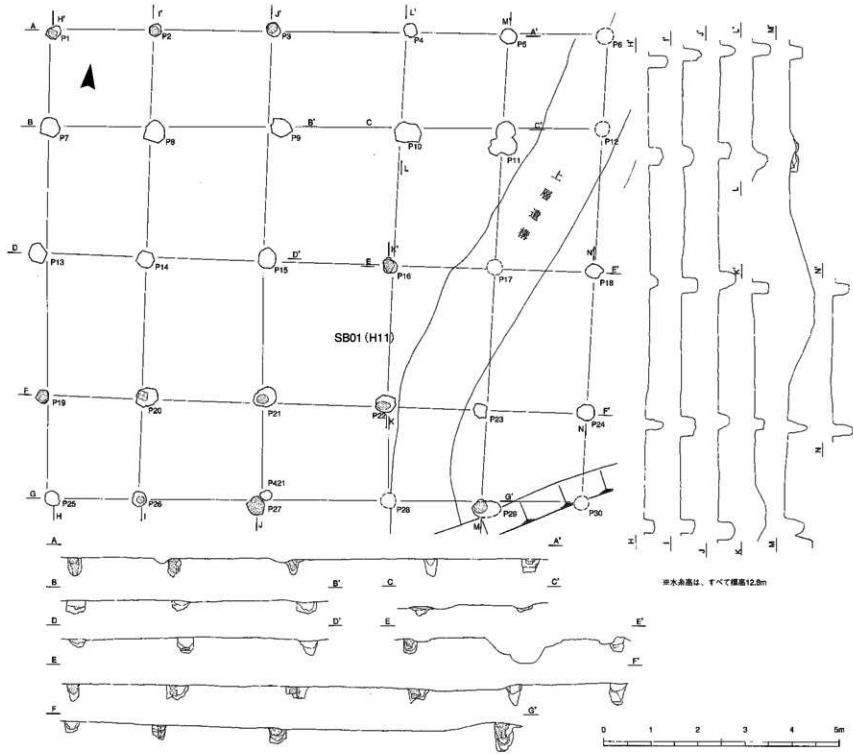


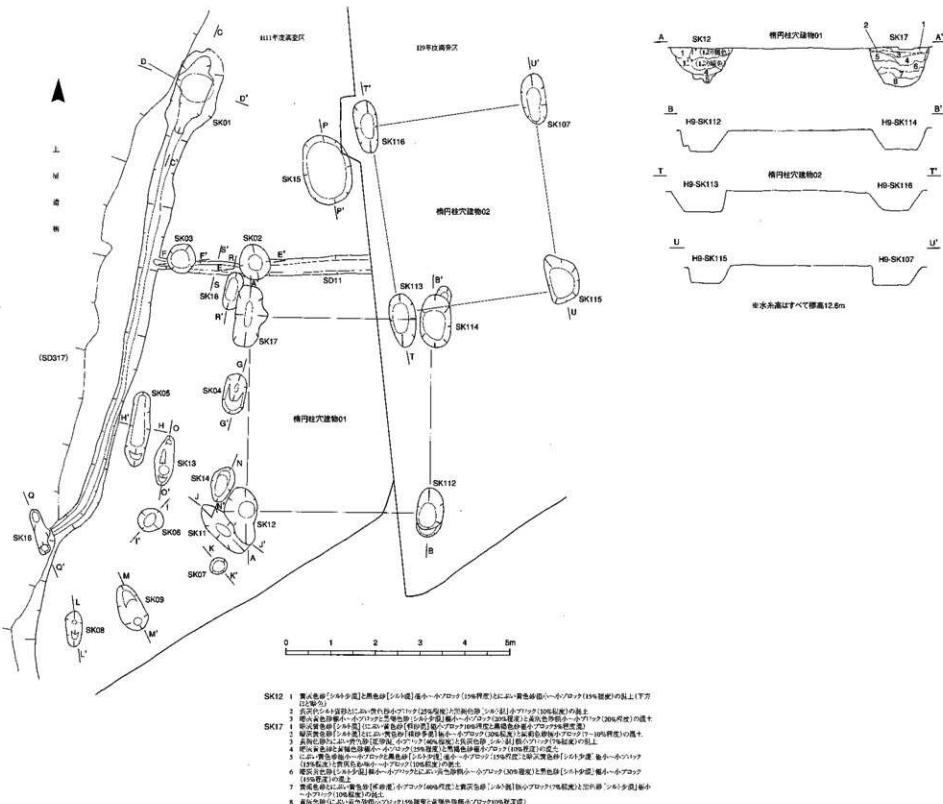
図版32 造構図 (30) (中世)

柱穴にみられる掘削道具痕跡

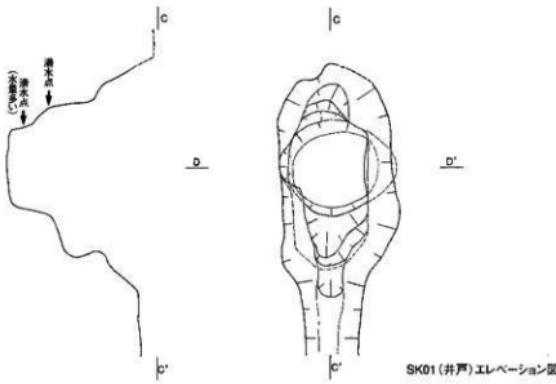


図版33 遺構図 (31) (中世)

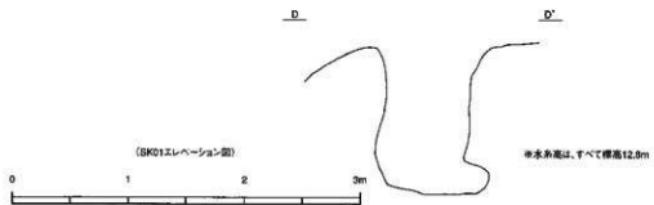




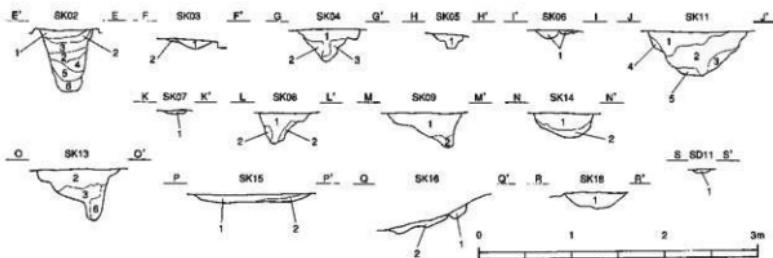
図版35 造構図 (33) (中世)



SK01 (井戸) エレベーション図

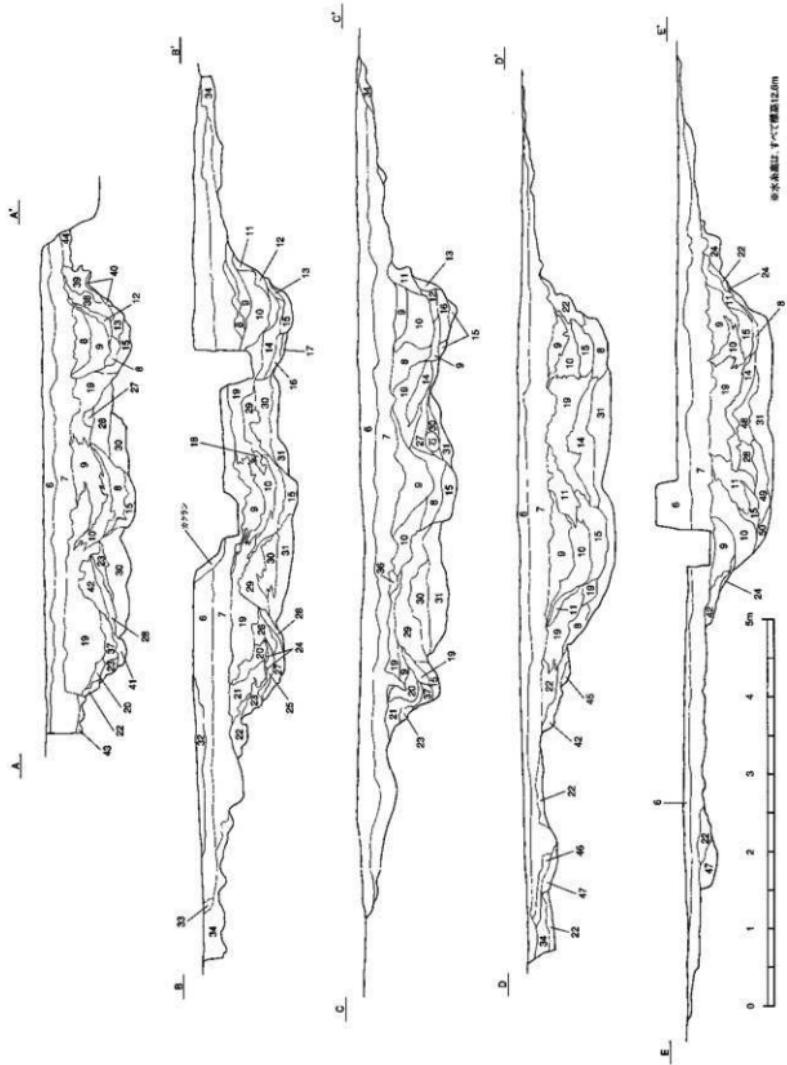


涌水位置は、すべて標高12.0m



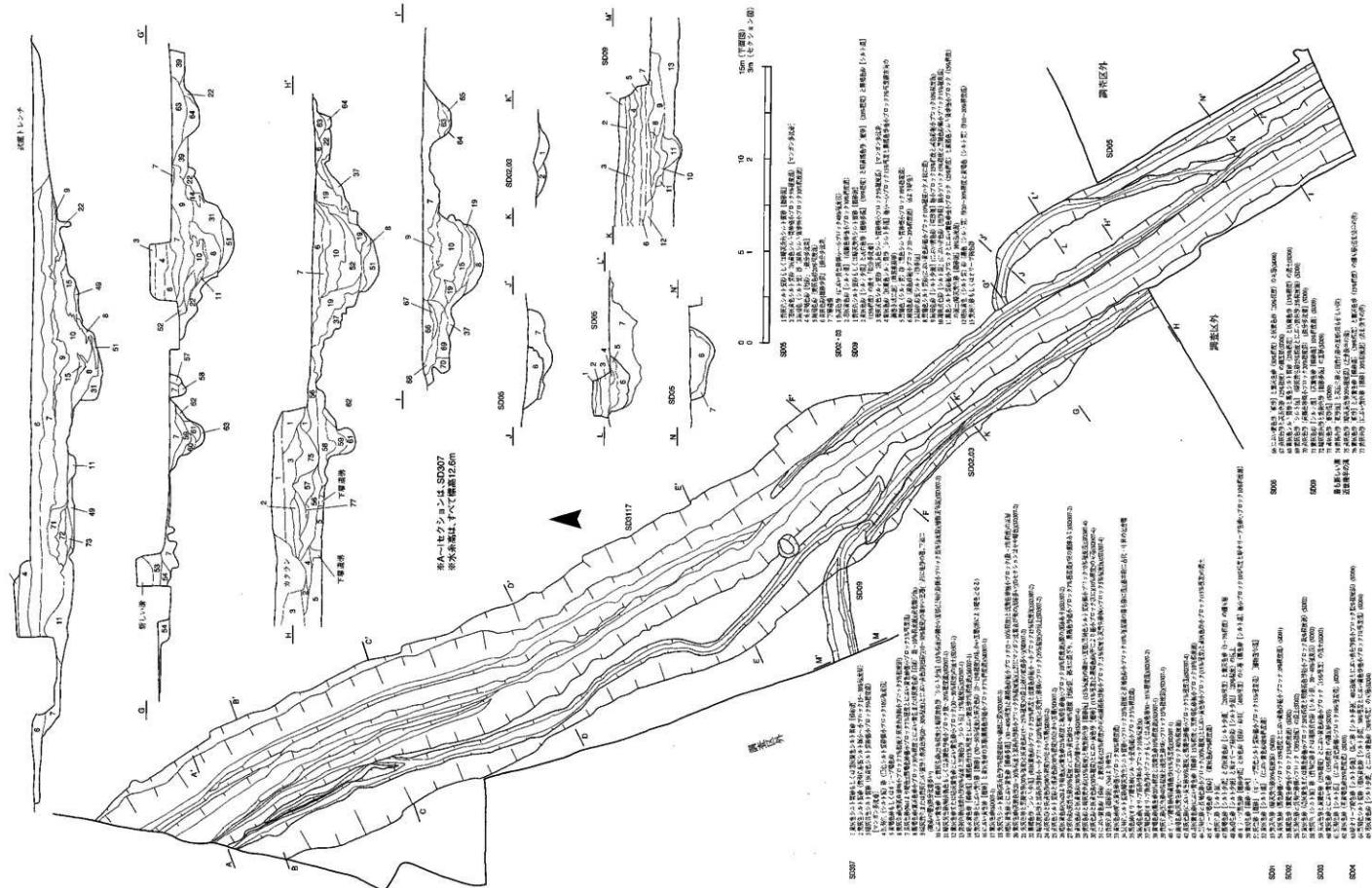
- | | | | |
|---------------------|---|--|---|
| SK02 | 1 黒色帶(黒色帶・シート岩) 厚小ブロック15cm程度と黒色砂巣小ブロック10%
充填物
2 灰色内部と黒色帶(シート岩) 厚小・小ブロック(30%~40%程度)と薄灰色「シート岩」 | SK03, SK04, SK05, SK06, SK07, SK08, SK09, SK10, SK11, SK12, SK13, SK14, SK15, SK16, SK17, SK18, SK19 | 1 黒色帶(黒色帶・シート岩) 厚小ブロック(15cm程度)
2 白色砂巣小・薄灰色「シート岩」(厚小・ブロック(15cm程度)とに白い薄灰色砂・薄灰色シート岩) 厚小・ブロック(15cm程度)の上
3 薄灰色シート岩層間に白い薄灰色・薄灰色「シート岩」(厚小・ブロック(15cm程度)とに白い薄灰色) |
| SK03 | 3 黒灰色帶(黒色帶・シート岩) 厚小ブロック(15cm程度)と薄黑色帶・シート岩「シート岩」(厚小・ブロック(15cm程度)とに白い薄灰色・薄灰色「シート岩」(厚小・ブロック(15cm程度)とに白い薄灰色)) | | 4 灰色砂
5 深灰色帶(薄灰色・シート岩) 厚小・ブロック(15cm程度)と薄黑色帶・シート岩「シート岩」(厚小・ブロック(15cm程度)とに白い薄灰色・薄灰色「シート岩」(厚小・ブロック(15cm程度)とに白い薄灰色)) |
| SK04 | 6 黒灰色帶(シート岩・シート岩) 厚小・ブロック(15cm程度)
(シート岩) 厚小・ブロック(15cm程度)と薄灰色帶・シート岩「シート岩」(厚小・ブロック(15cm程度)とに白い薄灰色・薄灰色「シート岩」(厚小・ブロック(15cm程度)とに白い薄灰色)) | | 6 黑灰色帶(シート岩) 厚小・ブロック(15cm程度)と薄灰色帶・シート岩「シート岩」(厚小・ブロック(15cm程度)とに白い薄灰色・薄灰色「シート岩」(厚小・ブロック(15cm程度)とに白い薄灰色)) |
| SK05~07, SD11, SK08 | 7 黒灰色帶(薄灰色・シート岩) 厚小・ブロック(15cm程度)と薄黑色帶・シート岩「シート岩」(厚小・ブロック(15cm程度)とに白い薄灰色・薄灰色「シート岩」(厚小・ブロック(15cm程度)とに白い薄灰色)) | | 7 黑灰色帶(薄灰色・シート岩) 厚小・ブロック(15cm程度)と薄黑色帶・シート岩「シート岩」(厚小・ブロック(15cm程度)とに白い薄灰色・薄灰色「シート岩」(厚小・ブロック(15cm程度)とに白い薄灰色)) |
| | 8 黒灰色帶(シート岩) 厚小・ブロック(15cm程度)と薄黑色帶・シート岩「シート岩」(厚小・ブロック(15cm程度)とに白い薄灰色・薄灰色「シート岩」(厚小・ブロック(15cm程度)とに白い薄灰色)) | | 8 黒灰色帶(シート岩) 厚小・ブロック(15cm程度)と薄黑色帶・シート岩「シート岩」(厚小・ブロック(15cm程度)とに白い薄灰色・薄灰色「シート岩」(厚小・ブロック(15cm程度)とに白い薄灰色)) |

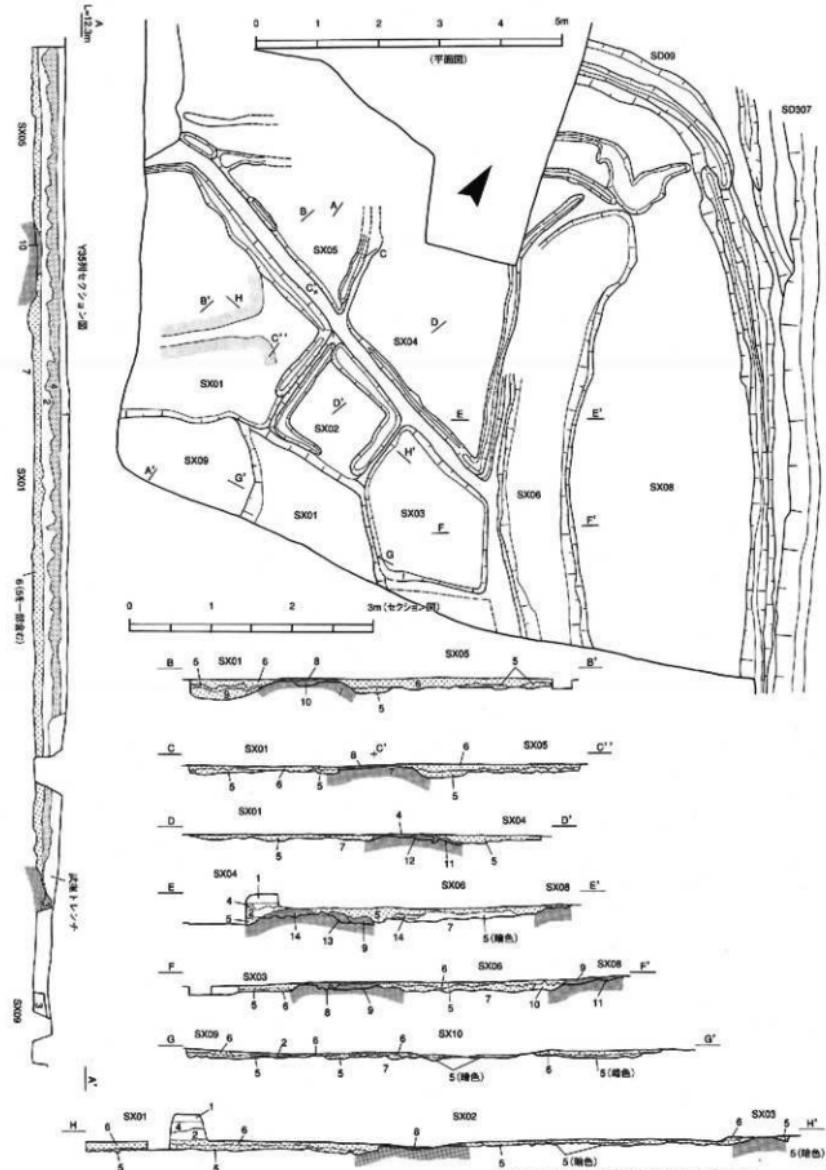
図版36 運構図 (34) (中世)



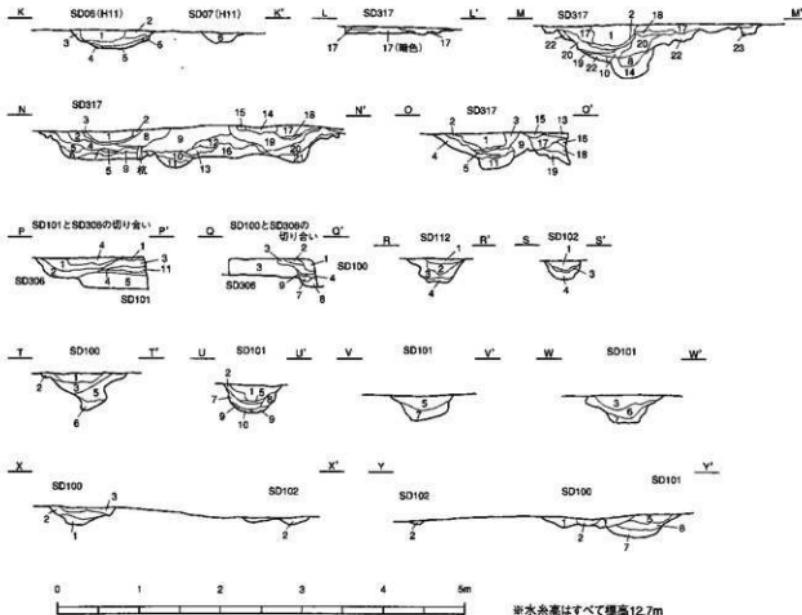
図版37 造構図 (35) (中世)

38 遺構図 (36) (中世)

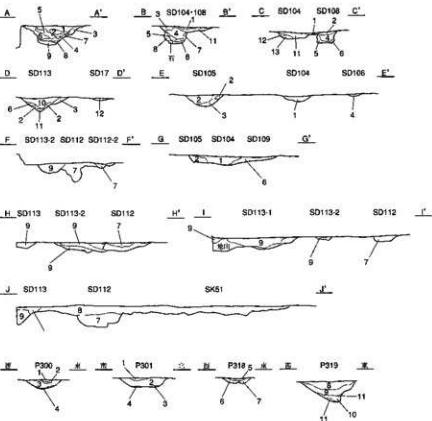
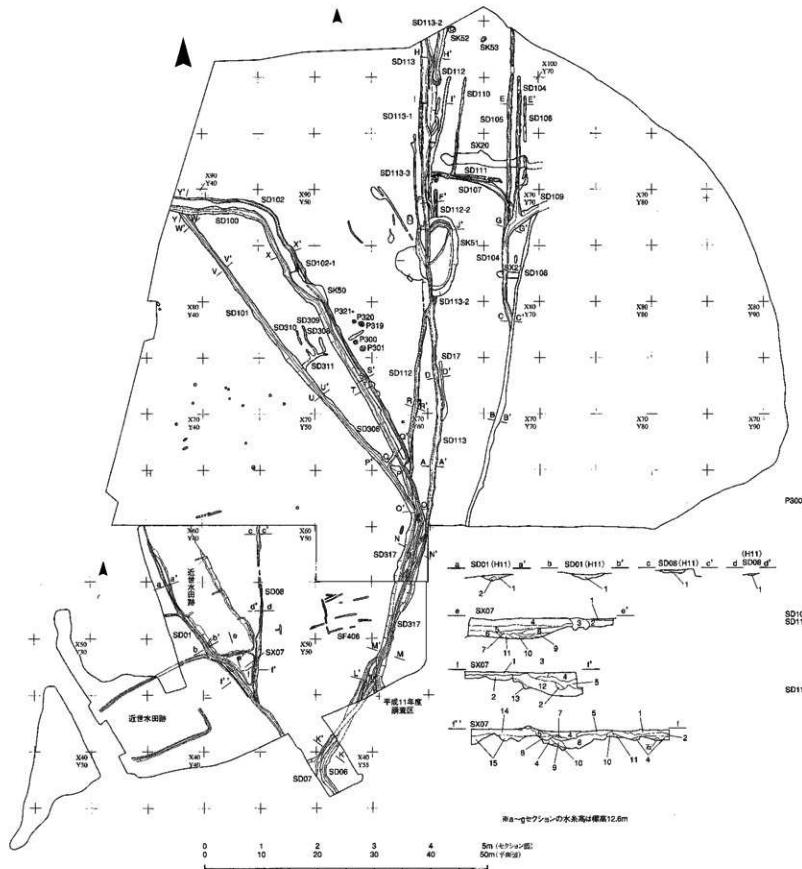




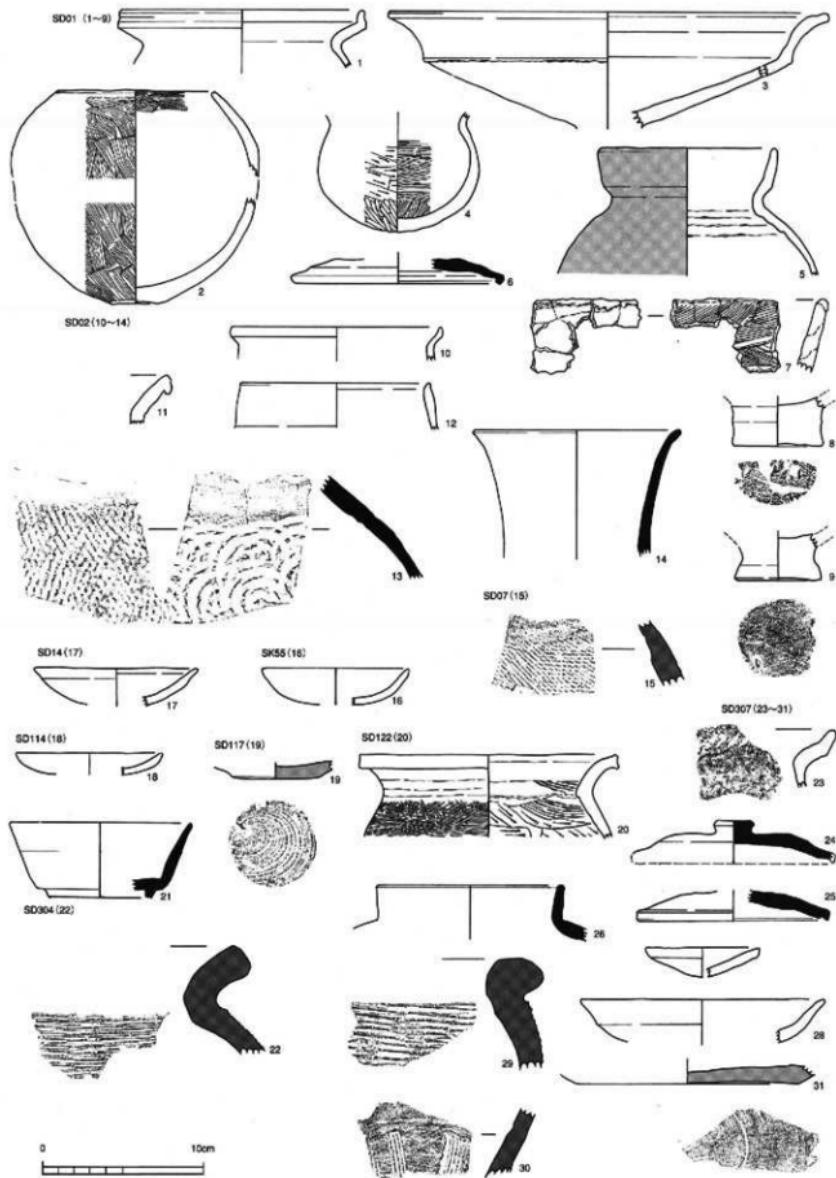
1. 案内柱頭（シカト装飾）(黒色シカト装飾柱小フック無底座)【マンゴー多辺形】
2. 黒色柱頭（シカト）(黒色シカト装飾柱小フック10%底座)～
3. 黑色柱頭（シカト）(黒色シカト装飾柱小フック10%底座)
4. 黑色柱頭（シカト）(黒色シカト装飾柱小フック無底座)～
5. 黑色柱頭（シカト）(黒色シカト装飾柱小フック15%底座)～
6. 黑色柱頭（シカト）(黒色シカト装飾柱小フック15%底座)～
7. 黑色柱頭（シカト）(黒色シカト装飾柱小フック15%底座)～
8. 黑色柱頭（シカト）(黒色シカト装飾柱小フック15%底座)～
9. 黑色柱頭（シカト）(黒色シカト装飾柱小フック15%底座)～
10. 黑色柱頭（シカト）(黒色シカト装飾柱小フック15%底座)～
11. 黑色柱頭（シカト）(黒色シカト装飾柱小フック15%底座)～
12. 黑色柱頭（シカト）(黒色シカト装飾柱小フック10-20%底座)～
13. 黑色柱頭（シカト）(黒色シカト装飾柱小フック10-20%底座)～
14. 黑色柱頭（シカト）(黒色シカト装飾柱小フック10-20%底座)～
- 日本古社の柱頭装飾
柱頭は、主に木造で、柱頭の形状は、丸柱頭、四角柱頭など多様である。
柱頭の高さは、一般的に5m程度である。
柱間の幅は、各セクションによって異なる。
柱頭の形状は、柱間によって異なり、丸柱頭や四角柱頭などの多様な形態がある。



図版40 遺構図 (38) (近世)

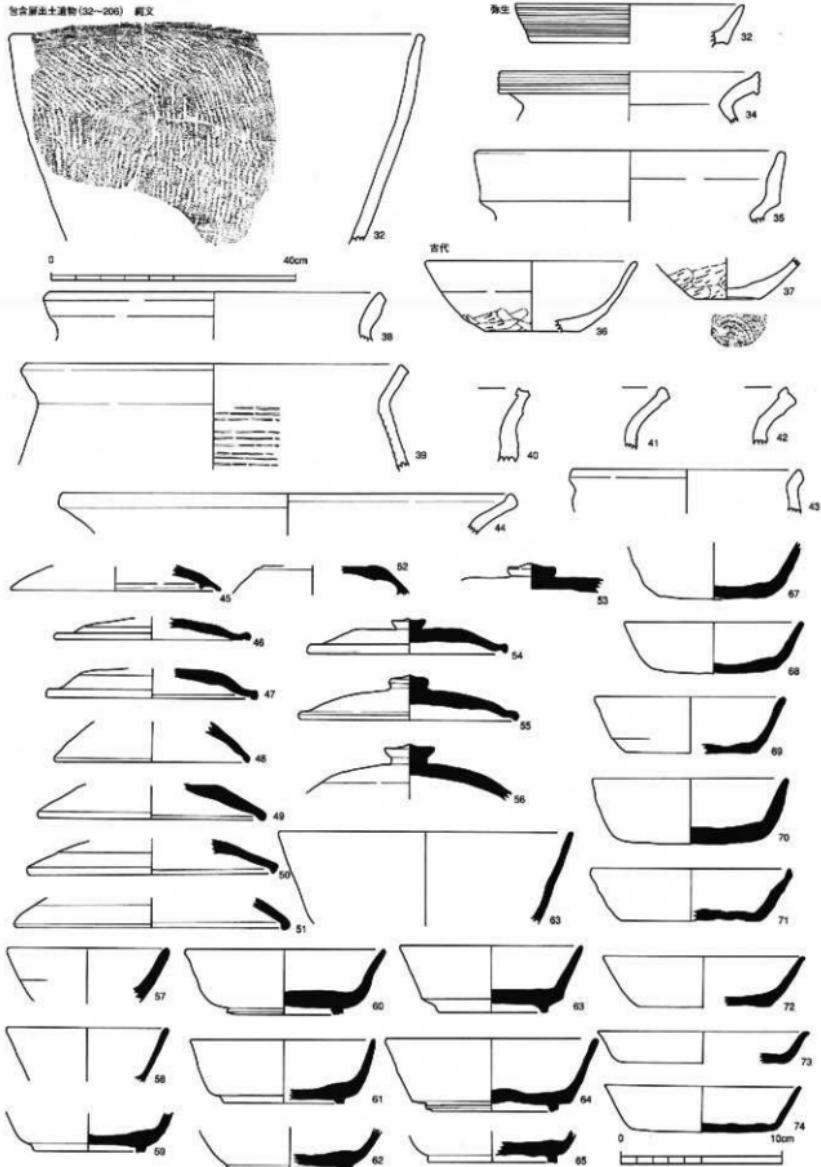


*A～J及びP300～P319セクションの水深は、標高12.5m

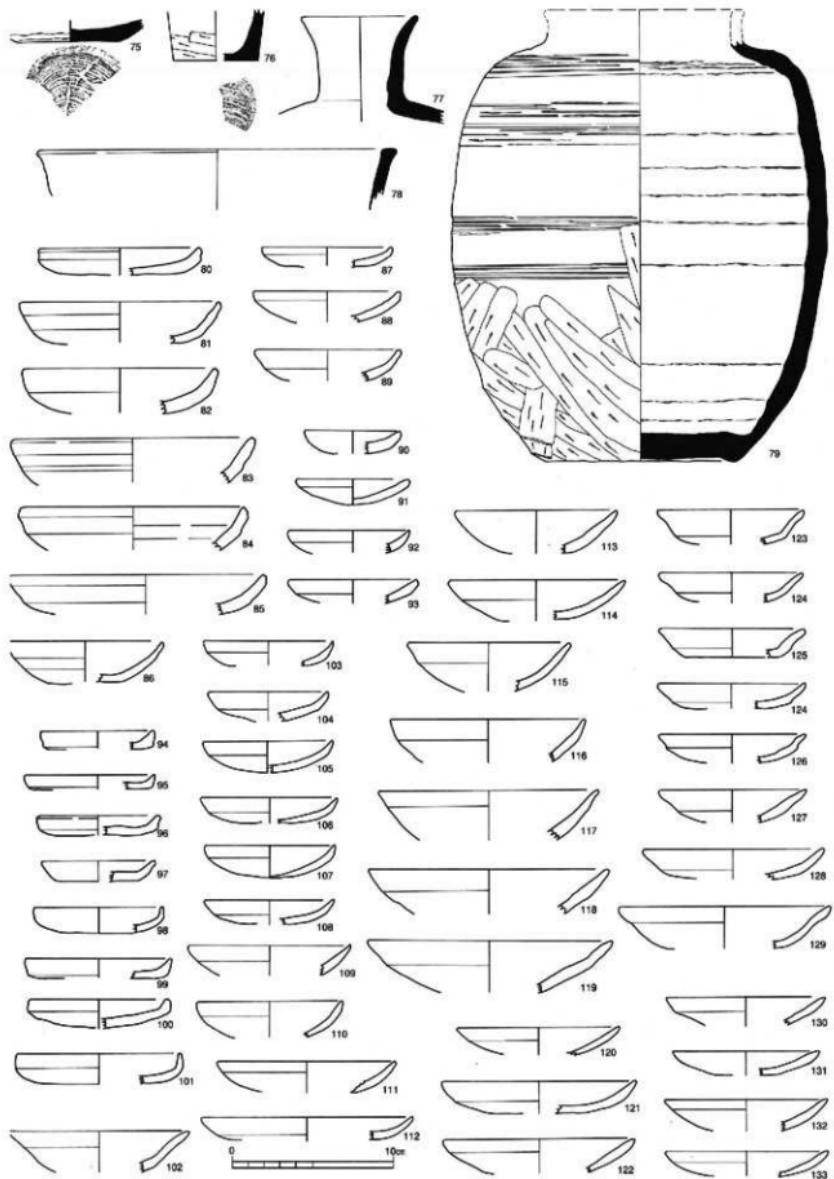


図版42 出土遺物 (1) (平成10年度造構出土遺物)

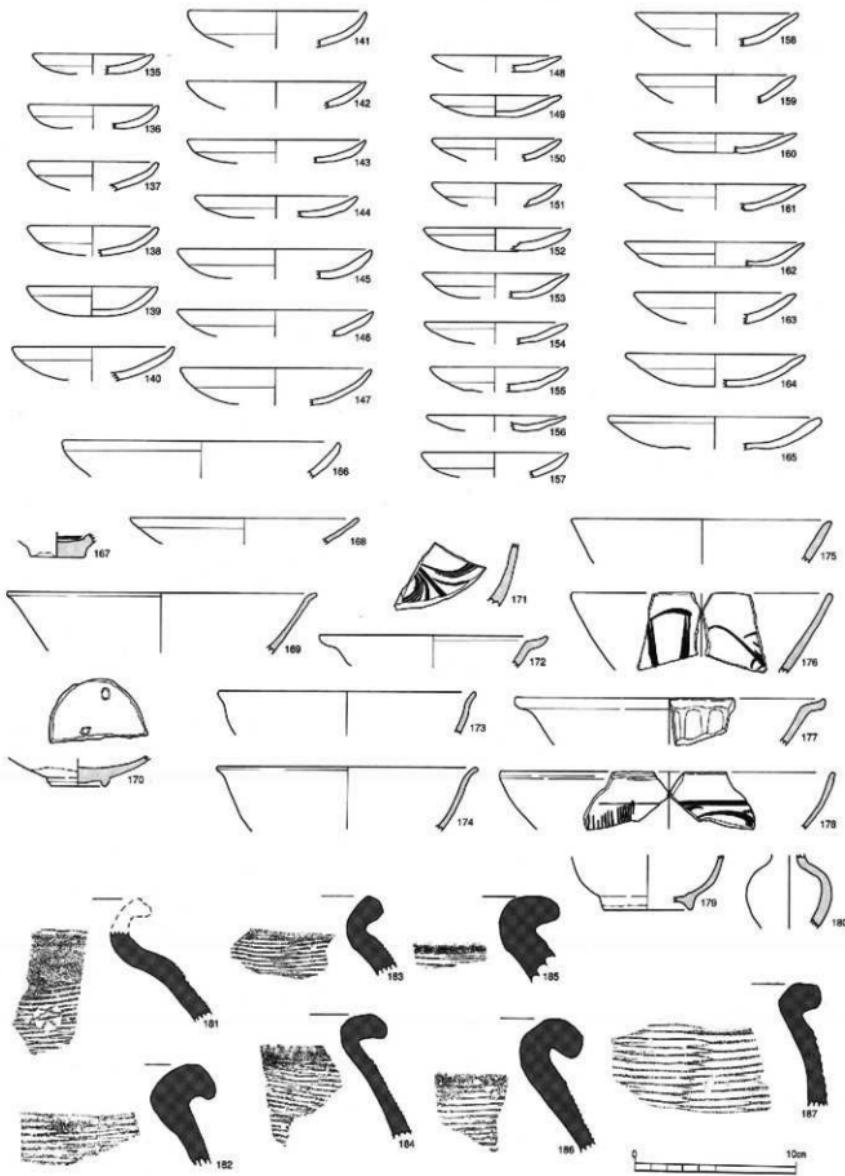
包含層出土遺物(32~206) 約文



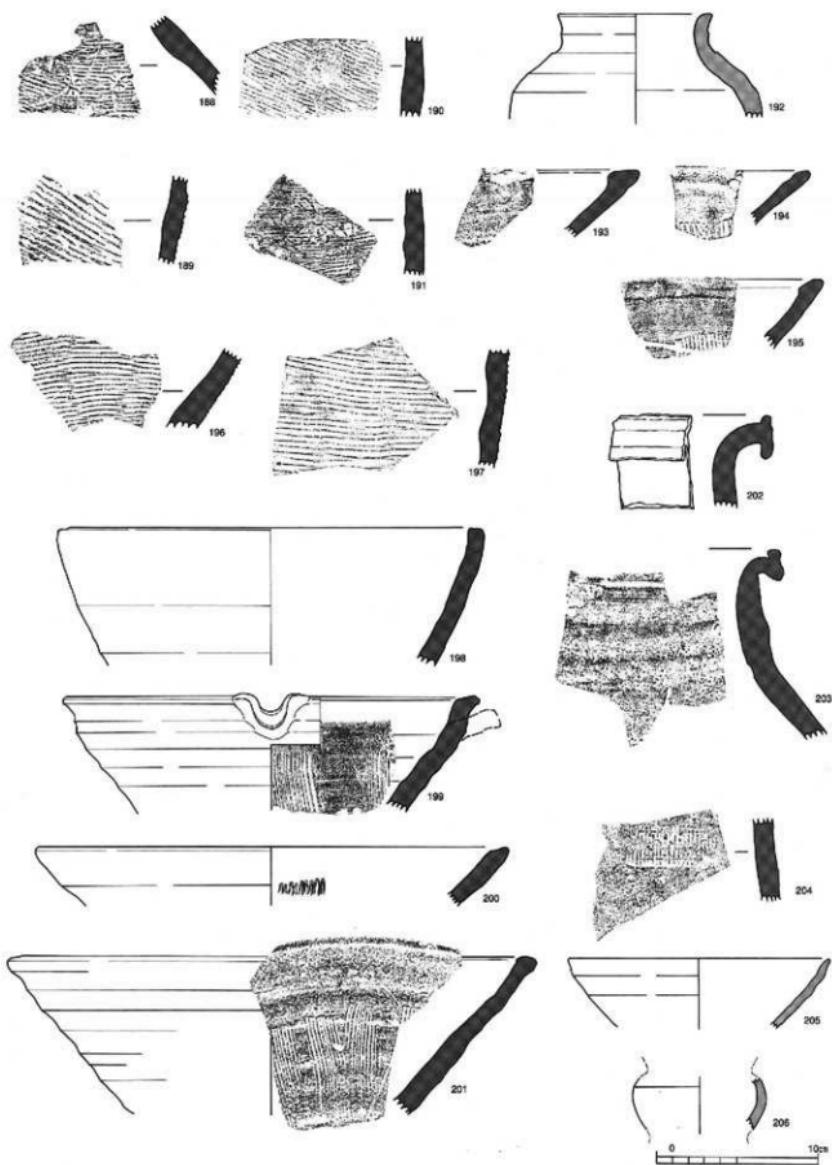
図版43 出土遺物 (2) (平成10年度包含層出土遺物) ※32は1/4



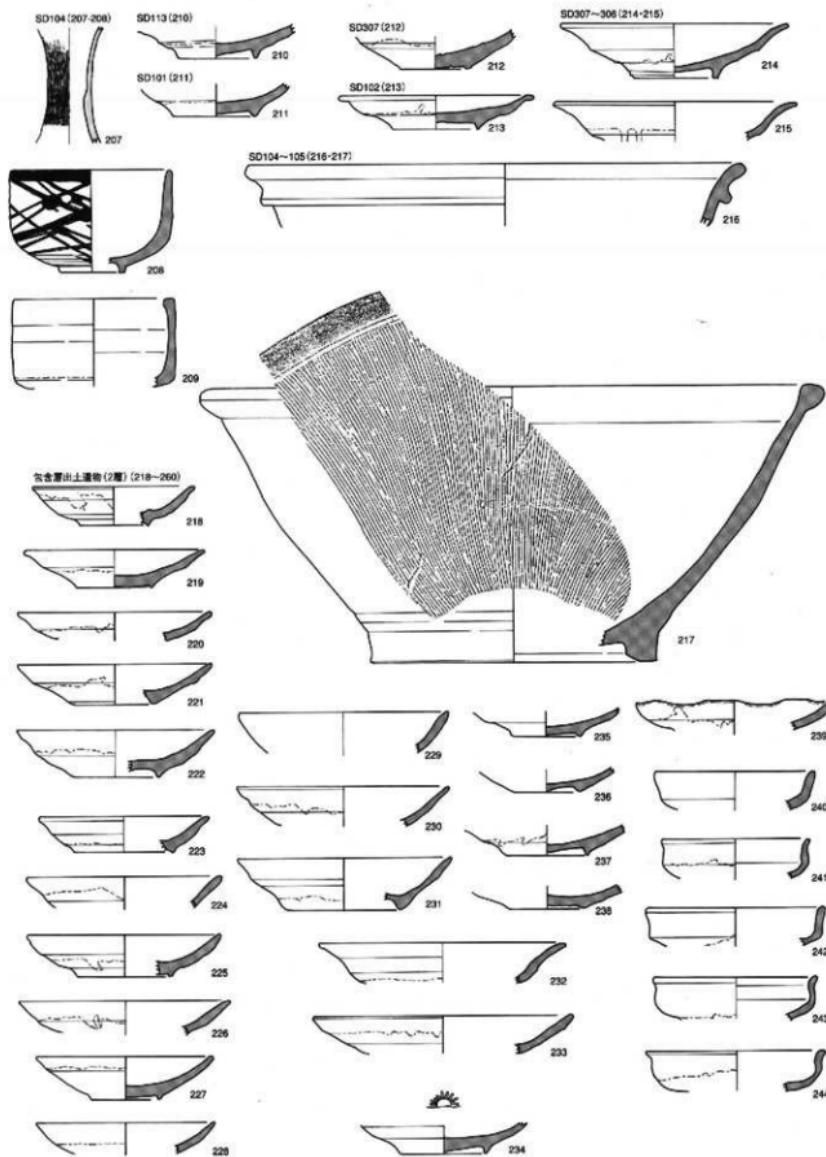
図版44 出土遺物（3）（平成10年度包含層出土遺物）



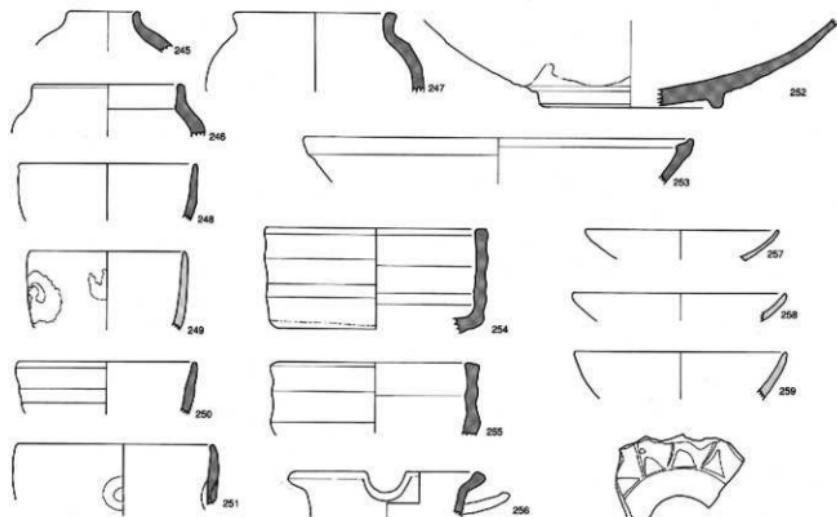
図版45 出土遺物 (4) (平成10年度包含層出土遺物)



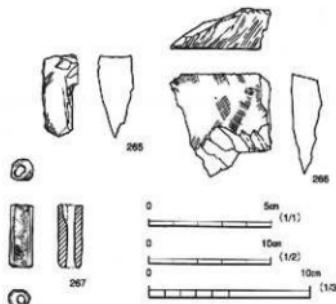
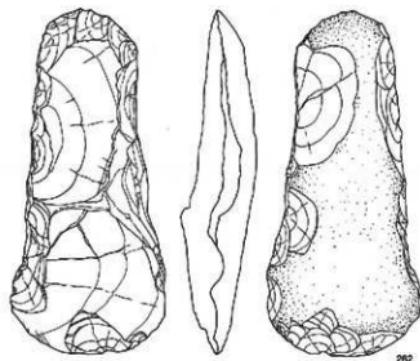
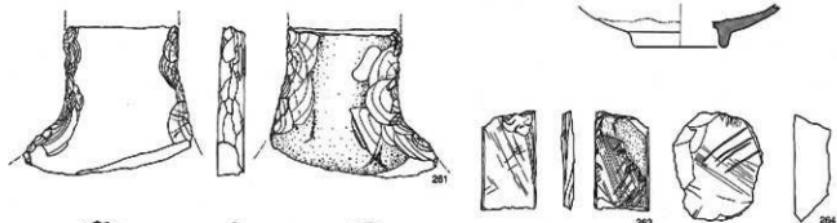
図版46 出土遺物（5）（平成10年度包含層出土遺物）



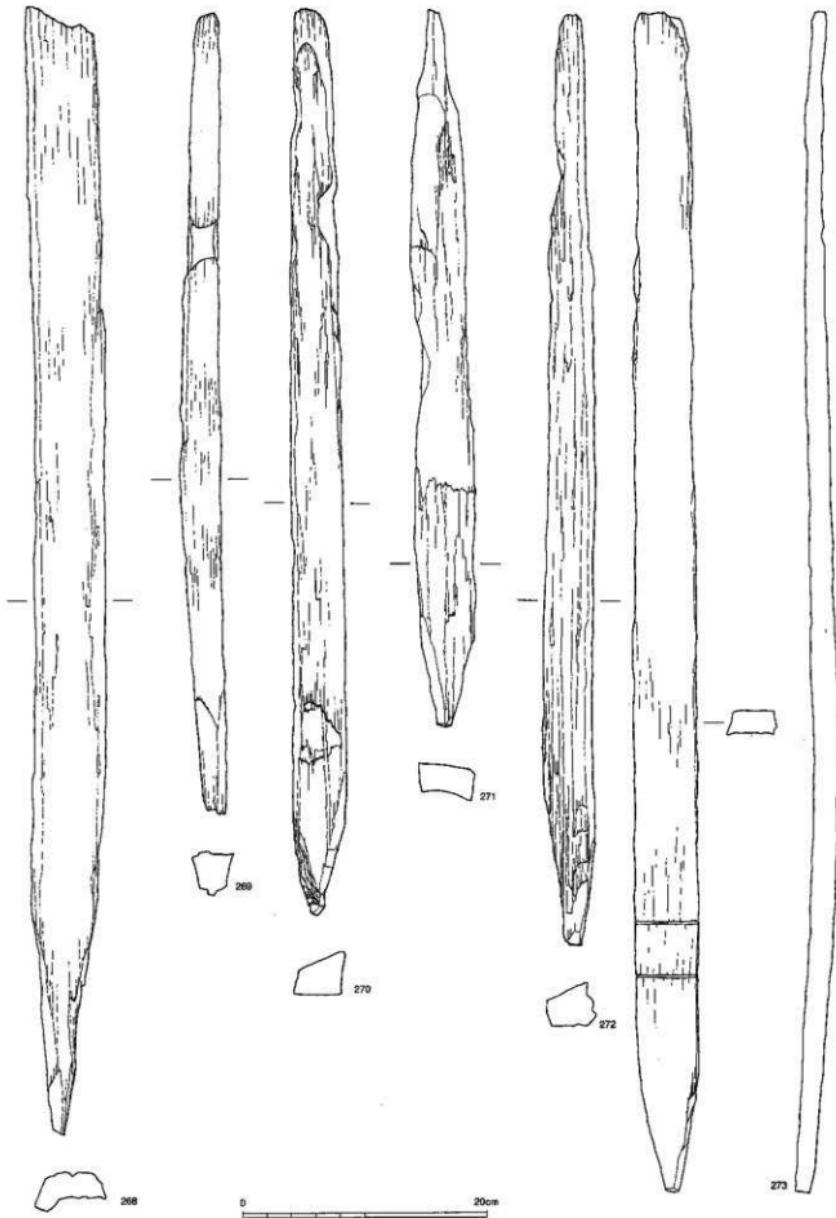
図版47 出土遺物 (6) (平成10年度造構包含層出土遺物)



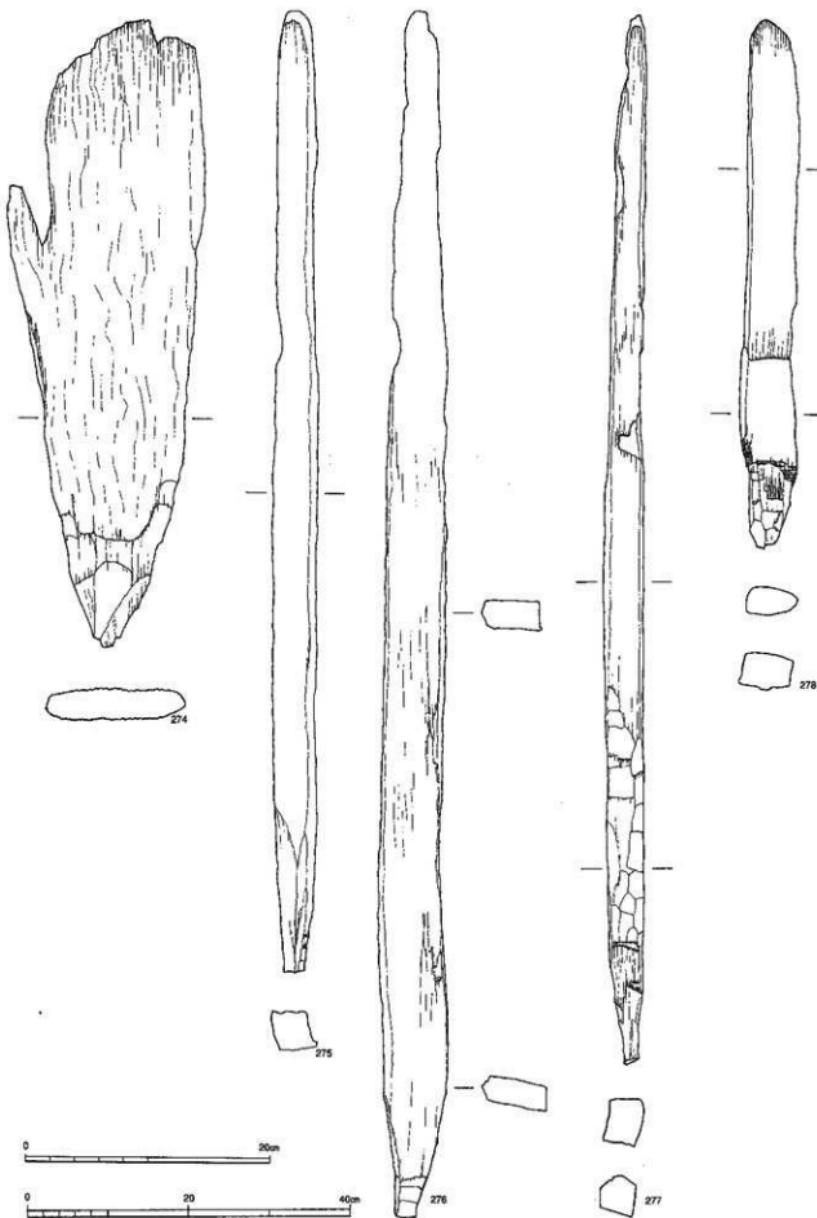
石製品 (251~257)



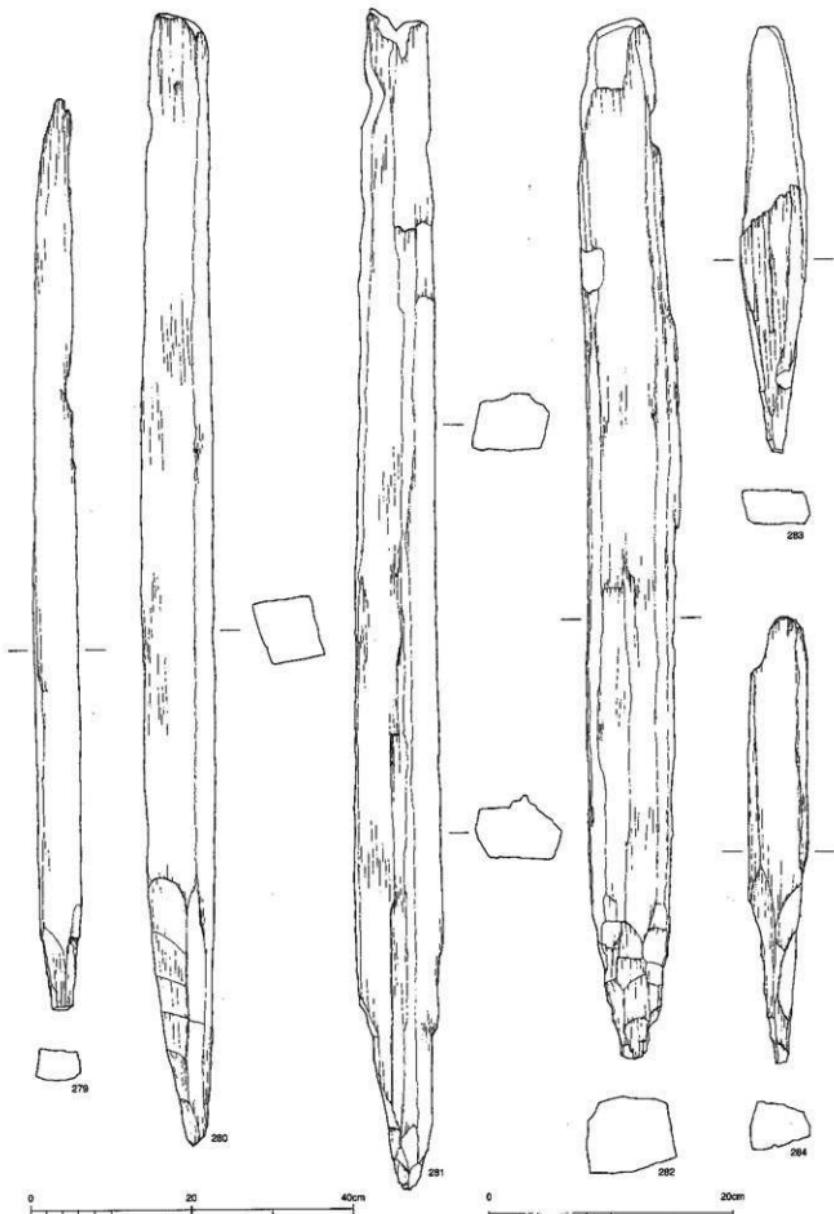
図版48 出土遺物 (7) (平成10年度包含層出土遺物・石製品) ※263~266は1/2.267は1/1



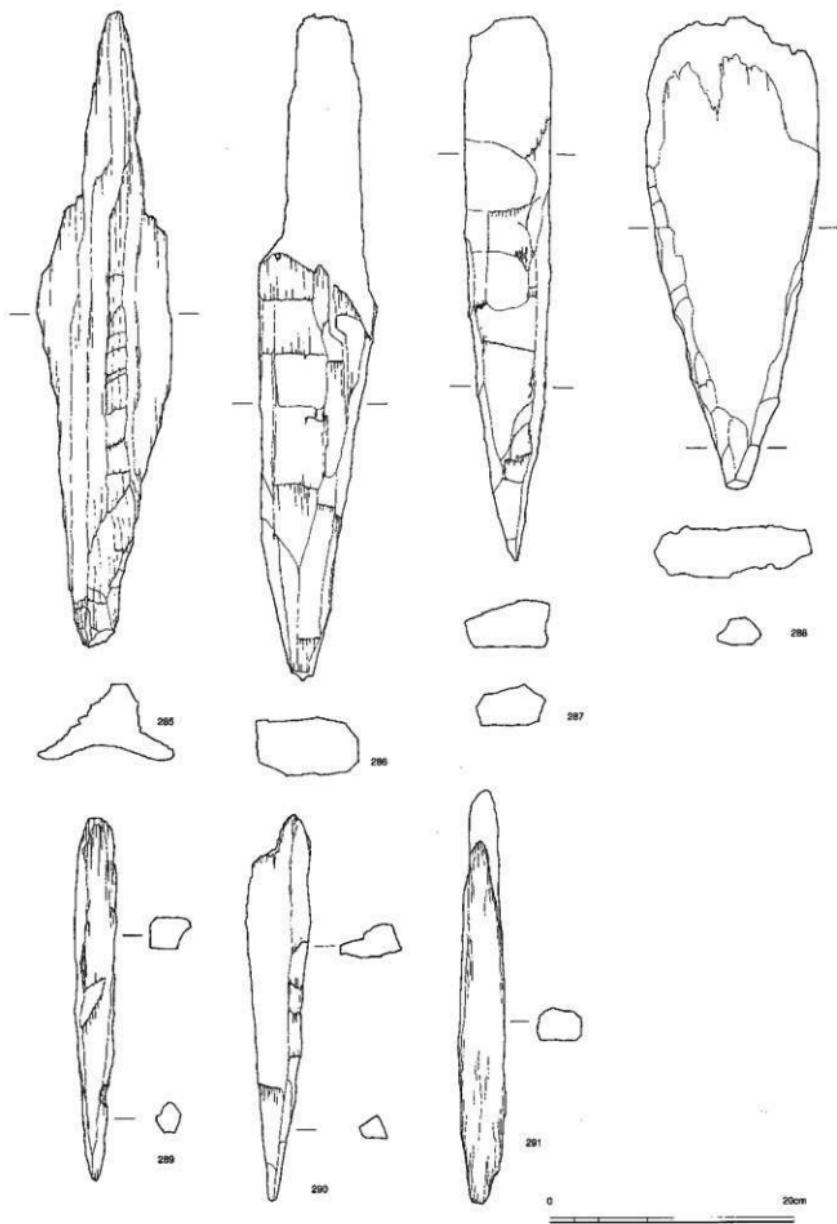
図版49 出土遺物（8）（平成10年度木製品）SG01



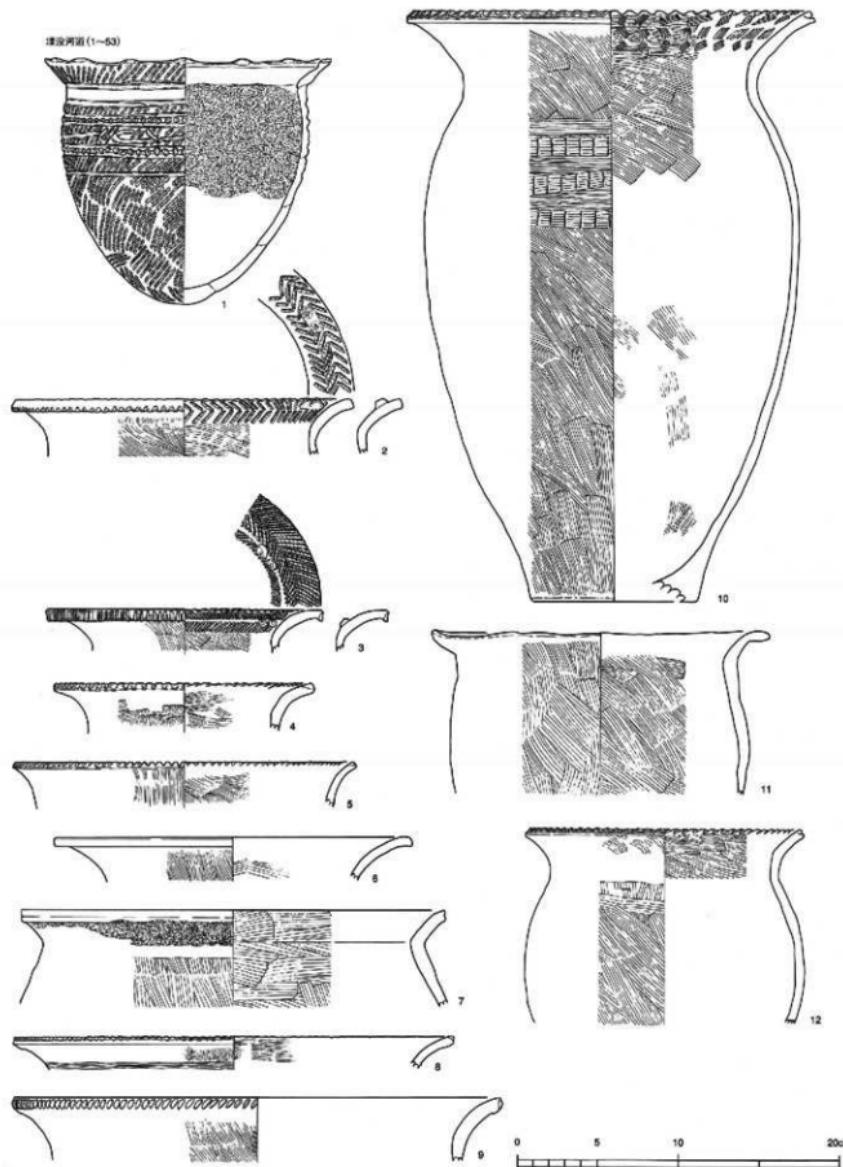
図版50 出土遺物（9）（平成10年度木製品）SG01 ※277は1/6



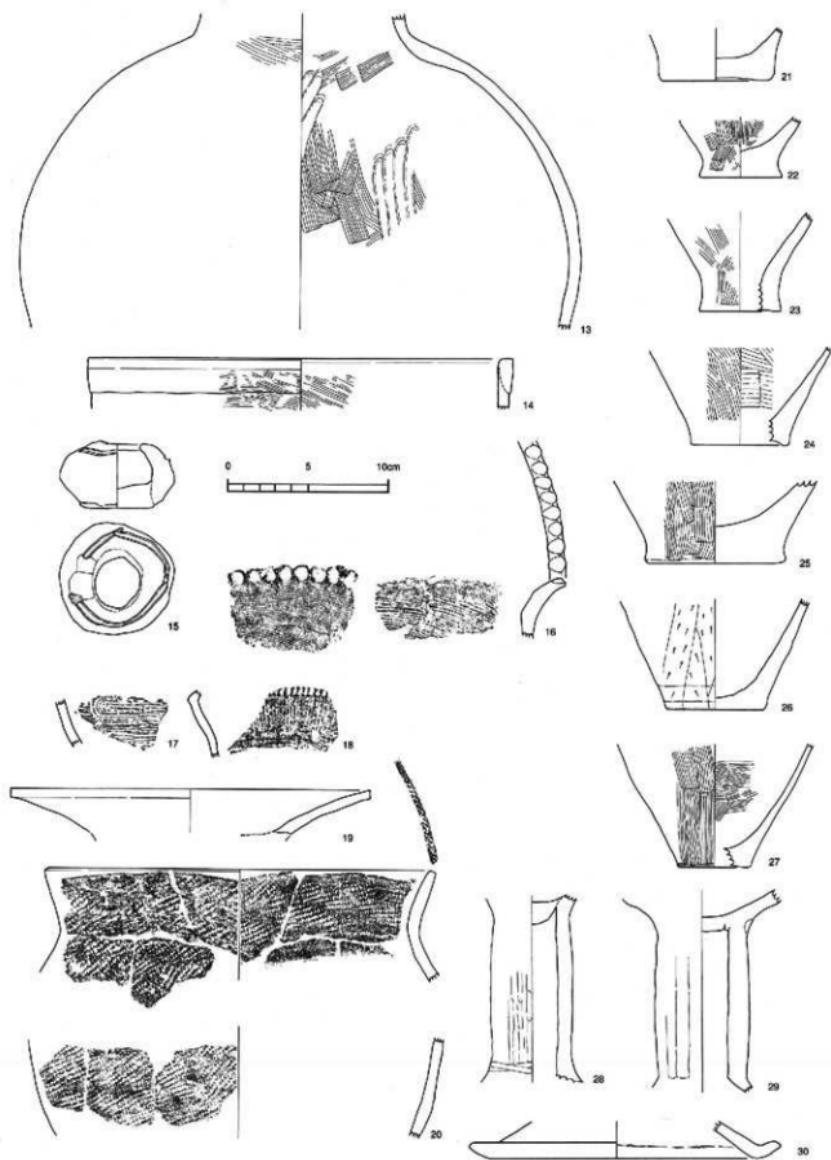
図版51 出土遺物(10)(平成10年度木製品) SG01・02 ※279・281・282は1/6



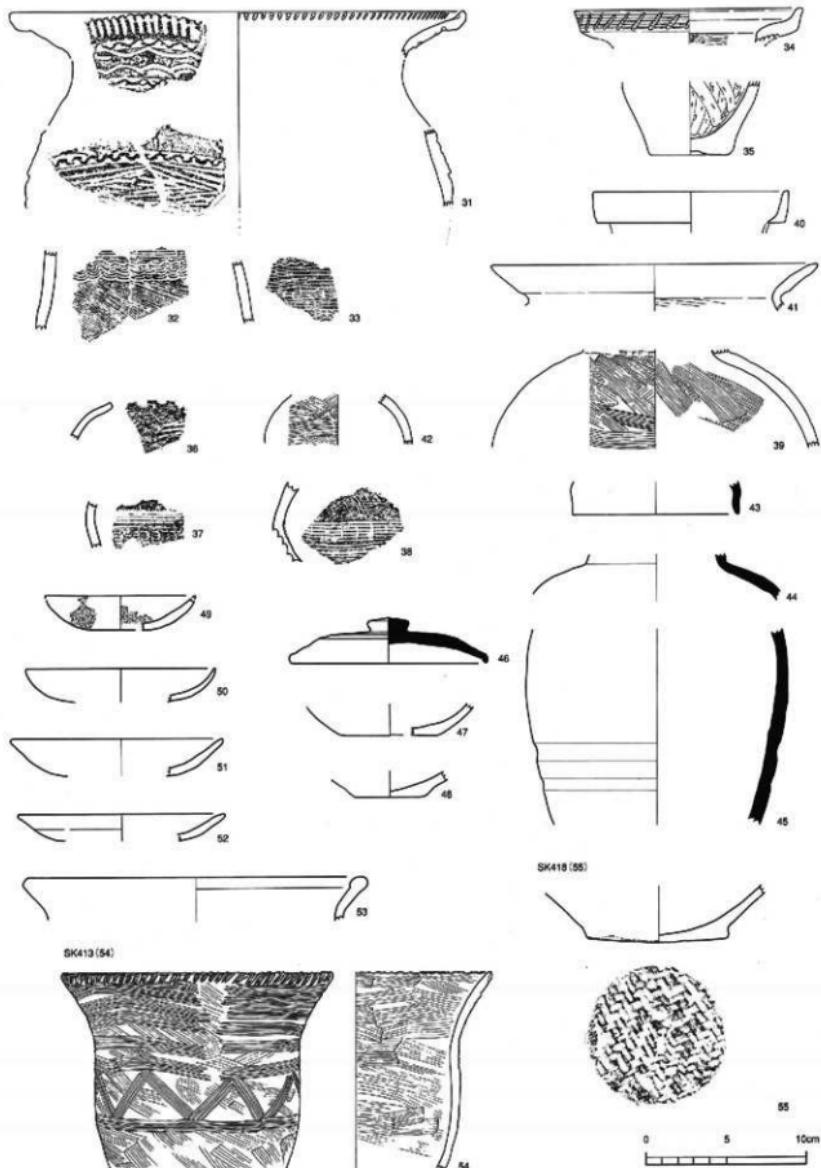
図版52 出土遺物（11）（平成10年度木製品）SG02・03



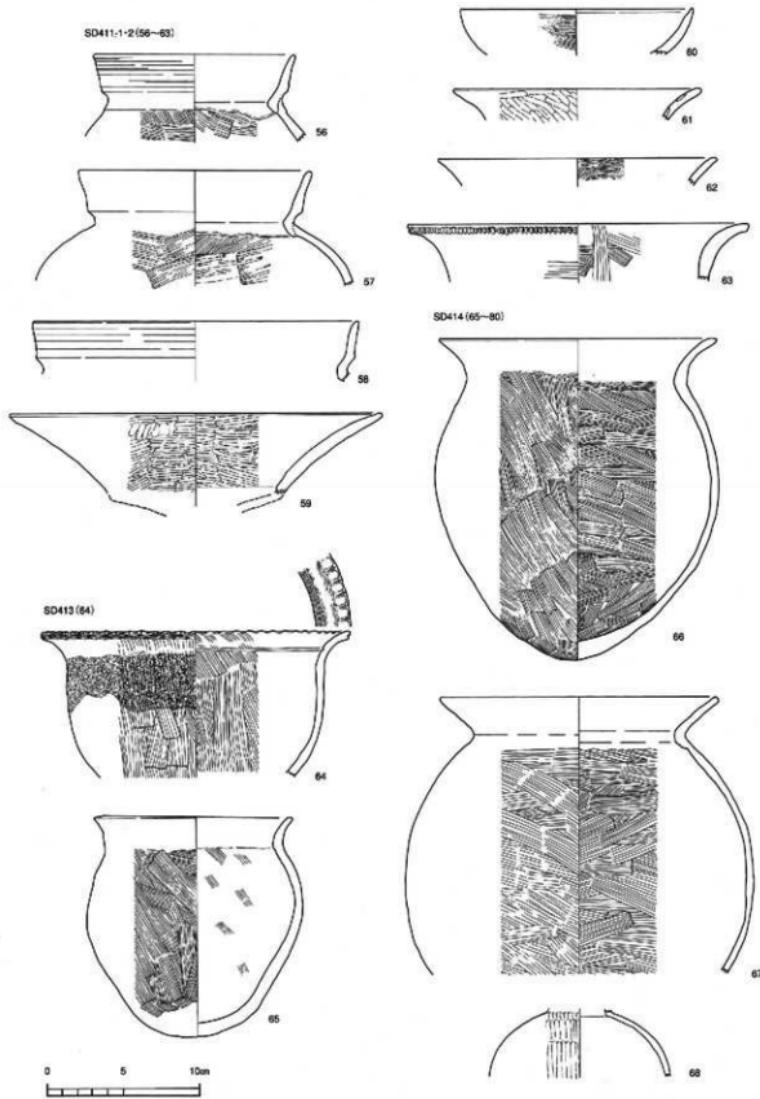
図版53 出土遺物 (12) (平成11年度遺構出土遺物)



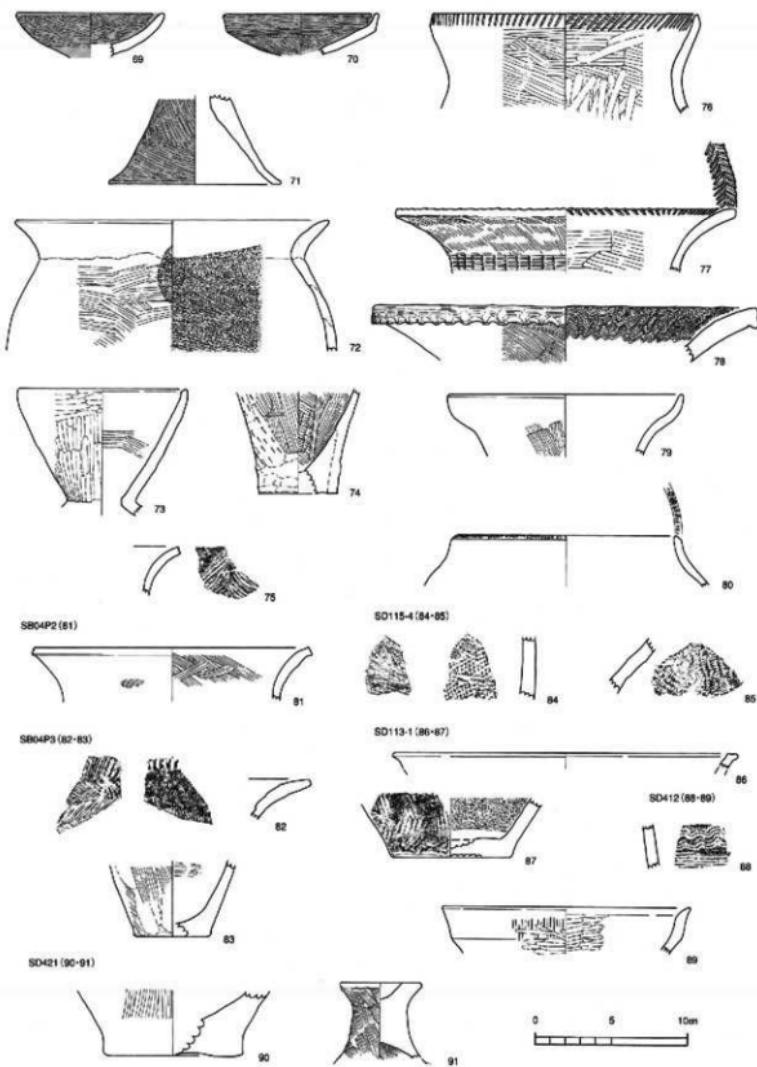
図版54 出土遺物 (13) (平成11年度遺構出土遺物)



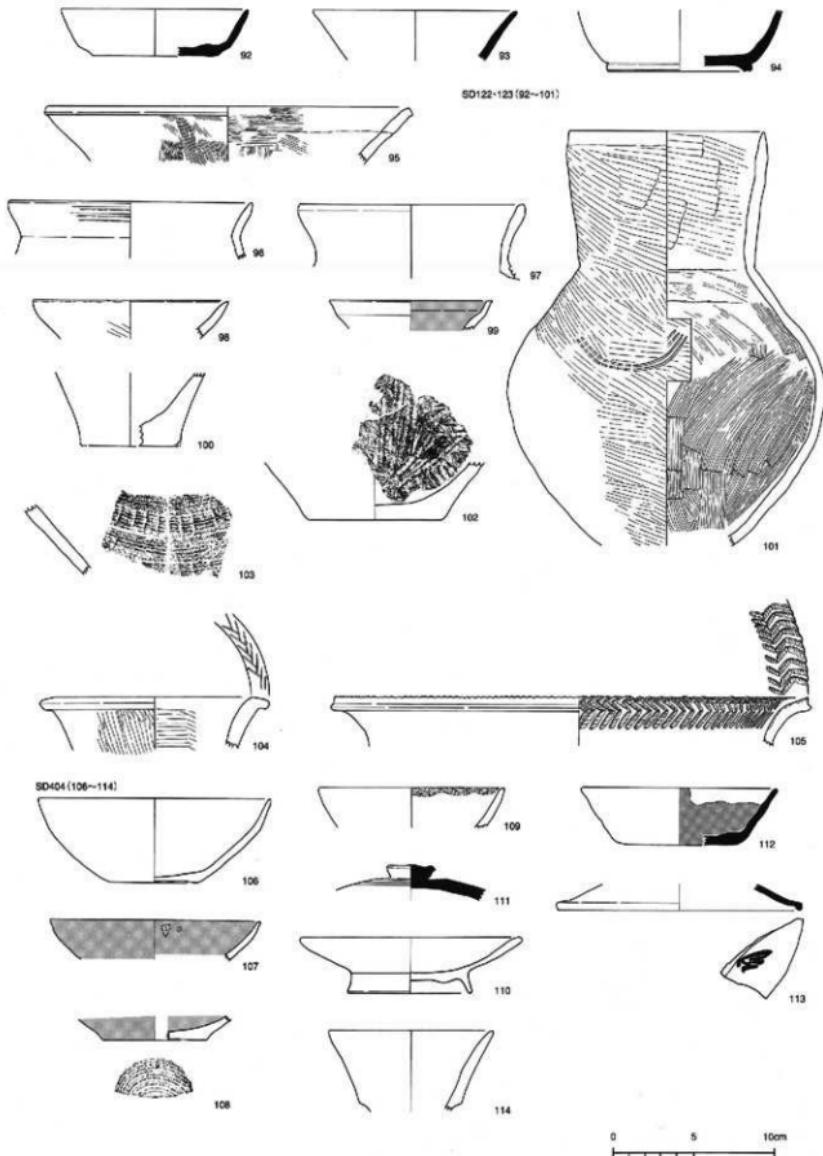
図版55 出土遺物 (14) (平成11年度遺構出土遺物)



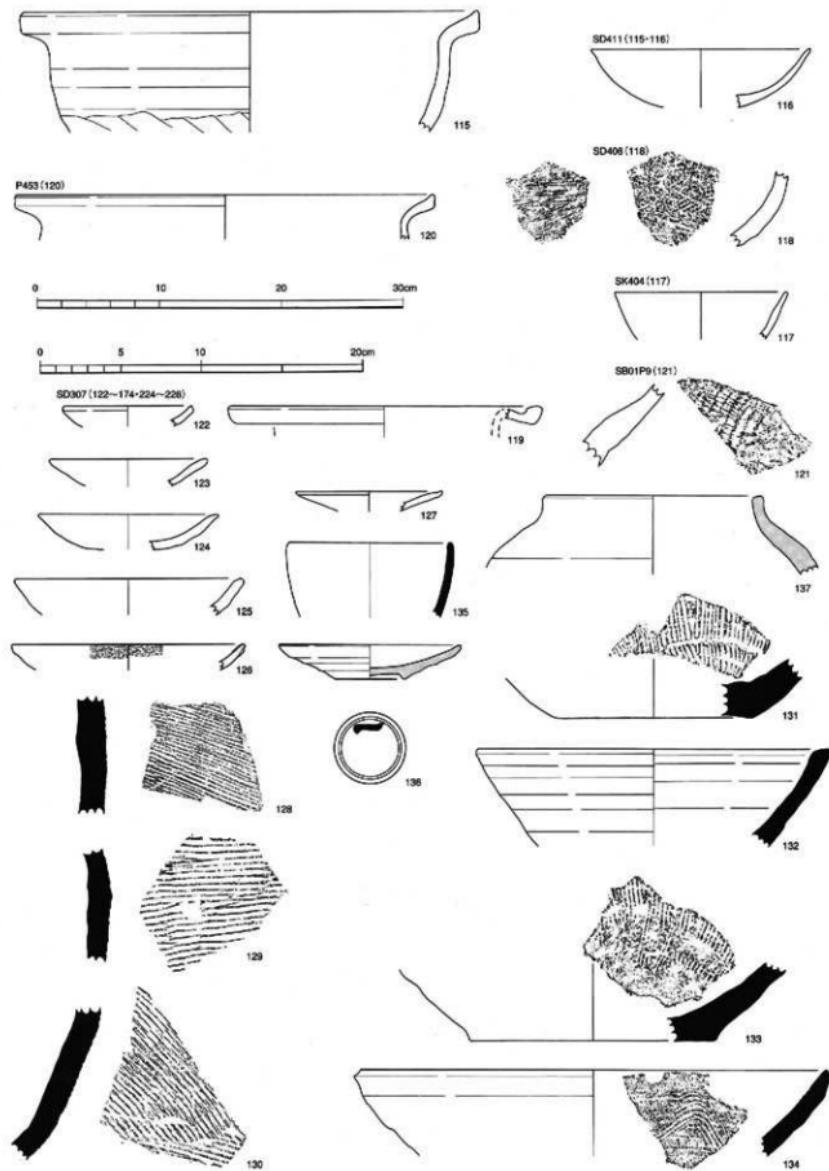
図版56 出土遺物 (15) (平成11年度遺構出土遺物)



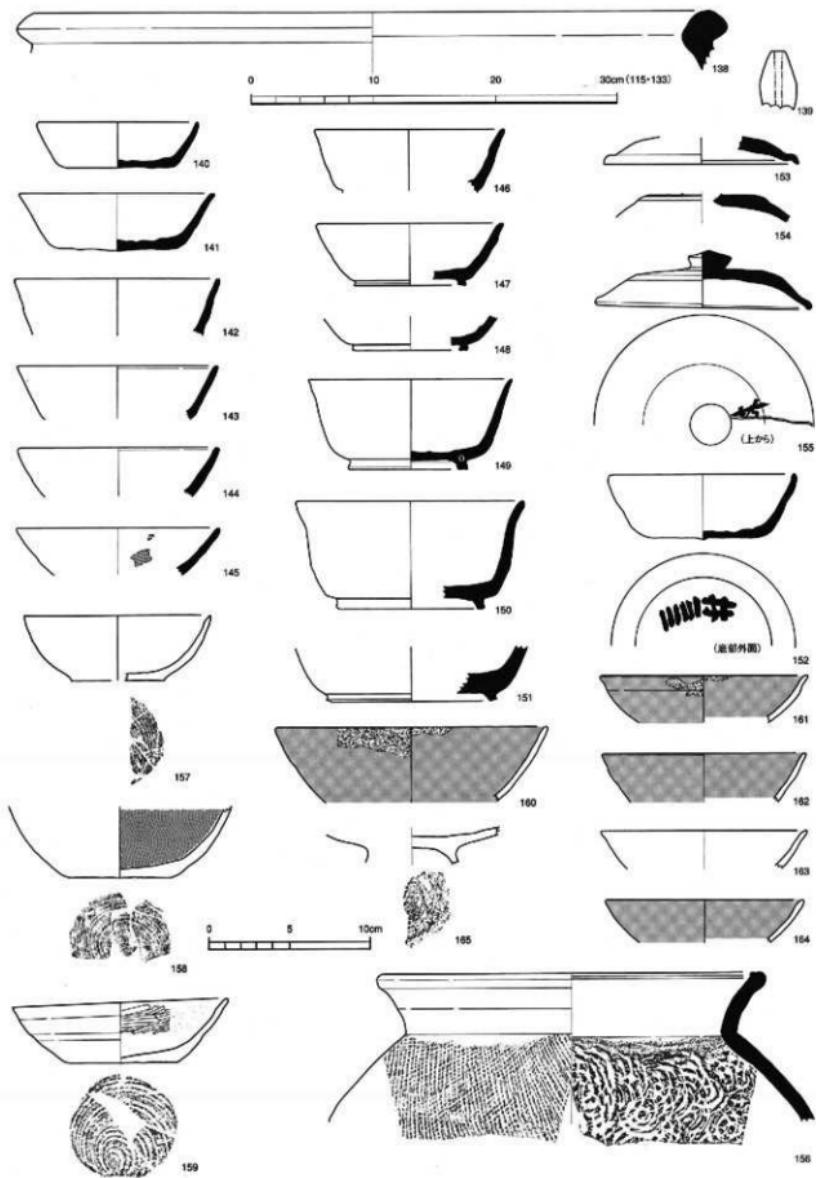
図版57 出土遺物 (16) (平成11年度造構出土遺物)



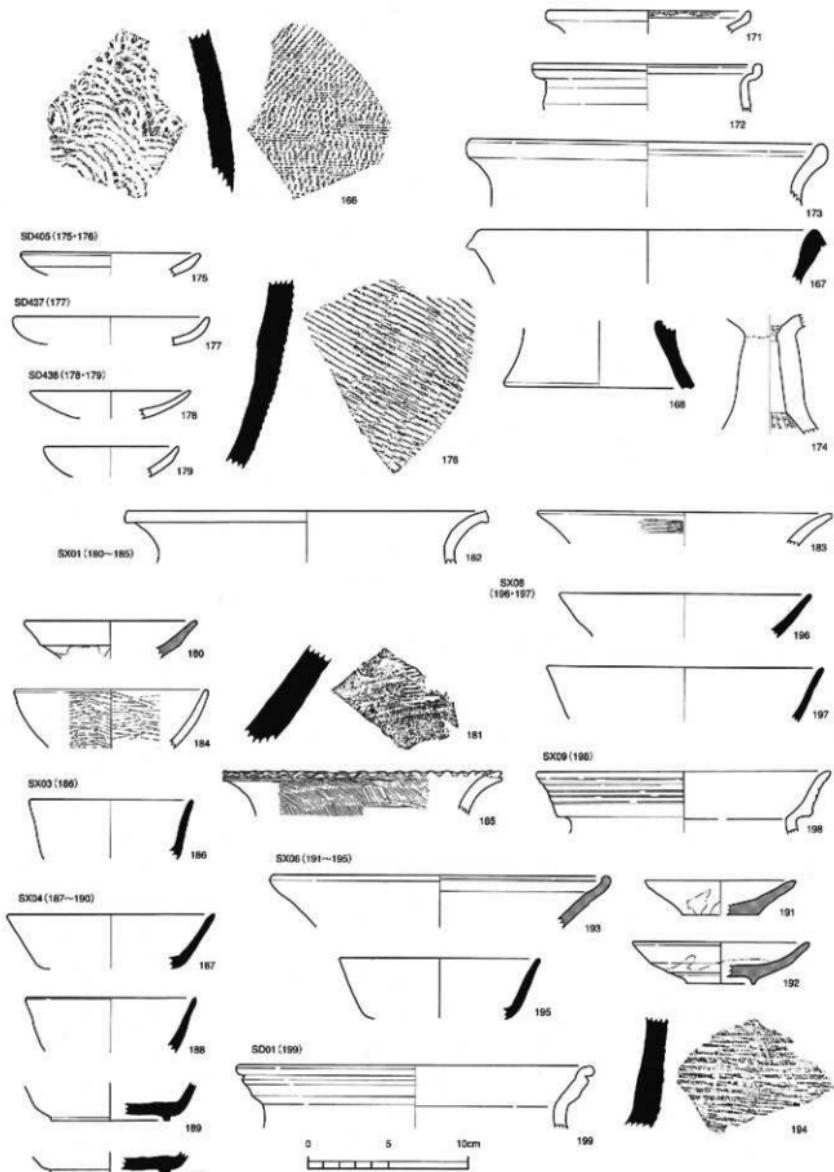
図版58 出土遺物 (17) (平成11年度遺構出土遺物)



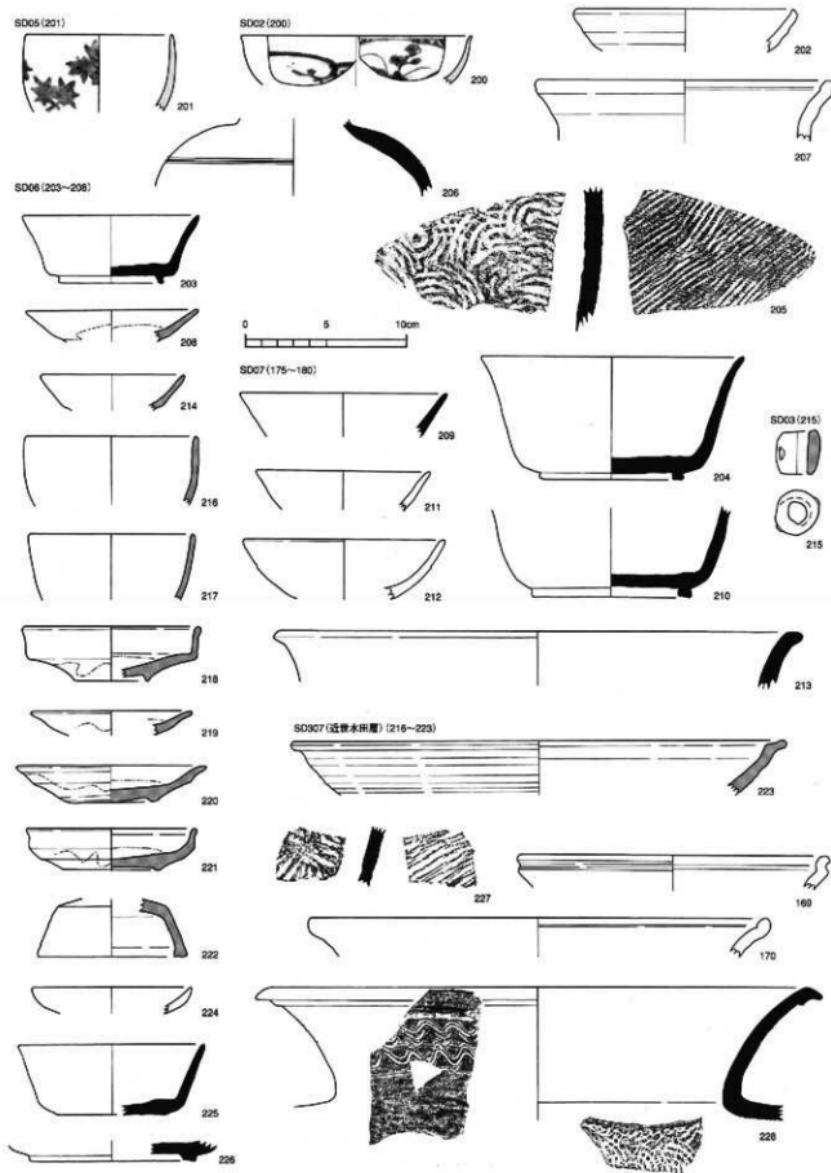
図版59 出土遺物 (18) (平成11年度造構出土遺物)



図版60 出土遺物 (19) (平成11年度造構出土遺物)



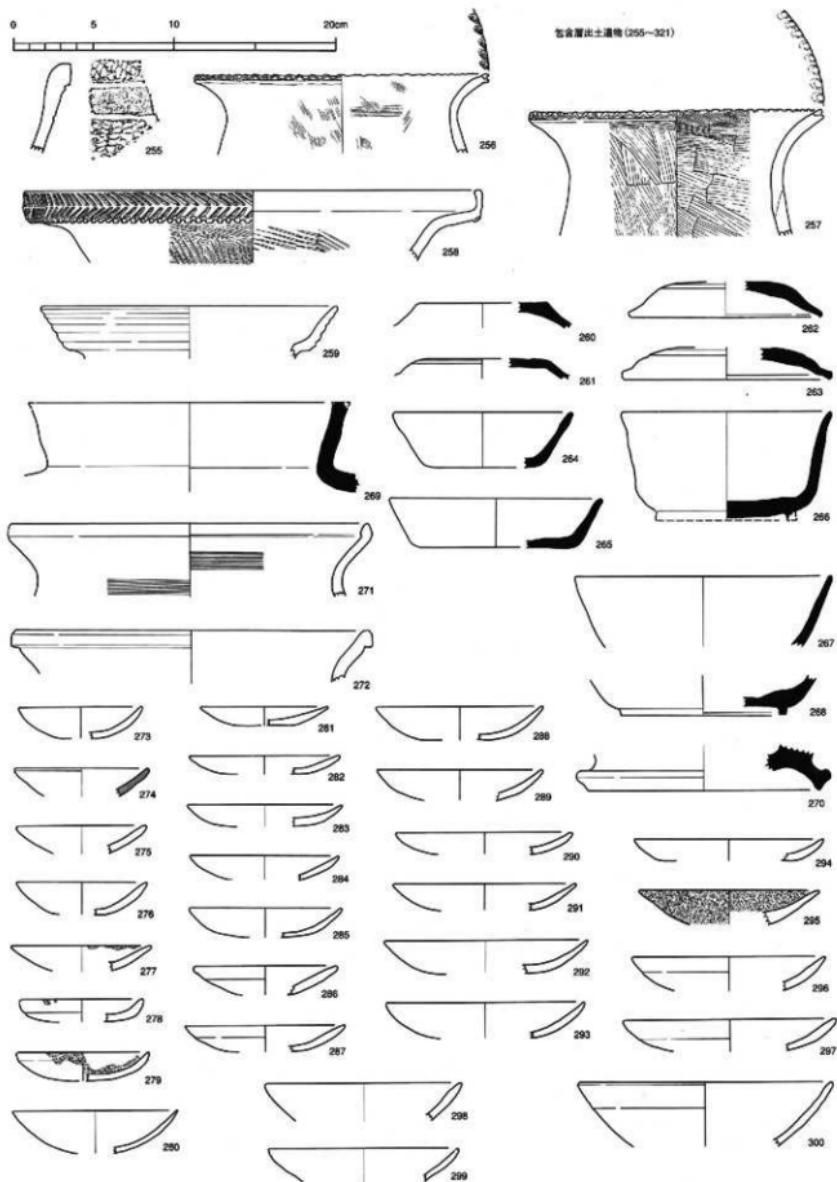
図版61 出土遺物 (20) (平成11年度造構出土遺物)



図版62 出土遺物 (21) (平成11年度造構出土遺物)



図版63 出土遺物 (22) (平成11年度造構出土遺物)



図版64 出土遺物 (23) (平成11年度包含層出土遺物)

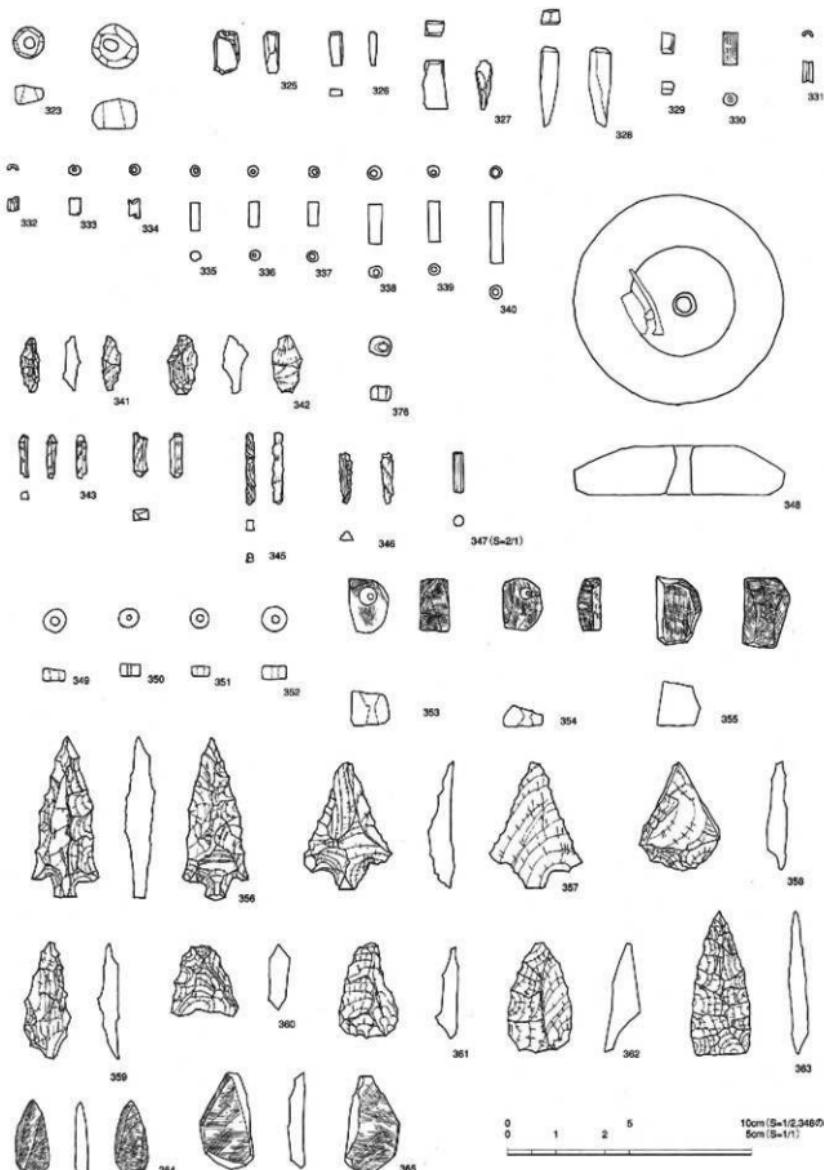


図(322)

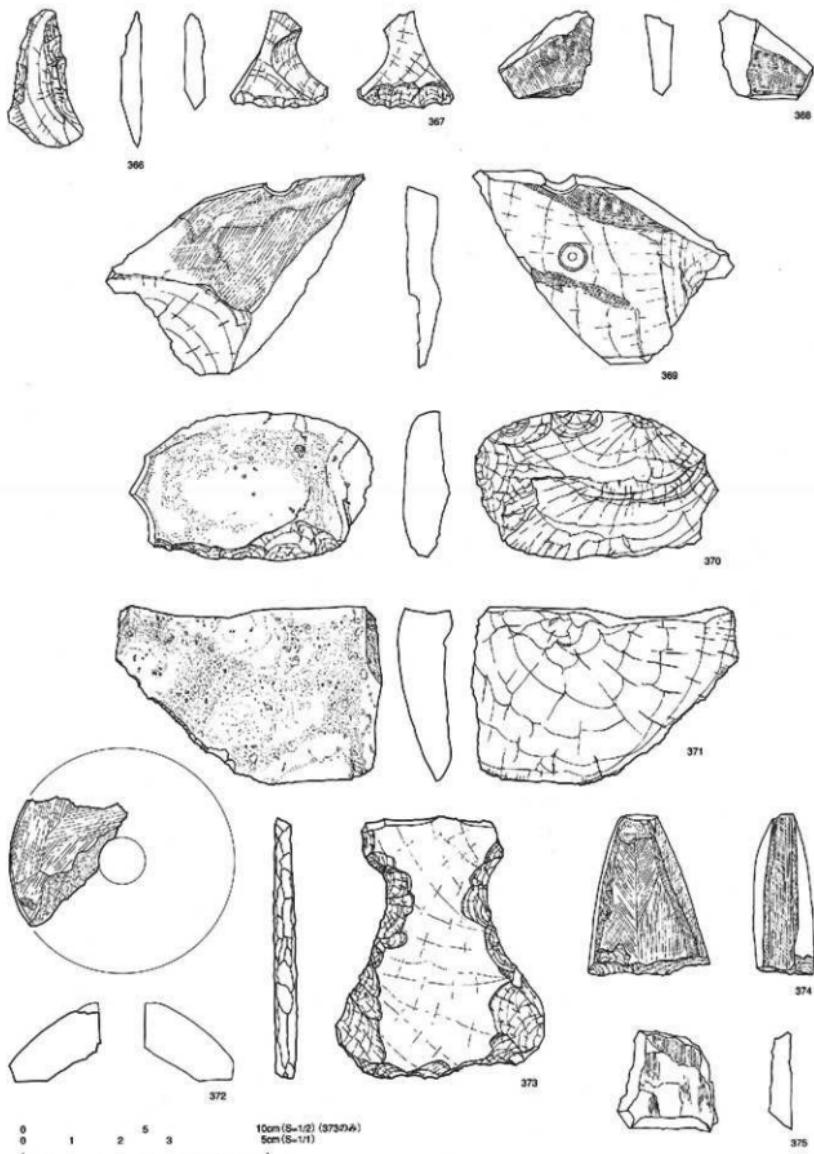


図(322-321)大

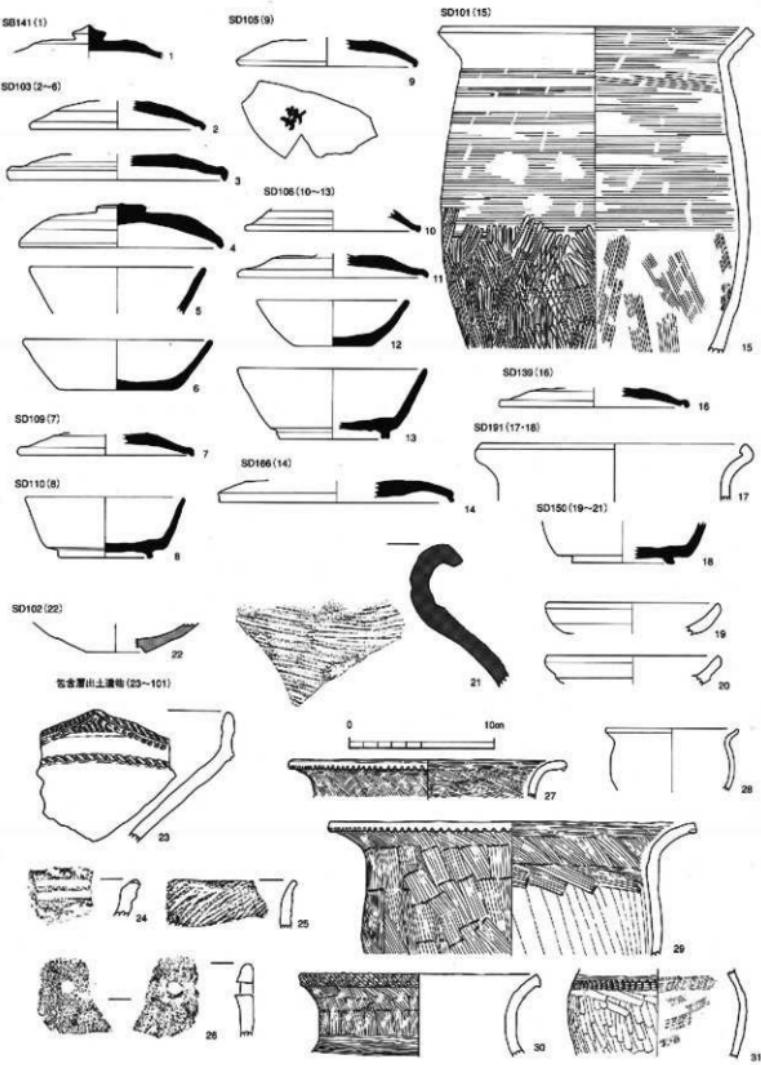
図版65 出土遺物 (24) (平成11年度包含層出土遺物)



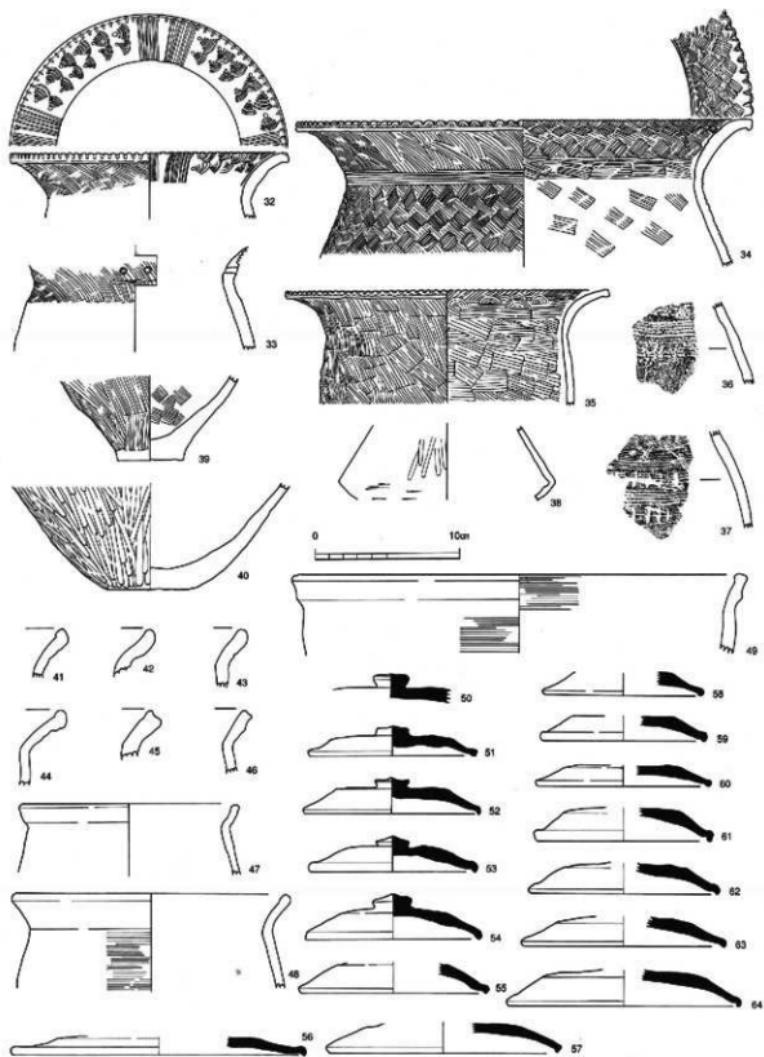
図版66 出土遺物 (25) (平成11年度石製品)



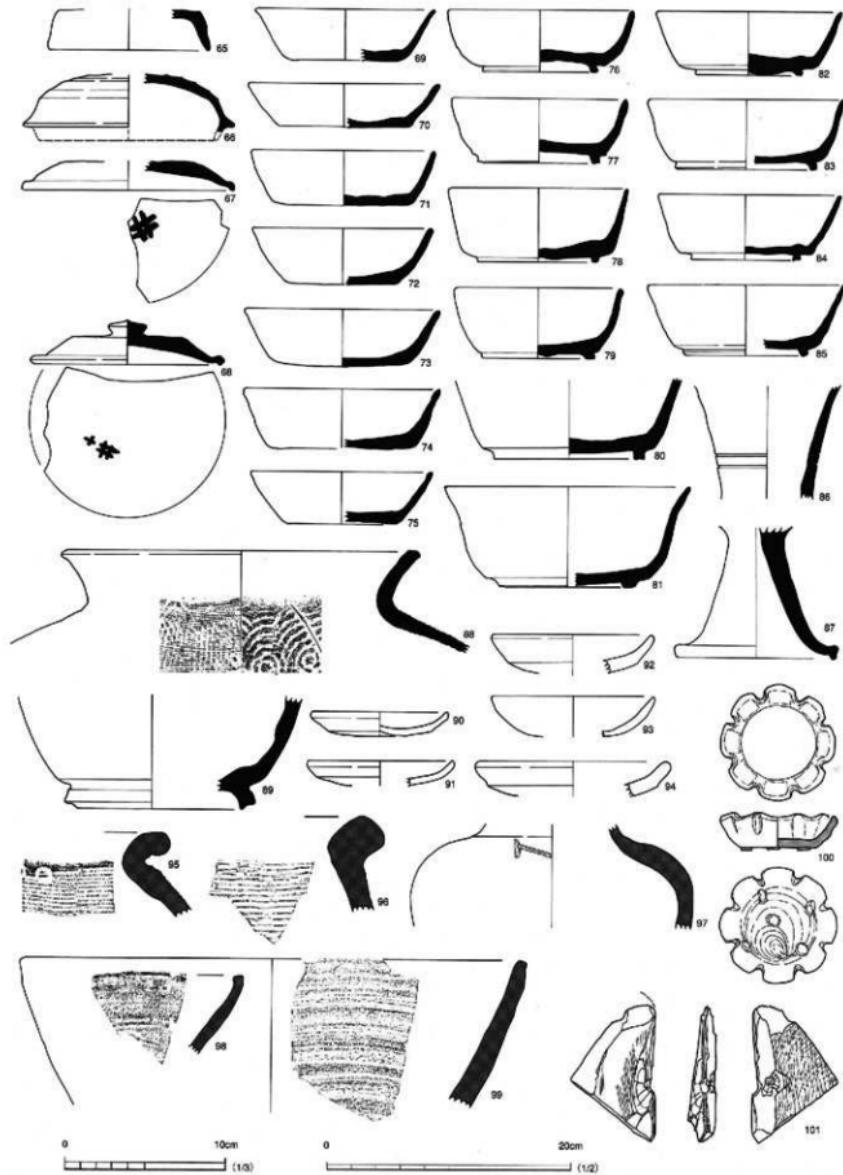
図版67 出土遺物 (26) (平成11年度石製品)



図版68 出土遺物 (27) (平成9年度遺構・包含層出土遺物)



図版69 出土遺物 (28) (平成9年度包含層出土遺物)



図版70 出土遺物 (29) (平成9年度包含層出土遺物) ※100・101は1/2



写真図版1 全景 1. 远景(南から) 2. 同左(北から)



写真図版2 昭和47年当時の航空写真



写真図版3 平成9年当時の航空写真



写真図版4 作業風景 1. 表土除去 2~4. 作業風景 5. 航空測量 6. 小学生の見学 7. サンプル採取 8. 現地説明会



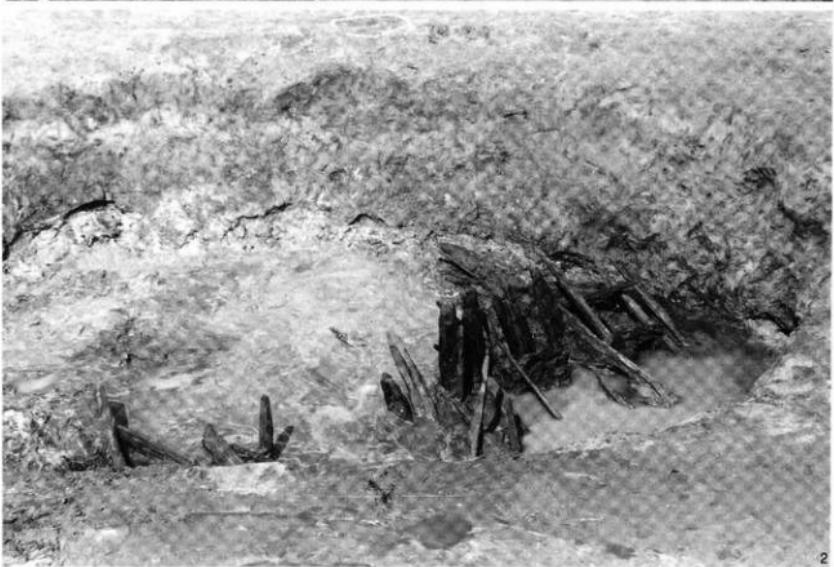
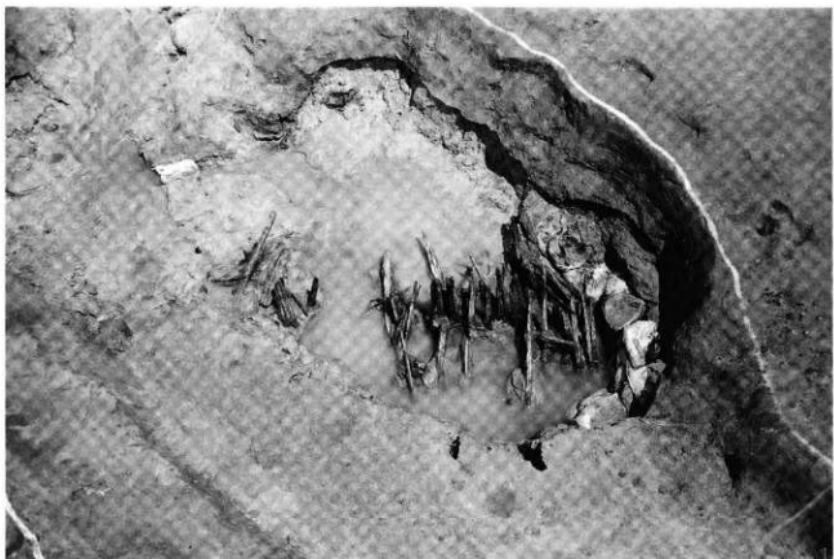
写真図版5 平成9・10・11年度調査区全景



写真図版6 平成10年度調査区全景

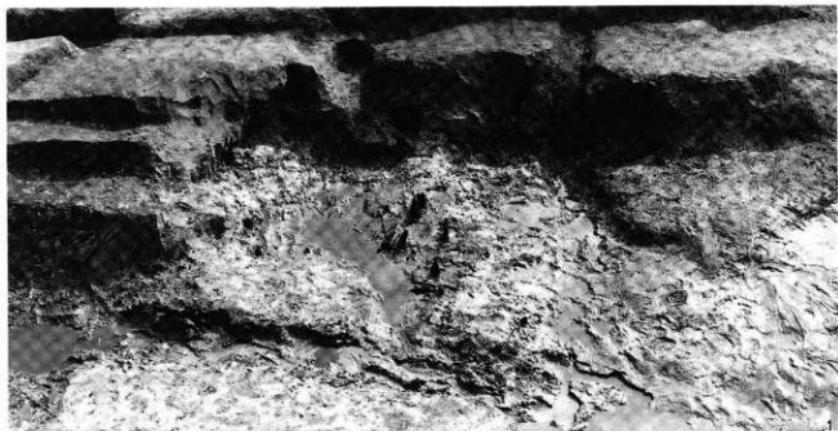


写真図版7 A地区(1) 全景



2

写真図版8 A地区(2) I-2 SG01



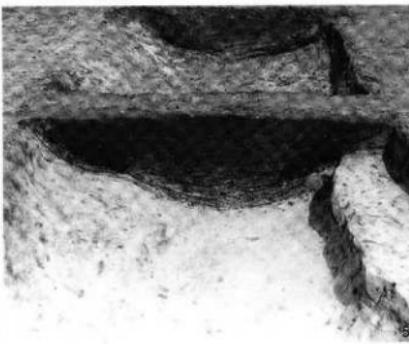
2



3

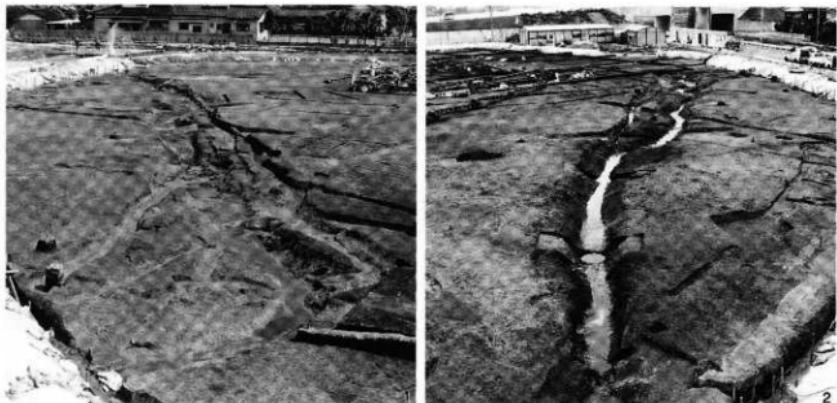


4



5

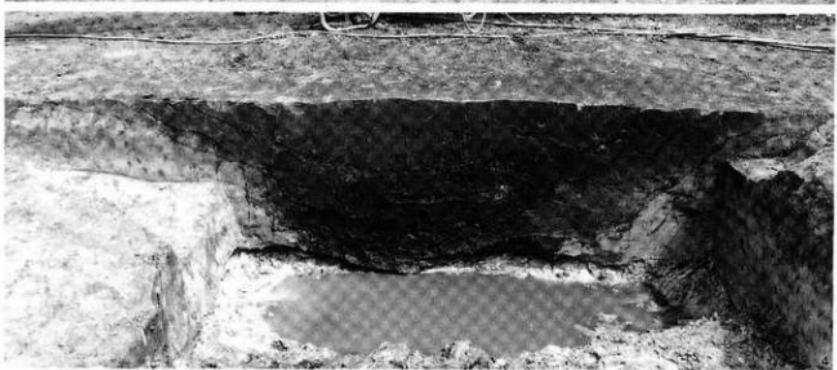
写真図版9 A地区(3) 1. SG02 2. SG01 3. SG02上部出土状況 4. SG06-1・2 5. SD06-2



1

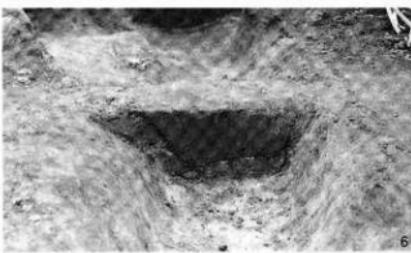
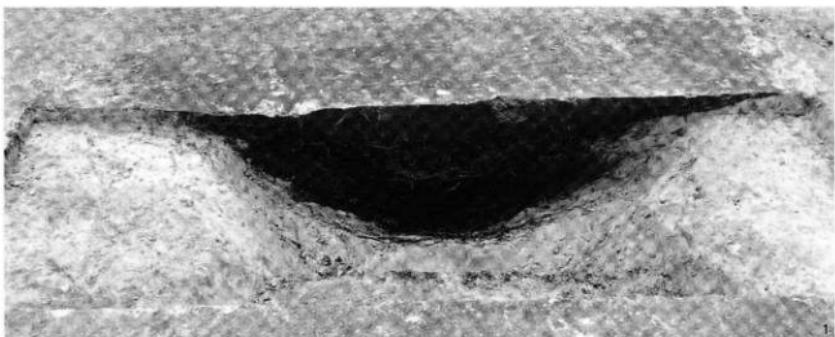


2

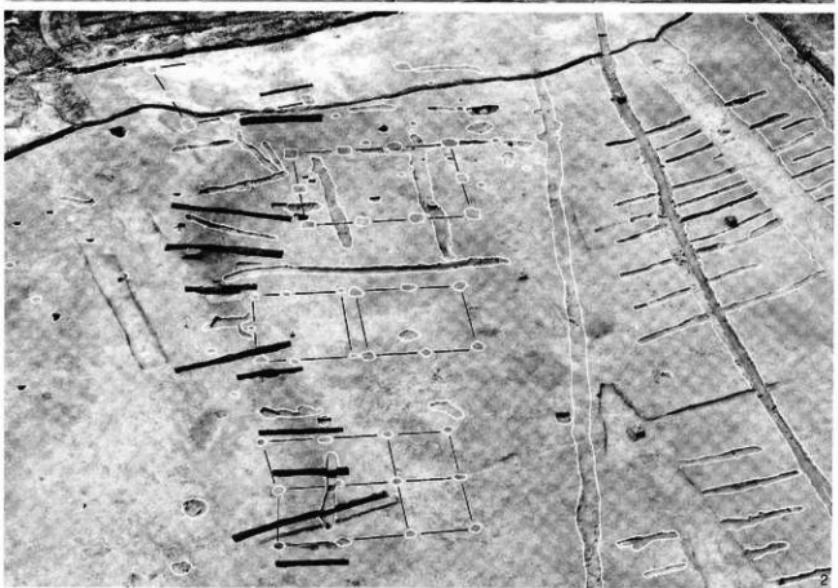


3

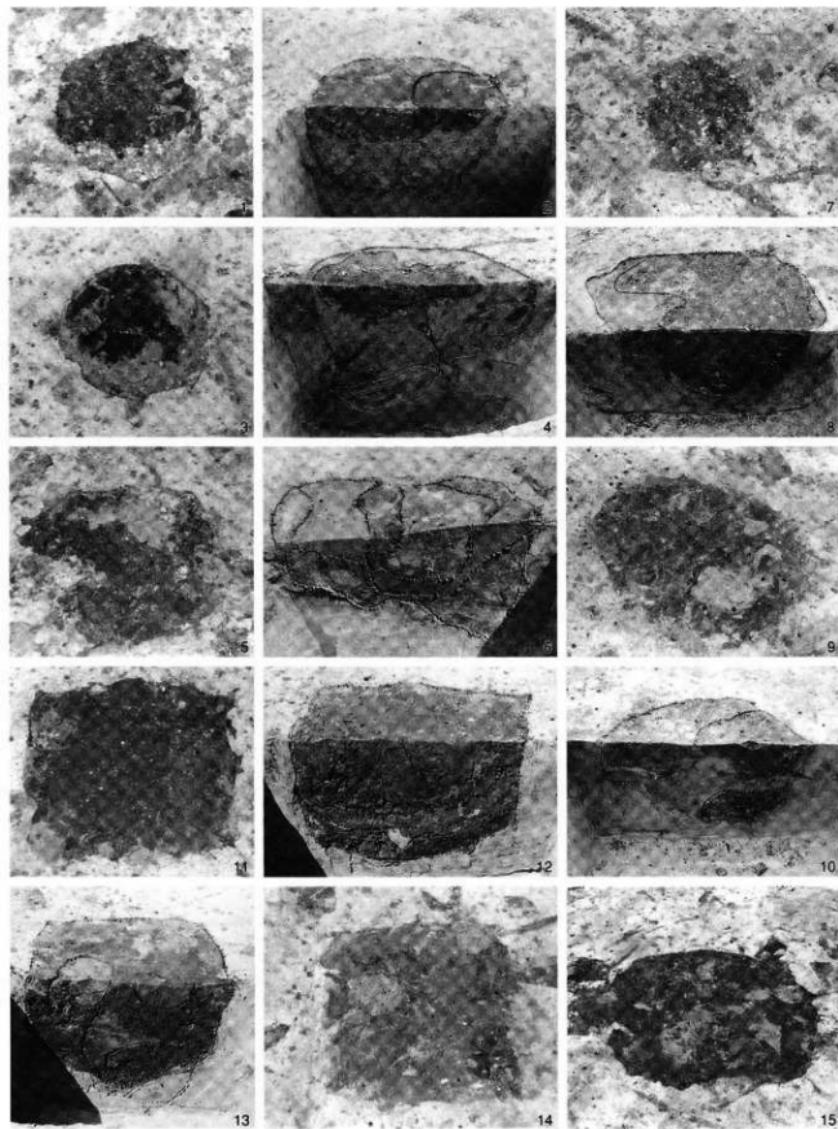
写真図版10 A地区(4) 1. SD01(古代段階)(北から) 2. 同左(南から) 3・4. SD01



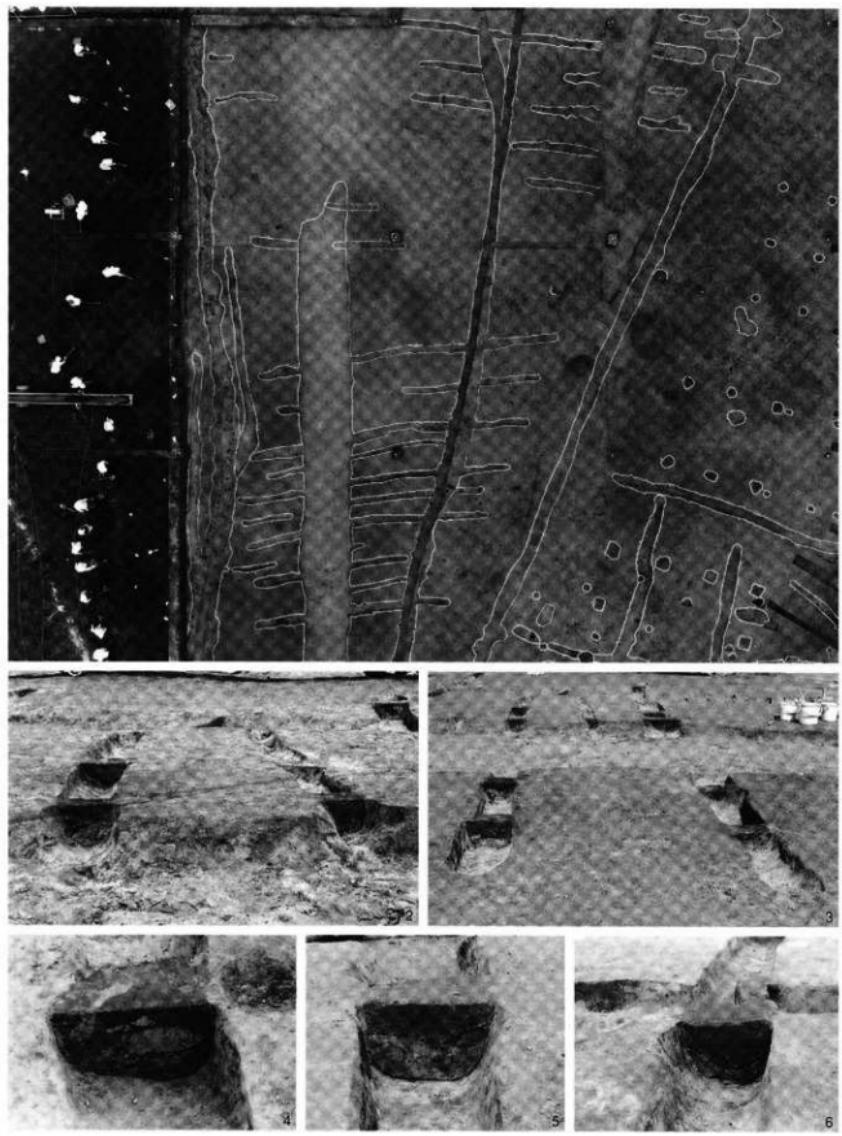
写真図版11 A地区(5) 1. SD01 2. SD01とSD06-1・3 3. SD01とSD05 4. SD05 5. SD08 6. SD06-3



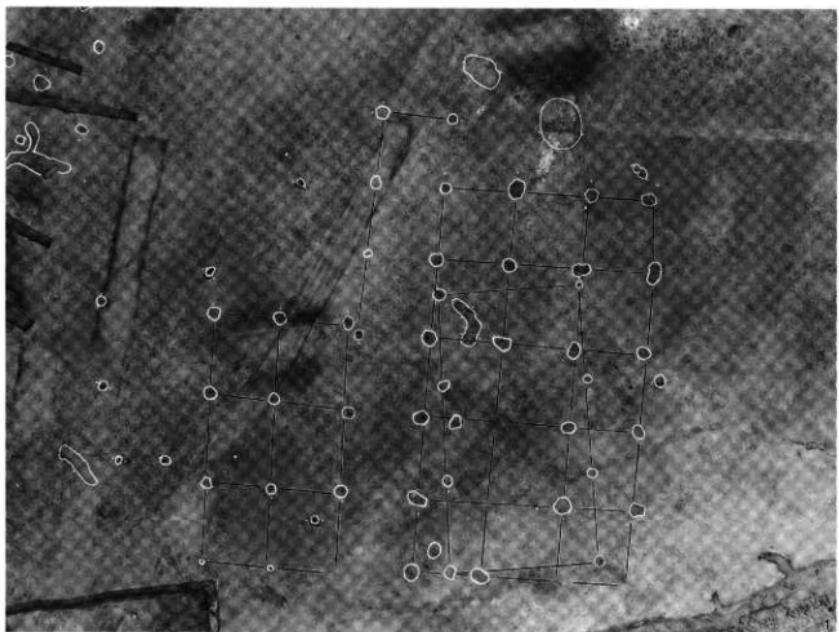
写真図版12 A地区(6) 1. 古代掘立建物柱群とサク状遺構(西から) 2. 古代掘立柱建物群



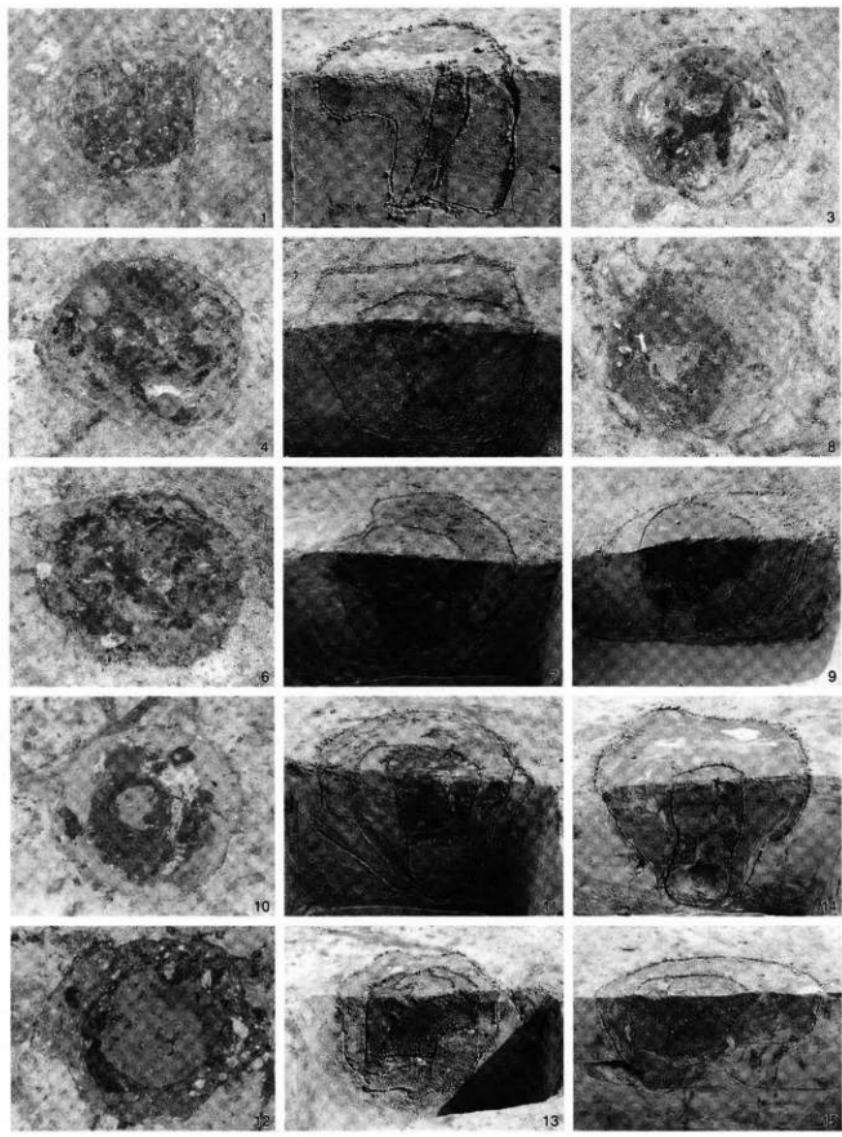
写真図版13 A地区(?) 1・2. SB04P3 3・4. SB04P8 5・6. SB05P2 7・8. SB06P4 9・10. SB06P6 11・12. SB07P2 13. SB06P7
14. SB07P6 15. SB07P10



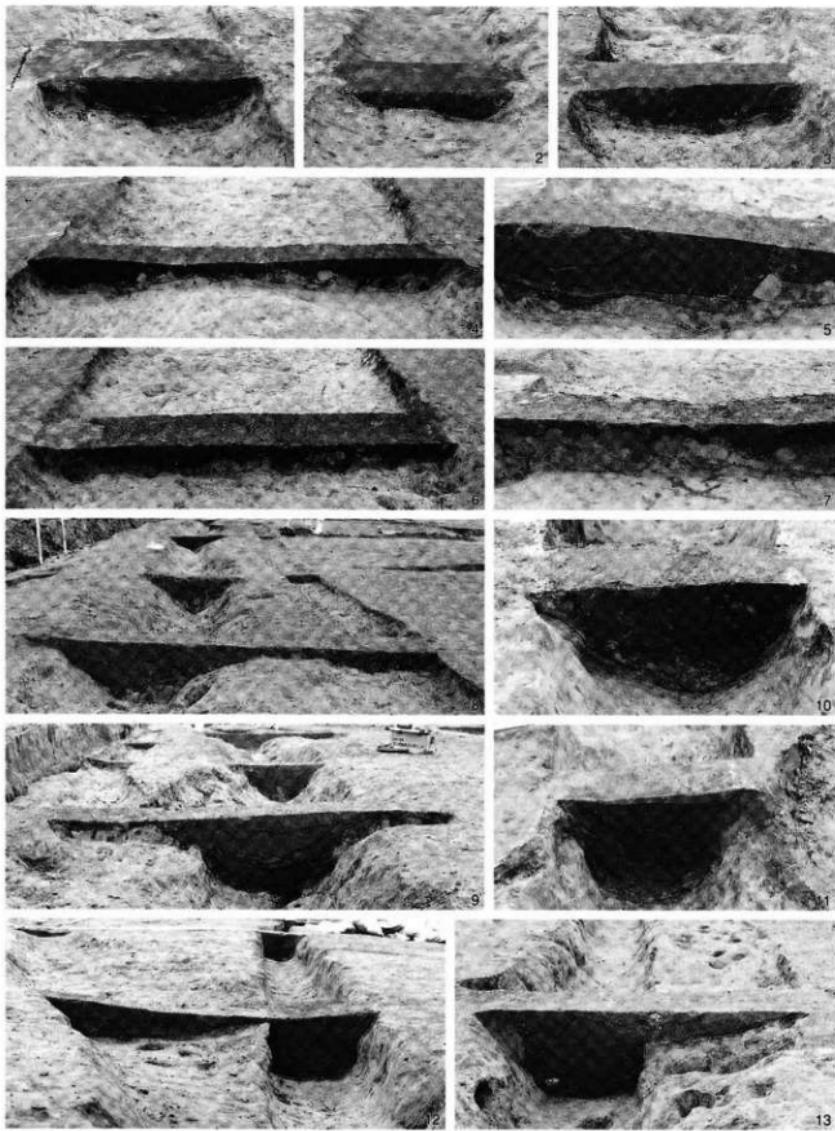
写真図版14 A地区(8) 1. 古代サク状造構 2~6. SF03~28



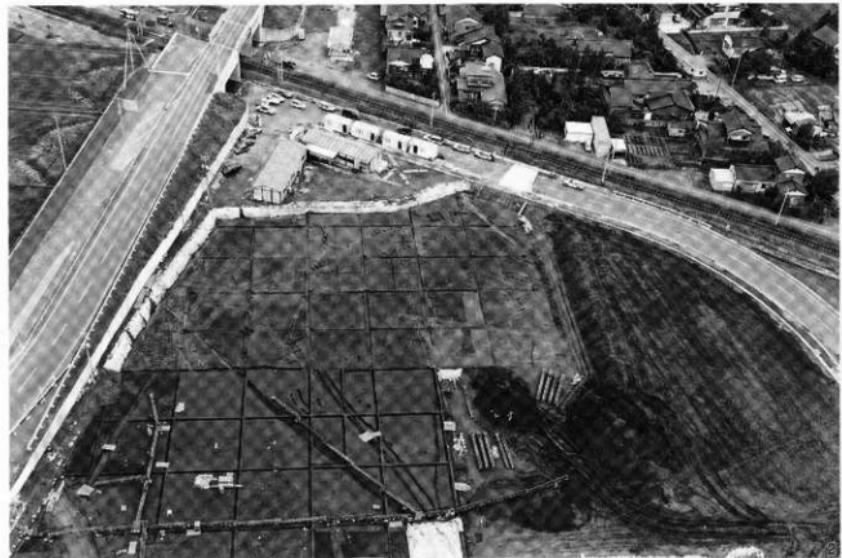
写真図版15 A地区(9) 1. 中世掘立柱建物(SB01-02-09) 2. SB08(中世)とSB07(古代)



写真図版16 A地区(9) 1-2. SA01P2 3. SA01P3 4-5. SB01P8 6. SB01P12 7. SB01P10 8-9. SB02P2 10-11. SB08P7
12-13. SB08P4 14. SB09P1 15. SB09P8



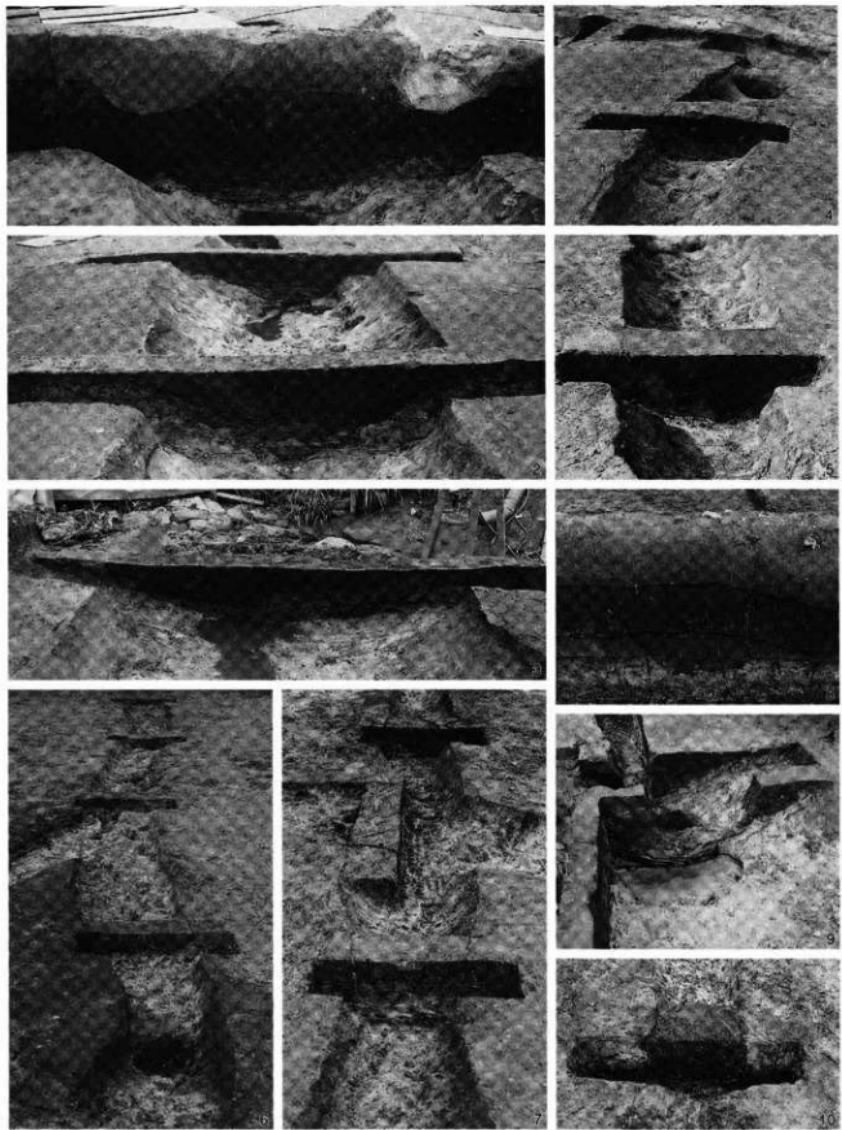
写真図版17 A地区(1) 1~3. SD14 4~7. SD13 8. SD113±SD17 9. SD113±SD115 10~11. SD02 12~13. SD104~108



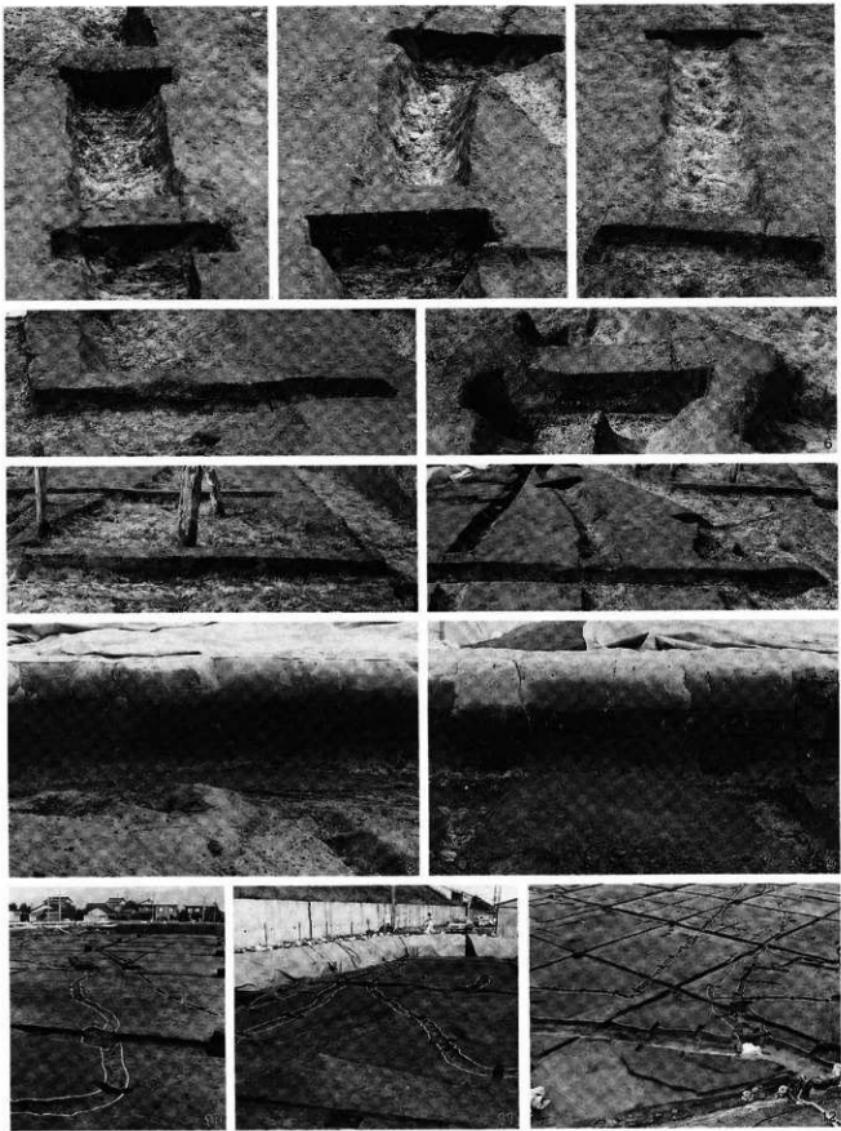
写真図版18 B地区(1) 1. 古代・中世面全景(北から) 2. 同左(南から)



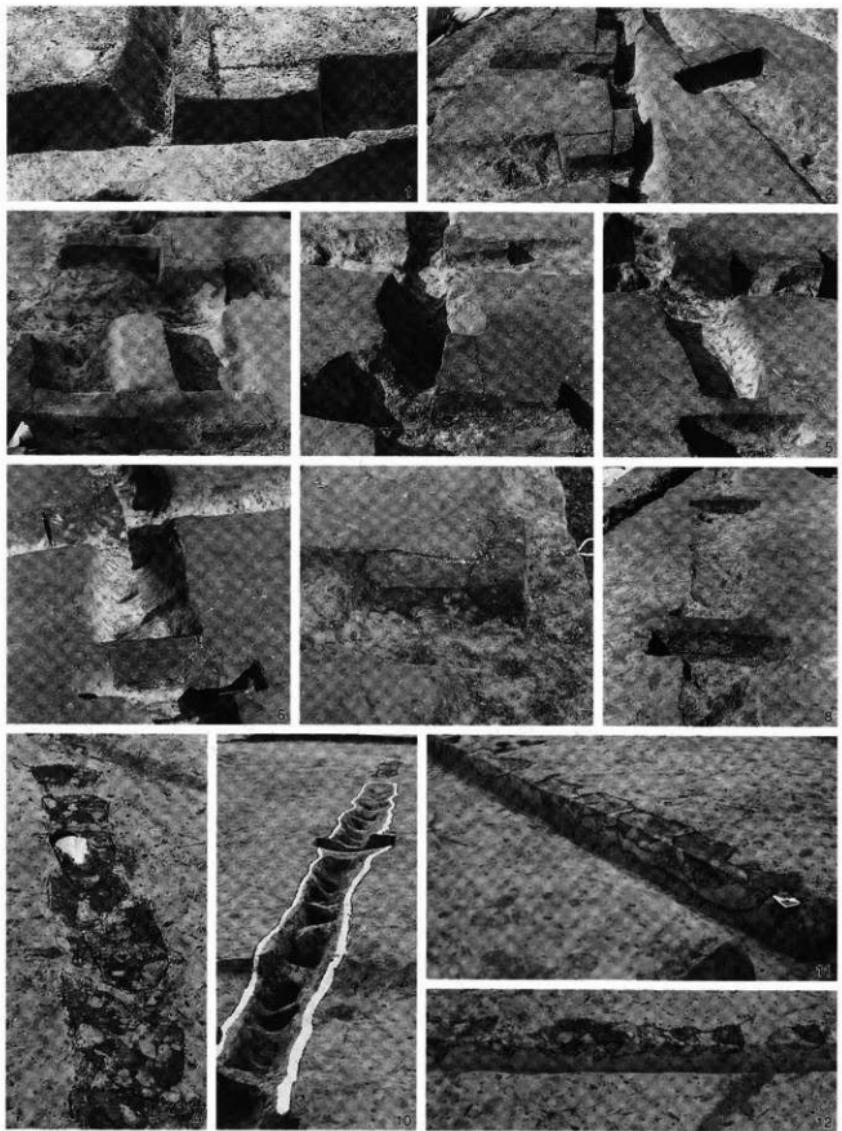
写真図版19 B地区(2) 1. 全景(北東から) 2. 西側ブロック(南から)



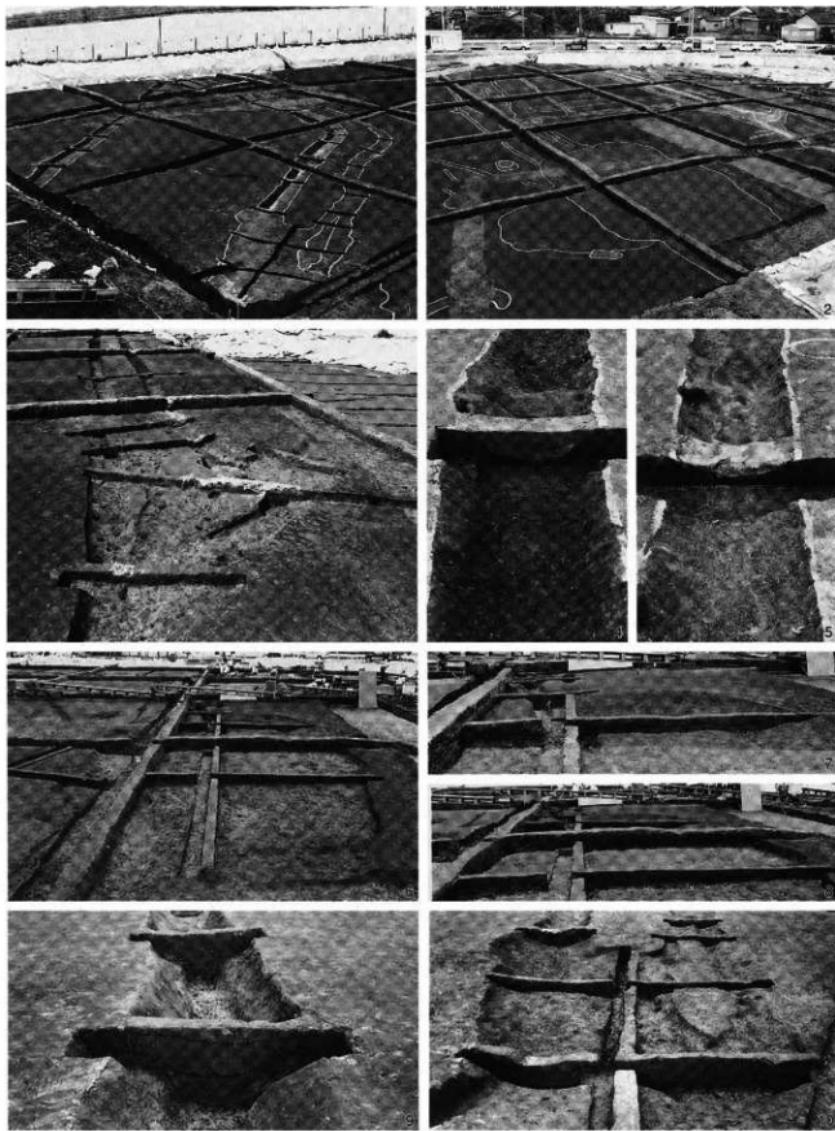
写真図版20 B地区(3) 1. SD06-2(上層はSD104とSD105) 2-3. SD06 4-5. SD06-3 6-7. SD114 8. SD116 9. SD116とSD06-2
10. SD116



写真図版21 B地区(4) 1. SD118 2. SD118 3. SD130 4-5. SD122 6. SD123-124 7. SD122-123-124 8. SD116とSD114
9. SD116とSD118 10. SD116とSD114 11. SD116とSD118 12. SD06-2とSD116とSD06-3とSD114



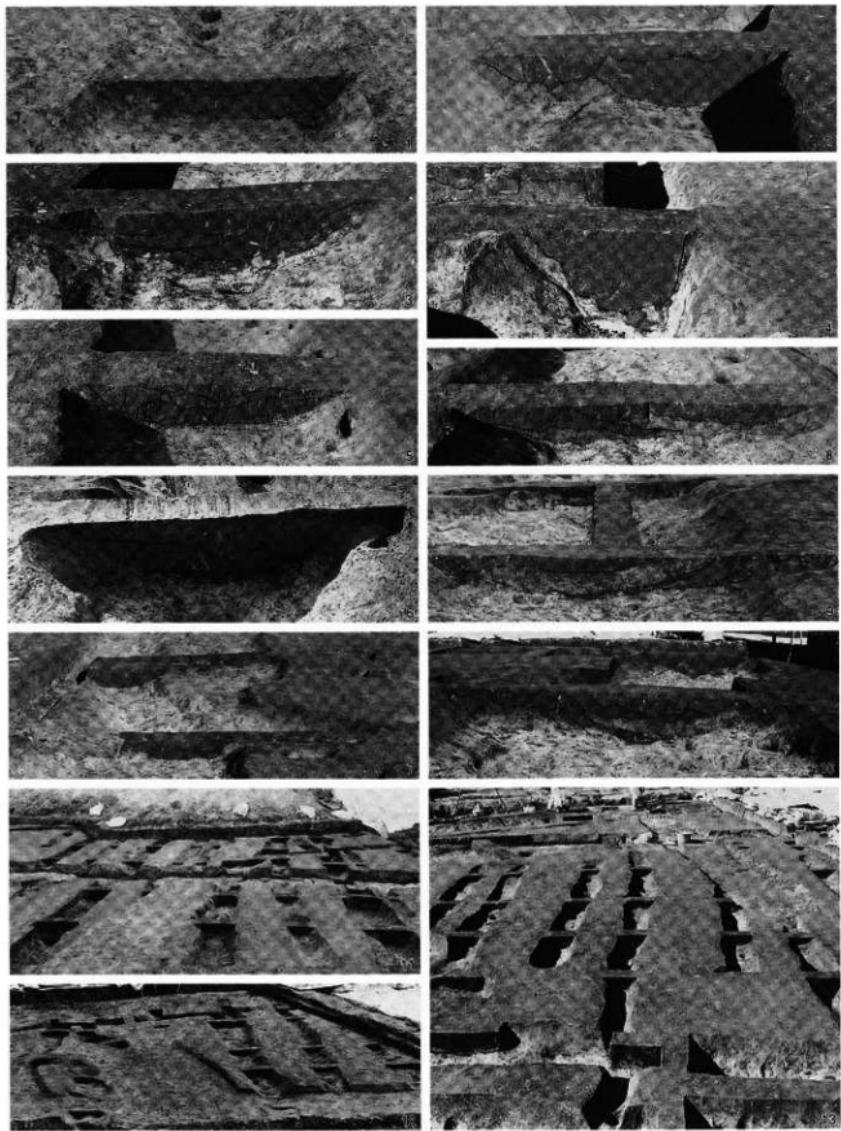
写真図版22 B地区(5) 1. SD124とSD125 2. SD125とSD126 3. SD143とSD144 4~7. SF311 8. SD133 9. SD138 10. SF08 11-12. SF05



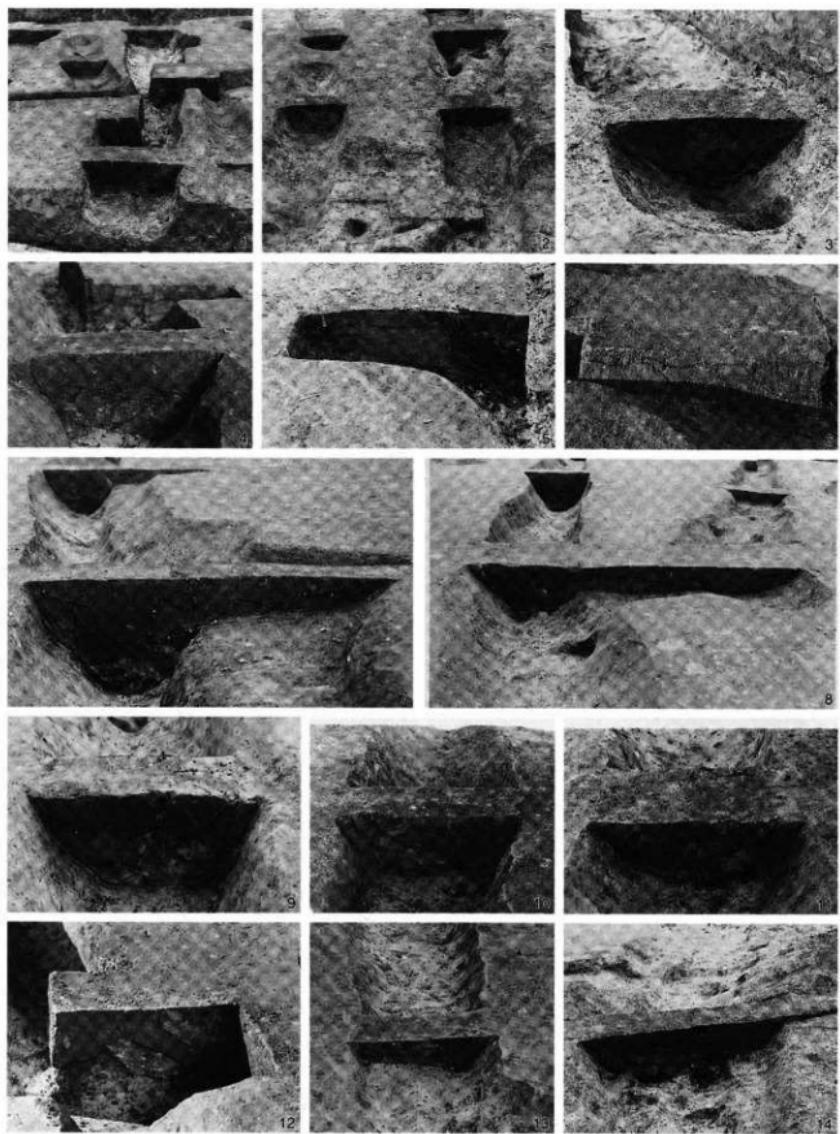
写真図版23 B地区(6) 1. 近世山西側ブロック(南東から) 2. 近世山西側ブロック(南西から) 3. SD104とSD105とSD106 4. SD104
5. SD105 6~8. SK51 9. SD101 10. SD100-102



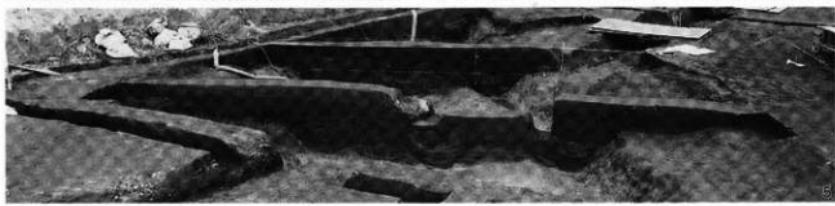
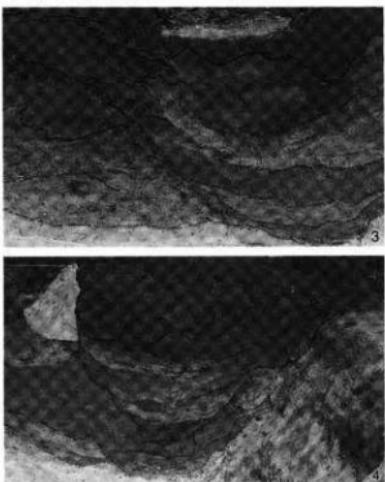
写真図版24 C地区(1) 1. 古代・中世面区全景 2. 古代サク状遺構群(北から) 3. 同左(南から)



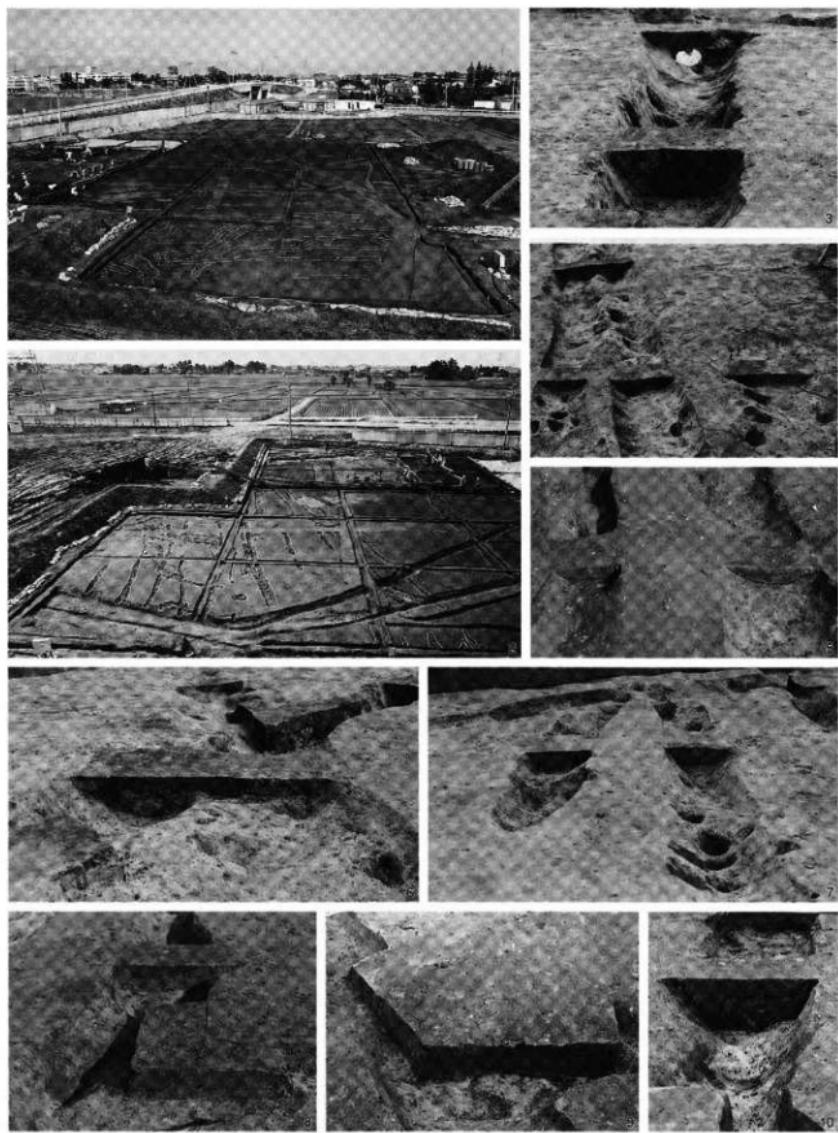
写真図版25 C地区(2) 1-2. SD130 3. SD130-1 4. SD130-2 5-6. SD133 7. SD133-5・6 8~10. SD122-123 11-12. SF307ブロック
13. SF309ブロック



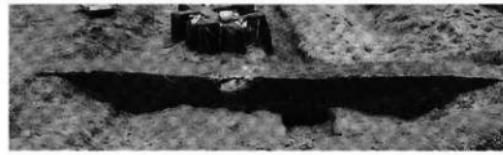
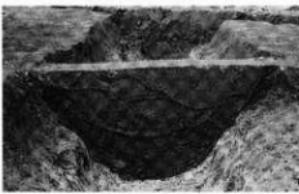
写真図版26 C地区(3) 1~3. SF307 4. SD144 5. SF307-20とSD144 6. SF307-2とSD122-123 7~8. SF308 9~11. SF309
12. SF309-7とSD115-1 13. SD325 14. SD344



写真図版27 C地区(4) 1. 近世面西側ブロック(右上はSD307) 2~5. SD307



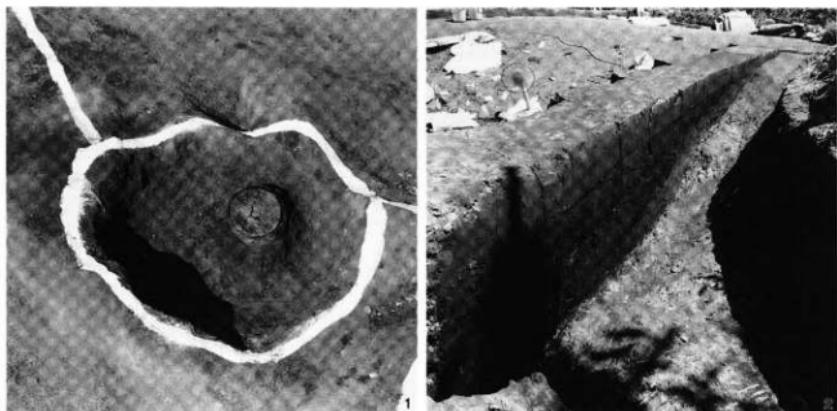
写真図版28 C地区(s) 1. 中共サク状造塊ブロック(南から) 2. 同左(東から) 3~5. SF301 6. SF301-4とSF302-1・2 7. SF302 8. SF301-5とSF302-11 9. SD324とSF301-16 10. SD324



写真図版29 C地区(6) 1. 近世面東側ブロック(南から) 2. SD102 3. SD100 4. SD306 5. SD112 6. SD101 7. SD101とSD306
8. SD100~102-112-306他 9. SD100とSD306



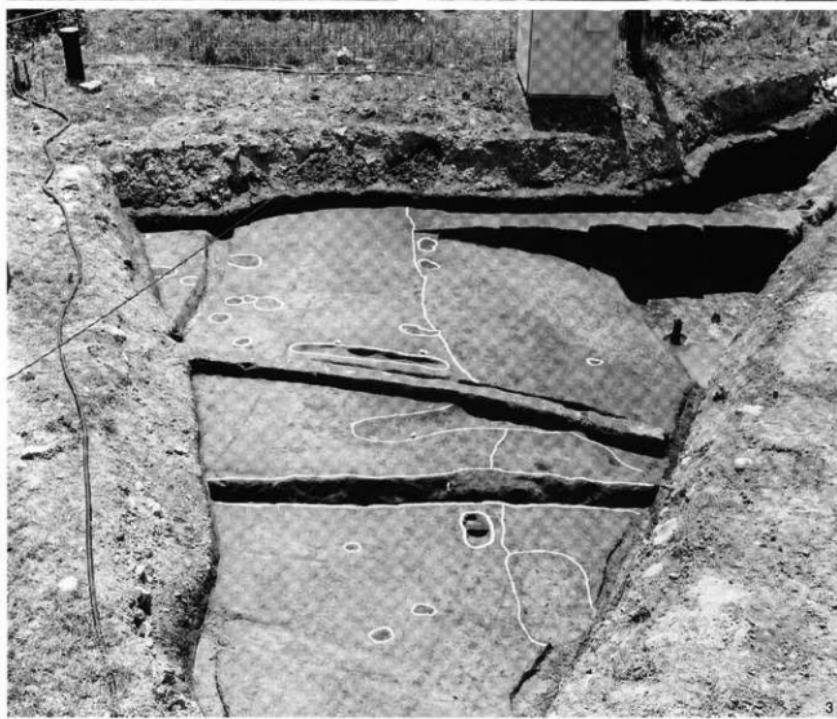
写真図版30 平成11年度調査区(D地区)(i) 全景



1

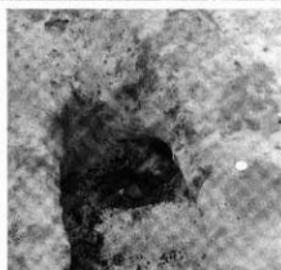
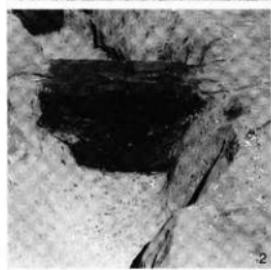


2

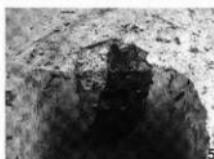
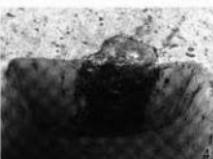
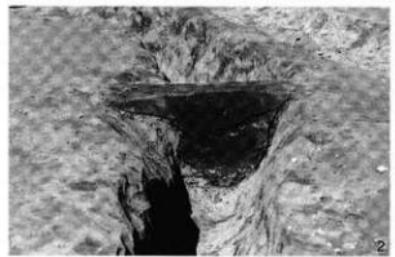
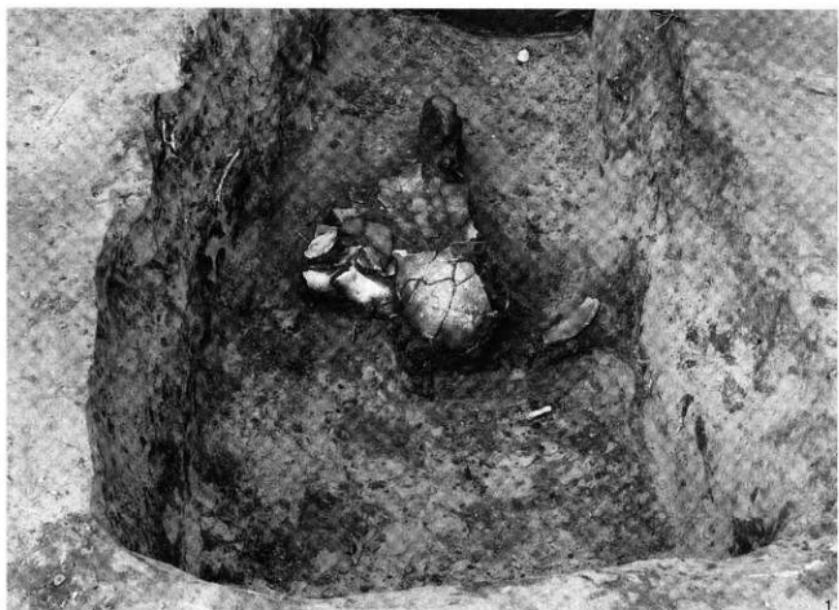


3

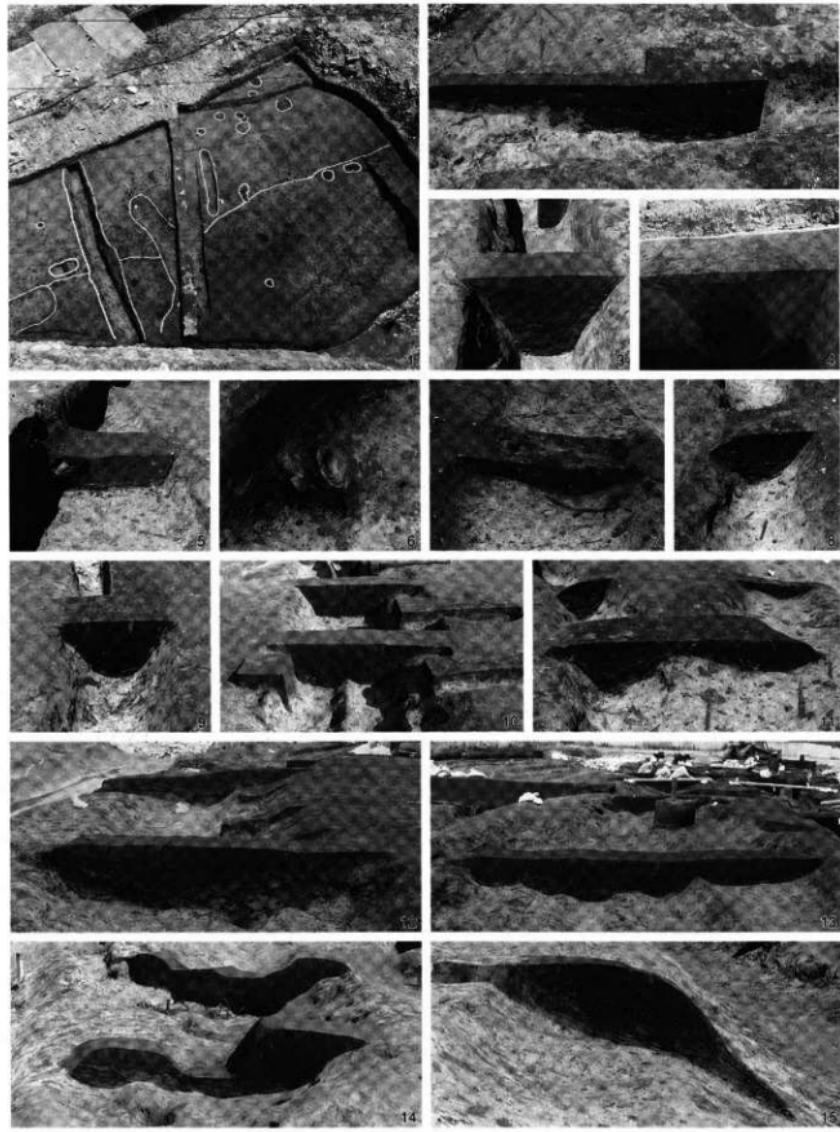
写真図版31 D地区(2) 1. SK418縄文土器出土状況 2. 墓没河道セクション 3. 墓没河道付近ブロック



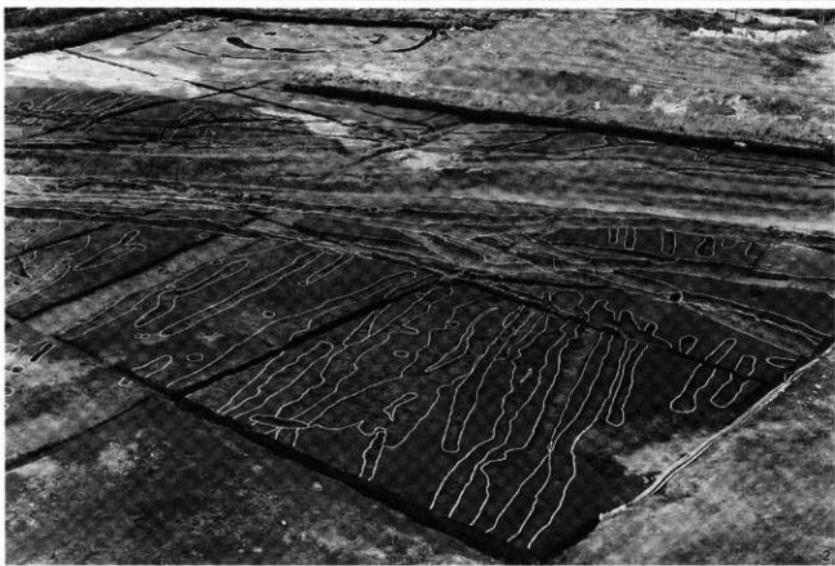
写真図版32 D地区(3) 1. 古墳時代住居跡(SB03-04) ブロック 2-3. SD414 4. SB04P1 5. SB04P2 6. SK413弥生土器出土状況



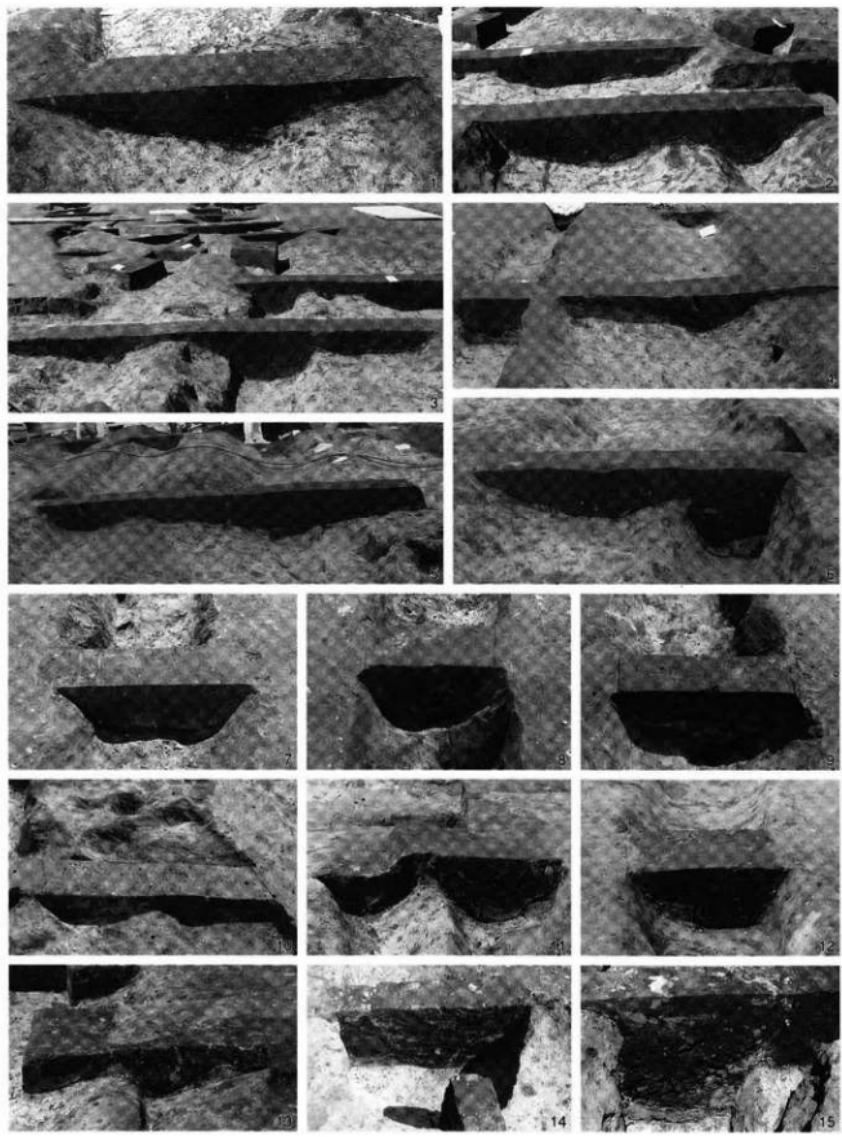
写真図版33 D地区(4) 1. SD414入り口部一括土器出土状況 2-3. SD413 4. SB03P2 5. SB03P4 6. SK405 7. SK406



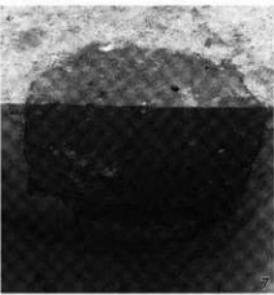
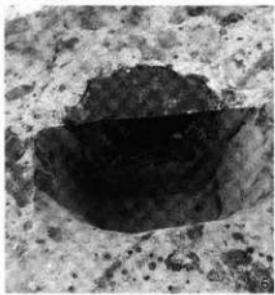
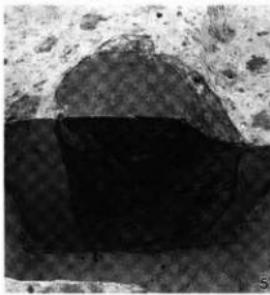
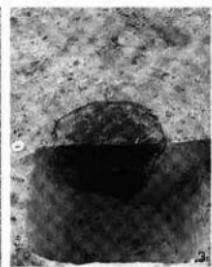
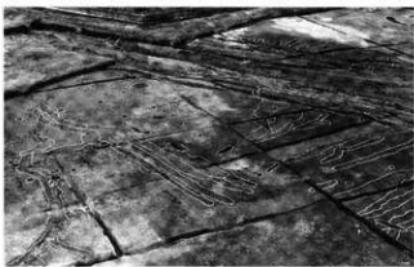
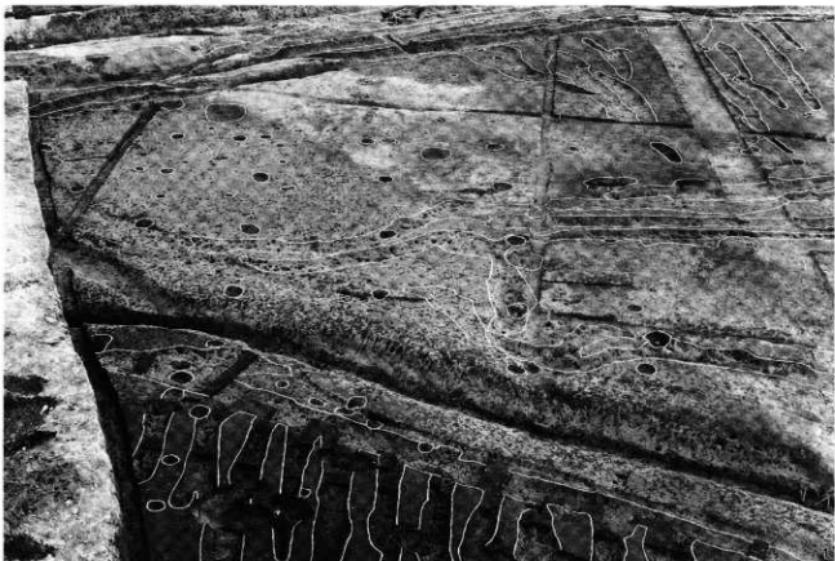
写真図版34 D地区(5) 1. 古墳時代住居跡(SB05)ブロック 2. SD422と埋没河道 3. SD422 4. SB05P2 5-6. SD421 7. SD411-1
8. SD411-3 9. SD411-2 10. SD411-1とSD411-3 11. SD411-2とSD411-3 12-14. SD122-123(SD406含む)
15. SD404



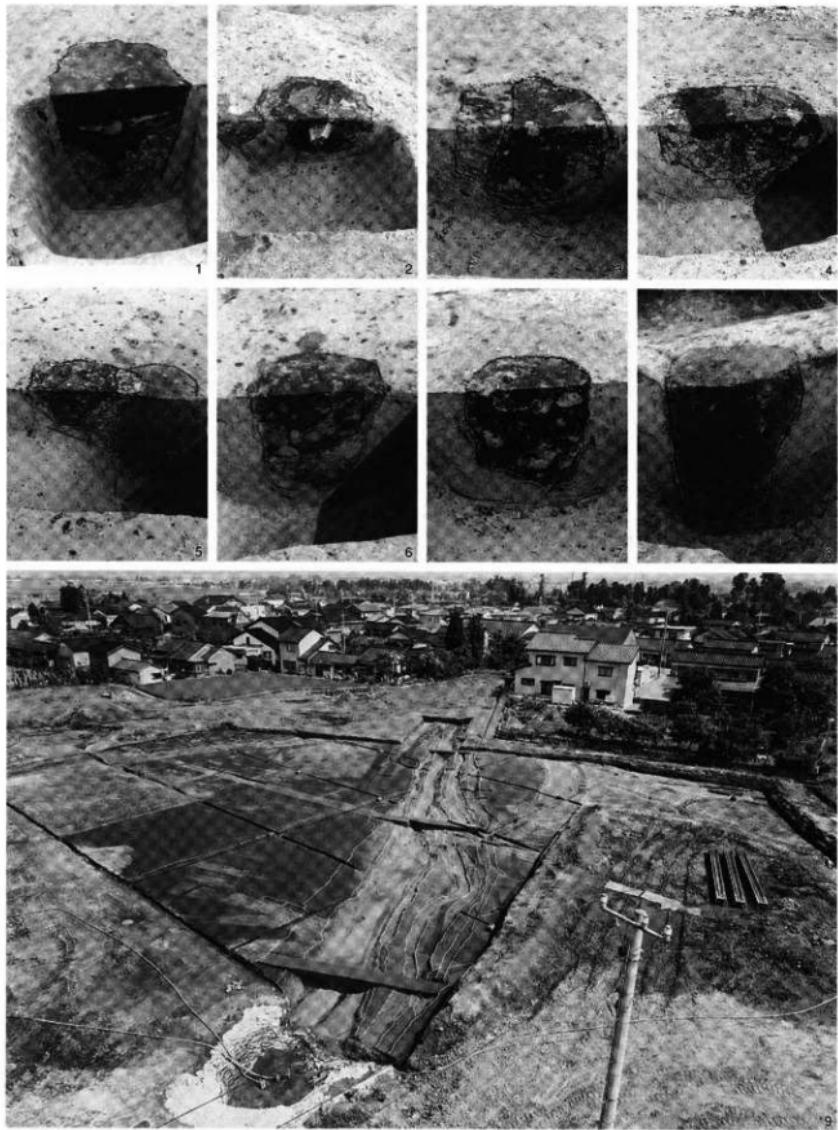
写真図版35 D地区(6) 1. 古代溝群とサク状遺構群 2. SF403ブロック



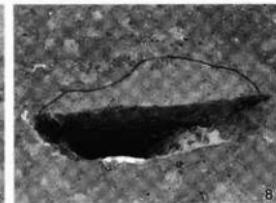
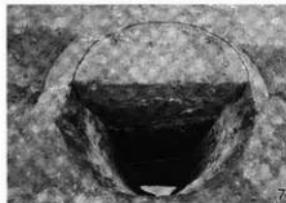
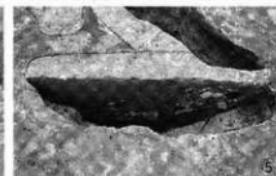
写真図版36 D地区[?] 1. SD133 2. SD133-1とSD115-4 3. SD115-2-3とSD133-2 4. SD115 5. SD115-4-6とSD406
6. SD115-1-SD115-4 7~12. SF403 13. SF405-9とSD437 14. SK409 15. SK410



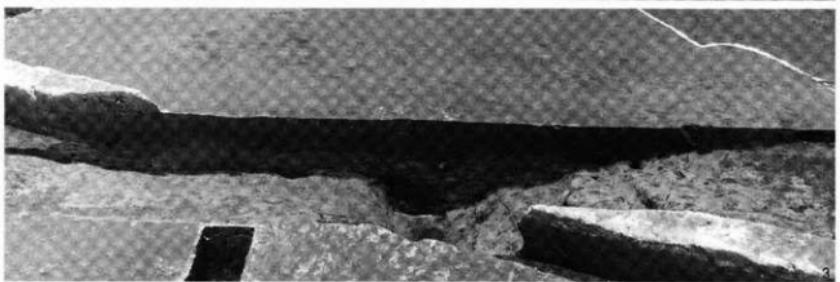
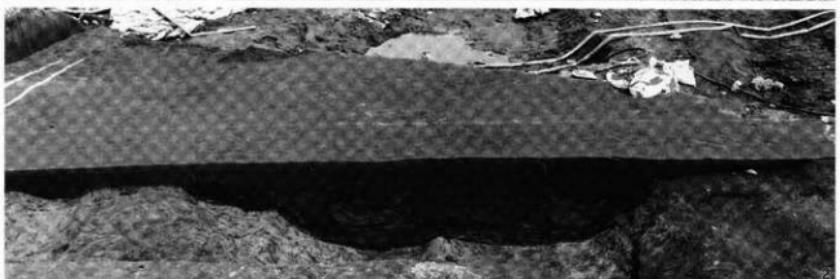
写真図版37 D地区(8) 1. 中世据立柱遺物 (SB01-02) 2. 中世サク状遺構群ブロック 3. SB02P1 4. SB02P6 5. SB01P5 6. SB01P14
7. SB01P16



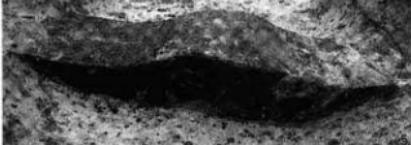
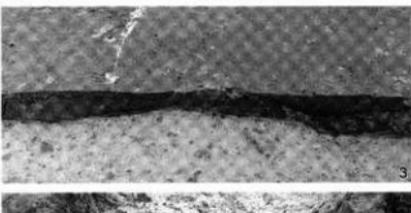
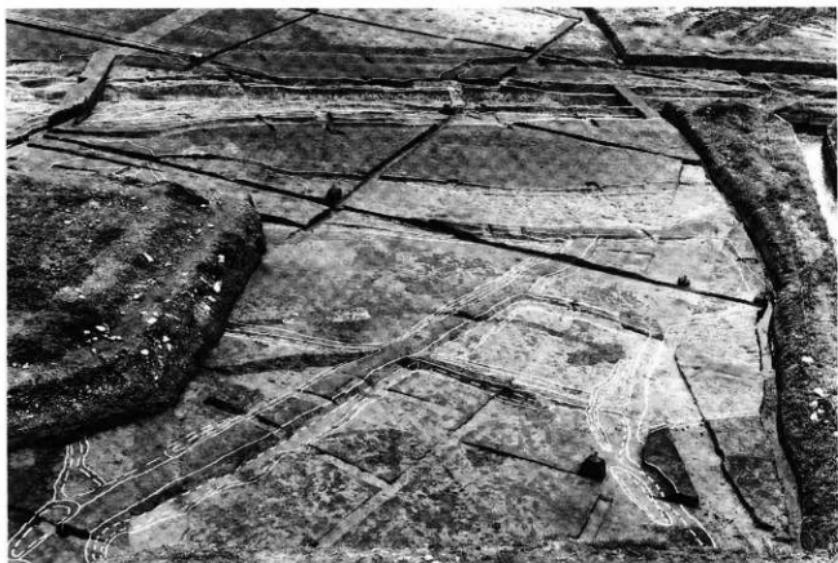
写真図版38 D地区(9) 1.P414 2.P453 3.P454 4.P457 5.P461 6.P472 7.P480 8.P482 9.上層造構全景



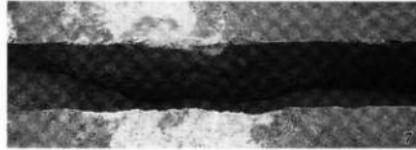
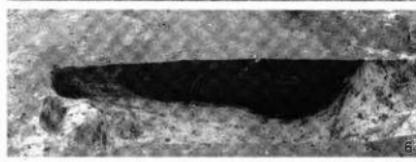
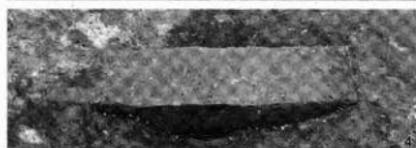
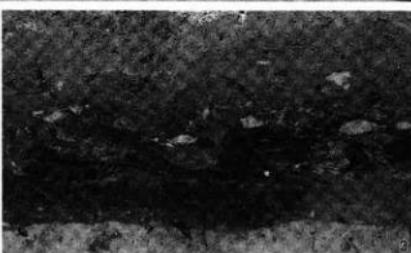
写真図版39 D地区⑩ 1-2. 格円柱穴建物及び井戸 3-4. SK01 5. SK11 6. SK17 7. SK02 8. SK08 9. SK14



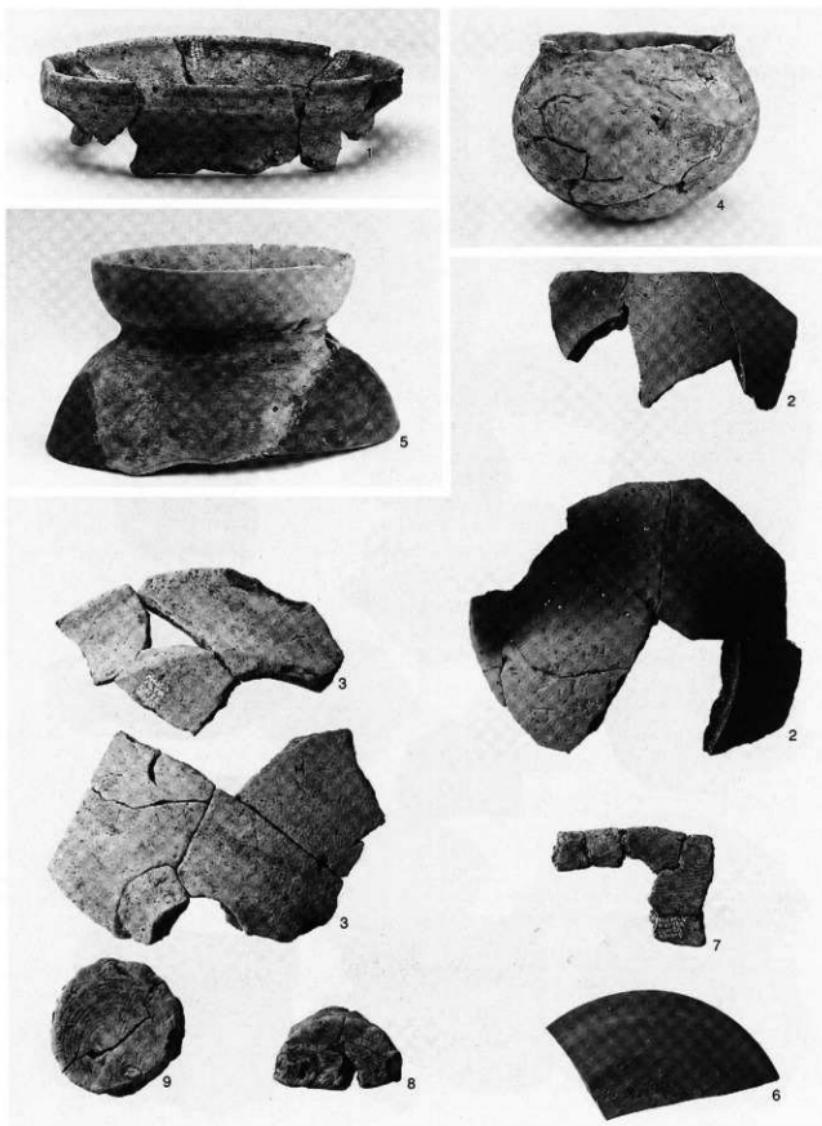
写真図版40 D地区川 1~3. SD307



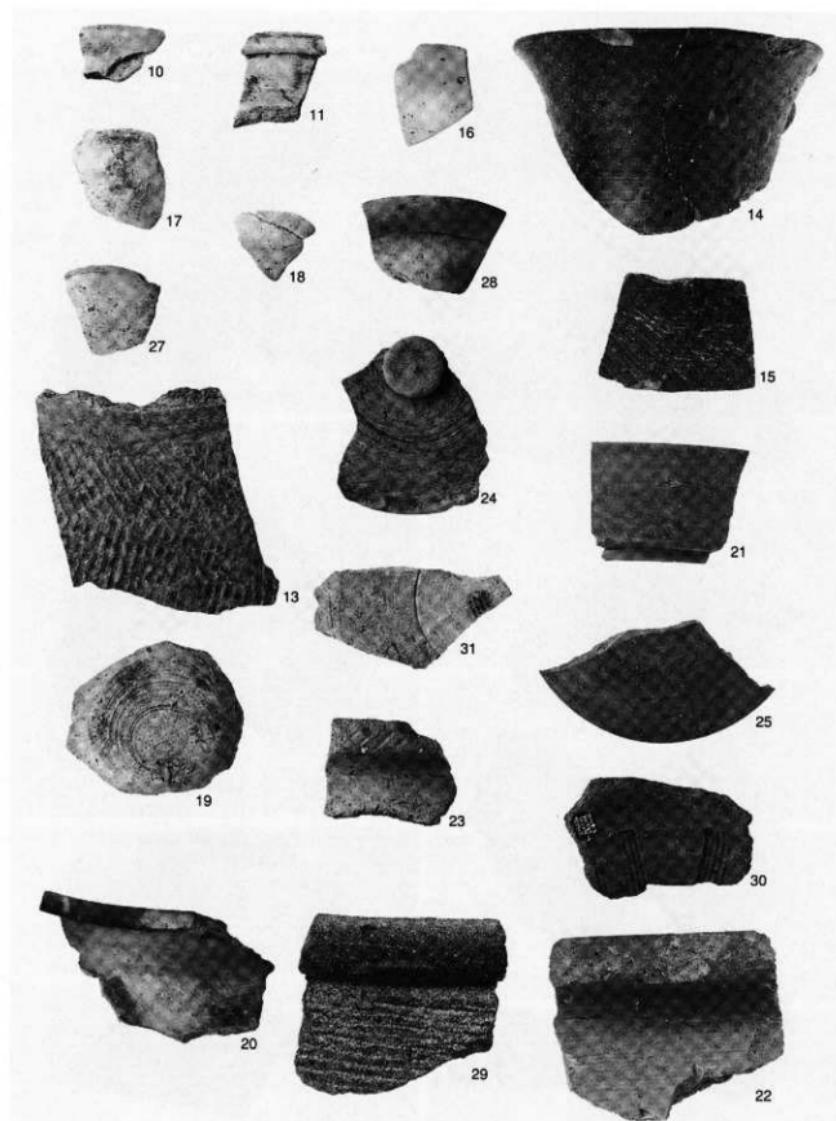
写真図版41 D地区(2) 1. 中世後期水田ブロック 2-3. 水田畦畔部分 4. 最下層の水田(X42Y33付近) 5. SD02-03
6. SD09と基本端序



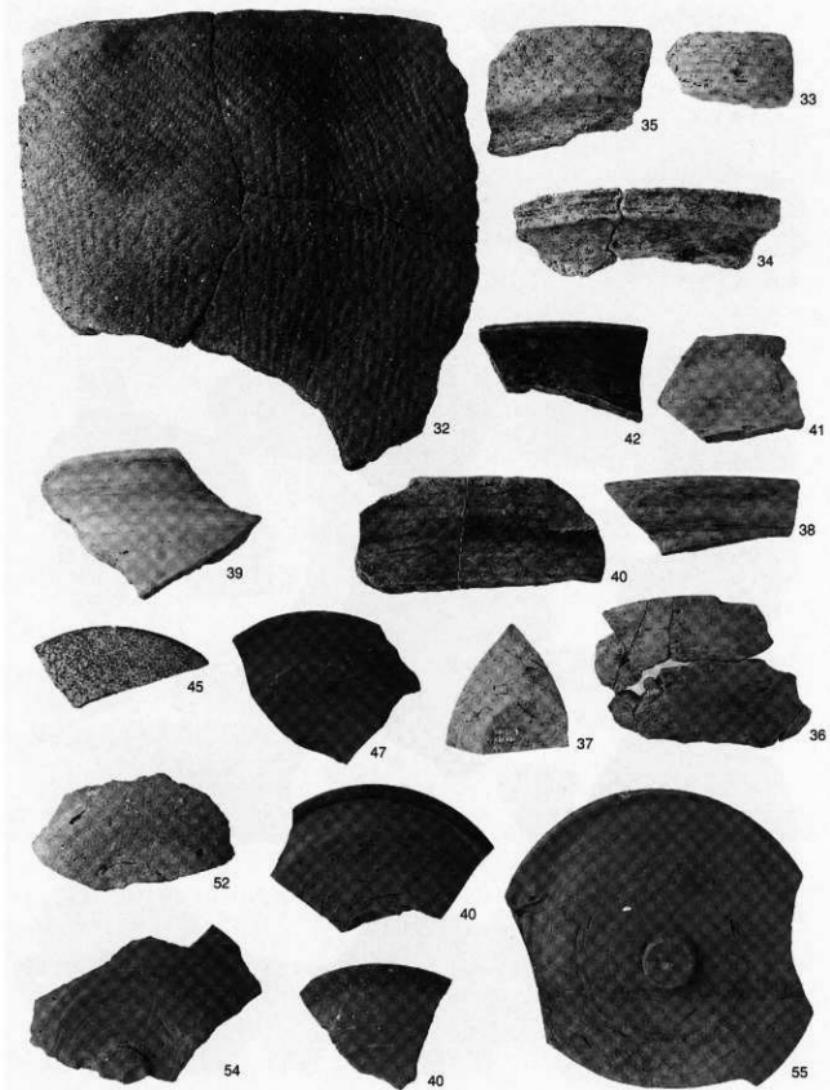
写真図版42 D地区③ 1. 近世水田跡(SX07)ブロック 2. 近世水田跡畔 3. 近世後期地震痕跡 4. SD01 5. SD08 6. SD05 7. SD06
8. SD06-07 9. SD317



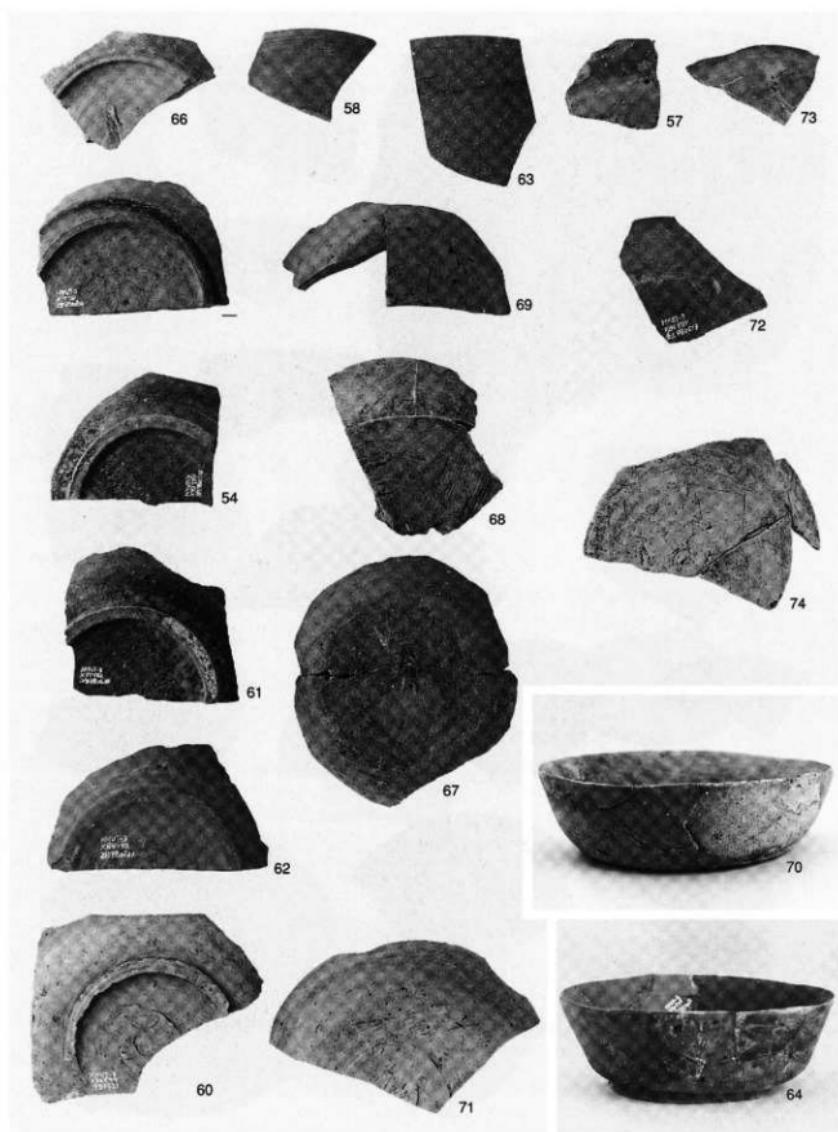
写真図版43 H10年度調査出土遺物(1) ※遺物の番号は、実測番号



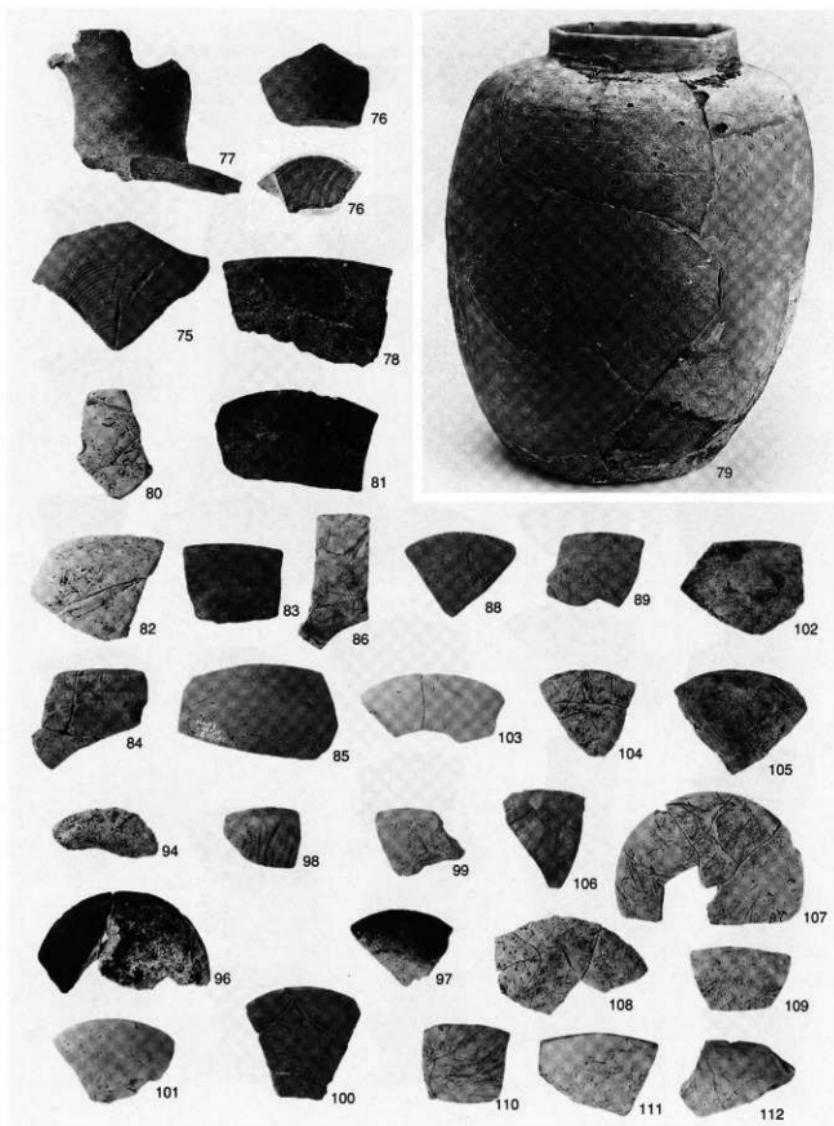
写真図版44 H10年度調査出土遺物(2)



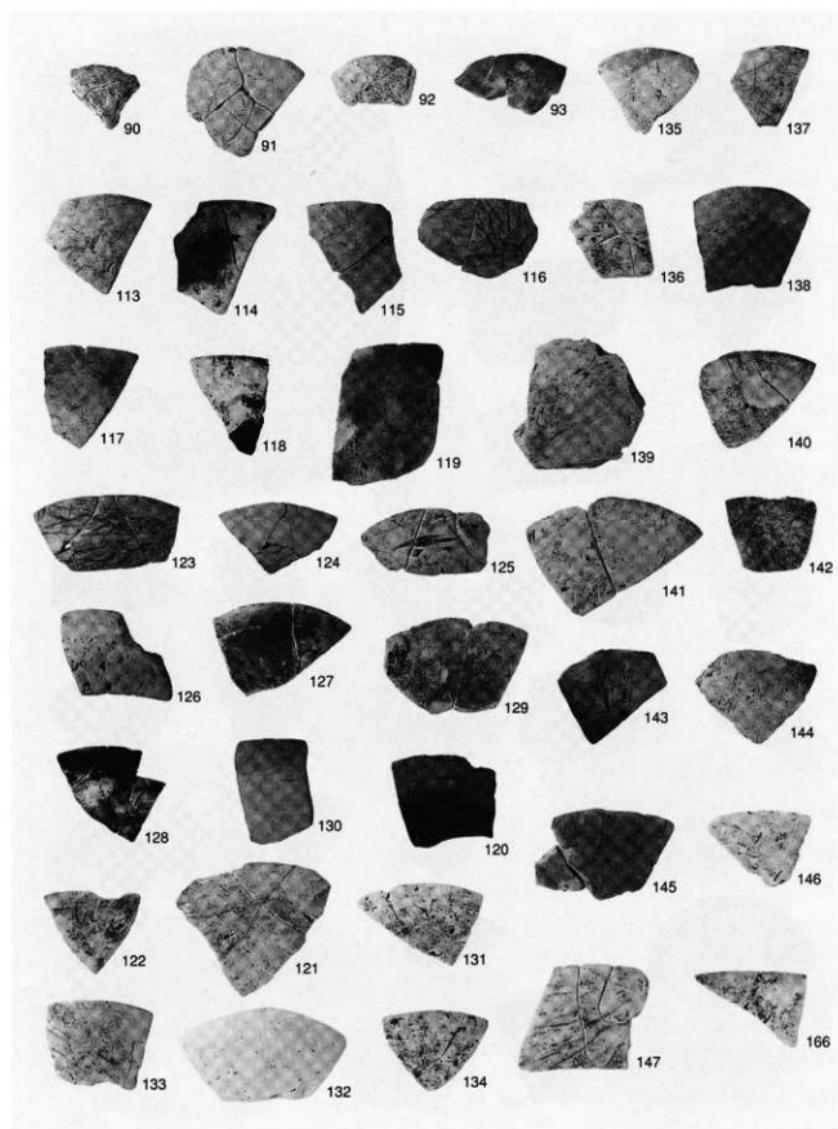
写真図版45 H10年度調査出土遺物(3)



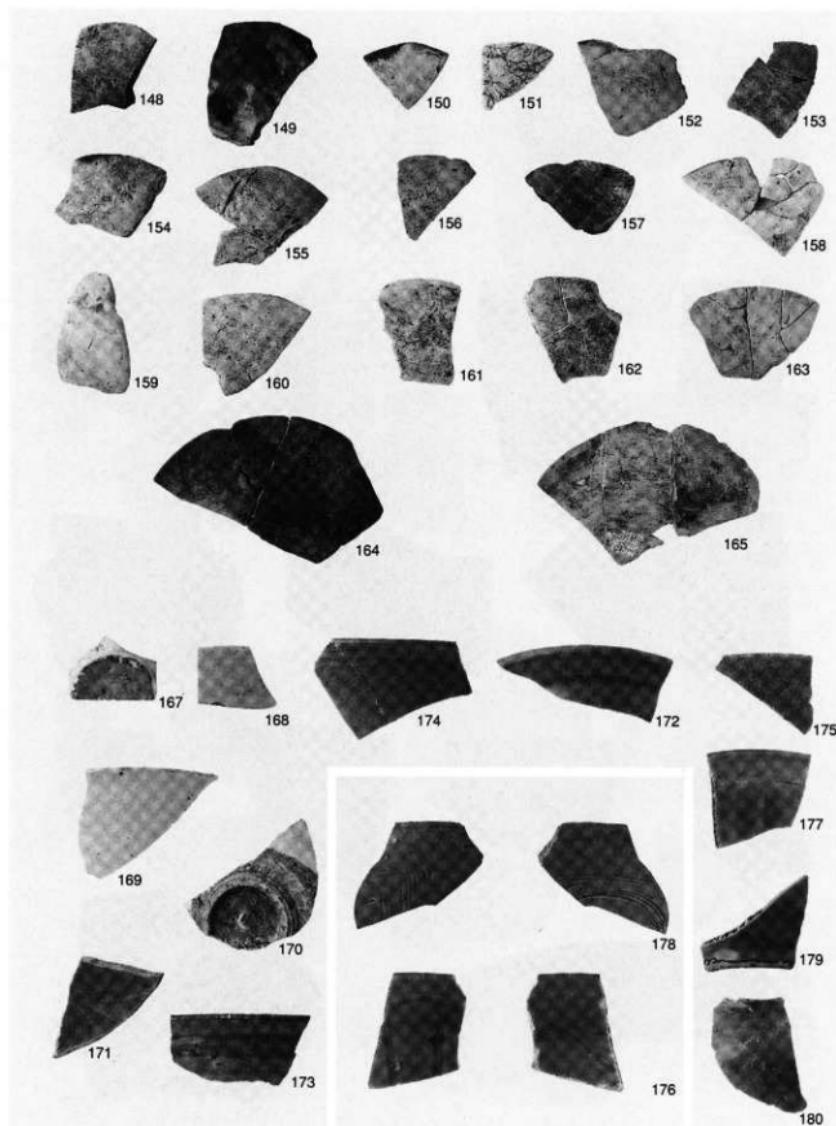
写真図版46 H10年度調査出土遺物(4)



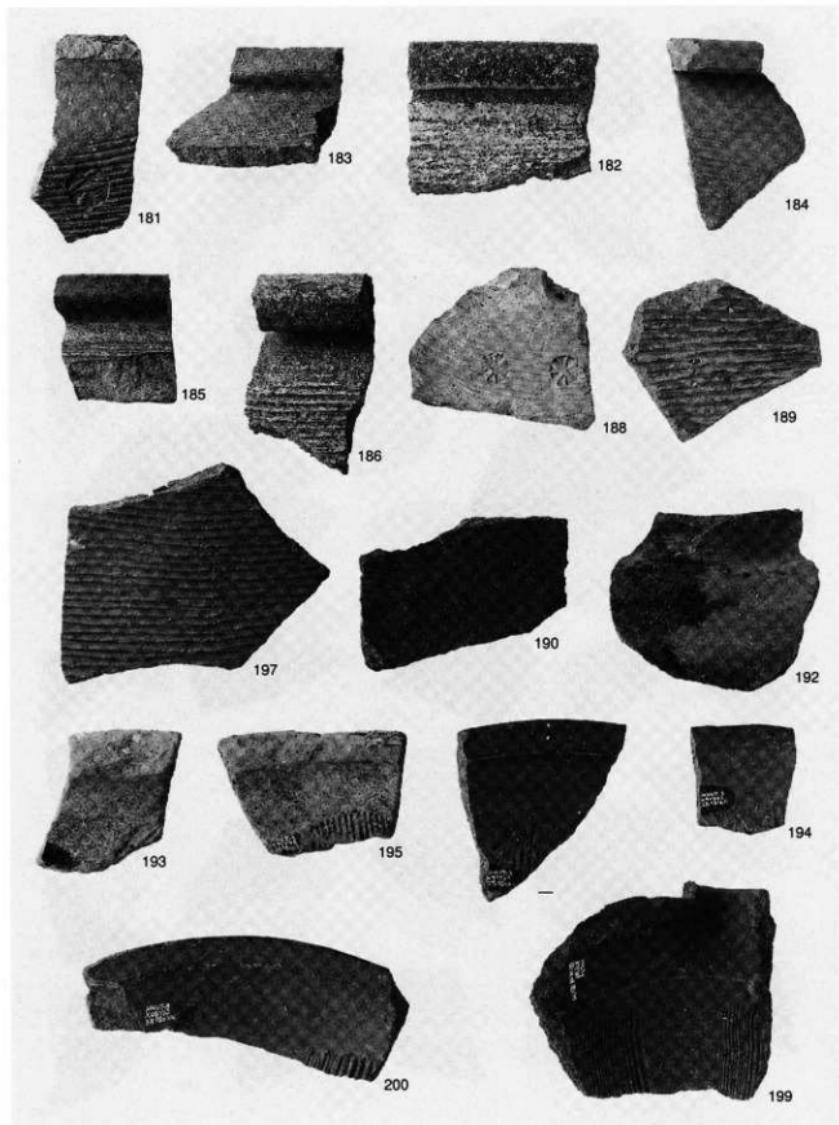
写真図版47 H10年度調査出土遺物(5)



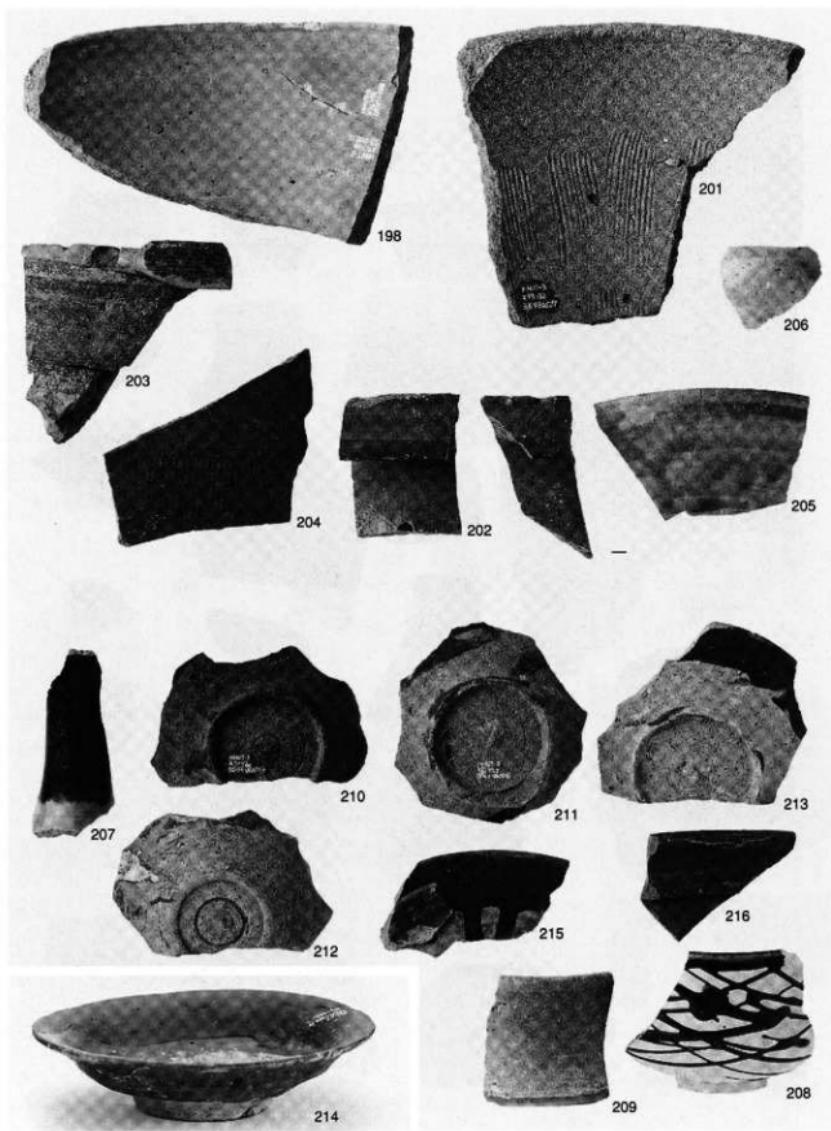
写真図版48 H10年度調査出土遺物(6)



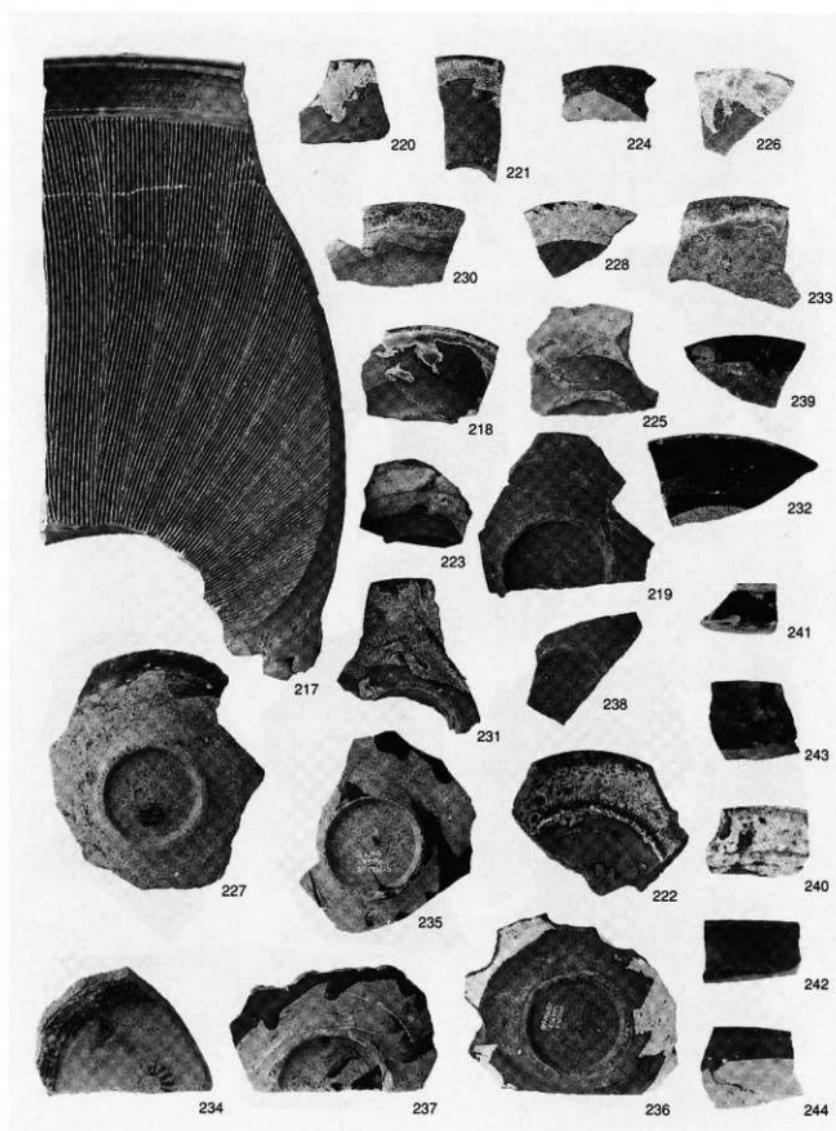
写真図版49 H10年度調査出土遺物(7)



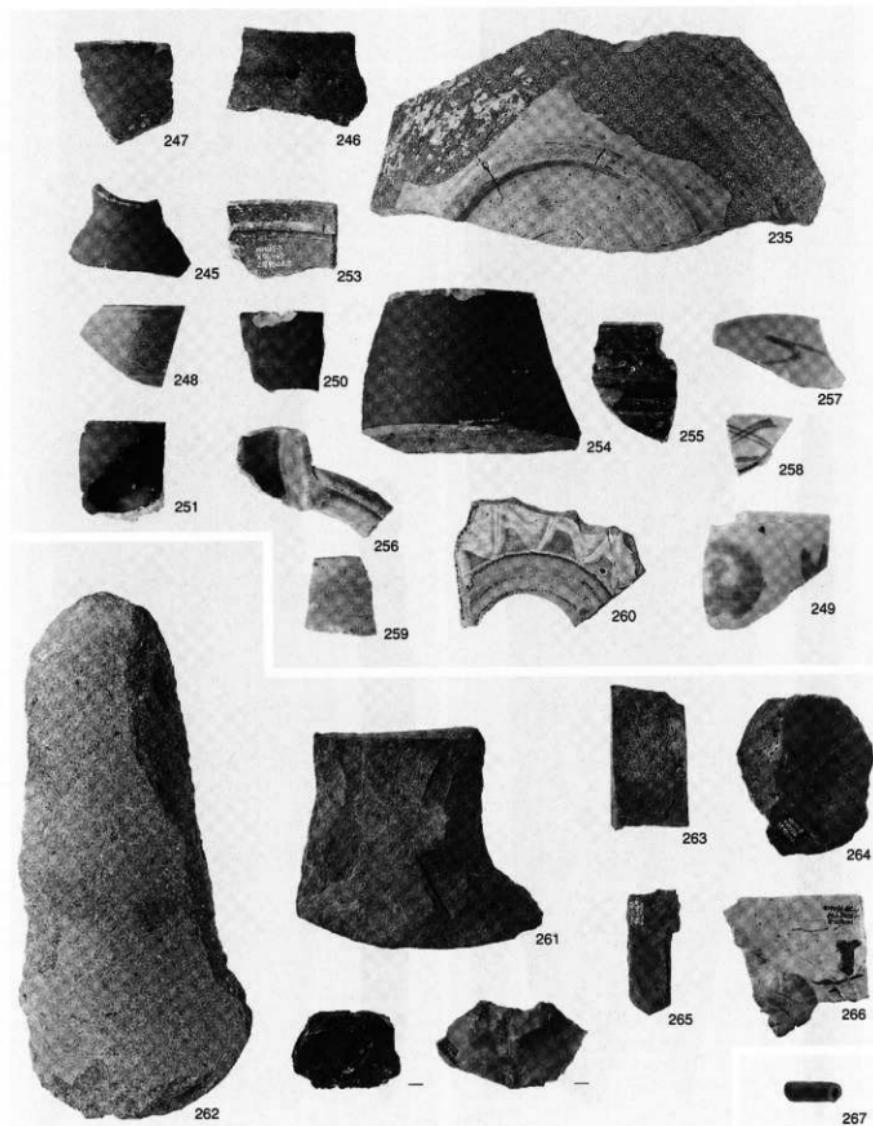
写真図版50 H10年度調査出土遺物(4)



写真図版51 H10年度調査出土遺物(9)



写真図版52 H10年度調査出土遺物



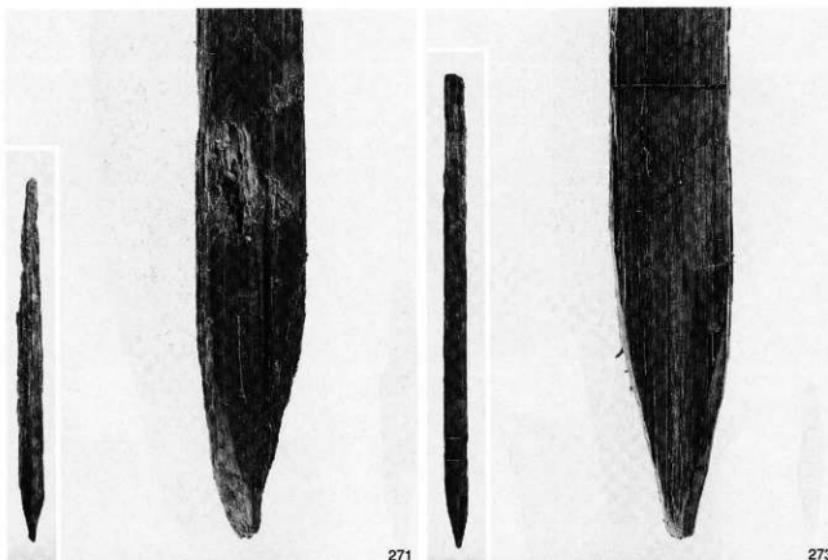
写真図版53 H10年度調査出土遺物⑩



281

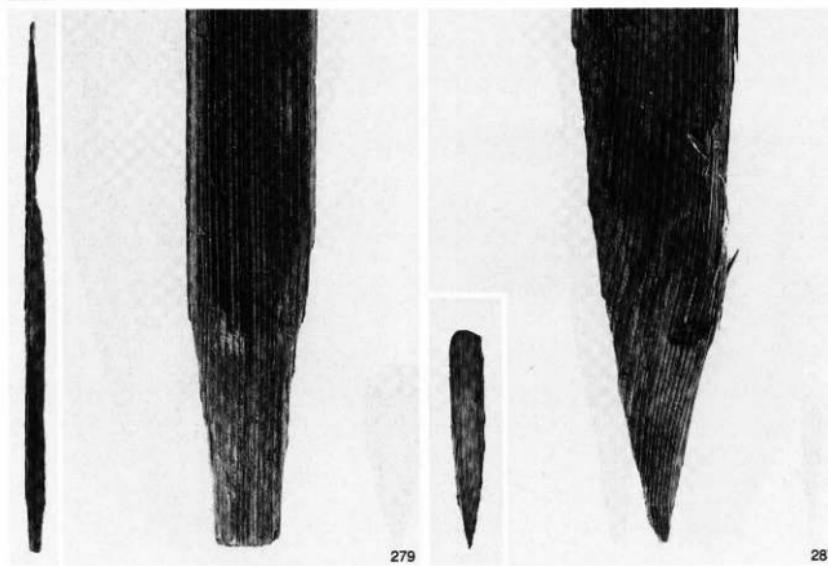


282



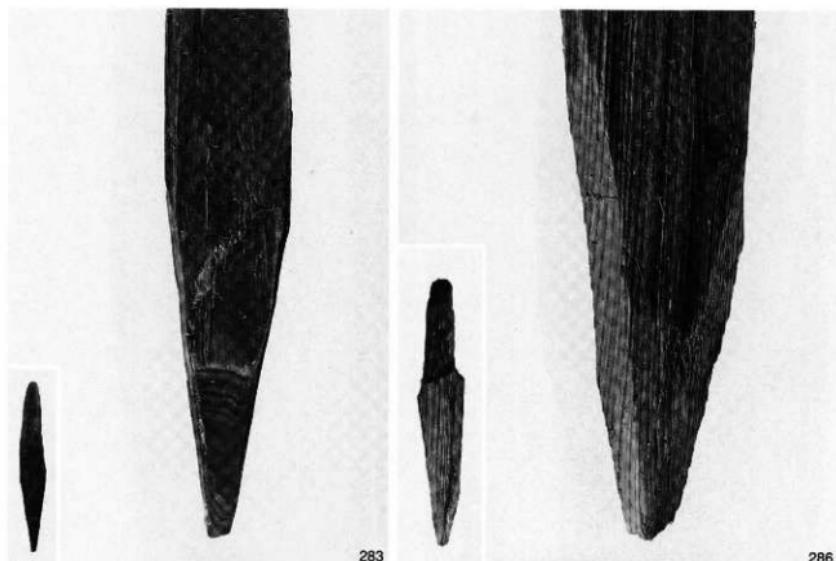
271

273



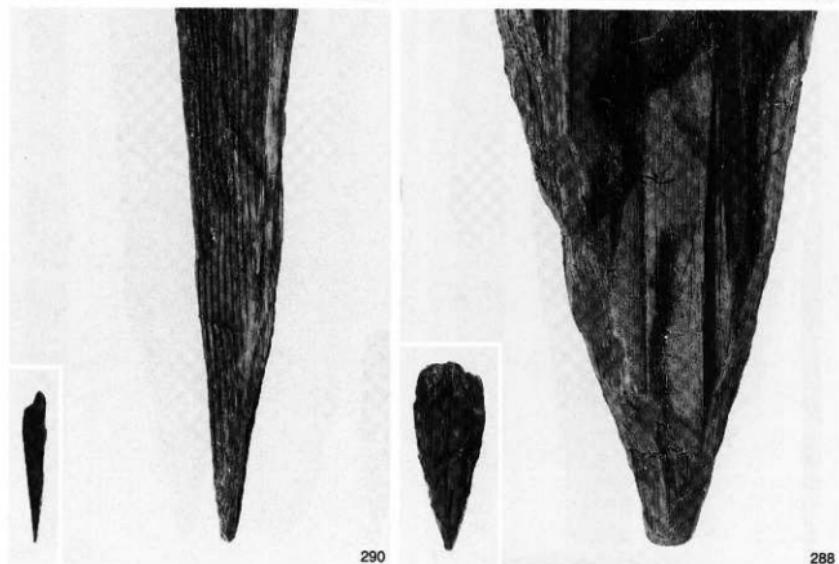
279

287



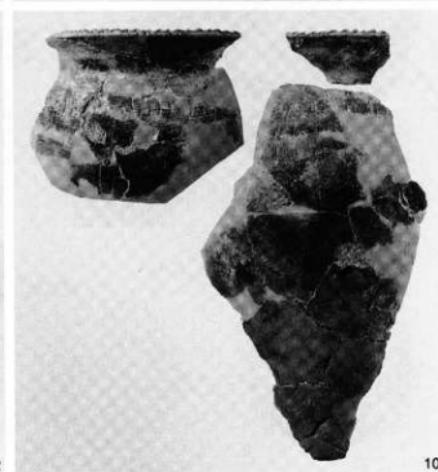
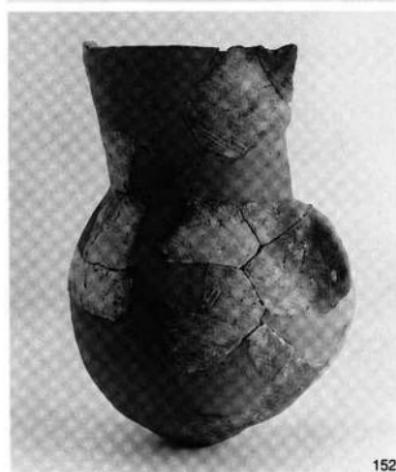
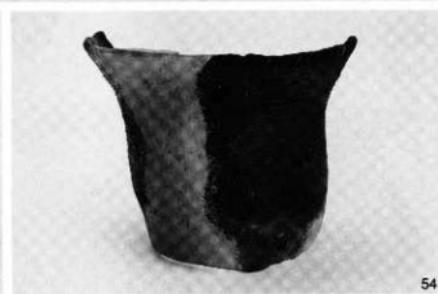
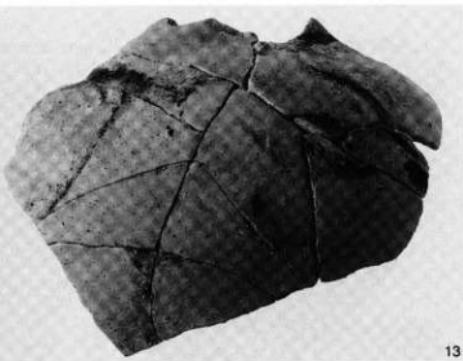
283

286



290

288





65



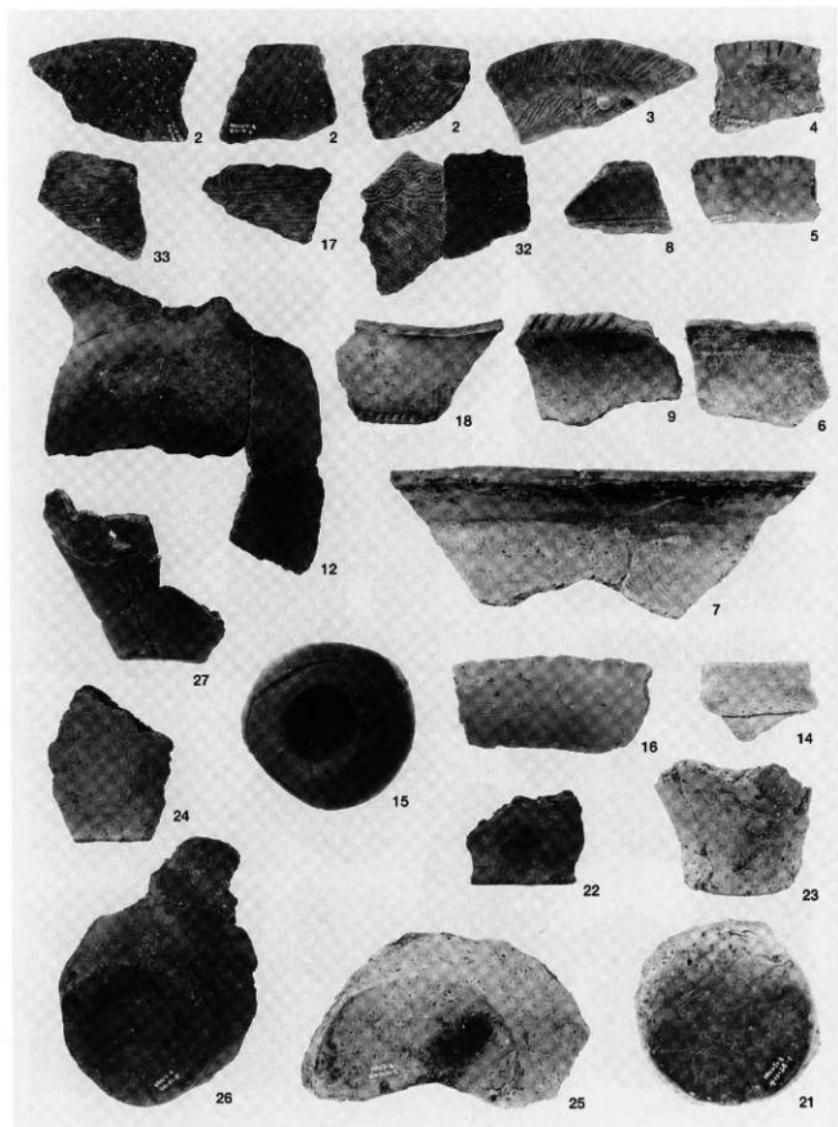
383



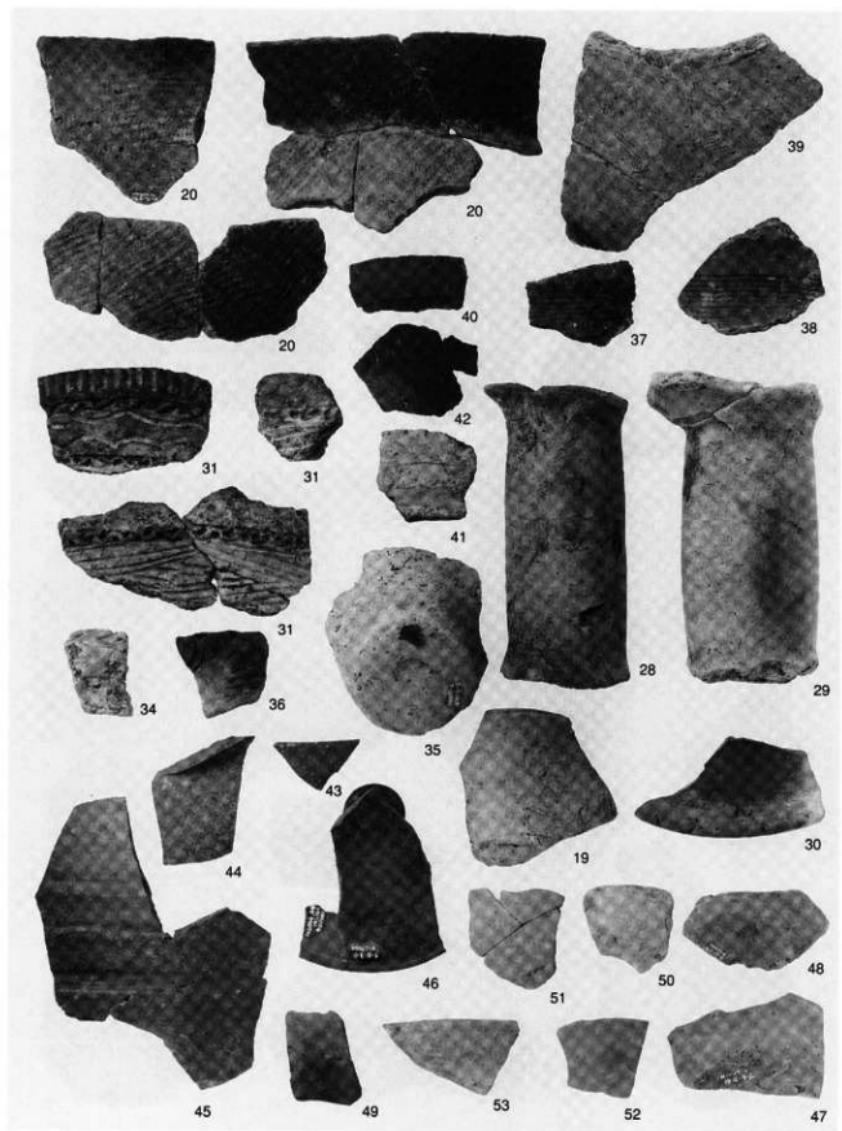
66



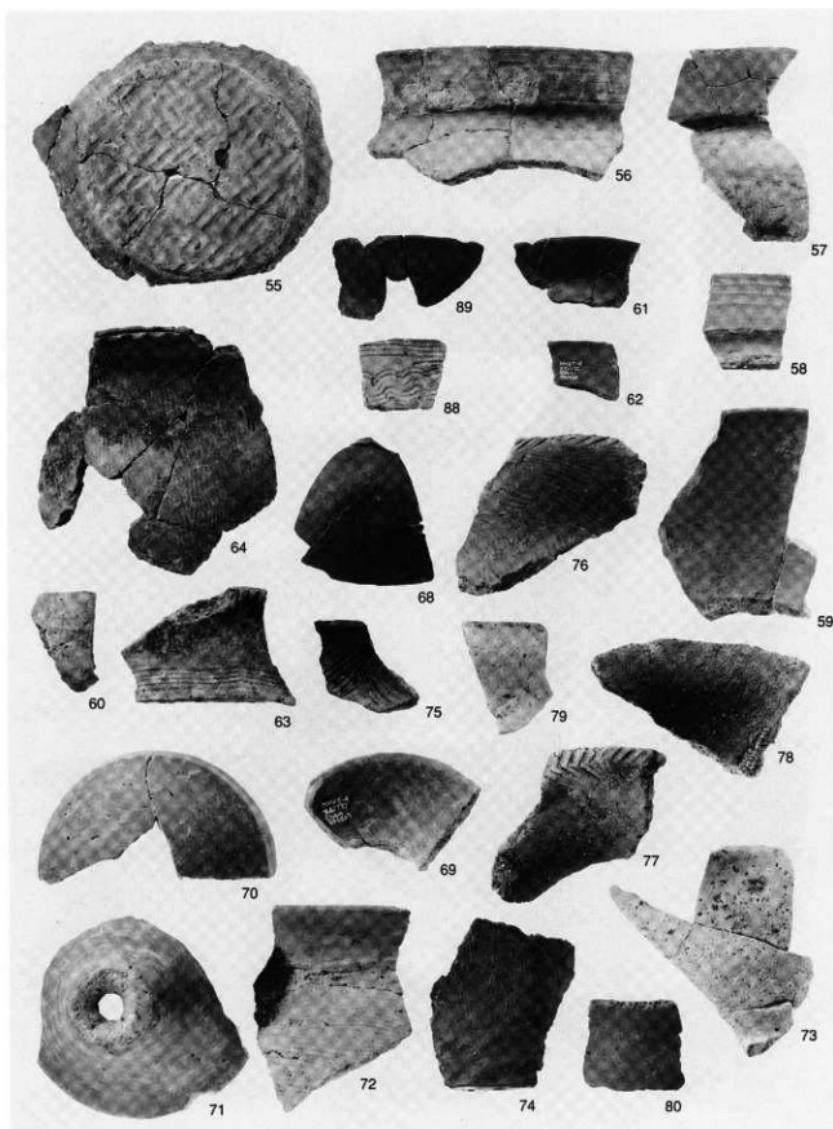
67



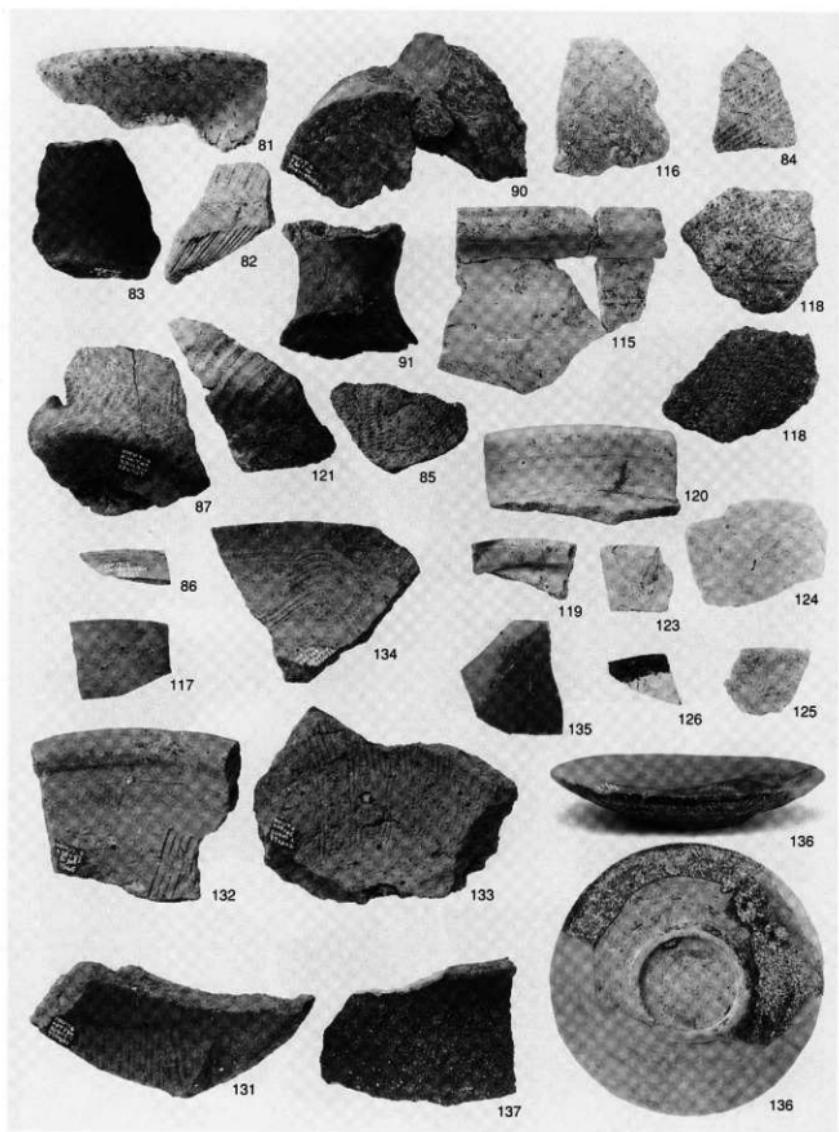
写真図版59 H11年度調査出土遺物(3)



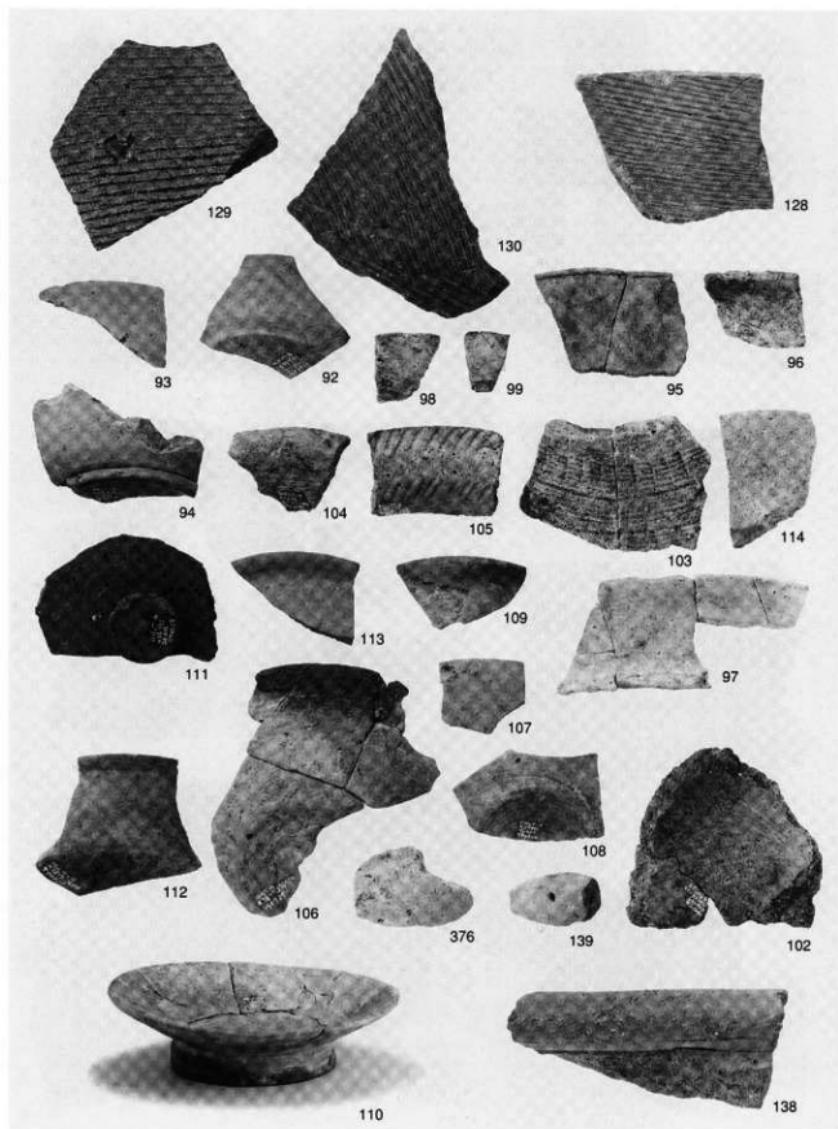
写真図版60 H11年度調査出土遺物(4)



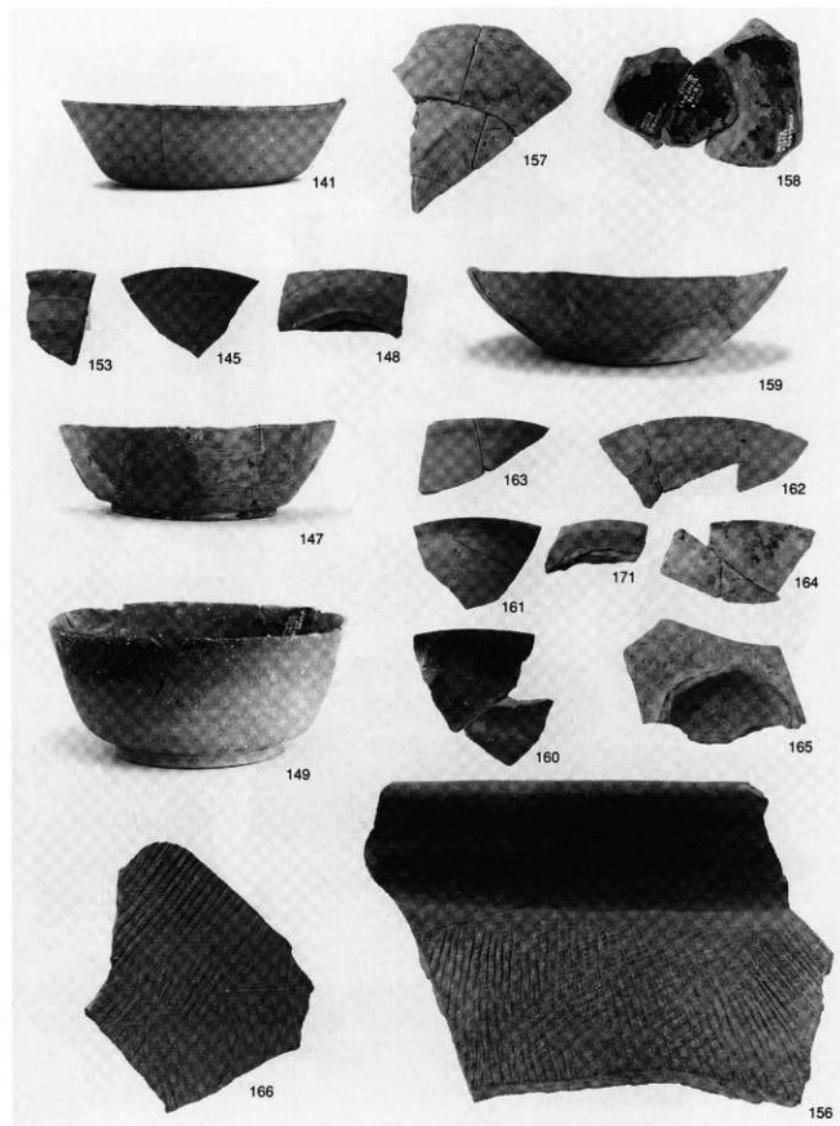
写真図版61 H11年度調査出土遺物(5)



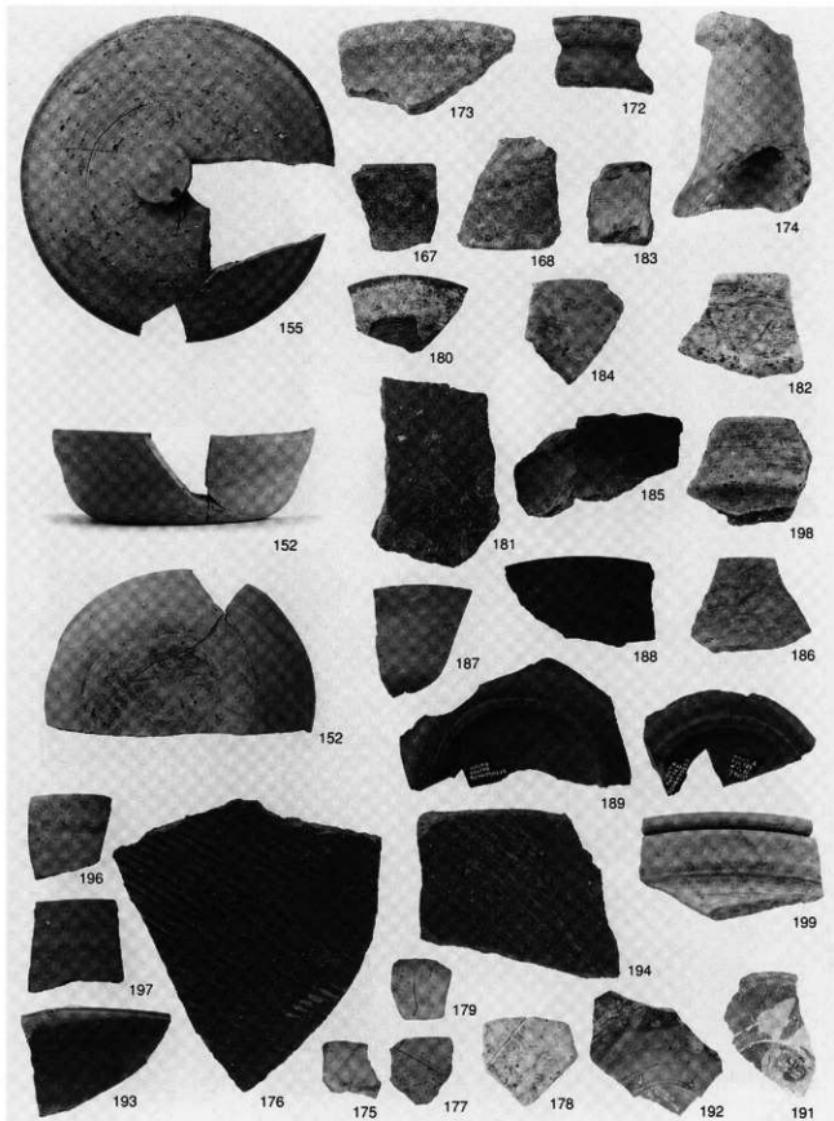
写真図版62 H11年度調査出土遺物(6)



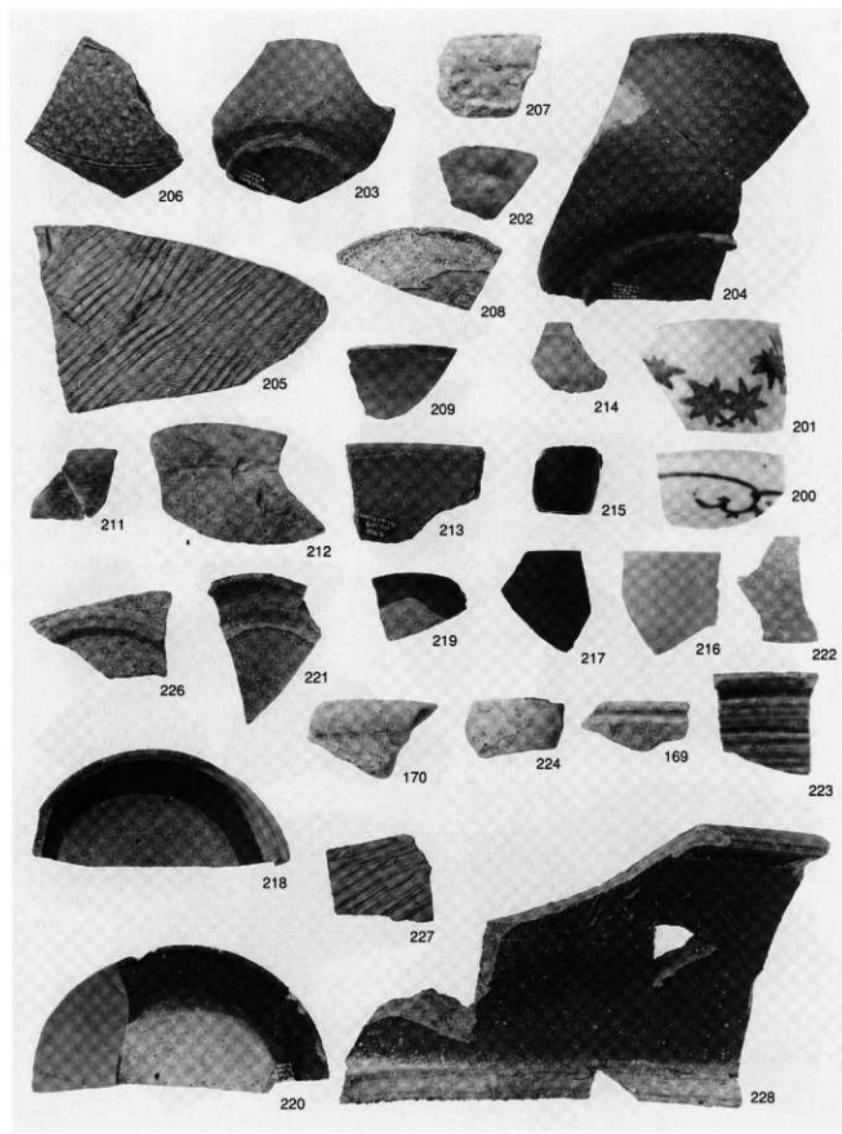
写真図版63 H11年度調査出土遺物(7)



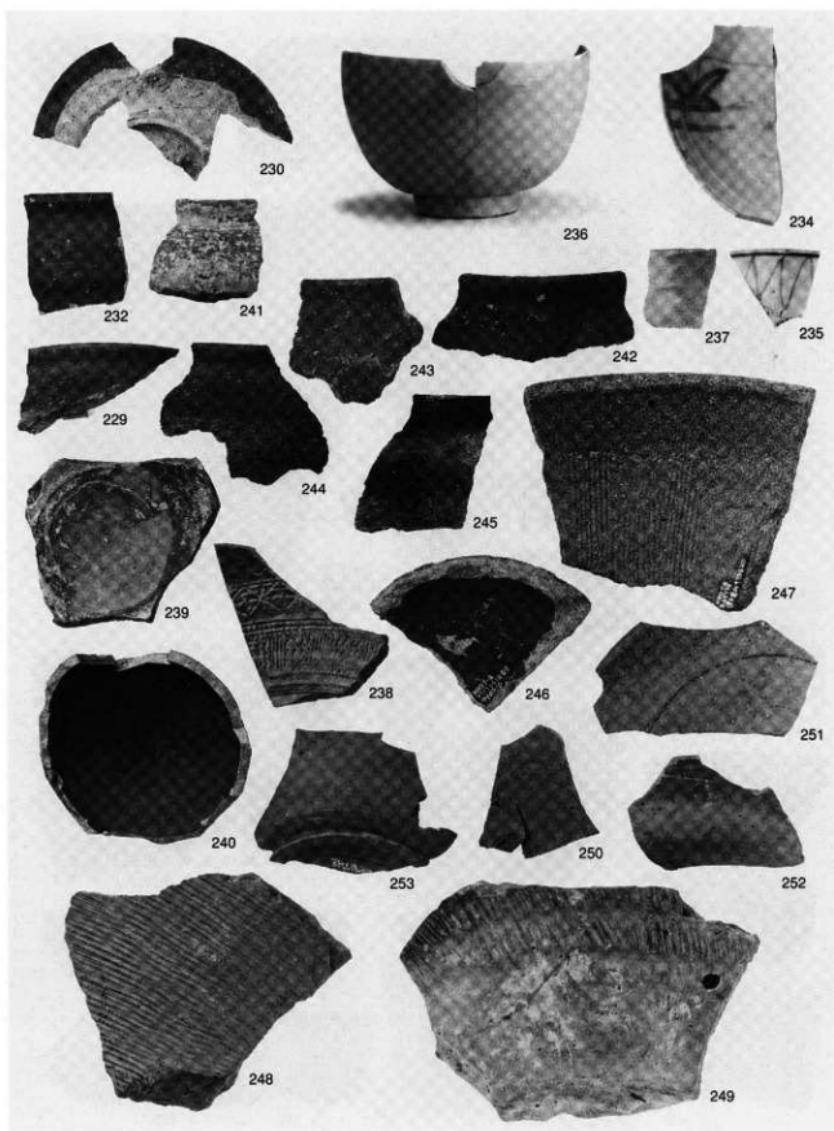
写真図版64 H11年度調査出土遺物(8)



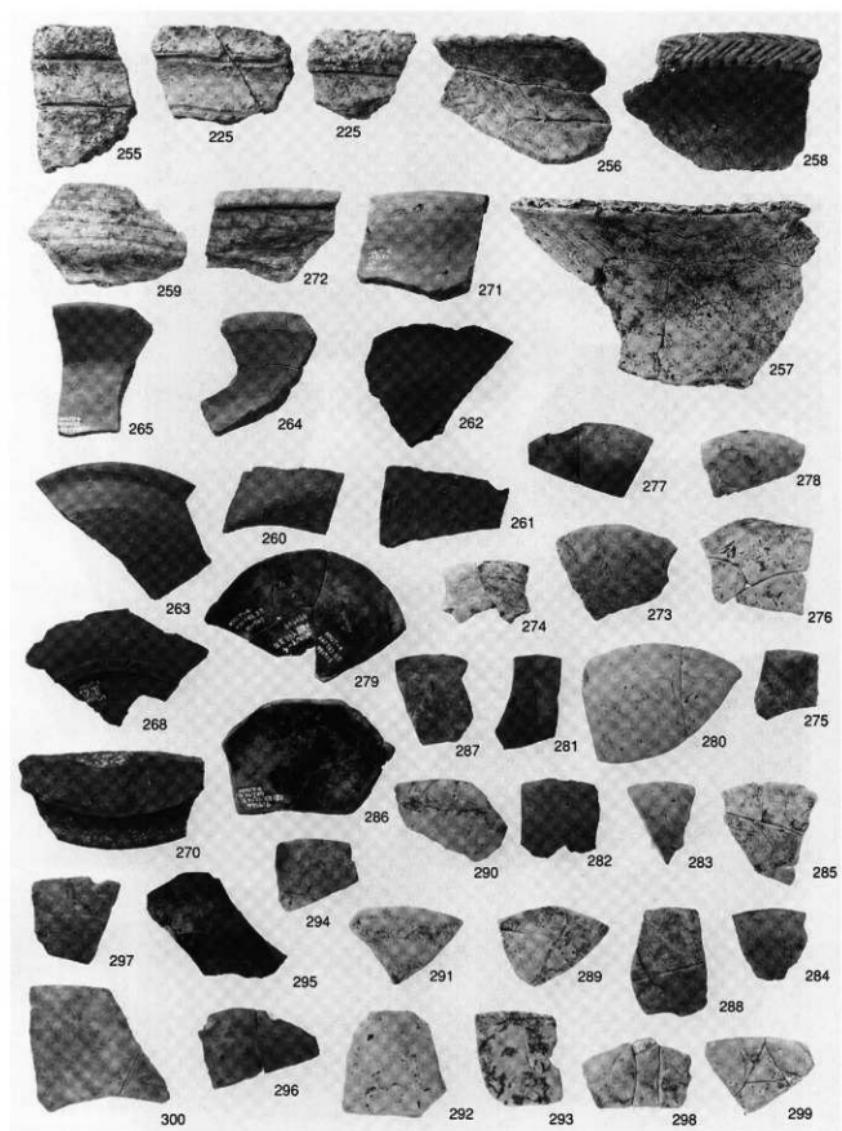
写真図版65 H11年度調査出土遺物(9)



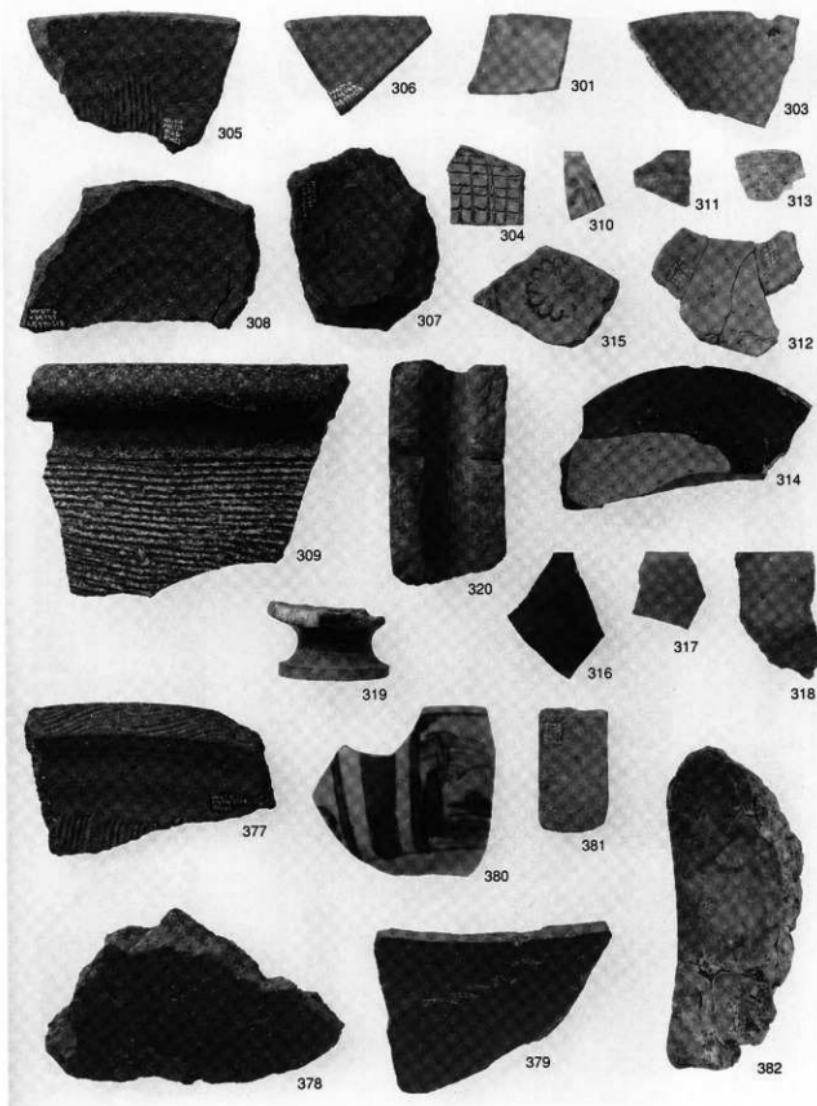
写真図版66 H11年度調査出土遺物38



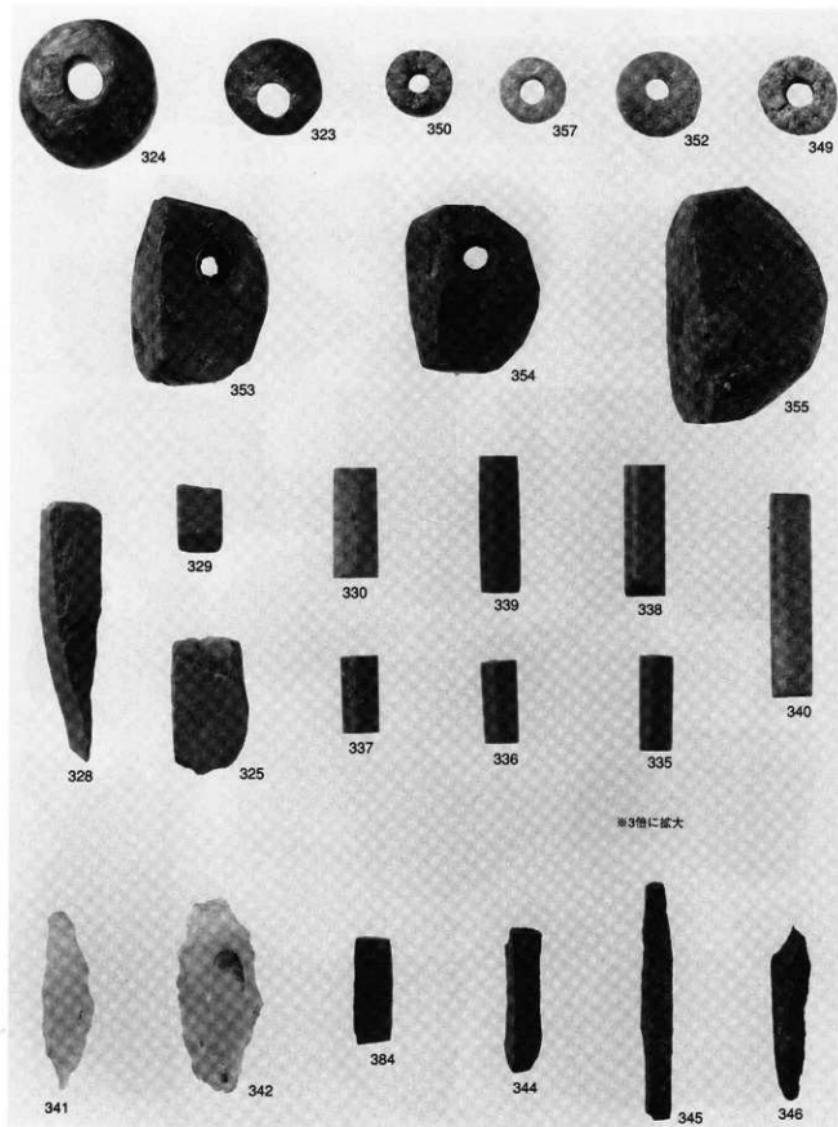
写真図版67 H11年度調査出土遺物(1)



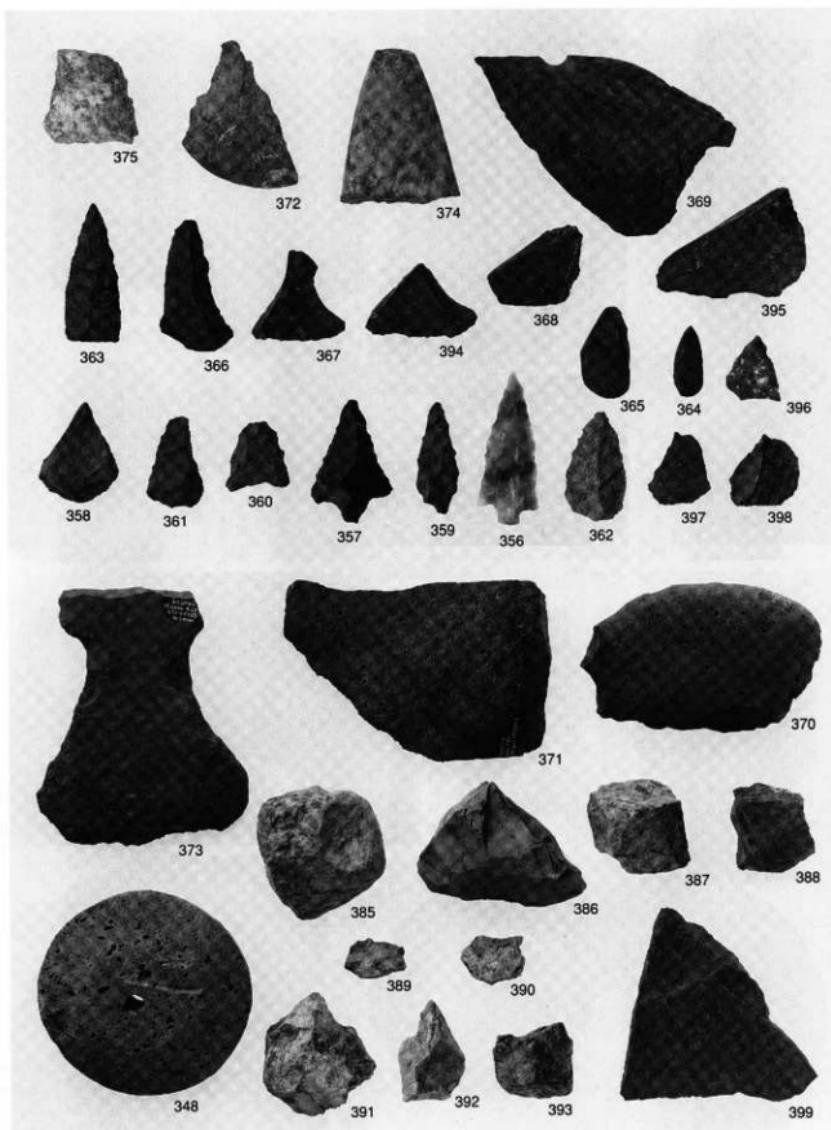
写真図版68 H11年度調査出土遺物13



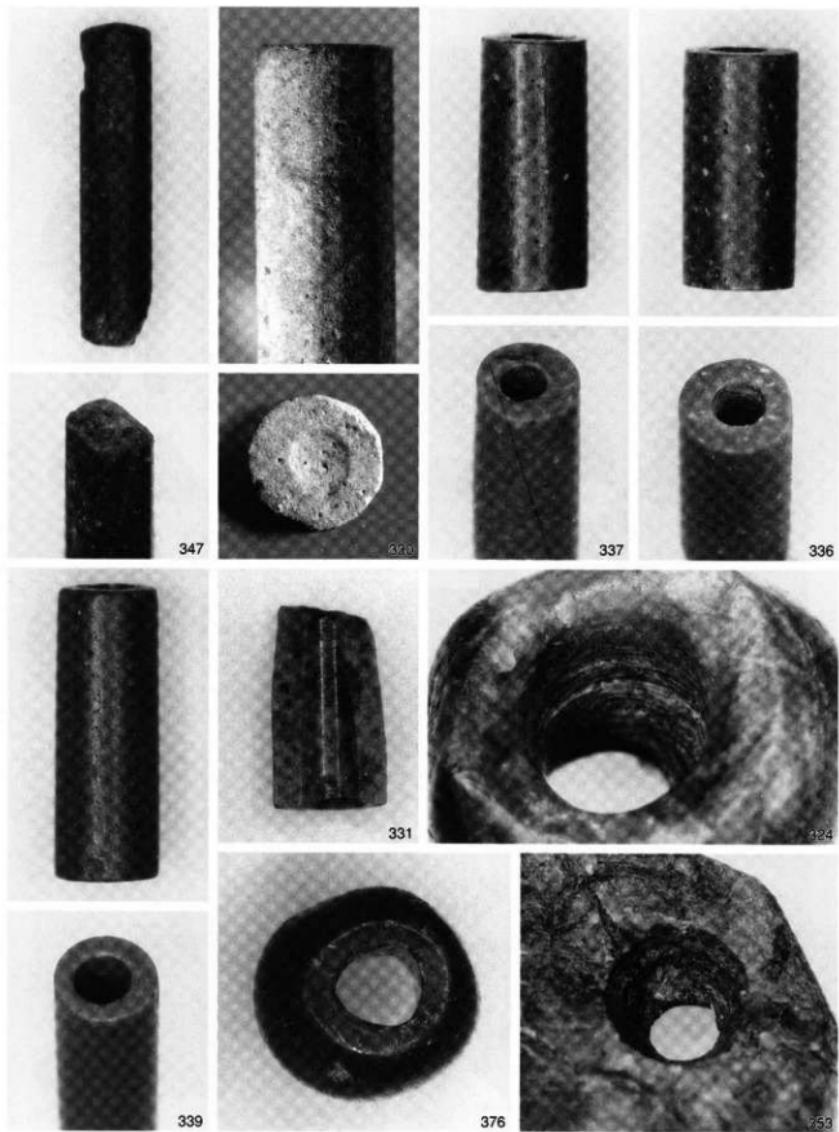
写真図版69 H11年度調査出土遺物⑬



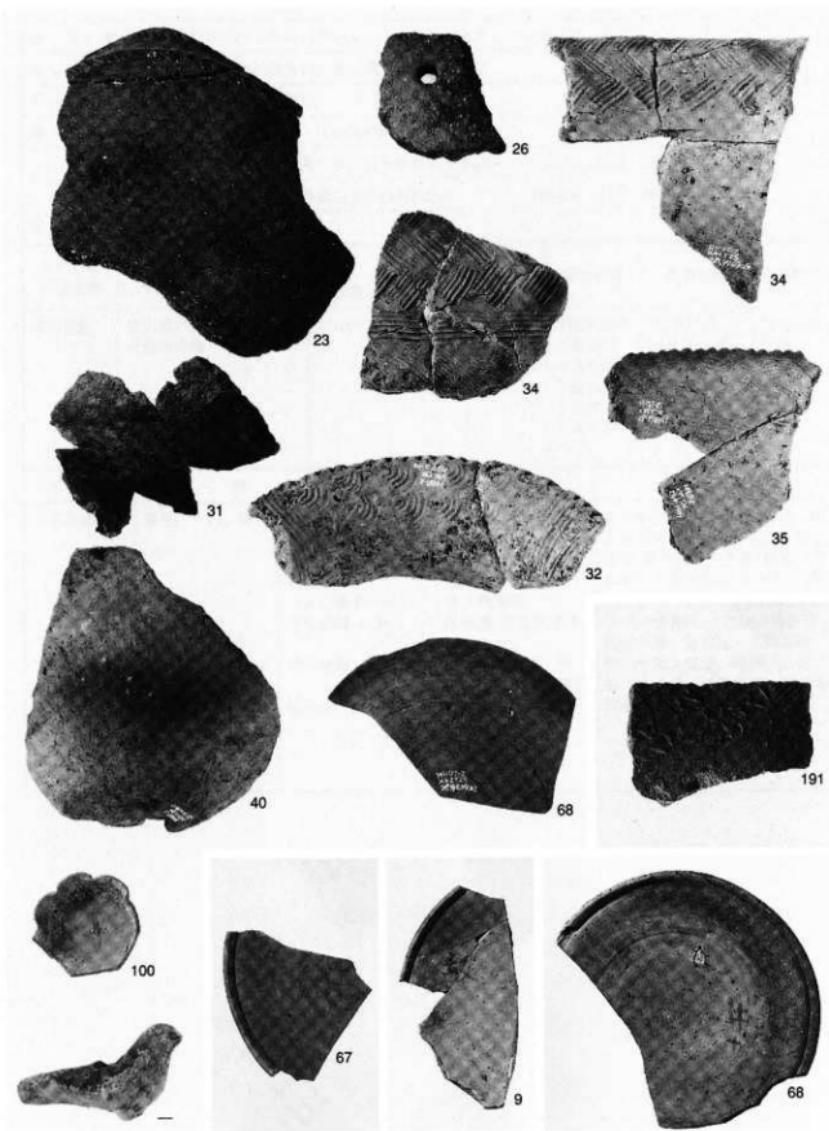
写真図版70 H11年度調査出土遺物64



写真図版71 H11年度調査出土遺物



写真図版72 H11年度調査出土遺物顕微鏡写真09



写真図版73 H9年度調査出土遺物 ⑨191は平成10年度

報告書抄録

ふりがな 書名	とやまけんなかにいかわぐんふなはしむらうらたいせきはっくつちょうさほうこく 富山県中新川郡舟橋村浦田遺跡発掘調査報告							
編著者	高梨清志・越前慶祐							
編集期間	舟橋村教育委員会・富山県埋蔵文化財センター							
所在地	〒930-0295 富山県中新川郡舟橋村仏生寺55 TEL076(464)1121 〒930-0115 富山県富山市茶屋町206-3 TEL076(434)2814							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
	市町村	遺跡番号	°	'	"			
浦田遺跡	富山県中新川郡 舟橋村舟橋	16321	321005	36° 42' 3"	137° 19' 20"	平成10年度 4月22日 ~11月30日 平成11年度 4月26日 ~8月31日	10,900m ² (H10年度 - 8,800m ² H11年度 - 2,100m ²)	住宅用地 造成
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		
浦田遺跡	集落・水田・畑地	弥生時代中期 弥生時代後期 古墳時代初め 古代 (8C後半~10C) 中世前期(13C) 中世後期(16C) 近世	埋没河道・土坑 溝・井堰 住居跡・溝 掘立柱建物・溝 サク状遺構 区画溝・掘立柱建物・ 溝・土坑 梢円柱穴建物・溝 水田跡・サク状遺構 水田跡・溝・小穴	弥生中期の土器(畿内第Ⅲ~代 IV様式初め)・石器・土作り関連 遺物、弥生後期の土器(猫橋~月 影期)、古墳初め(古府クルビ期) の土器、勾土形石製模造品、白 土の括資料、上末麻糬須恵器、 墨書き土器、鉢用鏡、十郎器碗・ 甕、中世土郎器、珠洲、八尾、 輸入陶磁器、越中漬戸、肥前系 陶磁器、錢貨など				

舟橋村埋蔵文化財調査報告書 3

富山県舟橋村
浦田遺跡発掘調査報告書

発行日 平成12年3月31日

発行 舟橋村教育委員会

〒930-0295

富山県中新川郡舟橋村仏生寺55

TEL 076 (464) 1121

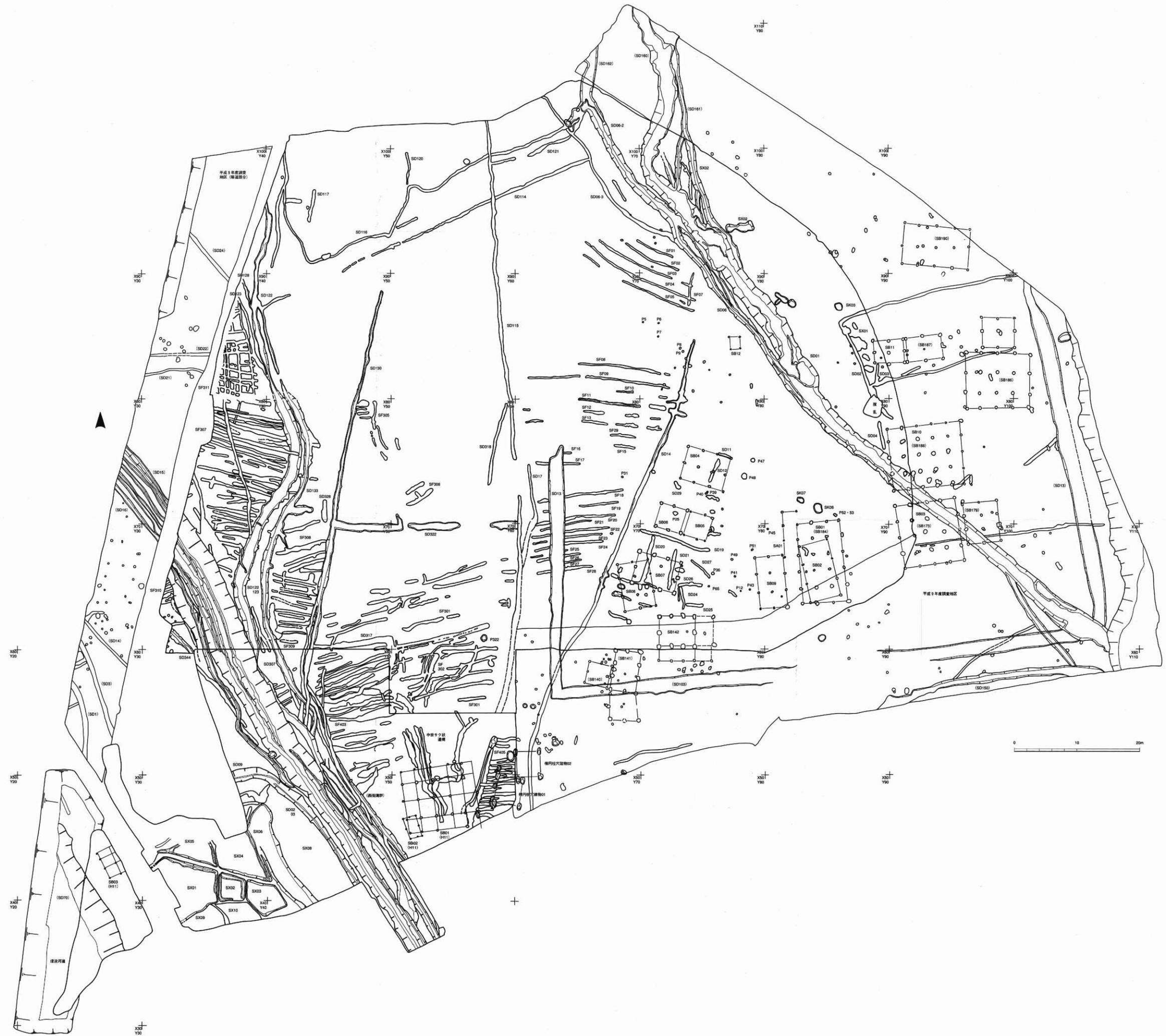
編集 富山県埋蔵文化財センター

印刷 北日本印刷株式会社

舟橋村浦田遺跡発掘調査報告

付 図

舟橋村浦田遺跡古代・中世遺跡全体図



付図 舟橋村浦田遺跡古代・中世遺構全体図（平成9・10・11年調査分）

